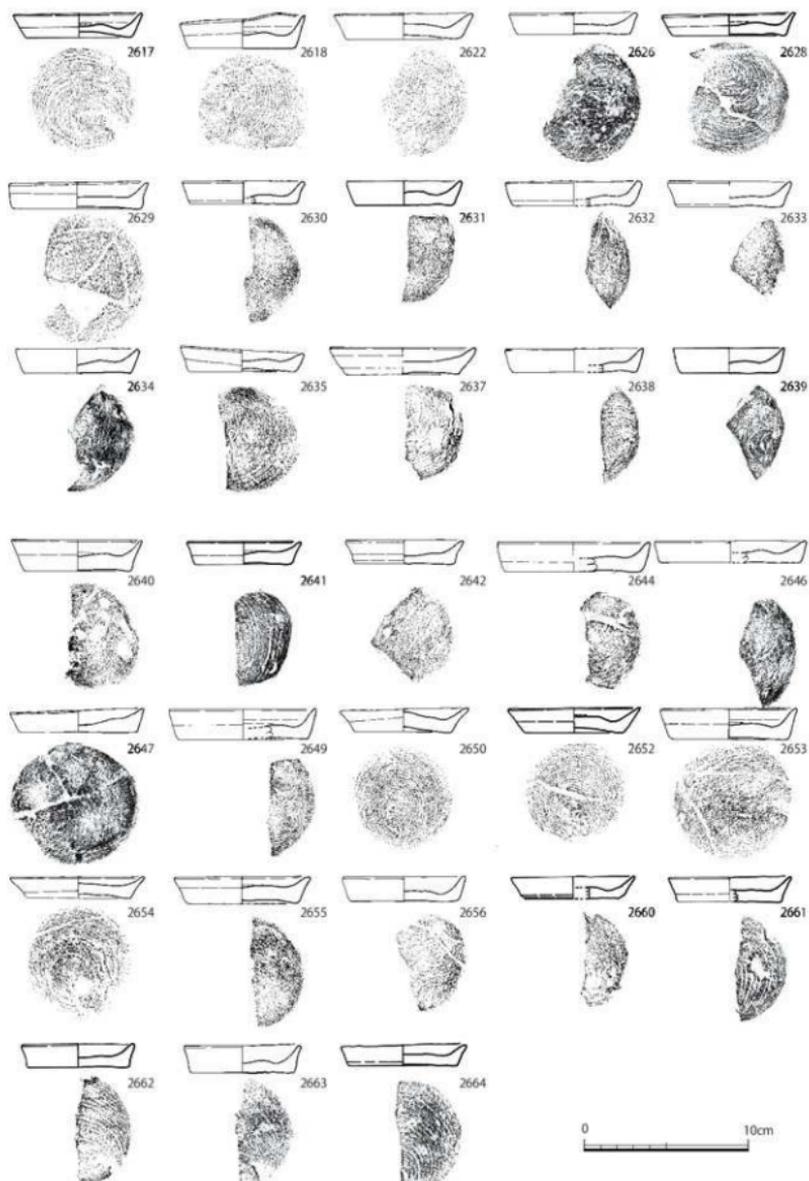
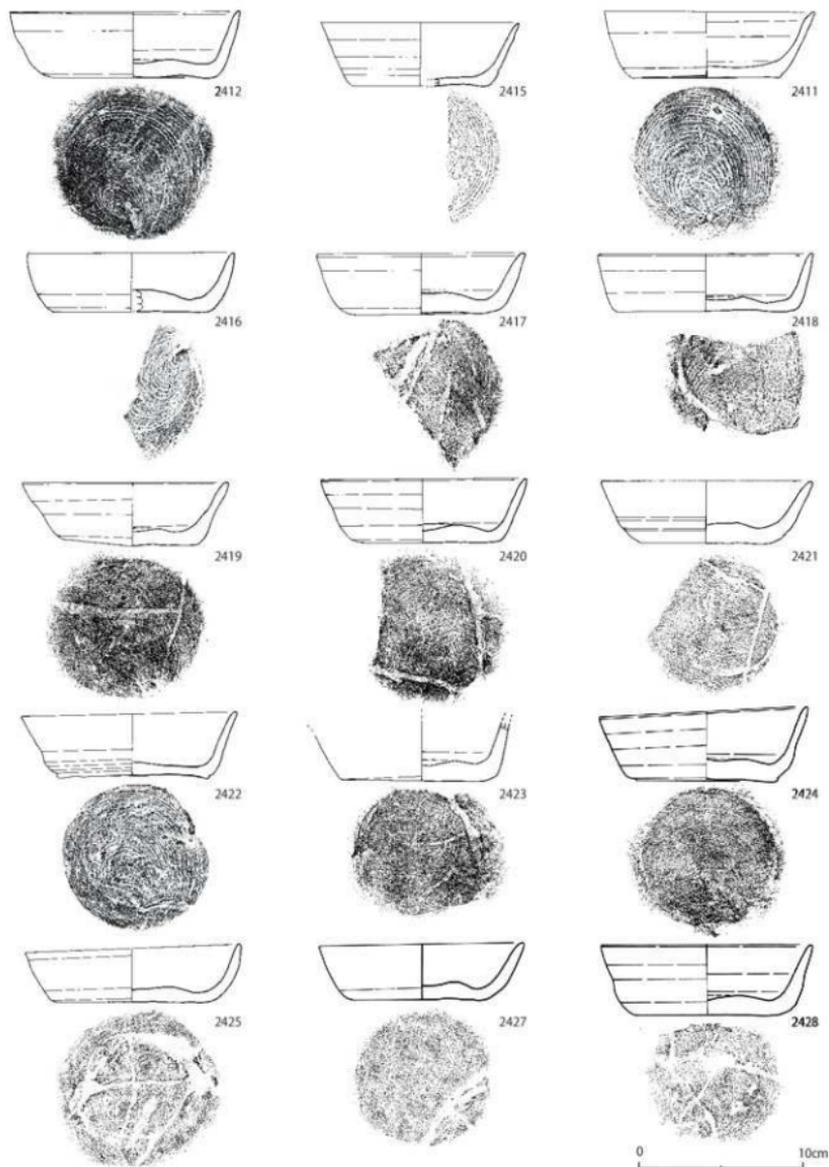


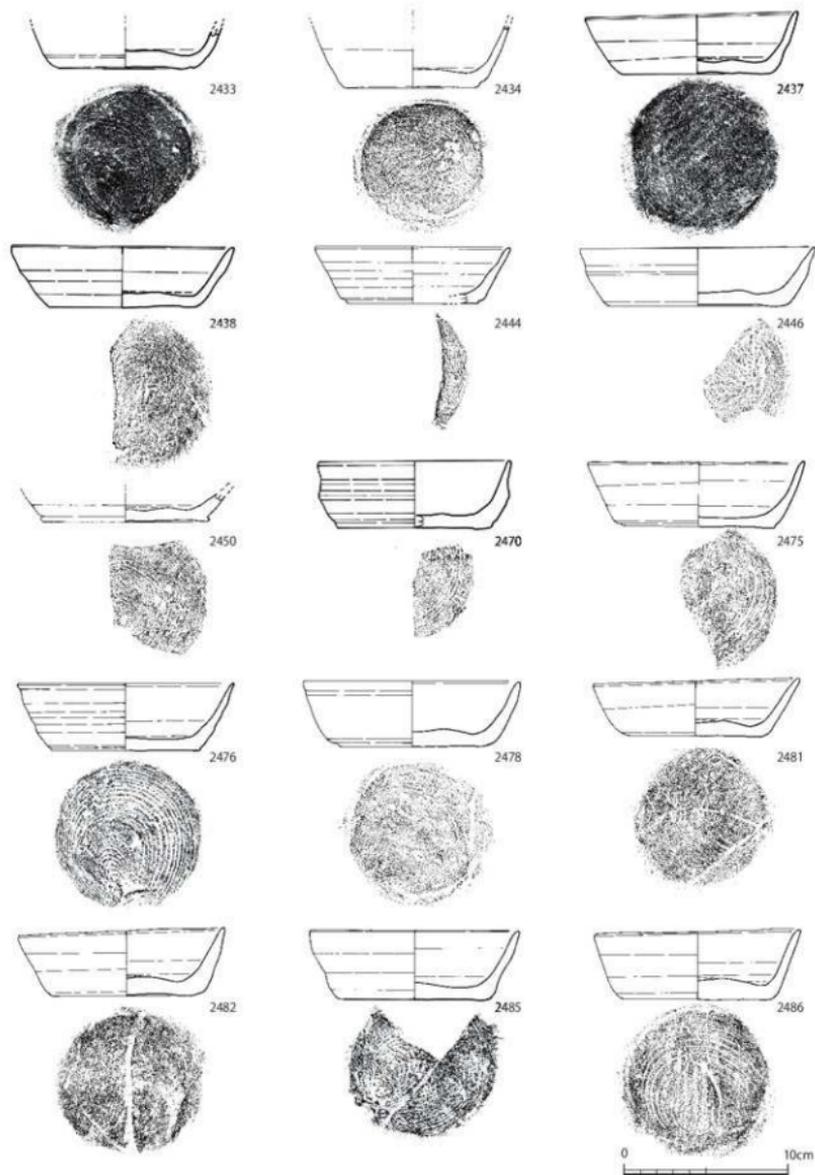
第 242 図 SK510 出土遺物実測図④ (1/3)



第 243 図 SK510 出土遺物実測図⑤ (1/3)



第 244 図 SK510 出土遺物実測図⑥ (1/3)



第 245 図 SK510 出土遺物実測図㉞ (1/3)



2493



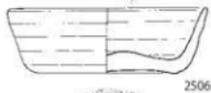
2496



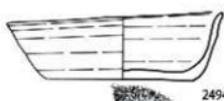
2499



2503



2506



2494



2497



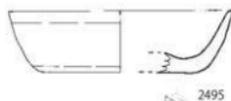
2501



2504



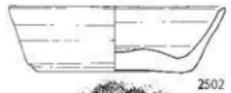
2507



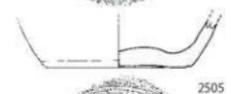
2495



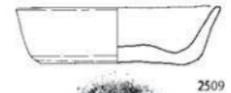
2498



2502



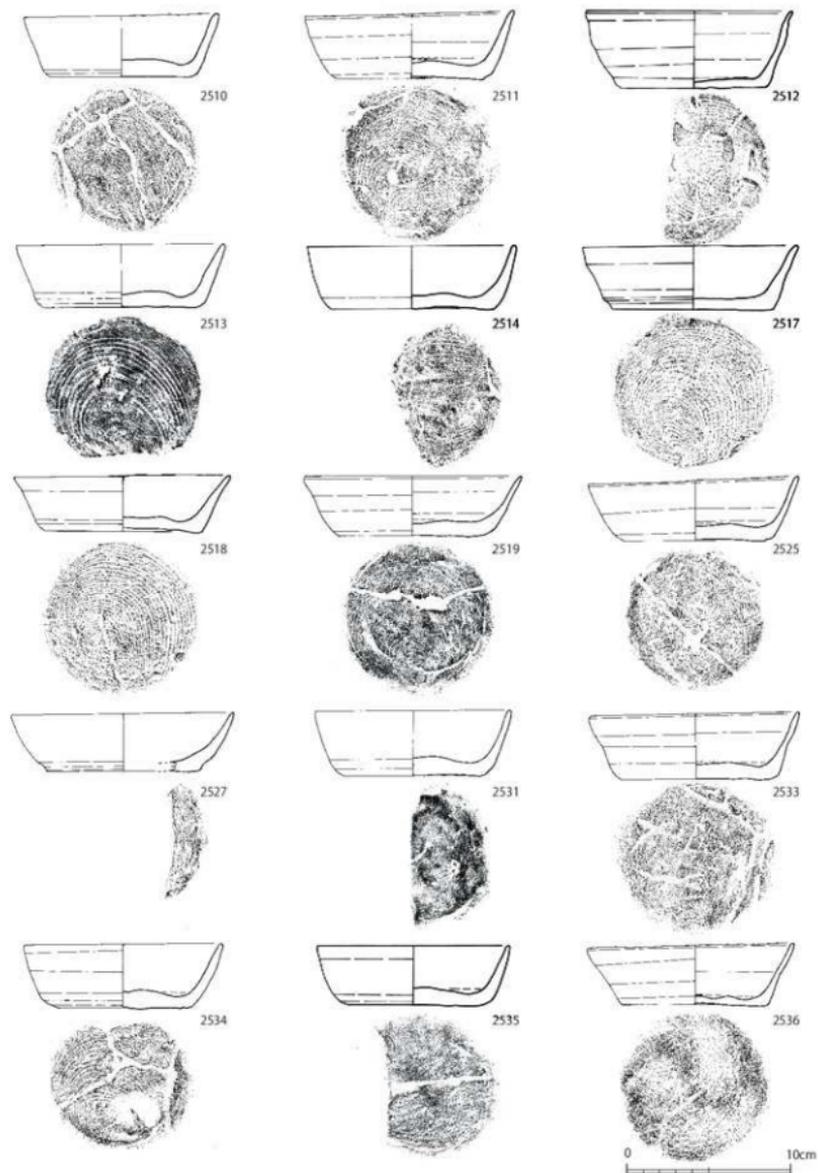
2505



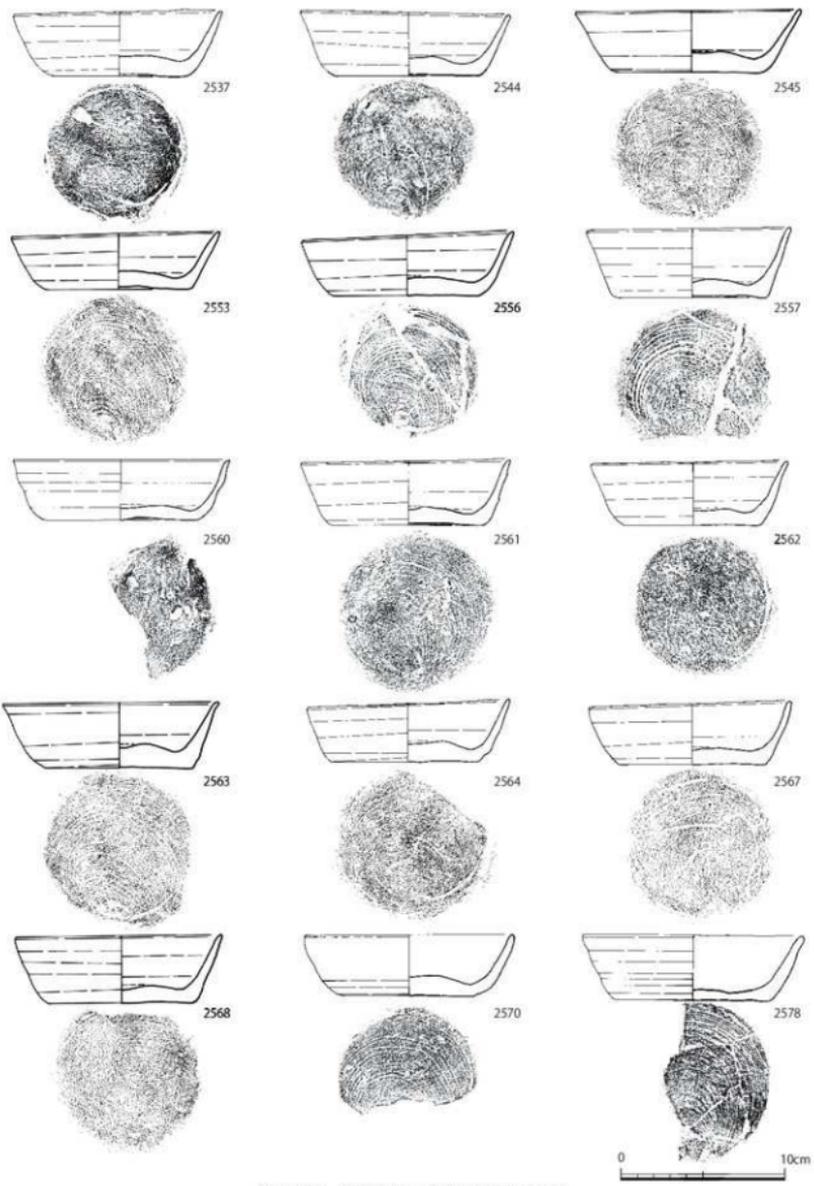
2509



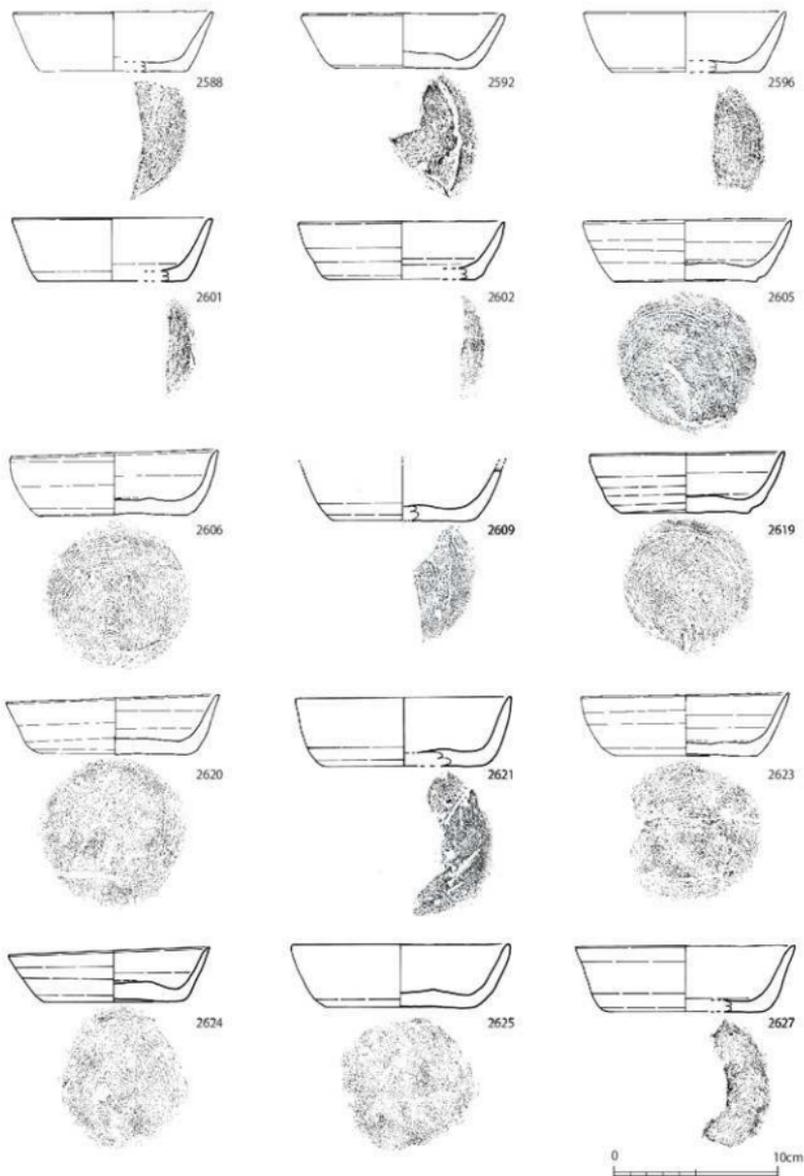
第 246 図 SK510 出土遺物実測図⑧ (1/3)



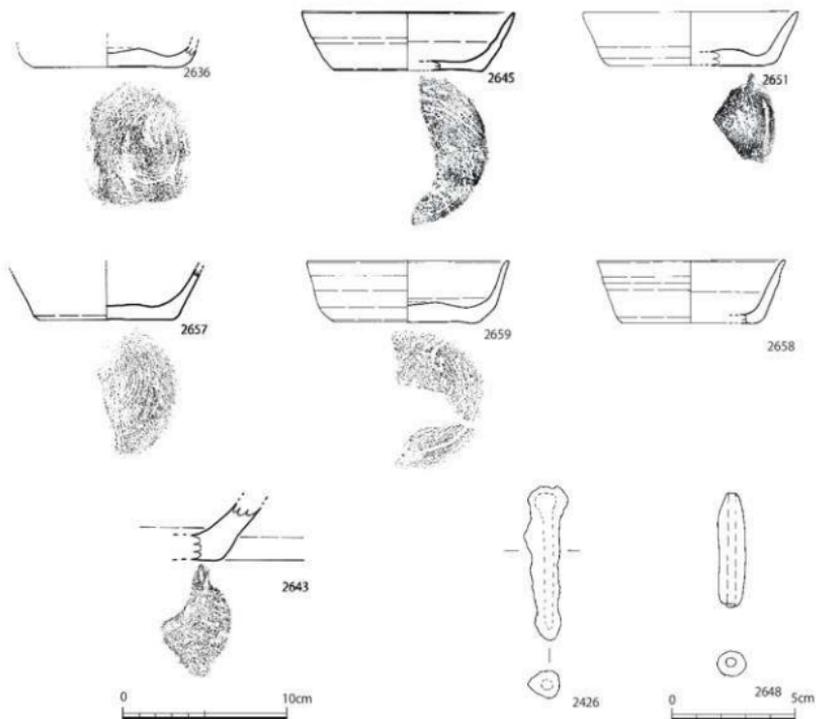
第 247 図 SK510 出土遺物実測図◎ (1/3)



第 248 図 SK510 出土遺物実測図¹⁰ (1/3)



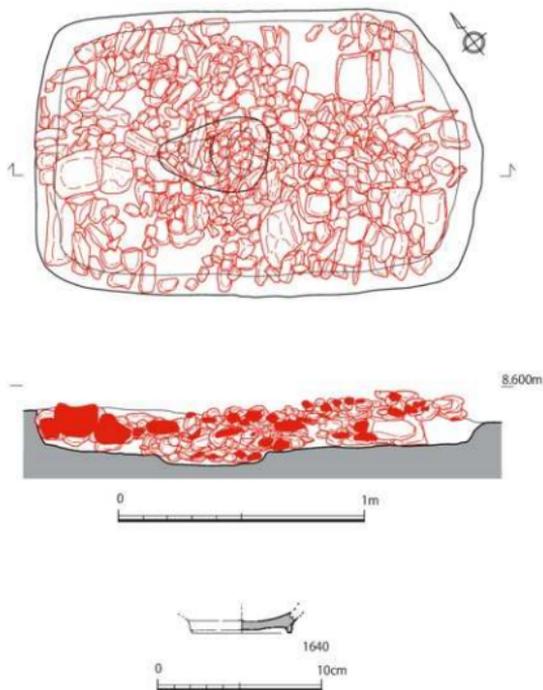
第 249 図 SK510 出土遺物実測図① (1/3)



第250図 SK510 出土遺物実測図⑩ (1/3・1/2)

SK515(第251図)

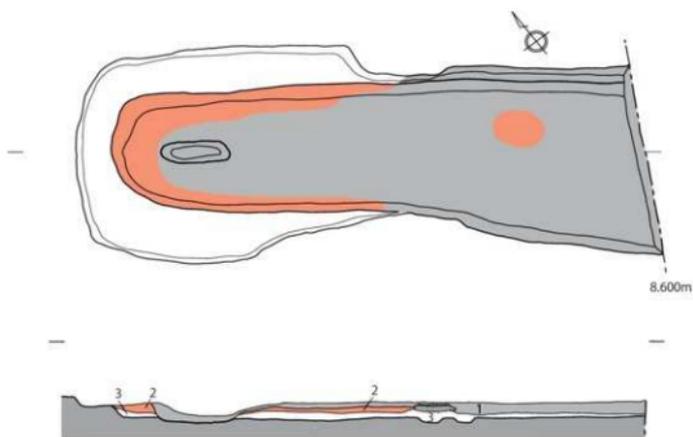
遺構はⅢ区で検出した。切り合い関係はSK520を切る。平面プランはやや不定形な長方形を呈する。規模は長軸1.8m、短軸1.16m、最大深0.26mを測る。床面はほぼフラットであるが、中央やや西寄りに深さの浅い楕円形状のくぼみがある。埋土は暗褐色粘質土で、図に示すように拳大～人頭大の河原石を充填している状況である。拳大などの大きさの石は丸いが、人頭大ほどのものになると、角形の石、もしくは丸みをもった四角形の石が見られる。またこれらの石はほとんどが被熱している。火葬墓の可能性が考えられる。遺物(第251図)は、ほとんど出土しなかったが、1640の瓦器椀が1点礫中から出土した。高台は貼り付けのちナデ調整。



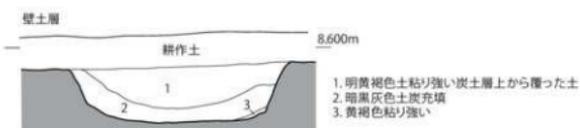
第251図 SK515 遺構・出土物実測図(1/20・1/3)

SK520(第252・253図)

遺構はⅢ区で検出した。切り合い関係はSK515に切られる。平面プランは不定形な長方形を呈し、東西方向に長い。床面はほぼフラットであるが、西側で長楕円形のくぼみがある。規模は長軸 2.2 m、短軸 0.58 m、最大深 0.08 m を測る。土層観察すると埋土は最上層の1層に明黄褐色粘質土の土で、覆われ、その直下に2層目として暗黒灰色粘質土の炭化物が充填している。またその下3層は炭化物が遺構の西側以外のほとんどを覆っており、その直下からプランの西側と東側の一部でガチガチに固まった焼土が堆積する。平面プラン中央やや東側で、石製の扁平な礫が2つ並列している。この遺構の性格は土壌墓、祭祀、焼成坑、鍛冶炉跡などがあげられるが、土壌墓の可能性が高いと推定される。またSK520を切る状況でSK515を検出しているが、SK515はSK520の真上に作られていること、また埋土や被熱多く受けていることから、SK515とSK520が関連している可能性とSK515とSK520で時期差がある可能性がある。遺物(第253図)は3点出土した。1641は瓦質土器鉢片である。口縁端部は面取りする。口縁部外面は横方向刷毛目工具痕がのこる。1642は土師質土器杯。外底部は回転糸切り離しのチナデ調整。胴部は底部から大きく外反せずにのびる。胎土は赤色粒子と石英を主に含む。1645は縄文土器深鉢片で波状の口縁部である。内外面ともチナデ調整。外面口縁端部付近に1条の沈線が口縁端部に平行するように巡る。胎土は石英・角閃石・結晶片岩などが入る。



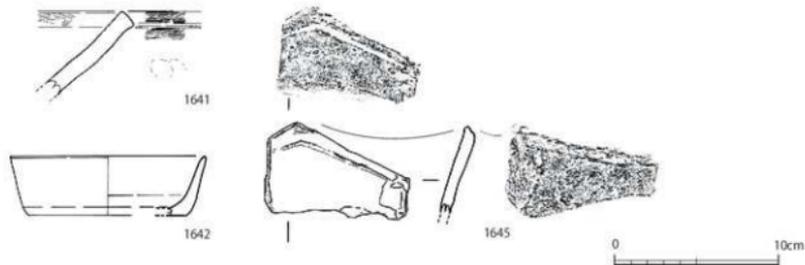
1. 暗黒灰色粘質土 ほとんど炭（炭化物）が充填
2. 赤褐色粘質土 ほとんど鏡土 ガチガチに堅い
3. 茶褐色粘質土 しまり強い



1. 明黄褐色土粘り強い炭土層上から覆った土
2. 暗黒灰色土炭充填
3. 黄褐色粘り強い



第 252 図 SK520 遺構実測図 (1/20)



第 253 図 SK520 出土遺物実測図 (1/3)

SK525 (第254・255図)

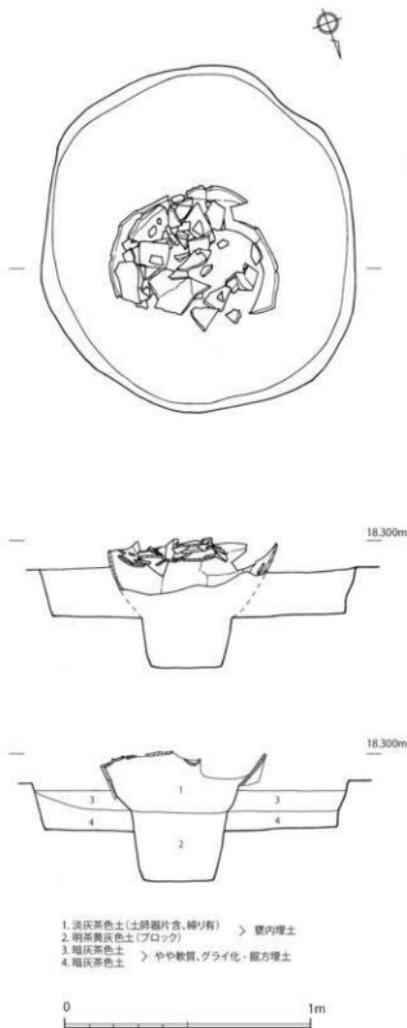
SK525はⅢ区南端で検出した土坑で、SD500が埋まったのちに掘りこまれたものである。土坑の平面形は円形を呈し、径1.5m、深さ0.5mを測る。土坑の中央に備前焼甕を正位置の状態に配していることが分かり、埋藏遺構と判断した。

土層観察から、円形の掘り方を掘ったのち、中央に備前焼を据えるためピットを掘りこんだものと考えられる(第254図土層図を参照)。ピットの深さは0.25mを測る。円形プランの埋土は2層に分層ができ、上層は暗茶灰色土、下層は暗茶灰色土である。甕の下に検出されたピットの埋土は明茶黄灰色土である。いずれもしまりがよい。

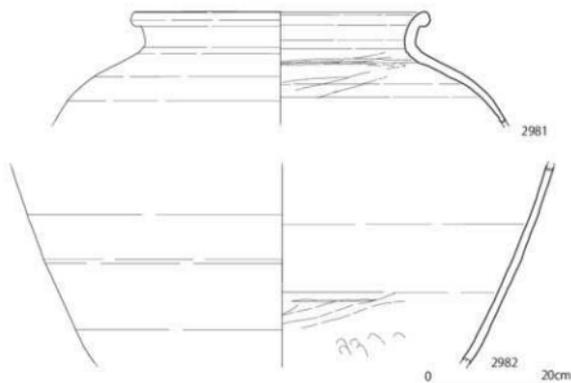
検出の際に遺構の上面を掘削してしまったが、備前焼甕の胴部はほぼ良好に遺存していた。甕の平面は半円形を呈しており、胴部の一部が欠損している。また甕の下部も欠損しており、甕の底部は確認することができなかった。甕の底部を人為的に打ち欠いたとみられる。甕の内側には土が充填していたが土器などの遺物は確認できなかった。

第255図の2981・2982は備前焼甕である。接合はできなかったが、同一個体と考えられる。2982は正位置に配した甕にあたり、2981は、2982の上面で割れた状態で出土している。2981は口縁部が外傾気味に立ち上がり、胴部はまるみをもつ。口縁部は玉縁状に肥厚し、外面端部は面取りを施す。調整は、口縁部が布状工具による横ナデ、胴部内外面はへら状工具ナデを施す。復元口径50cmを測る。色調は暗灰褐色を呈する。2982は直線的な胴部をなし、内外面ともへら状工具ナデである。復元で胴部最大径32.4cmを測る。色調は外面が灰褐色、内面は暗青灰色を呈する。

SK525で出土した備前焼甕の特徴は、口縁部玉縁の肥大化がみられない、口縁部が外傾気味に立ち上がる、還元焼成のため色調が青灰色をおびる、などを挙げることができる。近年の備前焼の研究結果から、時期は14世紀中頃と考えられる。



第254図 SK525 遺構実測図 (1/20)



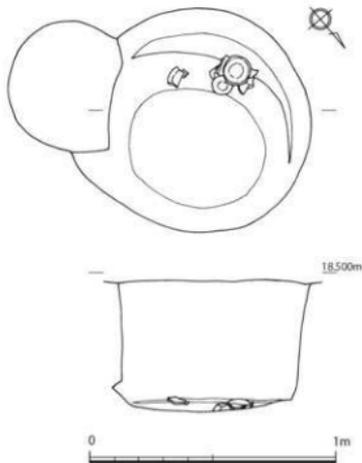
第 255 図 SK525 出土遺物実測図 (1/8)

SK707 (第 256・257 図)

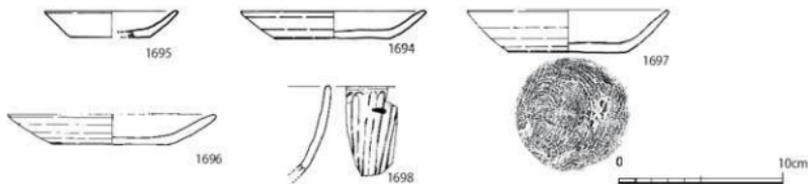
Ⅲ区南端で検出した土坑で、SD500の西側、多数のピットが集中する箇所にある。平面は円形を呈し、長軸 0.8 m + α、短軸 0.8m、深さ 0.6 mである。土坑の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面は中央に向かって窪んでいる。土坑中央より南側のほぼ地山直上で、土師質土器がまとめて出土している。いずれも口縁部を上にした正位置な状態で出土している。

1695 は土師質土器小皿である。底部から斜上方に開く。復元口径 8cm、器高 1.6cm を測る。色調は橙褐色を呈する。1694・1696・1697 は土師質土器杯で、底部から斜上方に大きく開く。いずれも淡黄色を基調とする。1694・1696 は復元口径 9.4～11cm、器高 1.7～1.9cm を測り、器高が低いものである。外面底部は糸切り離しのちナデである。1697 は復元口径 12.4cm、器高 2.5cm を測り、器高が高いものである。底部は糸切り離しが残る。

1698 は龍泉窯系青磁碗で、外面は線描き蓮弁を施す。弁先はまるみをおびる。軸調は暗緑色、素地は白灰色を呈する。貫入が著しい。



第 256 図 SK707 遺構実測図 (1/20)



第 257 図 SK707 出土遺物実測図 (1/3)

二. 井戸

SE580 (第258図)

SE580はⅡ区南西で検出した井戸で、SF1000から北2.2m先に位置する。

平面は円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ1.3mである。形状から素掘り井戸と考えられる。井戸壁面は、底面から下面は垂直に立ち上がるが、下面から上面は外傾気味に開いている。

井戸の埋土は上層(暗茶褐色粘質土、層厚1m)、下層(淡茶褐色粘質土、層厚0.5m)に分層ができる。上層の下部は井戸壁面の屈曲部分にあたるが、この面では炭化物が多量に混じり、土器など遺物がまもって出土している。下層は炭化物、遺物とも少量であった。

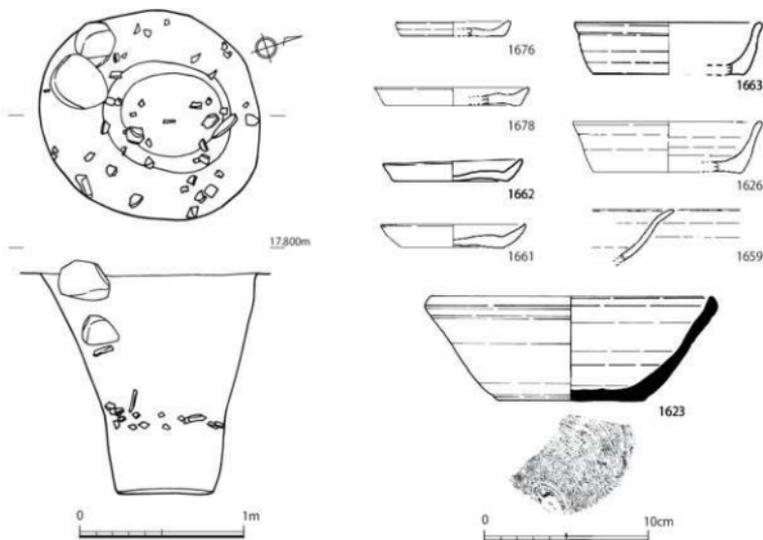
SE580では土師質土器、東播系須恵器、中国産白磁などが出土している。

1661・1662・1676・1678は土師質土器小皿である。いずれも外面底部は糸切り離しのちナデで、色調は橙褐色を基調とする。1676・1678は底部から垂直気味に立ち上がり、器高は低い。1661・1662は1676・1678と比べると器高が高く、底部から斜上方に開く器形である。

1626・1663は土師質土器杯である。底部から垂直気味に立ち上がり、器高は3.1～3.4cmを測る。口縁部端部はまるく肥厚気味である。

1659は白磁の口禿げ皿である。口縁部がくの字状に外反し体部中位は張る。口縁部内外面の軸を掻き取る。軸は厚めにかかり、軸調は白灰色を呈する。貫入はみられない。

1623は東播系須恵器の鉢である。口縁部端部は内傾気味に立ち上がり、玉縁状に肥厚する。体部は直線的に伸びる。底部は平底で糸切り離しが明瞭に残る。内外面体部は回転ナデである。色調は灰褐色を呈する。法量は復元口径17cm、器高6.4cmである。



第258図 SE580 遺構・出土遺物実測図(1/30・1/3)

ホ、包含層、その他の出土遺物（第259図）

包含層、遺構検出作業中に出土した遺物について紹介する。

1745は縄文土器深鉢の底部で、上げ底を呈する。1709・1711・1712・1713・1714・1719は土師質土器小皿である。いずれも底部切り離しは糸切り離しである。そのうち1719以外はSK015周辺の拡張時に出土したものである。1709・1711・1712・1714は底部から垂直気味に立ち上がる。1719は底部から斜上方に開き、底部の器壁が厚い。

1740・2990は土師質土器環でSK015周辺の拡張時に出土したものである。1740は口縁部が内傾気味に立ち上がる。2990は底部から斜上方気味に立ち上がる。

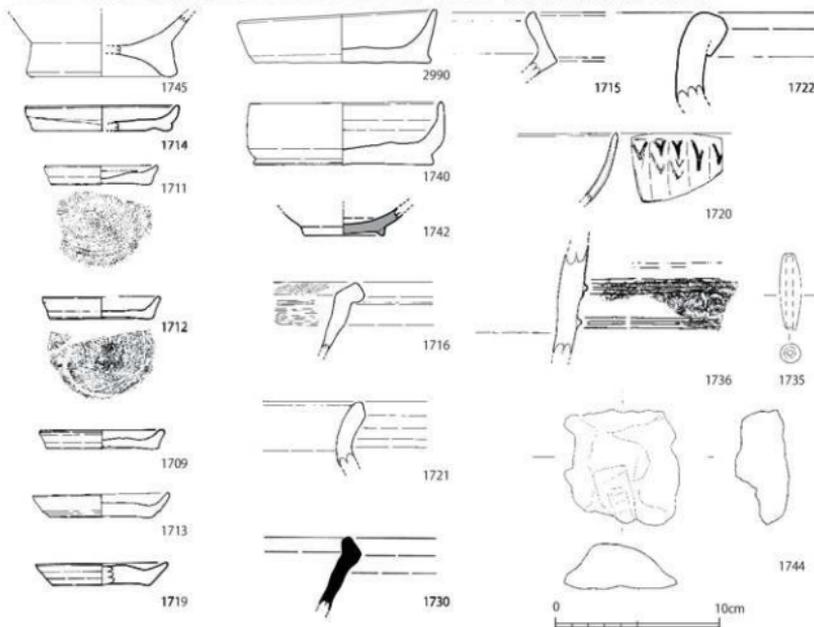
1742は瓦器椀で在地産か。断面三角形の低い高台が付き、底部は丸底である。1716は土師質土器鍋で口縁部は短く外反する。口縁部内面は斜め、体部は横方向の緻密なハケメ調整を施す。1721は瓦質土器甕で、口縁部は緩やかに外反する。色調は暗灰褐色を呈する。1730は東播系須恵器鉢で口縁部は内傾気味に立ち上がる。

1715は備前焼鉢で口縁部は内傾し、端部は面取り気味に仕上げる。1722は備前焼甕で口縁部が外傾し、端部は玉縁状に肥厚する。

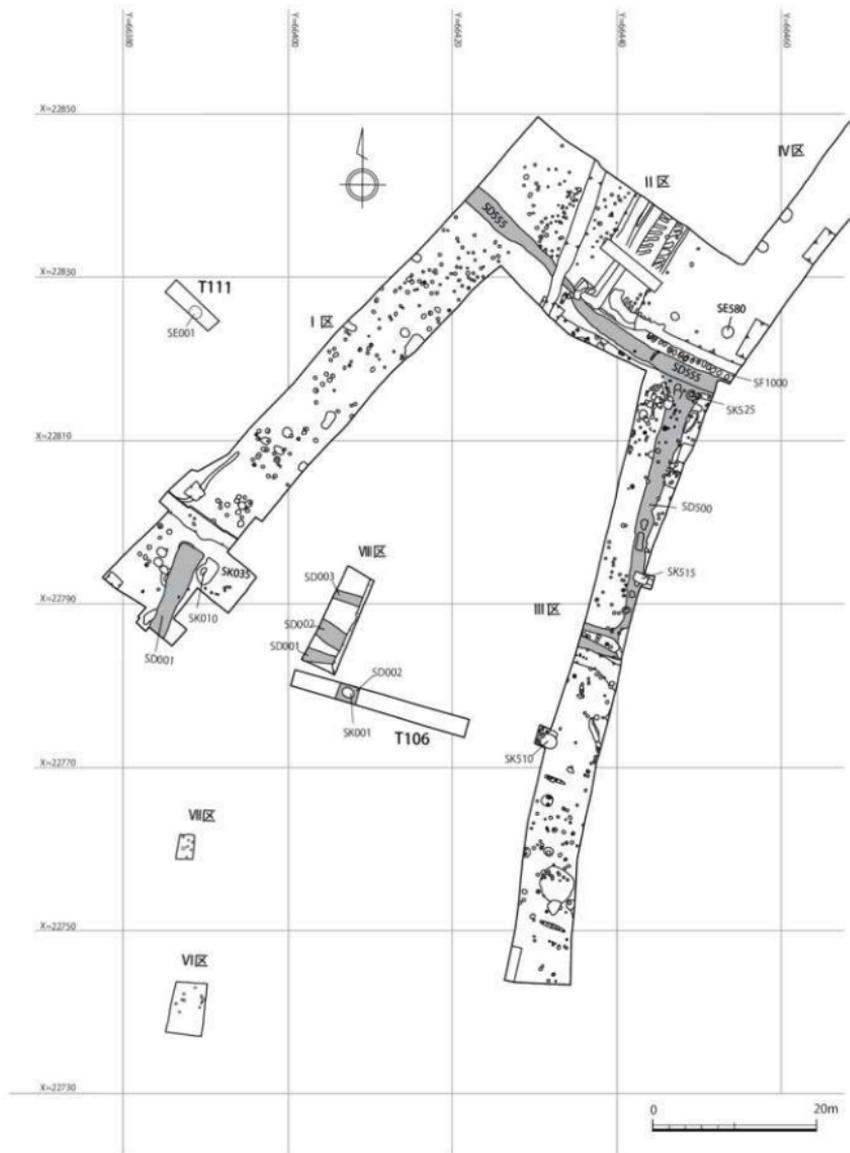
1720は龍泉窯系青磁碗で外面は蓮弁を施す。軸は厚めにかり、暗オリーブ色を呈する。

1736は瓦質土器火鉢の胴部で、浅鉢と考えられる。外面体部に2条の突帯が付き、突帯間に菊花文の連続スタンプを施す。突帯の上部および体部内面はヘラミガキを施している。色調は器表面が暗灰白色、断面は灰褐色を呈する。

1735は土師質土器の管状土錘である。1744は埴土で、木舞もしくは間渡の痕跡が認められる。



第259図 包含層出土遺物実測図(1/3)



第260図 第6地点周辺確認調査遺構全体図 (1/600)

(2) 第6地点周辺の確認調査(第260図)

本節では第6地点周辺で遺構確認を行ったⅥ～Ⅷ区および、平成16年度に第6地点周辺で実施した試掘調査の調査内容について報告する。第6地点の調査では、ピット・土坑・溝状遺構が多数確認されたが、これを受けて遺跡全体の様相把握を目的として、Ⅰ・Ⅲ区の間を中心に遺構確認調査を実施した。遺構確認は3ヶ所のトレンチを設定し、Ⅵ～Ⅷ区に振り分けた。また平成16年度に第6地点周辺の試掘調査を実施した際、2箇所のトレンチで中世遺構を確認している。以下、各区、トレンチの詳細について記す。

Ⅵ区(第260図)

第6地点Ⅲ区南端から約35m西に位置する。Ⅵ区の調査規模は5×6mのトレンチである。現況は水田で、遺構面は約0.6m下で検出された。地山は暗茶褐色粘質土である。調査区北側を中心にピット12基を検出している。中世の土師質土器が出土している。

Ⅶ区(第260図)

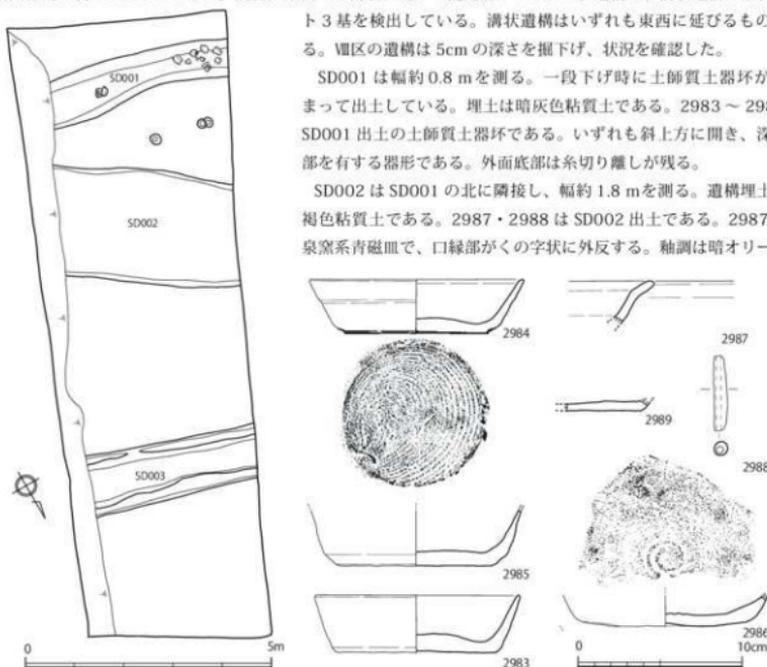
Ⅵ区から約15m北に位置する。Ⅶ区の規模は3×3mのトレンチである。現況は水田で、遺構面は約0.6m下で検出された。地山は暗茶褐色粘質土である。調査区が狭小ながら、ピット8基を検出している。

Ⅷ区(第260・261図)

Ⅶ区から約25m北東にあたり、Ⅰ・Ⅲ区の間位置する。Ⅷ区の規模は5×15mのトレンチである。遺構検出標高は約18.200mである。調査区東側では南北に延びる攪乱溝がみられる。遺構は、溝状遺構3条、ピット3基を検出している。溝状遺構はいずれも東西に延びるものである。Ⅷ区の遺構は5cmの深さを掘下げ、状況を確認した。

SD001は幅約0.8mを測る。一段下げ時に土師質土器環がまどまって出土している。埋土は暗灰色粘質土である。2983～2985はSD001出土の土師質土器環である。いずれも斜上方に開き、深い底部を有する器形である。外面底部は糸切り離しが残る。

SD002はSD001の北に隣接し、幅約1.8mを測る。遺構埋土は暗褐色粘質土である。2987・2988はSD002出土である。2987は龍泉窯系青磁皿で、口縁部がくの字状に外反する。釉調は暗オリーブ色



第261図 Ⅶ区遺構・出土遺物実測図(1/30・1/3)

を呈する。SD003は調査区北側に位置し、幅約1.2mを測る。

2986・2989はⅧ区検出土遺物である。2986は土師質土器杯の底部。内面底部にロクロ痕が残る。2989は白磁口髹げ皿の底部で、全面施釉である。釉調は灰白色を呈する。

T106 (第260・262図)

106トレンチはⅧ区の南側5m先に位置し、その規模は2×11mである。現況は水田で、水田の下は第1層(暗灰褐色土、層厚0.1m)、第2層(暗褐色粘質土、層厚0.1m)に分層ができる。遺構面は第2層直下で検出ができる。検出標高は18.600mである。遺構は調査区全体に展開しており、溝状遺構1条(SD002)、土坑1基(SK001)、ピット37基を検出している。SD002は南北に延びるもので、北西に隣接するⅧ区の溝状遺構と関連性が高い



第262図 T106・SK001遺構・出土遺物実測図(1/20・1/3)

ものである。SK001は土師質土器を廃棄した土坑で、掘下げ、完掘を行っている。以下、SK001の詳細について報告する。

SK001はトレンチ中央から西寄りに検出した土坑で、SD002を切る。平面は隅丸方形を呈し、長軸1.15m、短軸1.1m、深さ0.15mを測る。土坑の壁面はやや垂直気味に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。土坑の中央を中心に土師質土器小皿・坏などがまとまって出土している。遺構の埋土は淡灰褐色土である。

土師質土器は遺構上面から床5cm上にわたってみられる。土坑中央にはほぼ個体の小皿・坏が、東側では小皿・坏が細かく砕いた状態で出土している(第262図・平面図の破線部分にあたる)。土坑中央の小皿・坏は、口縁部を上にしたもの、うつ伏せにしたものがみられる。土器の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

第262図はSK001出土遺物である。土師質土器小皿・坏とも底部切り離しは糸切り離しである。146・152の小皿、147～151・153・155・157の坏は、土坑中央で出土したもので、その他は土坑東側、土器細片のまとまり部分から出土している。

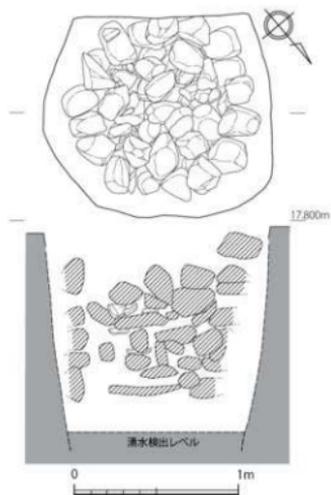
小皿の器形は、器高が高く底部から斜上方に開くもの(86・87・91・93・101)と、器高が低く底部から斜上方に立ち上がるもの(前記番号以外的小皿)に分けることができる。器高は前者が1.0～1.5cm、後者が1.0～1.6cmの範囲におさまる。いずれも底部の器壁は厚く、体部と底部の境は不明瞭である。坏の器形は、底部から斜上方に開くもの(54・118・150)と、斜上方に開くが口縁部下に段を有するもの(前記番号以外の坏)に分けることができる。いずれも深い体部で、器高3.0～3.3cmの範囲におさまる。口径は復元口径をのぞくと、11.8～12.1cmである。75・76・157の底部は厚い。70は土師質土器釜で口縁部直下に鈎が付く。鈎は断面方形をなす。

T111 (第260・263・264図)

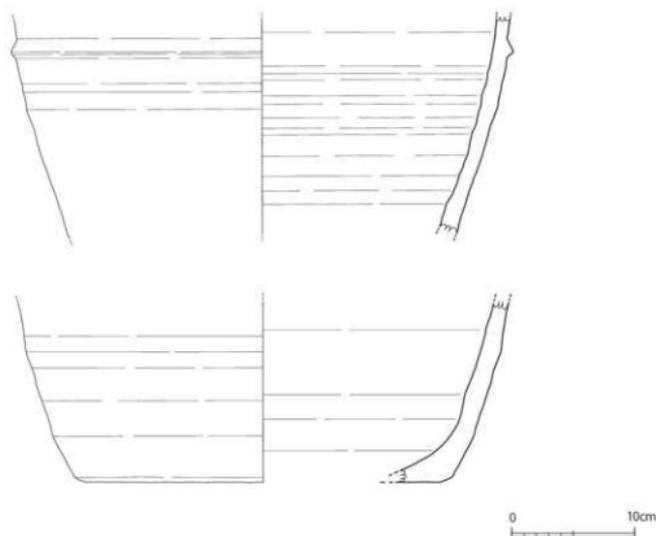
T111トレンチは第6地点I区の西10m先に位置し、その規模は1×4mである。この周辺はI・III区の微高地より0.5m下の低地にあたる。現況は水田で、水田および旧水田層の下、第1層(暗灰黄褐色粘質土、層厚0.1m)、第2層(暗灰褐色粘質土、層厚0.1m)に分層ができる。遺構面は第2層直下で検出ができる。地山は褐黄白色粘質土である。検出標高は17.800mである。遺構は土坑1基、井戸1基(SE001)、ピット2基を検出している。土坑・井戸とも調査区外に延びるためその全容は不明であるが、井戸については掘下げを行っている。以下、井戸の詳細について報告する。

SE001は平面が円形をなす石組み井戸である。幅は1.3mでやや小規模である。石組みは人頭大の河原石を使用している。井戸側では遺構上面から中ほどにかけて拳大の石類が多量に検出されており、井戸廃棄時に井戸封じを行ったものとみられる。多量の石類のほか、破砕した備前焼甕が出土している。石類を除去しながら調査を進めたが、検出面から約1.3mの深さから地下水が湧き出したため掘下げを中止した。

第264図はSE001出土の備前焼甕である。3034は胴部で上位に断面三角形の突帯が施される。胴部は直線的に伸び底部へと至る。3035は底部で斜上方に立ち上がる。外面底部は板状工具のナデが残る。いずれも色調は暗赤褐色を呈する。



第263図 T111・SE001遺構実測図(1/30)



第264図 T111 出土遺物実測図(1/4)

第3節 小結

第6地点の全形は変則的な調査区であったものの、ほぼ調査区全体にわたって中世を中心とする遺構を確認することができた。遺構は微高地が展開するⅠ・Ⅲ区でとくに密集している。またⅡ区のSD555を境として遺構密度が異なり、SD555より北は希薄である。現況の字境がSD555にあたり、北は字古市、南は字奥園に分かれるが、当時の土地利用を考えるうえで興味深い。遺構の状況から、Ⅰ・Ⅲ区を中心に生活・居住域が営まれたものとみられる。本節では出土遺物をふまえ、Ⅰ・Ⅲ区の遺構群を中心に14、15世紀の遺構変遷について述べ、小結としたい。

第6地点では土師質土器小皿・坏や、土師質・瓦質土器鍋・釜・鉢など日常的に使用された土器のほか、東播系須恵器鉢、瀬戸焼鉦皿、龍泉窯系青磁碗、白磁口売げ皿などの搬入品が出土しており、大分県内の他の中世集落遺跡の出土状況とほぼ同様の内容をもっている。土師質土器小皿・坏は、近年発掘調査が進展している大友館、中世大友府内町跡出土の土師質土器と器形・調整など類似する点がみられその関連性が注目される。時期的な編年は考察を参照されたい。上記の遺物のほか、出土した備前焼、瓦質土器風炉について触れておく。14世紀代の備前焼の播鉢(第217図1440・第223図1681)、甕(第255図2981・2982)の色調はいずれも青灰色を呈するもので、SD001・SD555・SK525で出土している。全国的に14世紀段階の備前焼が出土する消費遺跡は少ない傾向であり、流通過程を考えるうえで貴重な資料である。SK505出土の瓦質土器風炉(第236図1636)は15世紀代と考えられるものである。15世紀代の瓦質土器風炉は、大分県内では杵築市・岡ノ前遺跡などの居館関連遺跡や、津久見市・津久見門前遺跡などの寺社関連遺跡に出土分布が限られるようである。第6地点では1点のみの出土であったが、遺跡の性格を考えるうえで注目される資料である。つぎに14・15世紀の遺構変遷について触れる。

14世紀 Ⅲ区のSD500、SD555は、形状・規模から灌漑もしくはは屋根に伴う区画溝であり、SD500・555の

遺物出土状況、出土量は異なるが、時期はおおむね14世紀前半～中頃と考えられ、同時期に併存したものとみられる。Ⅷ区・106トレンチではSD500との関連性が考えられる溝状遺構を検出しているが、SD500南西部の様相は判断としない状況である。Ⅰ区北側に位置するSB001～004は屋敷に関連する建物と考えられる。Ⅰ区南端ではSD001、SK010・015・035が検出されている。出土遺物から、これらの遺構は時期的に大きな差はなく、周辺付近にひとつの遺構のまとまりをなしたことが想定される。時期はSD500・SD555と併存もしくは新しい段階と考えられ、14世紀中頃～後半を考えたい。Ⅲ区で検出された埋裏遺構のSK525はこの段階にあたるものと考えられる。火葬墓・土墳墓と考えられるSK515・520は、出土遺物から14世紀後半以降と考えられる。SD500・555が埋まった段階の遺構分布は、Ⅰ・Ⅲ区の南側を中心とするものであり、地理的に、調査区南側に位置する台地裾部の微高地を中心に展開したとみられる。

15世紀 この段階の遺構は主にⅢ区を中心に展開しているようである。調査区ではこの段階の溝状遺構は確認されなかった。注目する遺構として、完形の土師質土器を大量廃棄したSK510が検出されている。SK510の性格は前節で詳述しているのが割愛するが、出土量、出土状況から特異性をもつものである。106トレンチで検出された廃棄土坑のSK001もこの段階の所産と考えられる。15世紀後半以降はSK505・SK540・SK707・111トレンチSE001を検出している。15・16世紀段階の遺構分布は点的な状況であるが、微高地と北側に位置する低地を中心に遺構が展開したものとみられる。

以上をふまえ、今に残る地名・灌漑水系を参考に遺跡の性格について考えたい。第6地点周辺では中世に遡る地名が見られるが、調査区南50m先に字宗角寺の寺地名、調査区南側に展開する台地上には屋敷・館跡と推定される字堀ノ内の地名が残っている。字堀ノ内の南に隣接する箇所では、第13地点の発掘調査を実施している(第14章で詳述)。調査では14世紀代の屋敷区画と考えられる溝状遺構および建物群を検出している。

大分県立歴史博物館による、豊後高田市所在の田染荘、都甲荘、香々地荘など荘園村落遺跡の灌漑調査では、現在の水利体系が古代・中世にまで遡ることが明らかにされている。第6地点周辺の水田灌漑状況を見ると、Ⅲ区周辺にはクリクマイゼ(現在は100m下流に位置する)が位置していた。第6地点周辺の丹生川左岸沖積地一帯の水田はクリクマイゼから取水している。イゼの構築時期が注目されるところであるが、第6地点で検出された遺構群とイゼの位置から有機的関連が示唆される。

これらの状況を鑑みると、第6地点が位置する丹生川左岸の微高地および、字堀ノ内・第13地点が位置する台地先端部の範囲を中心にひとつの集落域を想定することができる。階層についての言及は困難であるが、13世紀後半の丹生荘地頭職を掌握した大友3代頼泰、14世紀末～15世前半の大友11代親著のこの地域の関わりを考慮すると、大友氏もしくは大友氏との結びつきのある在地領主層が想定される。集落域内の屋敷、寺院関連の空間構成および、集落と水田耕地の関係、など土地利用の具体的な検討が今後の課題である。

第8章 第7地点の調査

第1節 調査の内容

丹生遺跡群第7地点は大分市大字丹生字野間口に所在し、南北に伸び東側に開口する谷状地形にあたる。谷の南北の長さは、約400m、幅約60mであり、第7地点は谷の開口部西側に位置している。

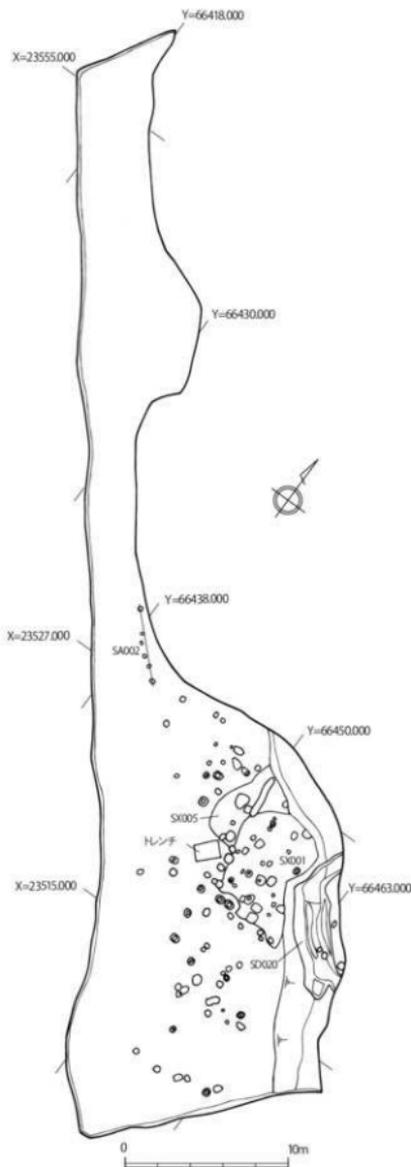
発掘調査はこの谷状地形に沿って西側の丘陵部分を中心に実施した(第265図)。調査面積は約400㎡である。調査区の平面はおおむね長方形を呈し、北半分が幅約6mと狭く、南に向かって広がるが、ほぼ丘陵の地形に即している。

遺跡からは丹生川左岸の沖積地を望むことができ、遺跡北東50m先には8～10世紀を中心とする第8地点が隣接する。第7地点と第8地点の比高差は約6mである。

第7地点の調査の結果、調査区の南半分を中心に、ピットのほか、掘立柱建物5棟(SB001～005)、柵跡(SA001～002)、竪穴状遺構(SX005)、土坑(SK010)、溝(SD020)を確認した(第265・266図)。SA002より北側は遺構が希薄である。

確認した遺構は古代を中心とするものであり、注目する遺構としてSB001が挙げられる。SB001は建物内側に川原石を使用した石敷遺構(SX001)をもち、円面硯・緑釉陶器が出土している。またSX001や建物柱穴の埋土には破砕した壁土が多量に出土しており、建物の構造、性格が注目される。SD020は、丘陵から一段下がった谷状地形の低地部分にあたる場所で検出している。SD020は、北に位置する谷頭方向から流れ、丘陵下の沖積地へ延びるとみられ、その性格について注目される。

第267図は調査区南壁土層図である。地形的に丘陵部分は西から東に向かって緩斜しながら、谷の低地へとつづく。現況は水田であり、丘陵では水田層下に幾枚かの旧水田層がみられる(第3層)。丘陵の斜面部分には、水田に伴う石垣および裏込土(第2層)、盛土整地層と考えられる第7層が確認でき、近世陶磁器が出土している。遺構面は、丘陵では第4～8層下で、低地では第1・第7層下で確認できる。検出標高は、丘陵で約21m、低地で約20mを測る。いずれも地山は褐灰色粘質土である。確認した遺構の埋土は、おおむね、暗灰黒褐色粘質土、黒褐色粘質土である。次節では各遺構の詳細について記すことにする。



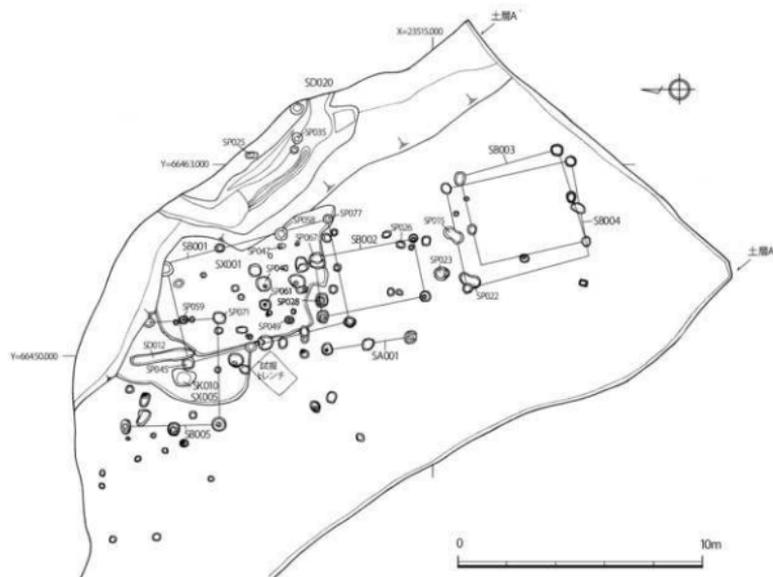
第265図 第7地点遺構配置図(1/300)

第2節 遺構と遺物

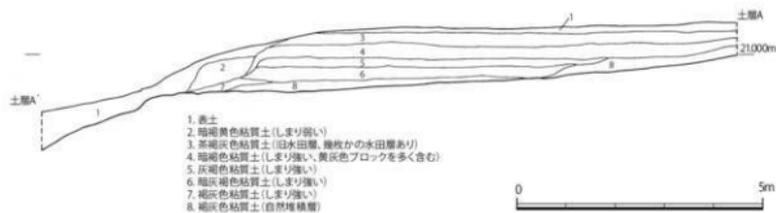
(1) 古代

イ、掘立柱建物、柵跡

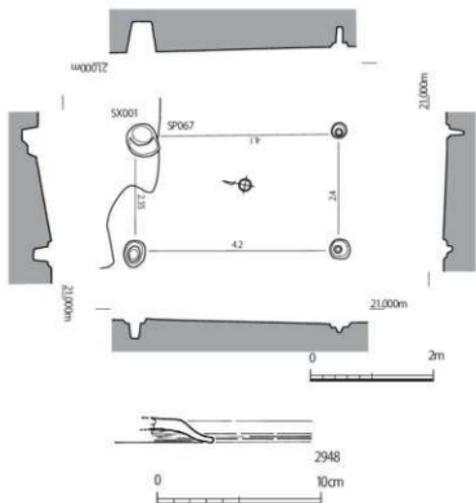
掘立柱建物は5棟確認でき、長軸方向により、南北方向(SB001・002)と東西方向(SB003～005)をもつものに分かれる。いずれも調査区南側で検出しており、SB001・002・005と、SB003・004のまとまりがみられる。SB001については次項で触れる。柵跡は2列確認している。



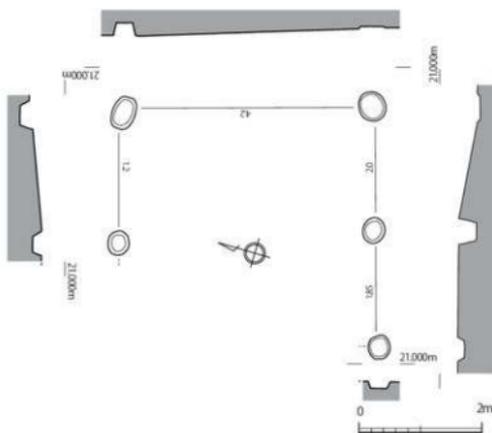
第266図 主要遺構全体図 (1/200)



第267図 南壁土層図 (1/100)



第 268 図 SB002 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 269 図 SB003 遺構実測図 (1/80)

SB002 (第 268 図)

SB001 を切る建物で、南北方向に長軸をもつ。主軸方位は $N12^{\circ} W$ である。梁行 1 間、桁行 1 間の小型建物で身舎面積は 9.96 m^2 である。梁行南側の柱穴は他と比べひとまわり小さい。2948 (SP067) は土師器蓋で内面にヘラミガキを施す。

SB003 (第 269 図)

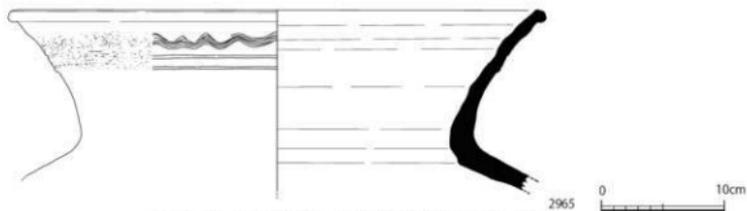
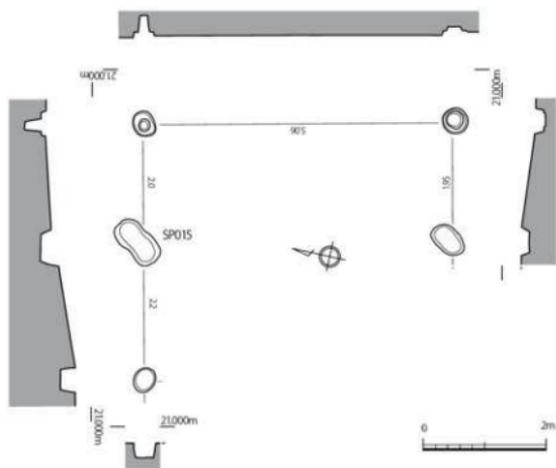
SB001・002 より南に位置する建物で、SB004 と重複する。建物は東西方向に長軸をもつが、梁行西側の柱穴は確認することができなかった。主軸方位は $N72^{\circ} E$ である。梁行は 2 間、桁行は 1 間の小型建物で、身舎面積 $8.54 + a \text{ m}^2$ である。柱穴からの出土遺物は小片であるため図示できなかった。

SB004 (第 270 図)

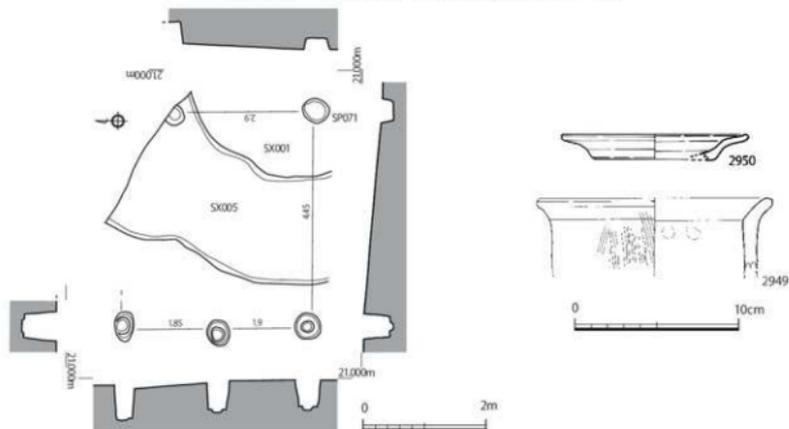
SB001・002 より南に位置する建物で、SB003 と重複する。建物は SB003 と同じく東西方向に長軸をもつが、梁行西側の柱穴は確認することができなかった。主軸方位は $N72^{\circ} E$ である。梁行 2 間、桁行 1 間で身舎面積は $10.54 + a \text{ m}^2$ である。2965 (SP015) は須恵器裏で、口縁部は緩やかに外反し、口縁部端部は肥厚する。口縁部は直線的に伸びる。口縁部下に櫛描波状文、その下に沈線 2 条を等間隔に施す。復元口径 43.6 cm を測る。暗灰褐色を帯び焼成は良好である。

SB005 (第 271 図)

SB001 の西に位置する建物で、SB001、SX005 を切るものと考えられる。建物は SB003・004 と同じく東西方向に長軸をもつが、建物の北側は近世段階以降の削平を受けている。主軸方位は $N5^{\circ} W$ である。梁行 1 間、桁行 2 間の規模と考えられ、身舎面積は $10.05 + a \text{ m}^2$ である。2950 (SP071) は土師器蓋で、口縁部端部内側に段を有する。2949 (SP071) は土師器裏で、口縁部は短く外反し、胴部は直線的である。胴部外面に縦方向のハケメ調整を施す。



第 270 図 SB004 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/4)



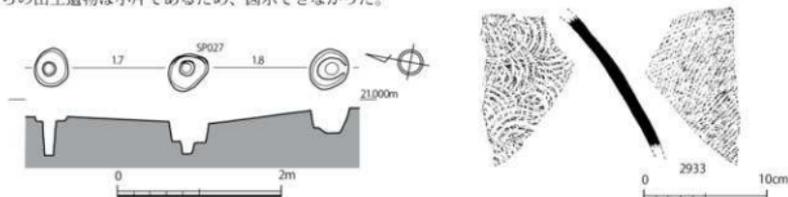
第 271 図 SB005 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SA001 (第272図)

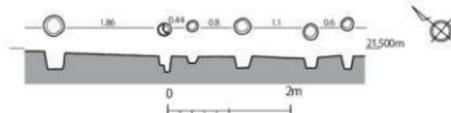
SB001・002より西に位置し、主軸はほぼSB002と同一である。柱穴の規模から建物の可能性が高いが、柱穴を周囲で確認なかったため樁跡とした。主軸方位はN11°Wである。柱穴は等間隔に配し、北から南に向かって深さが浅くなる。2933 (SP027)は須恵器甕の胴部である。

SA002 (第273図)

調査区南半分に遺構の広がりを認められるが、SA002は最も西側に位置する。主軸は東西方向にあり、地形に即した位置関係にある。主軸方位はN42°Wである。ピットの間隔、深さにバラツキが認められる。柱穴からの出土遺物は小片であるため、図示できなかった。



第272図 SA001 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/4)



第273図 SA002 遺構実測図 (1/80)

ロ. 性格不明遺構

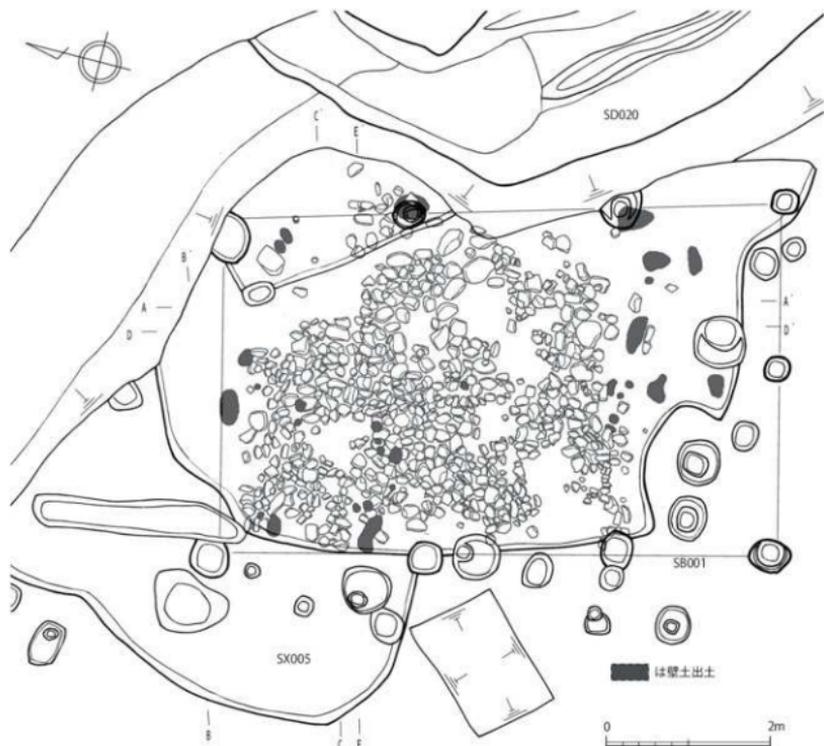
SB001 (SX001)、SX005について触れる。SB001とSX001は関連する遺構である。SB001は、梁行2間、桁行3間の規模をもつ建物であり、SX001は建物内側の石敷遺構である。SX005は竪穴状を呈するものである。これらの性格について現状では断定しえないため、性格不明遺構として報告する。

SX001 (第274～278図)

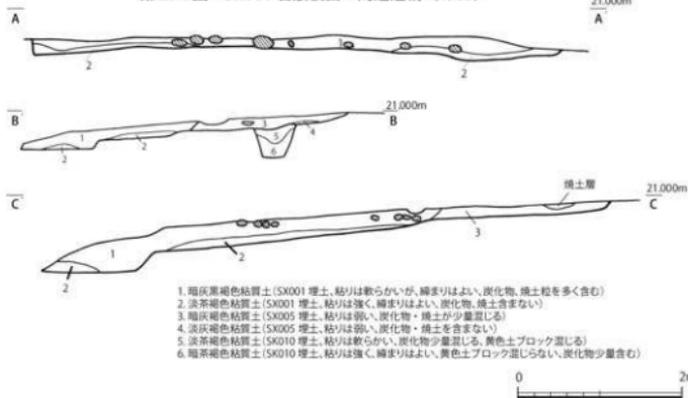
SX001は、SB001の内側にあたるもので、不定形の長軸約7m、短軸4.6m+αの掘り込みプランを確認できる(第274～276図)。掘り込みはSX005を切るが、北と東側は水田に伴う石垣の構築により削平を受けている。掘り込みのほぼ中央を中心に石敷が検出できる。石材は人頭大、拳大の川原石で占める。石敷は数箇所の空間があって整然と配置したものではなく、石と石の間は密接せず隙間が認められる。石類は焼けているものがほとんどない。遺物は土器とともに破砕した壁土が多量に出土する。SB001の柱穴出土のものとは異なり、5cm程度のものが大半を占める。壁土は石敷の周縁を中心に出土している。

第275図はSX001と後述するSX005の土層図である。石敷の上面は暗灰褐色粘質土(第1層)であり、炭化物・焼土を多く含んでいる。石敷の下部は淡茶褐色粘質土(第2層)でしまりはよく焼土・炭化物は含まない。後述するが、第2層下に柱穴を確認していることから、第2層は石敷配置に伴う整地層とみられる。整地後、上面に石敷を配置したと考えられる。

第277・278図はSX001出土遺物であり、縄文土器、土師器環・蓋・椀・甕、黒色土器A類椀、須恵器面碗・甕、緑軸陶器、土錘、壁土、石錘がみられる。SX001上層は石敷より上面にあたり、SX001下層は石敷とほぼ同レベルで出土し、取り上げを行ったものである。これらは第1層に対応する。なお緑軸陶器は上層で1点出土している。細片のため図示しえなかった。緑軸陶器は器種不明であるが、土師質焼成で淡緑色を帯びる。壁土は破砕した小片が多いため、特徴的なものを中心に図化を行った。

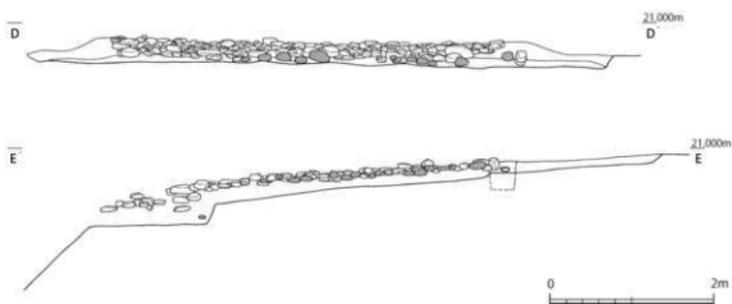


第 274 図 SX001 石敷検出・周辺遺構 (1/60)

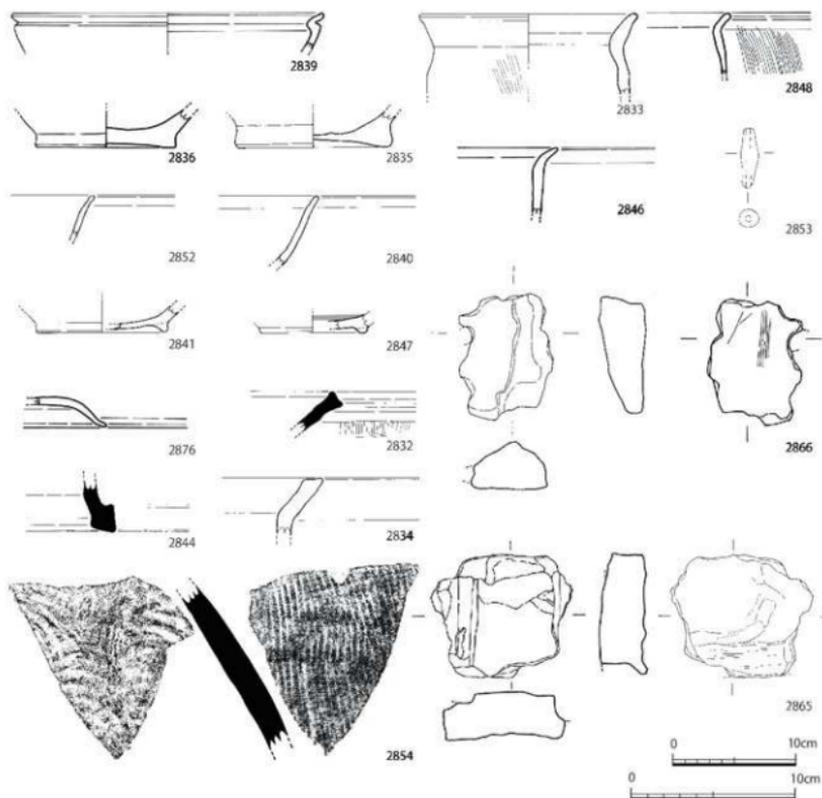


1. 暗灰黒褐色粘質土 (SX001 埋土、粘りは散らかいが、締まりはよい、炭化物、焼土粒を多く含む)
2. 淡茶褐色粘質土 (SX001 埋土、粘りは強く、締まりはよい、炭化物、焼土含まない)
3. 暗灰褐色粘質土 (SX005 埋土、粘りは弱い、炭化物・焼土が少量混じる)
4. 淡灰褐色粘質土 (SX005 埋土、粘りは強い、炭化物・焼土を含まない)
5. 淡茶褐色粘質土 (SX010 埋土、粘りは散らかい、炭化物少量混じる、黄色土ブロック混じる)
6. 暗茶褐色粘質土 (SX010 埋土、粘りは強く、締まりはよい、黄色土ブロック混じらない、炭化物少量含む)

第 275 図 SX001 土層断面実測図 (1/60)



第 276 図 SX001 断面見通し図 (1/60)



第 277 図 SX001 上層出土遺物実測図 (1/3・1/4)

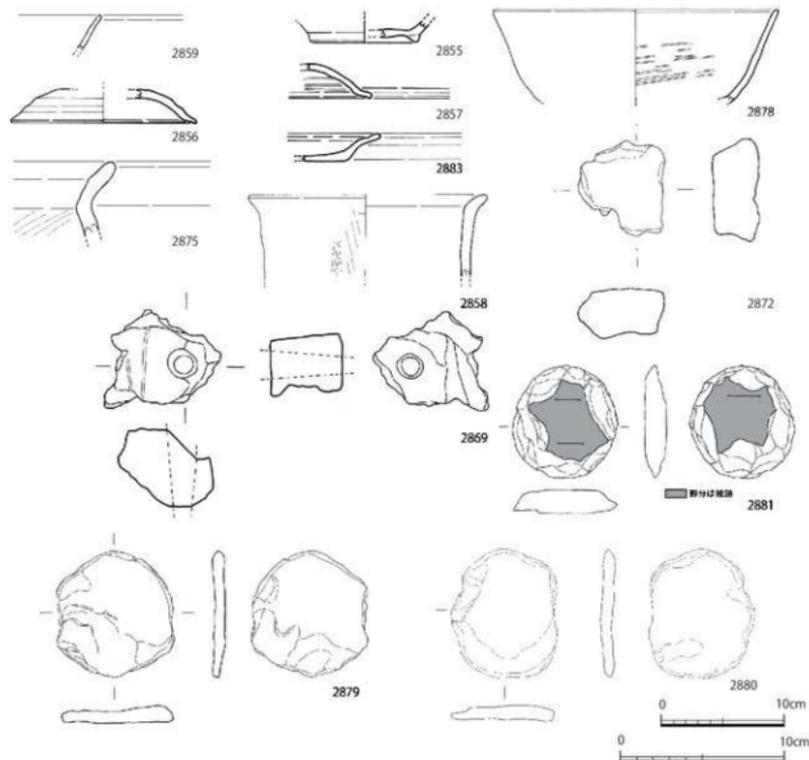
(上層出土遺物・第 277 図)

2835・2836・2839 は縄文土器であり 2839 は浅鉢、2835・2836 は深鉢の底部である。2847 は黒色土器 A 類椀で高台は低い。2876 は土師器蓋で、口縁部は短く外方へと開く。2834 は土師器甕で、企救型か。2833 も土師器甕であるが、口縁部端部がすぼまる。2844 は須恵器円面硯の脚部で、端部は断面三角形を呈する。2865・2866 は壁土。2865 は 2 箇所に間渡痕が認められる。2866 は円形の穿孔が認められ木舞痕であろう。

(下層出土遺物・第 278 図)

2859 は土師器環。2856・2857 は土師器蓋である。2857 は口縁部内側に段を有し、体部内面にヘラミガキを有する。2883 は土師器皿か。口縁部がくの字に外反する。2878 は土師器椀か。大振りの形を有し、体部内面に横方向のヘラミガキを施す。2869・2872 は壁土。2869 は円形の穿孔が認められ木舞痕であろう。2872 は破砕したもので、SX001 出土資料は大半がこのような小片が占めている。2879～2881 は石錘で重なって出土している。2881 は上・下面とも二次被熱を受けている。いずれも石材は川原石である。

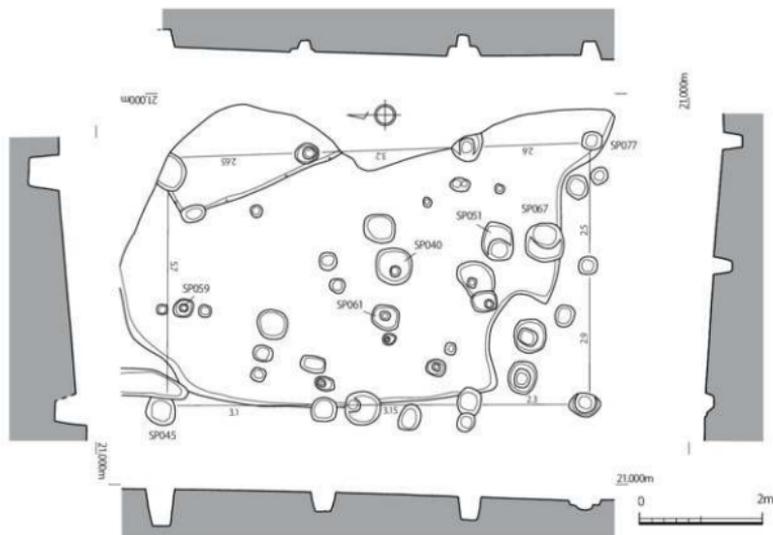
SX001 の土師器環は、口縁部が外反するもの (2840・2852)、直口するもの (2859) などがみられる。蓋は口縁部が屈曲し端部に段を有するもの (2857)、端部に段を有しないもの (2856・2876) が見られる。



第 278 図 SX001 下層出土遺物実測図 (1/3・1/4)

SB001 (第 279・280 図)

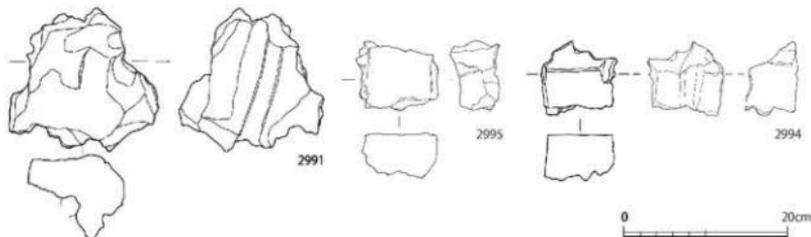
SX001 の外側周囲に位置する建物で、南北方向に長軸をもつ。建物の南側の桁方向の柱穴は SX001 を振り込んでいる。建物の北、東側は近世段階の水田開発に伴い削平を受けている。主軸方位は N5° W である。梁行 2 間、桁行 3 間の規模をもつ建物である。身舎面積は 47.18 m² を測り、本遺跡の建物のなかで最も大きい。各柱穴の深さは 0.4 ~ 0.5 m であり、上面から下面全体に壁土が出土している。壁土の大きさは 20 ~ 30 cm 程度のものが多く、5 ~ 10 cm 程度の破片が出土する他の遺構とは異なる状況である。



第 279 図 SB001・SX001 石敷下遺構実測図 (1/80)

第 280 図は SB001 柱穴から出土した壁土である。壁土は大型が多く、ここでは特徴的なものについて触れる。2991 (SP045) は内側に木舞痕が認められる。2995 (SP077)・2994 (SP077) は平面形がコーナーを示すもので、2 面が確認できる。2994 は内側に木舞痕が認められる。

第 281 図は SX001 の石敷下から確認した柱穴出土遺物である。柱穴は地山面 (褐色粘質土) から確認している。2946 (SP059) は縄文土器深鉢である。口縁部内側に段がつく。2947 (SP061) は土器器坏である。2948 (SP067) は土器器蓋である。体部内面にヘラミガキが認められる。



第 280 図 SB001 出土遺物実測図 (1/6)



第 281 図 SX001 石敷下出土遺物実測図 (1/3)

SX005 (第 282 ~ 284 図)

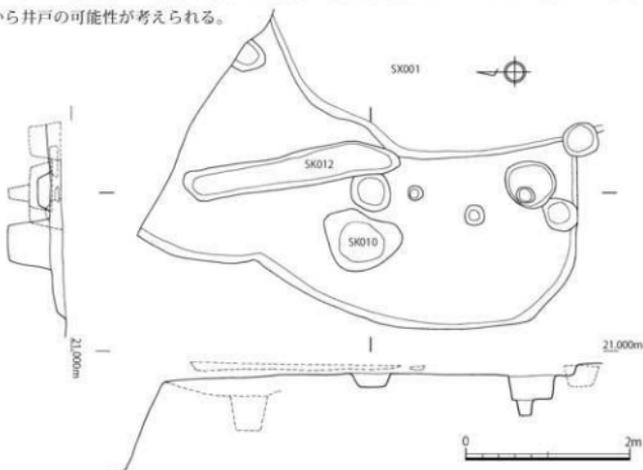
SX001 の西側に検出した竪穴状遺構で、南北方向に長軸をもつ。そのプランは SX001、SB001・SB005 の柱穴、SD012 と重複する。SD012 は近世陶磁器が出土する溝状遺構である。また遺構の北側は近世段階の水田開発に伴い削平を受けている。

SX005 の平面形は不整形をなし、長軸 $4.8\text{m} + \alpha$ 、短軸 $2\text{m} + \alpha$ 、深さ 0.2m を測る。遺構の壁面はやや垂直気味に立ち上がる。遺構埋土は暗灰褐色粘質土で、炭化物・焼土が少量混じる (第 275 図)。

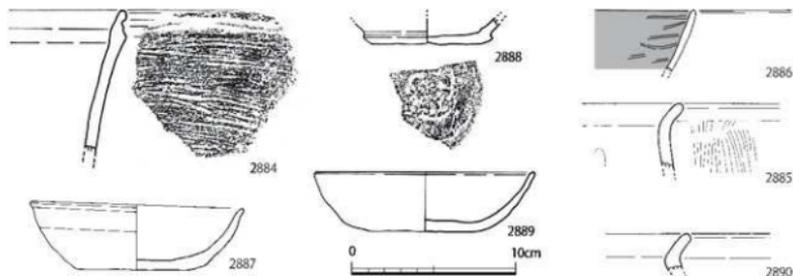
遺構の床面はおおむね平坦であり、ほぼ中央付近に SK010 が検出できたほかは、建物の主柱穴となるピットは検出されなかった。SK010 は土層観察等から、SX005 に伴う遺構と考えられる。遺物実測は図示しえなかったが、破碎した壁土細片が出土しており、遺構の埋没時期は SX001、SB001 と近接するものと考えられる。

第 283 図は SX005 の出土遺物である。遺物は縄文土器、土師器、黒色土器がみられる。2884 は縄文土器の深鉢である。胴部は緩やかに外反し、口縁部が屈曲気味に内傾する。胴部外面は条痕が残る。2887 ~ 2889 は土師器環である。2888 は底部が円盤高台状をなし、回転ヘラ切り離しが残る。2887・2889 は体部が内彎する器形である。2887 は口縁部が外反し体部中位から屈曲気味に底部へといたる。2889 は口縁部が直線的に伸びる。外面体部下半にヘラズリが認められ、底部は回転ヘラ切り離しのちなデである。2886 は黒色土器 A 類碗か。体部内面にヘラマガキを施す。2885・2890 は土師器甕。2885 は口縁部が短く外反し体部は直線的に伸びる。外面は縦方向のハケメを施し、体部内面は指オサエが残る。2890 は口縁部が短く外反する。

SK010 は径約 1m の不整形プランをなし、深さ約 40cm を測る。壁面はやや垂直気味に立ち上がる。埋土はおおきく 2 層に分層できる (第 275 図)。上層 (淡茶褐色粘質土)、下層 (暗茶褐色粘質土) とともに古代を中心とする遺物がみられた。なお調査時では遺構の底面から地下水が湧き、底面から 0.2m 上まで溜まった状態がみられた。この状況から井戸の可能性が考えられる。

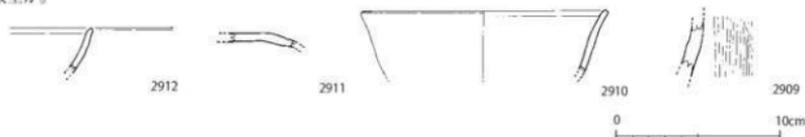


第 282 図 SX005 遺構実測図 (1/60)



第 283 図 SX005 出土遺物実測図 (1/3)

第 284 図は SK010 出土遺物である。2910・2911 は上層、2909・2912 は下層からの出土である。2910・2912 は土師器環。2911 は土師器蓋の天井部である。2909 は土師器甕で、外面に縦方向のハケメを施す。企冪型か。



第 284 図 SK010 出土遺物実測図 (1/3)

ハ、溝

SD020 (第 285・286 図)

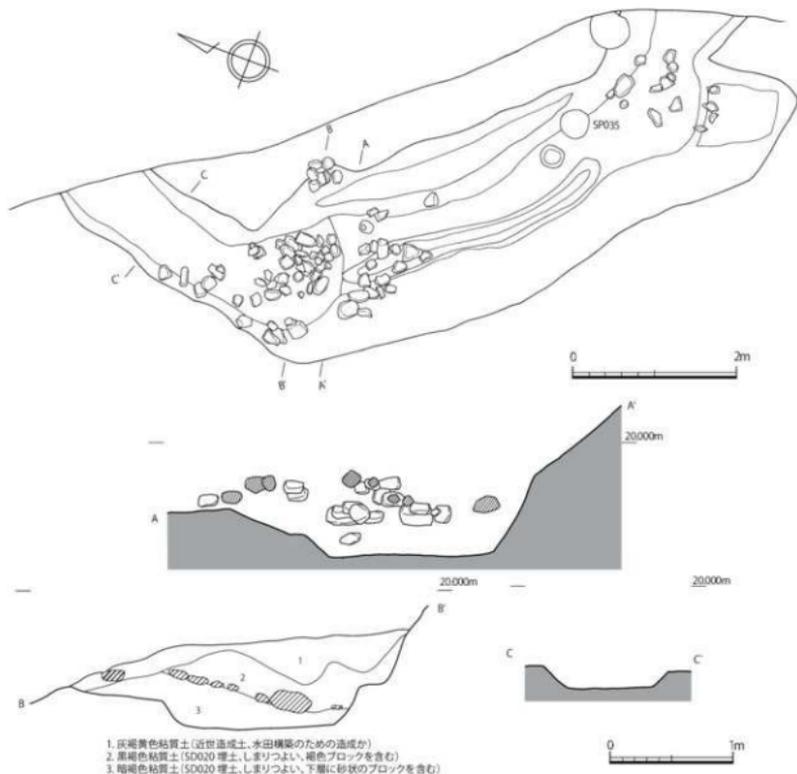
SD020 は、SB001、SX005 等主要な遺構群が展開する丘陵から、東に一段下がった谷状地形の低地部分で検出している。丘陵と低地との比高差は約 1m ほどである。なお低地部分では、SD020 のほか 4 基のピットを検出している。そのうち SP035 とピット 1 基が SD020 と重複している。

SD020 の両端は調査区外に延びるため、その規模は明らかにしえない。地理的にみると、谷と丘陵の境に沿って流れた可能性がある。溝の長さは約 8m + a である。幅は最大で 2.4m、最小で 0.8m を測り、溝の両端が狭くなっている。深さは 0.5m を測る。底面はほぼ平坦で、各底面は高さの違いにより、北から東に向かって流れていたと考えられる。

第 285 図は SD020 の土層断面図である。溝の上面は近世段階の水田造成に伴う第 1 層 (灰褐色粘質土) がみられる。その下、第 2 (黒褐色粘質土)・3 層 (暗褐色粘質土) は SD020 の埋土である。とくに第 2 層では拳大の礫を多く含んでいる。第 2・3 層の状況から、おおむね東から西にむかって溝が埋められたものとみられる。また第 2・3 層とも古代の土器とともに破砕した壁土が出土している。溝の埋没時期については、古代と考えられるが、第 2・3 層ともほぼ同時期の可能性がある。

第 286 図は SD020 出土遺物である。縄文土器、土師器、須恵器、土鍾が出土している。なお壁土は細片が多く、図示しなかった。2905・2912～2915 は第 3 層から出土し、その他は第 2 層出土である。

2894・2895 は縄文土器の浅鉢である。2895 の口縁部は垂直気味に立ち上がり、胴部中位は強い屈曲がみられる。口縁部外面に 2 条の沈線がみられ、胴部内外面とも横方向のヘラミガキを施す。2893 は縄文土器の深鉢の底部であろう。2896～2898・2905・2912 は土師器環の口縁部。2899 は土師器環の円盤状底部。2901 は土師器鉢か、口縁部が短く内傾する。2913 は土師器蓋で、口縁部は比較的長く、まるみをもつ。2906 は須恵器甕の胴部。2902 は須恵器壺の胴部か。胴部内面にロクロ痕が残る。外面は自然釉がかかる。2914 は須恵器瓶の胴部か。外面はヘラケズリが認められる。



第 285 図 SD020 遺構実測図 (1/60・1/40)

二、その他の柱穴

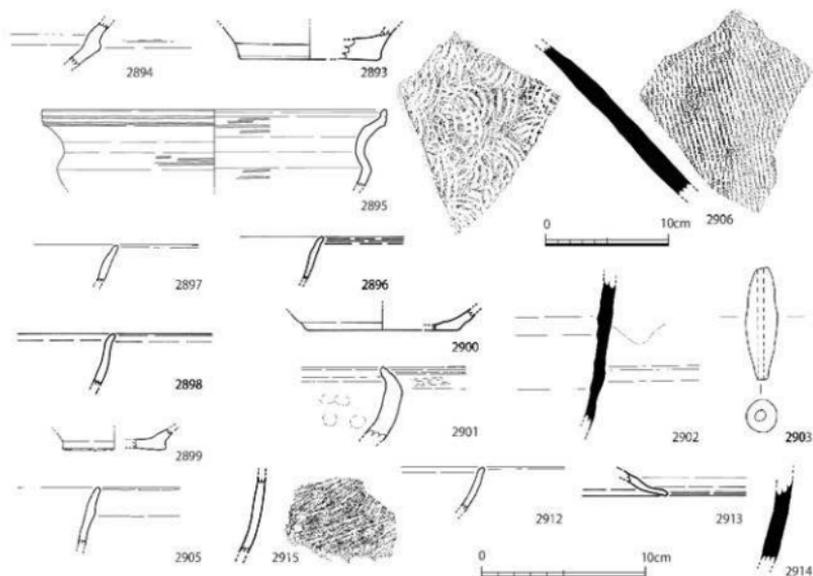
SP025・035 (第 287・288 図)

SD020 周辺では 4 基のピットが確認されているが、そのうち SP025・035 について触れる。

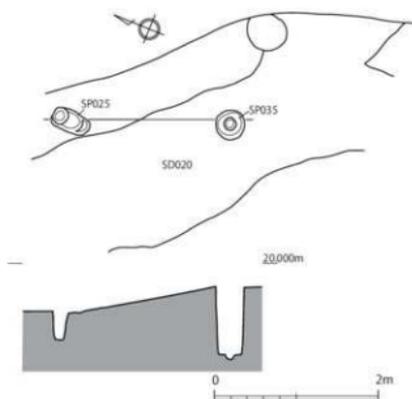
SP035 は SD020 を切るが、025 とともに壁土が多く出土している。025 は平面が楕円形を呈し、径は約 0.4m を測る。深さは約 0.3m である。035 は平面が円形を呈し、径は約 0.3m を測る。深さは約 0.8m である。025 と 035 の柱間は 1.9m を測る。

SP025・035 の柱列の主軸は、丘陵の SB001 と同一の主軸方位であることが指摘できる。柱列は SB001 の柱筋から約 1m 北にずれているが、同じ主軸方位から SB001 とほぼ同時期の遺構と考えられる。SB001 に付属する建物、低地で展開する建物の可能性が考えられるが、SP025・035 の周辺は調査区外に近く全容は不明である。現段階は柱列として考えたい。

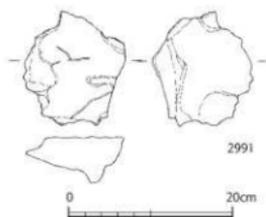
SP025・035 とも出土遺物は破碎した壁土が占めている。第 288 図は SP035 出土の壁土で片側部分は面を成している。



第286図 SD020 出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第287図 SP025・SP035 遺構実測図 (1/60)



第288図 SP035 出土遺物実測図 (1/6)

第289図はその他のピットから出土した遺物である。2928 (SP026)、2930 (SP023)、2932 (SP026) は土師器坏である。2929 (SP026) は土師器高台付き坏で、外面底部は回転ヘラ切り離しが残る。2927 (SP022) は土師器甕で、体部内外面はハケメ調整を施す。2931 (SP023) は土師器の甕である。口縁部上端は平坦に仕上げる。2934 (SP028) は土師器の管状土鍾である。

ホ、その他の出土遺物（第289・290図）

ここでは遺構の掘り下げ、検出、表採した遺物を中心に触れる。

2924はSD012出土の唐津系陶器鉢である。口縁部は玉緑状に肥厚し、外面体部は刷毛目装飾を施す。口縁部は露胎である。復元口径20cmを測る。

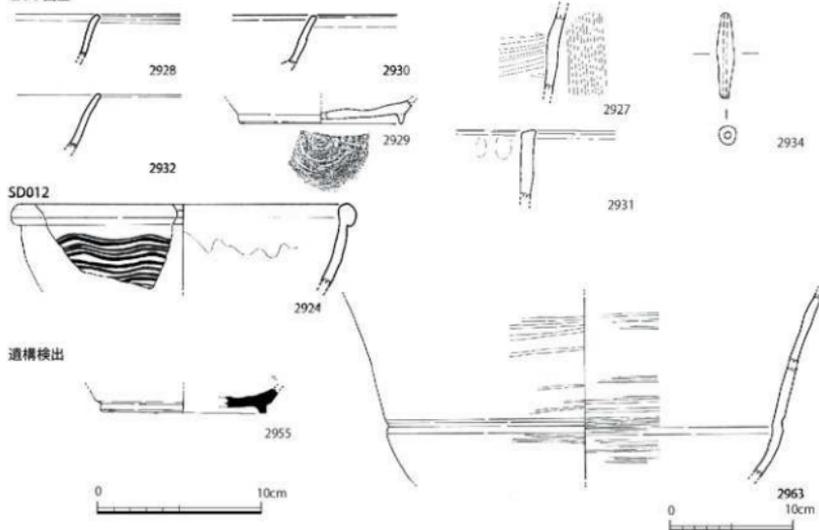
2955・2963は遺構検出時に出土した遺物である。2963は縄文土器の深鉢で、胴部最大径32cmを測る。胴部が屈曲し、ほぼ直線的に上方へ伸びる。胴部内外面とも横方向のヘラミガキを施す。色調はおおむね褐色を呈する。2955は須恵器高台付き杯の底部である。

2920・2966・2923・2919は、SB001周辺の東側斜面に位置する近世水田に伴う石垣部分から出土した遺物である。2920・2966は縄文土器の浅鉢である。2920は内彎する器形で、口縁部下に8条の沈線、胴部中に格子状の文様を施す。色調は暗赤褐色を呈する。2966は胴部が屈曲し、ほぼ直線的に上方へ伸びる。外面に2条の沈線を施す。2923は黒色土器A類椀か。古代の所産であろう。体部内面はヘラミガキを施す。2919は肥前系磁器碗である。

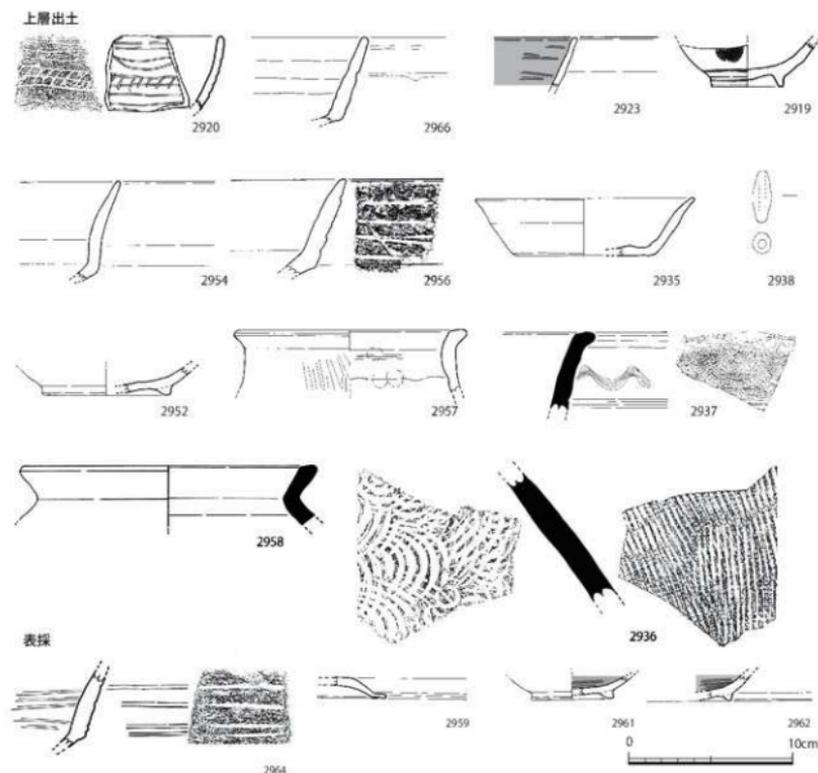
2935～2938・2952・2954・2956～2958は暗灰褐色粘質土など遺構面より上層から出土した遺物である（第267図の南壁土層図・4～6層に対応する）。2954・2956は縄文土器の浅鉢で、胴部が屈曲する。2956は外面に4条の沈線を施す。2935は土師器杯である。口縁部が緩やかに外反する。2952は土師器椀か。2957は土師器裏で、口縁部上端は平坦に仕上げる。外面は縦方向のハケメを施す。2936・2937・2958は須恵器裏である。2936は胴部片である。2937は口縁部端部が外方に張り出す。口縁部下に5条単位の波状文、また波状文の下に2条の沈線を施す。2958は口縁部が短く外反し、胴部は張り出す器形であろう。2938は土師器の管状土鉢である。

2959・2961・2962・2964は表採した遺物である。2964は縄文土器の浅鉢の胴部で、先に示した2954・2956・2966と同様な器形を有する。2964の外面に4条の沈線を施す。2959は土師器蓋で、口縁部端部は段を有する。2961・2962は黒色土器A類椀か。いずれも体部内面にヘラミガキを施す。

ピット出土



第289図 その他の遺構出土遺物実測図①(1/3・1/4)



第290図 その他の遺構出土遺物実測図② (1/3)

第3節 小結

第7地点の調査では、調査区南側を中心に古代の掘立柱建物、溝、柵跡、ピットが確認された。以下、調査で分かったことを述べ、小結としたい。

本遺跡では、縄文時代後期を中心とする土器が出土した。遺構からは流れ込みによるものであり、他は遺構外からの出土であった。今回の調査では縄文時代に関連する遺構が確認されなかったものの、この谷周辺に縄文時代後期～晩期の遺跡が展開する可能性が予想される。

古代の遺構から出土した遺物は、土師器、須恵器、黒色土器A類、埴土などの土製品がみられた。とくに、土師器杯、蓋の占める割合は高い。須恵器は糞の出土がみられるもの、坏・蓋は皆無である。このことから、供膳具は土師器主体の傾向を窺うことができる。SX001、SX005・SD020は、土師器杯・蓋等の特徴から9世紀前半～中頃、他遺構の時期もほぼ同時期と考えられる。

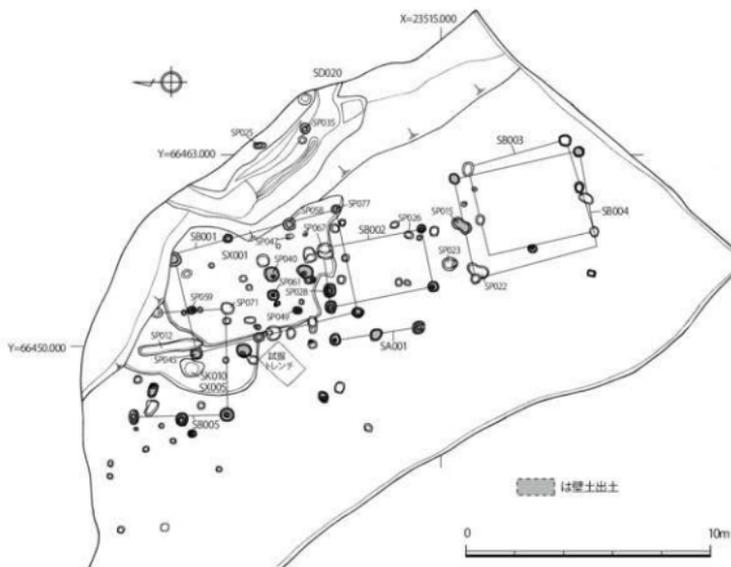
土器よりも最も多く出土している埴土は、スサがはいり、二次被熱を受けている。埴土を支えるには、竹などの部材で格子目状に組まなければならないが、本遺跡では破砕したもののほか、横方向に組んだ間渡や、縦方向に穿孔した木舞などの痕跡が確認できる。第291図は遺構から出土した埴土分布図である (SX001・SD001の

図示は省略している)。この図からは、SB003 をのぞく各掘立柱建物、櫓列、その他のピットから広範囲に出土していることが分かる。SB001 の柱穴や SX001 以外の各遺構の壁土は細片が占め、木舞・間渡などの痕跡を残すものは出土していない。

2 間×4 間の SB001 は、建物内側に石敷 (SX001) をもつものである。SX001 出土の壁土は細片が多く、石敷の周囲を中心に出土分布が確認できる。一方、SB001 柱穴の壁土破片は、その倍以上に大きく、2994 のように平面形がコーナーを示すものが出土している。以上のことから SB001 の柱穴周囲に壁土を巡らした可能性が高く、SB001 廃絶時に壁土も破砕し埋めたものと考えられる。なお瓦の出土はみられなかった。調査では、SB001 の梁行、桁行軸線上に壁土を支えた考えられるピットは確認できず、入口など具体的な建物復元を行うことができなかった。今後の課題としたい。

第 7 地点では、掘立柱建物の主軸方向、壁土出土有無などから複数段階の変遷が想定できる。出土資料が僅少のため、具体的な遺構の前後関係は不明であるが、短期間のうちに建物の建て替えを行った可能性が高い。

つぎに遺跡の性格について考える。検出した遺構は谷の開口部に立地するが、掘立柱建物は丘陵の南端部分でほぼ南北を軸に並んでいる。SB001 は石敷・壁土の構造をもち、須恵器円面硯・緑軸陶器の出土から、掘立柱建物群のうち中心的な位置を担った建物であった可能性が高い。低地で検出した SD020 は、北に位置する谷頭方向から流れ、丘陵下の沖積地へ延びるとみられ、性格としては灌漑用の水路が考えられる。時期は SB001 より先行ないし並行時期が考えられ、両者の有機的関連が示唆される。SB001 など掘立柱建物の立地は、沖積地を一望できる谷の開口部をおさえることに重要な意味をもつものとみられ、水路などを管理・管轄した建物群として考えることが可能である。第 7 地点北に隣接する第 8 地点は、ほぼ同時期に企画性のある掘立柱建物群を検出している。以上をふまえると、第 7 地点で検出した遺構群は一般集落とは考えにくく、水田経営などに関わる公的な施設と考えられる。当該時期の集落の規模、水田開発などの地域的な様相の解明が今後の課題である。

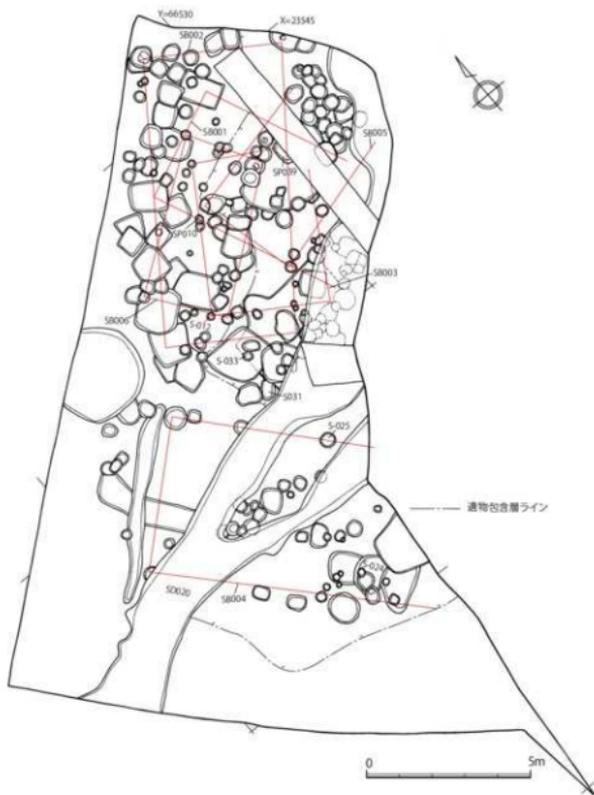


第 291 図 壁土出土分布図 (1/200)

第9章 第8地点の調査

第1節 調査の内容

第8調査地点は、丹生川西岸に位置し、大字「丹川」字「野間口」にあたる。当調査区は第7調査地点の50m東、第4調査地点の300m北東に位置している。調査面積は200㎡である。調査地点の現況は水田である。丹生川の河岸段丘上に位置しており、遺構の検出標高約17mで、調査区北側から南側にかけて、緩やかに傾斜している。地盤は粘土・砂礫の堆積層で、付近の開析谷からの流路痕跡であると推定される。検出遺構は土坑・溝・ピット・掘立柱建物跡などである。調査区の東～南側にかけては、約0.3mの包含層が堆積しており、この包含層に一部のピットと溝跡(SD020)が切り、包含層除去後にピットを中心とした遺構が検出された。出土遺物は古代土師器主体であり、ほとんどの遺構は古代に帰属できる。



第292図 第8地点遺構配置図(1/150)

第2節 遺構と遺物

(1) 概要

第8調査地点は、古代の溝跡1条・掘立柱建物跡6棟・ピット・土坑2基・包含層である。基本層序(第293図)は、1～5層は水田層、6層は古代の包含層である。6層からは比較的多くの遺物が出土した。遺構は6層を切るものと除去後に検出されるものがある。掘立柱建物跡6棟の構成する柱穴は、一片0.8m前後の方形掘り方になる柱穴や幅0.3mほどの円形柱穴である。

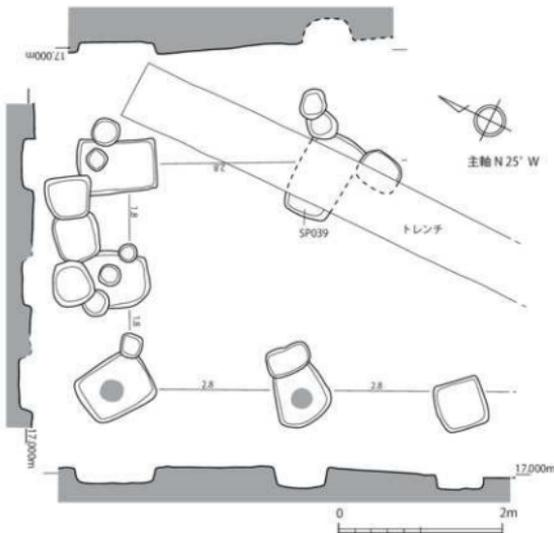


第293図 基本層序模式図

(2) 古代

イ. 掘立柱建物跡(SB)

調査区東の柱穴群から掘立柱建物跡6棟を確認した。しかし建物跡は調査区外に近接していることと後世の削平を受けているものが多く、全体がわかるものは少なかった。また掘立柱建物跡等を構成しないピットも多く、調査区の北側や東側に関連遺構が展開していると考えられる。方形掘り方の柱穴をもつ掘立柱建物跡は、第4調査地点でも多く検出されており、距離的にも数百mの距離しか離れていないため、また出土遺物から考慮すると関連があると思われる。さらに第7調査地点においても石敷きをもつ掘立柱建物跡などが検出されており、この遺構との関連も考えられる。



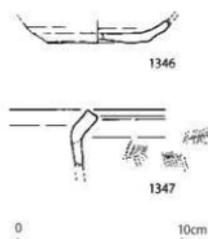
第294図 SB001 遺構実測図(1/80)

SB001(第294図)

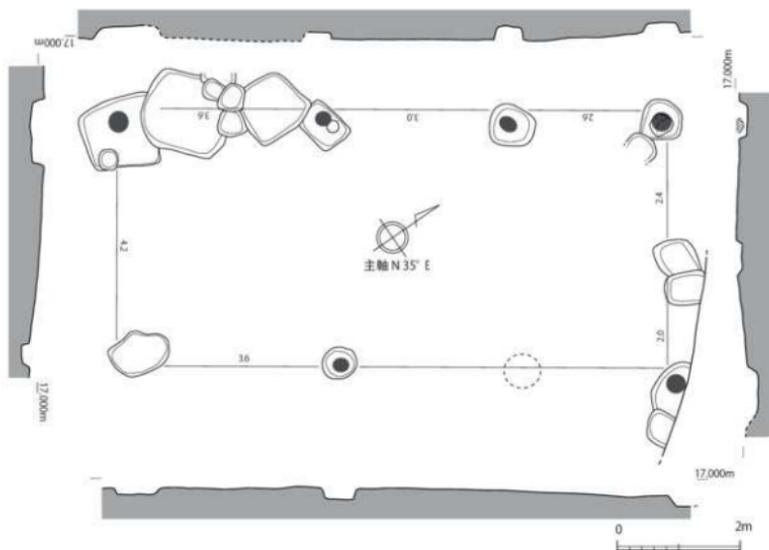
遺構は調査区北側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SB006に切られる。包含層下で検出した。建物跡は全て検出できず、北側と東側の調査区外に延びると思われる。建物方位はN25°Wである。梁行2間+a×桁行3+a間、身舎面積29.1+a㎡である。出土遺物(第295図)は、1346(SP039)は土師器杯の底部である。1347(SP039)は土師器(甕)である。

SB002(第296図)

遺構は調査区北側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SB006に切られる。包含層下で検出した。建物跡を構成する柱穴は東側桁行の北から2個目の柱穴がトレンチによって不明である。またいくつかの柱穴から柱痕が検出され、丸柱で0.3mほどである。北側梁行の東西端の柱穴には柱痕から礎盤石か根石に使用されたと思われる礫が検出された。建物方位はN35°Eである。梁行2間×桁行3間、身舎面積37.8㎡である。出土遺物は小破片のみである。



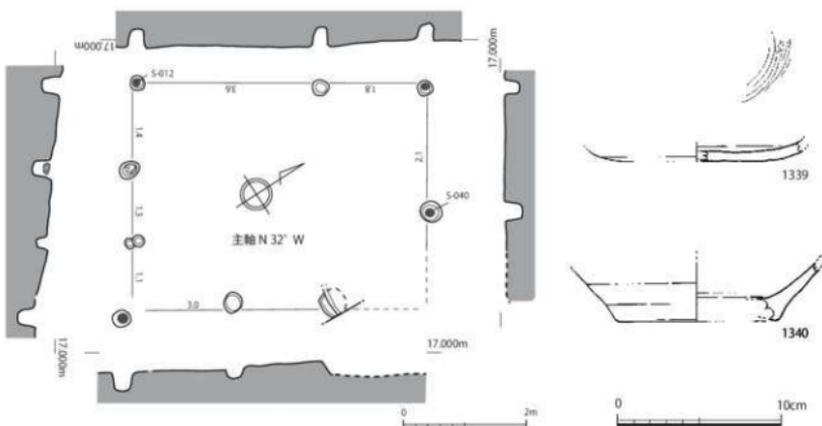
第295図 SB001 出土遺物実測図(1/3)



第296図 SB002 遺構実測図 (1/80)

SB003(第297図)

遺構は調査区北側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SB006に切られる。包含層下で検出した。建物跡を構成する柱穴は北東隅の柱穴が試掘トレンチにより削平されたと考えられる。また数基の柱穴から丸柱痕と礎盤石であろう礫が検出された。建物方位はN32° Eである。梁行3(2)間×桁行3間、身舎面積17.8㎡である。出土遺物(第297図)は、1339(SP012)は土師器環の底部である。内底部に円状のヘラミガキを施す。1340(SP010)は縄文土器深鉢であろう。



第297図 SB003 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB004(第298図)

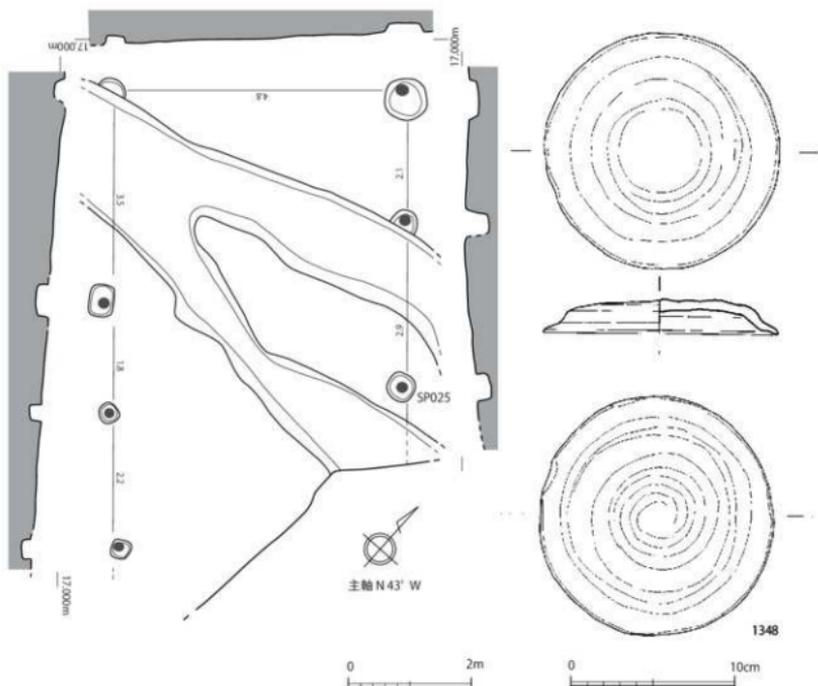
遺構は調査区南側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SD020に切られる。包含層下で検出した。建物跡は全て検出できず、南東側の調査区外に延びると思われる。建物方位はN43°Wである。梁行1間×桁行3+ α 間、身舎面積36+a㎡である。特にSPO25の柱穴の柱痕部から土師器蓋を正位置の状態で見つけた。出土遺物(第298図)は、1348(SPO25)は土師器蓋で、完形である。内外面にヘラミガキを施す。

SB005(第299図)

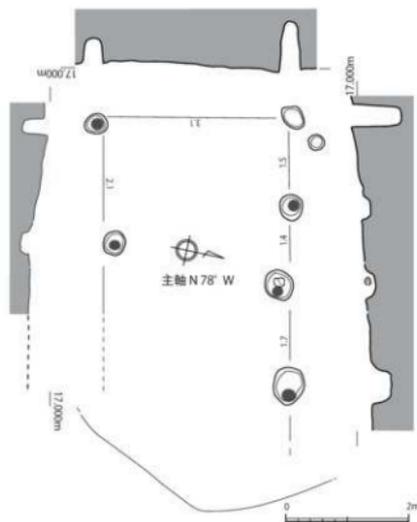
遺構は調査区北側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SK040を切る。包含層下で検出した。建物跡は全て検出できず、東側の調査区外に延びると思われる。建物方位はN78°Wである。梁行1間×桁行3+ α 間、身舎面積14+a㎡である。柱痕観察から丸柱を利用したことがわかる。出土遺物(第299図)は小破片のみである。

SB006(第300図)

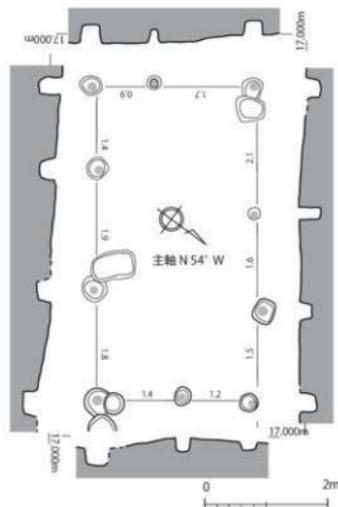
遺構は調査区北側で検出した。他の柱穴との切り合い関係があり、SK040を切る。包含層下で検出した。建物跡は全て検出できず、東側の調査区外に延びると思われる。建物方位はN54°Wである。梁行2間×桁行3間、身舎面積13.3㎡である。柱痕観察から丸柱を利用したことがわかる。出土遺物(第300図)は小破片のみである。



第298図 SB004遺構・出土遺物実測図(1/80・1/3)



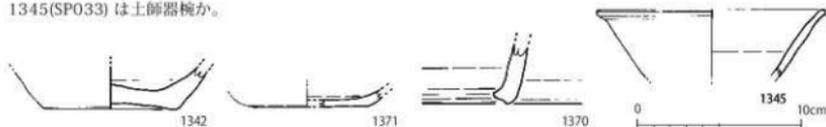
第299図 SB005 遺構実測図 (1/80)



第300図 SB006 遺構実測図 (1/80)

その他のピットからの出土遺物 (第301図)

1342(SP024)は縄文土器深鉢片、1371(SP031)は土師器環の底部、1370(SP031)は土師器甕の底部、1345(SP033)は土師器椀か。



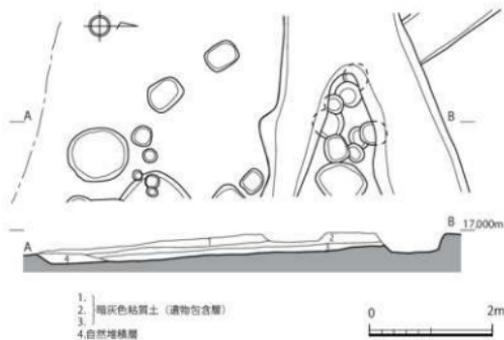
第301図 その他のピット出土遺物実測図 (1/3)

ロ. 溝跡 (SD)

SD020(第302図)

溝跡は1条 (SD020) 確認した。調査区の西側から東側に向かって検出し、途中で2条に分岐する。切り合いは包含層を切る。規模は調査区内検出範囲で、全長 $21 + a$ m、最大幅 2.5m、最大深 0.4m である。

埋土は砂質土中心で、水流があったことを予測させる。開析谷からの谷水が関係していると思われる。出土遺物 (第303図) は 1369・1372は甕底部、1349は内外面に回転ヘラミガキ調整、1350は椀底部、1368は環である。



第302図 SD020 遺構実測図 (1/80)

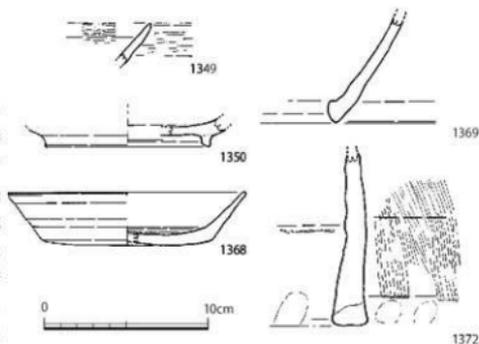
ハ、土坑(SK)

土坑は2基確認した。

SK030(第304図)

遺構は調査区南西側で検出した。SPO24などを切る。包含層除去後確認できた。形状は一部を調査区の境にあたるため不明であるが、長軸1.7+αm、短軸1.9m、最大深0.2mを測る。埋土は粘質土で、炭化物を多く含む。出土遺物(第306図)は1327・1334は土師器環で、口縁端部を若干外反させる。1327は器高が他の環よりも高い。1330の環以外はミガキ痕は見当たらない。1331・1332は土師器椀である。

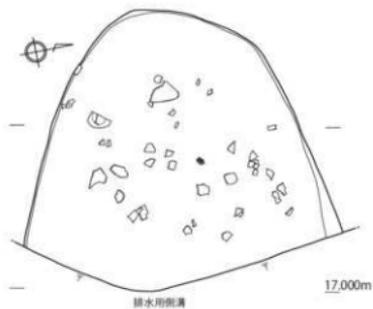
1335は片口の土師器鉢である。外面は刷毛調整のちナデである。1338は須恵器壺の胴部で、外面に平行してカキメが残る。1344・1341は甌、1337は縄文土器で浅鉢か。



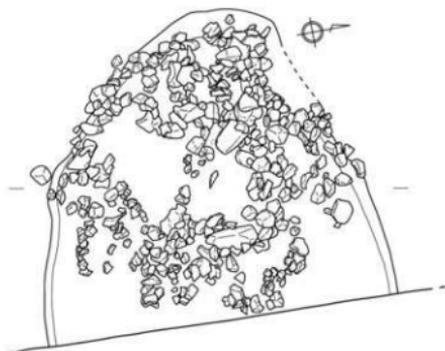
第303図 SD020 出土遺物実測図(1/3)

SK040(第305図)

遺構は調査区東側で検出した。SB001・002・005・006に切られ、SB003を切る。包含層下で検出した。形状は不定形な円形を呈し、長軸1.9+αm、短軸2.15m、最大深0.4mを測る。上層部には拳大ほどの礫が密集する。出土遺物は土師質土器小片が少量出土した。



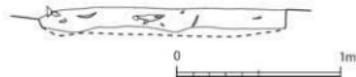
排水用側溝



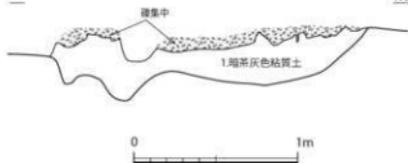
1層灰色土(粘質土/微褐色粒,明茶黄色粒子,炭化物多)

17.000m

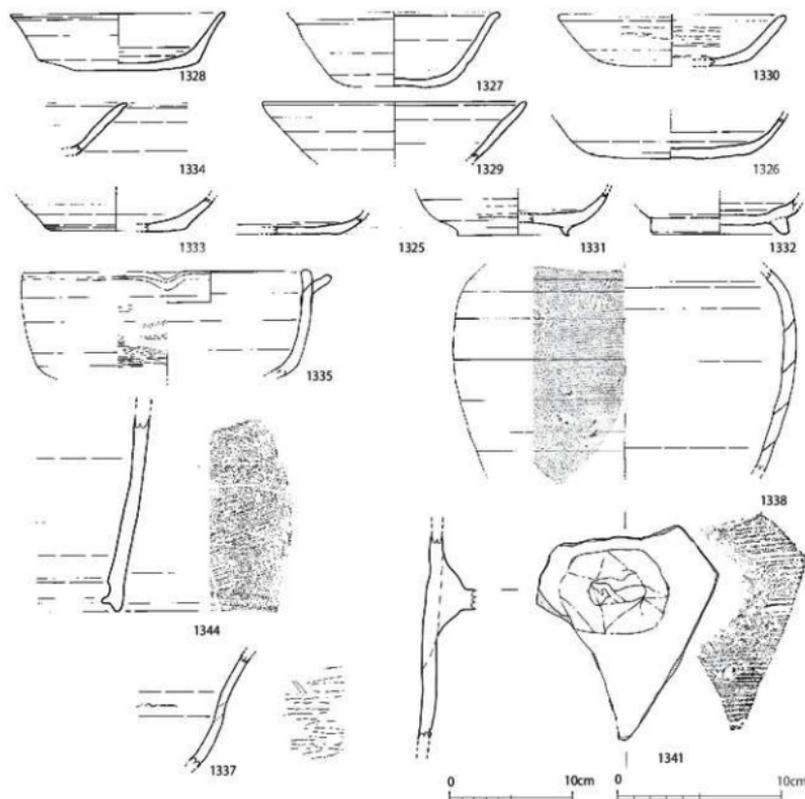
17.000m



第304図 SK030 遺構実測図(1/80)



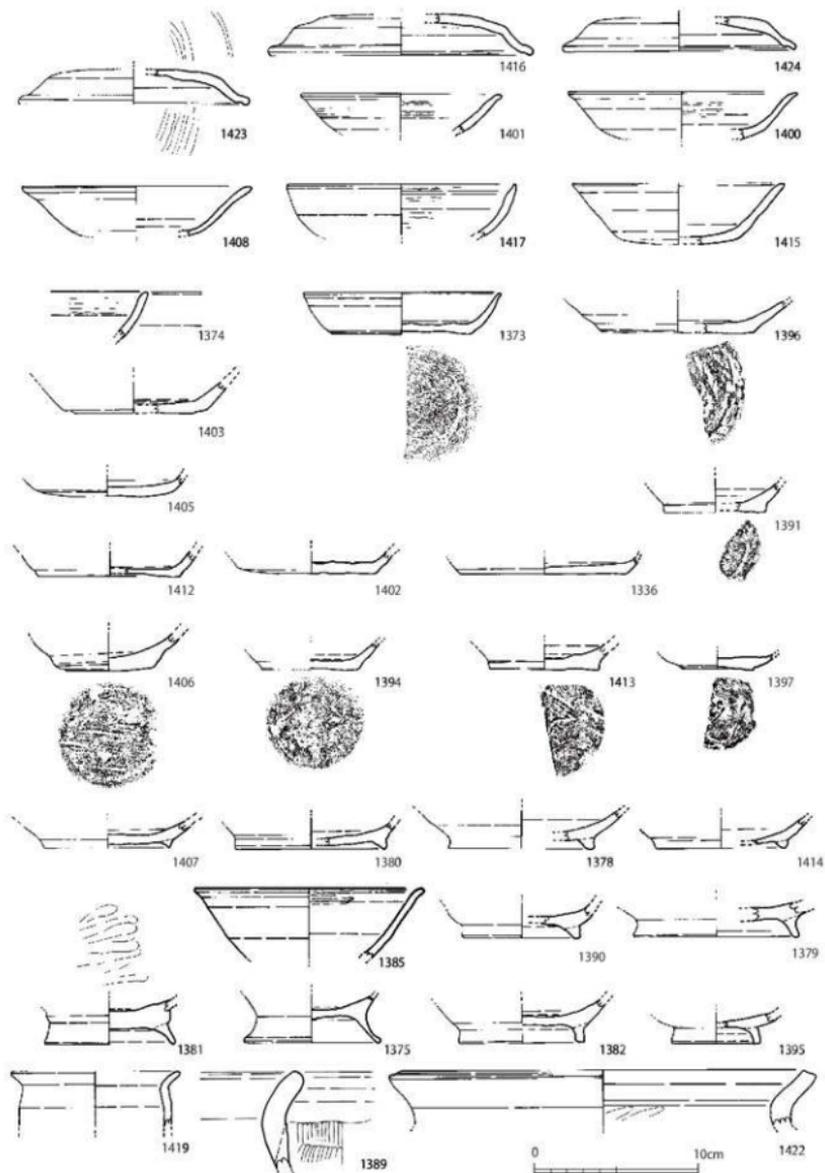
第305図 SK040 遺構実測図(1/80)



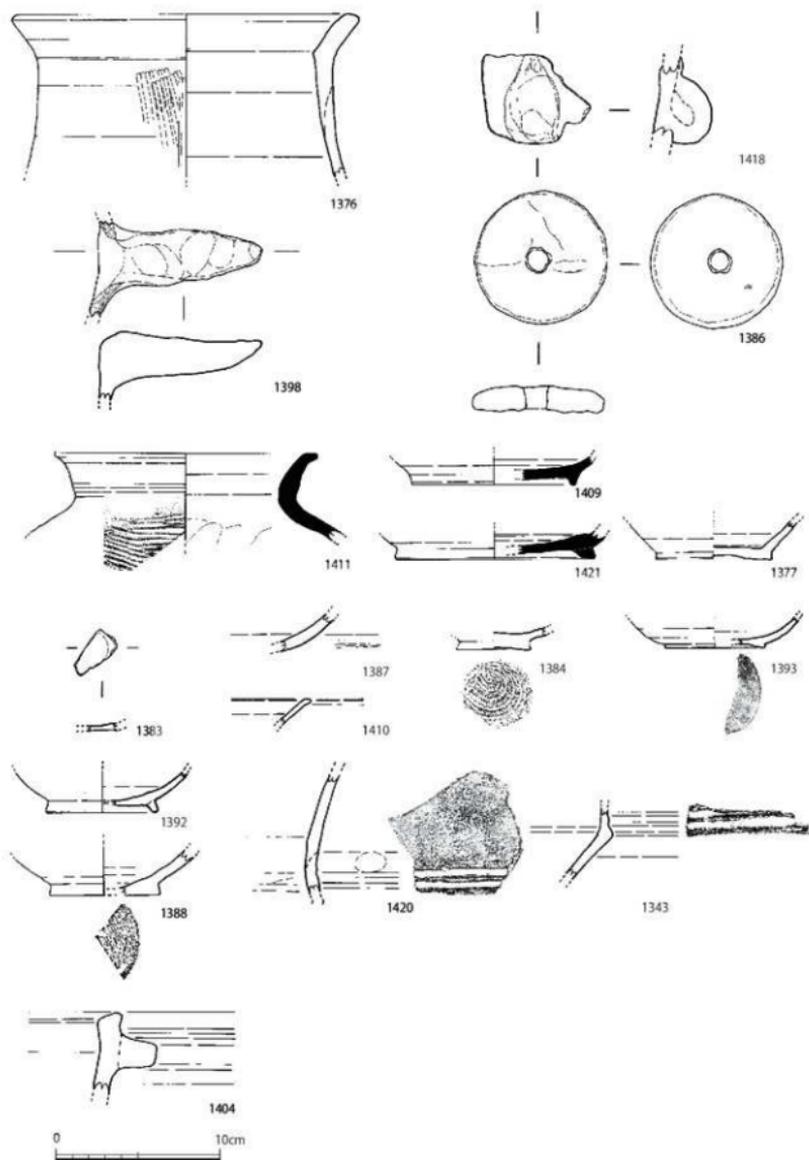
第306図 SK030 出土遺物実測図 (1/3) 1335・1338 (1/4)

包含層 (第292図)

調査区東側で広く検出した。一部のピットとSB6、SD20に切られる。その他の遺構はこの包含層除去後に検出できている。出土遺物は一部古代末～中世前期の遺物が含まれるが、検出面で確認できたものであり、包含層上部の層に帰属する遺物と考えられる。この包含層の出土遺物(第307・308図)は古代中心である。1423は土師器蓋で、内外面にヘラミガキ調整する。1408・1417・1415・1374・1373・1346などは土師器坏である。口縁端部を外反させるものや胴部中央から外反していくものがある。1415は器高が他よりも高い。1373は外底にヘラ記号を施す。1391等は円盤状高台を貼り付けるもので、前述の土器よりも新しい要素である。1407・1380等は土師器椀である。1381・1385・1375・1390・1379・1382・1395は内黒土器である。1375は高台が高い。1389・1942・1376は囊で企句型である。1398は土師器の銅で、両手もしくは片側に把手がつく。把手の下部派2次焼成を受けている。1386は土製の紡錘車である。1411は須恵器囊である。外面平行タタキ痕が残る。1409・1421・1377は須恵器椀である。1383・1387・1410・1384・1393は緑釉陶器である。1384や1393は関西方面の生産か。1392は瓦器椀で12世紀くらいの所産。1388は土師器で、胎土は白色である。白色研磨土師器と呼ばれるものか。1404は銅。1420・1343は縄文土器である。



第307図 包含層出土遺物実測図①(1/3)



第308図 包含層出土遺物実測図② (1/3)

第3節 小結

第8地点において、古代の遺構(9～10世紀中心)を検出した。立地は北側と西側にのびる開析谷が合流する地点の近接地にあたり、地盤は礫や粘質堆積土である。後背地は丘陵が接近しており、開析谷の延長部を避けるように古代の集落が展開する。掘立柱建物跡は6棟検出し、SB001・002は方形堀片の柱穴で構成され、第4調査地点などで確認できる建物跡と関連が考えられる。SB003～006は丸柱穴で構成され、特にSB006は調査区に広がる包含層を切るため、建物跡の中では一番新しい。切り合い関係及び埋土から掘立柱建物跡の新旧はSB003→SB001→SB002→SB004・005→SB006である。柱穴からの出土遺物などを参照すると8世紀後半から10世紀代に展開していたと考えられる。出土遺物は緑釉陶器の皿や坏が数点出土しており、SB001・002を考慮すると丹生郷に関する公的施設が展開していた可能性がある。その後、柱穴の規模は小さくなるが、建物の性格がそのまま引き継がれるのか、もしくは相違する建物が展開するのかは明確にすることはできない。補足として、当調査区の隣接する丘陵沿いに沿って東側の試掘調査においても、当調査区と同時期の遺構が確認できている。一部、素掘りの井戸跡と考えられるものも検出した。これらから、遺跡の範囲はさらに東側を中心に広がっていることは判明されているが、盛土保存のため、本調査には移行していない。



第8地点作業風景

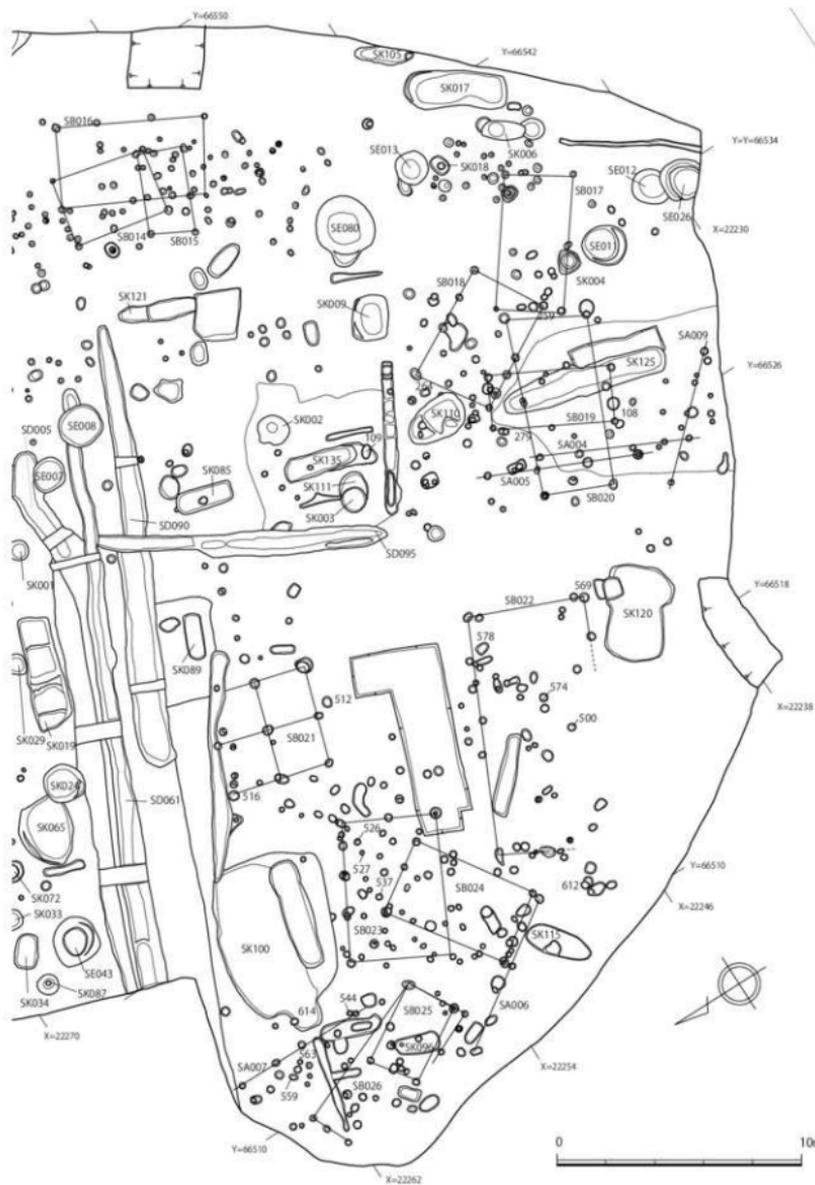
第10章 第9地点の調査

第1節 調査の内容

丹生川坂ノ市条里跡第9地点は、大分市大字丹川字野邊田にあたり、丹生川右岸の微高地に位置している。第9地点の東側は山塊が南北に延び、西側は丹生川に沿って低地が広がる。第9地点と低地の比高差は1mである。試掘調査の結果、低地では現水田層下に礫を含む砂礫層がみられ旧河道を確認している。調査区北東150m先には、縄文時代・中世遺跡の第10地点が位置している。



第309図 第9地点遺構配置図(1/300)



第 311 図 第 9 地点遺構完掘図② (1/200)

調査区の全形はおおむね正方形をなし、調査面積は2500㎡である(第309図)。

第9地点の調査概要について触れる。現況は水田層で、水田下は複数の旧水田層が認められる。旧水田下は調査区北西側では黄褐色粘質土(近世以降の整地層)、その他では暗灰褐色粘質土であり、その直下が遺構面にあたる。検出標高は調査区西側が約23m、東側が約22mであり、地形的に西から東へ緩斜している。

第9地点の遺構検出の結果、調査区全体にわたって遺構の広がりを確認することができた。遺構の埋土は茶褐色粘質土、灰褐色粘質土を基調とする。地山は黄褐色粘質土で、砂礫を含まない。遺構は出土遺物から、中世、近世を中心とする2時期が確認でき、いずれの時期も多様な遺構、遺物が検出されている。本章では、中世の遺構を中心に報告を行うことにし、近世～近代遺構は概要のみにとどめている。近世・近代遺構については第2節の(2)で触れる。

第9地点の中世遺構の時期は10～13世紀代を中心とするものである。遺構はピット多数のほか、下記の性格をもつものが確認されている(第309～311図)。

掘立柱建物26棟(SB001～026)

柵跡9列(SA001～009)

溝跡2条(SD030、SD070)

土坑22基(SK040、SK045、SK055、SK065、SK085、SK086、SK089、SK094、SK096、SK100、SK105、SK110、SK111、SK115、SK120、SK121、SK125、SK135、SK140、SK145、SK150、SK155)

井戸跡2基(SE015、SE080)

第9地点の中世遺物は、土師質土器、瓦器、東播系須恵器、常滑・渥美焼の国産陶器、白磁・青磁・青白磁・黄軸陶器の中国産陶磁器が出土している。瓦器は和泉型瓦器のほか、焼きがあまり軟質焼成の瓦器が多量に出土している。軟質焼成の瓦器は胎土・調整・器形から和泉型瓦器とは異なるものであり、在地産と想定されるものである。この瓦器は大分市域では、はじめて第9地点でまとまって出土していることから、その生産・流通を考えるうえで重要な資料である。また渥美焼、白磁四耳壺、黄軸陶器盤など当該時期では流通希少な陶磁器が出土している。次節では各遺構の詳細について記す。

第2節 遺構と遺物

(1) 古代末～中世

イ. 掘立柱建物(第309～311図)

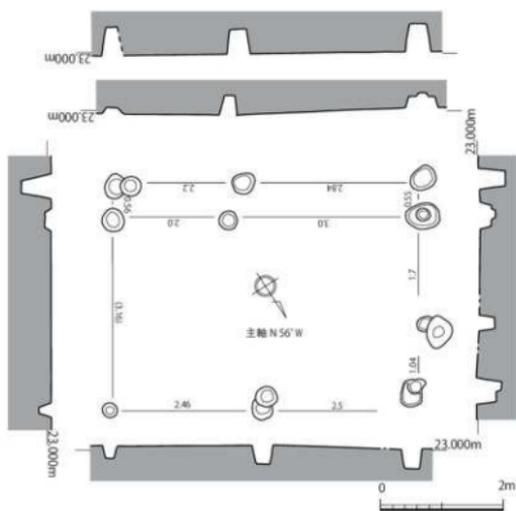
第9地点では掘立柱建物26棟、柵跡9列を確認できた。掘立柱建物・柵跡とも調査区全体で検出している。掘立柱建物はその主軸から、東西方向(SB001～003・SB011～013・SB015・SB017・SB020・SB022～024)と、南北方向(SB004～010・SB014・SB016・SB018・SB019・SB021・SB025・SB026)に分かれる。柵跡は東西方向(SA006・008・009)と、南北方向(SA001～005・007)に分かれる。建物、柵跡の主軸方位の違いは、空間配置、時期的変遷を考えるうえで手掛かりとなるものである。

SB001(第312図)

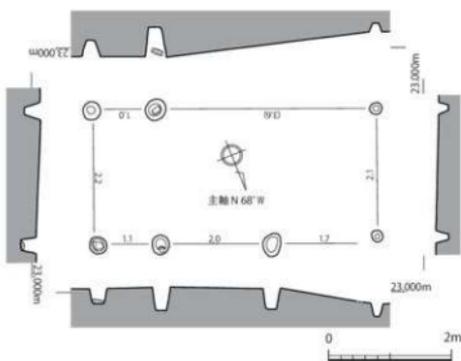
調査区中央の北端で検出した、東西方向に長軸をもつ建物である。南側に庇をもつ。身舎部分は梁行2間、桁行2間の規模で、身舎面積は14.70㎡である。東側の梁行方向の柱穴は確認することができなかった。南側の桁行方向および、庇方向の柱穴が東寄りに位置しており柱間距離が短くなっている。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SB002(第313図)

調査区北東で検出した東西方向に長軸をもつ建物である。SA001の南側に位置する。梁行1間、桁行2間の規模で、身舎面積は10.11㎡である。柱穴からは土師質土器の小片が出土したが図示できなかった。



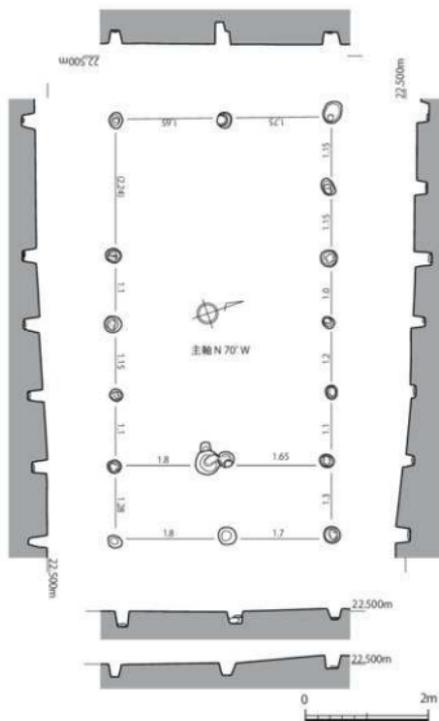
第 312 図 SB001 遺構実測図 (1/80)



第 313 図 SB002 遺構実測図 (1/80)

SB003 (第314図)

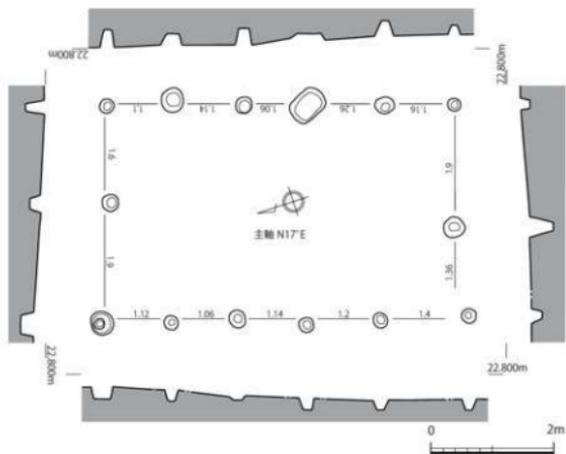
調査区中央の北東寄りに検出した根石をもつ建物で、東西方向に長軸をもつ。SB003の西にSB008が隣接する。建物の一部が近世溝のSD005に切られている。建物の規模は梁行2間、桁行6間で東側に庇をもつ。柱間距離は梁行1.7～1.8m、桁行1～1.2mで、おおむね等間隔に柱穴を配する。身舎面積は19.30㎡である。梁行側の柱穴をのぞく、他の各柱穴の底面には径20cmの扁平な川原石を配している。建物の梁行は旧地形と同じく東から西に向かって緩斜している。柱穴からは土師質土器環など小片が出土しているが図示できなかった。



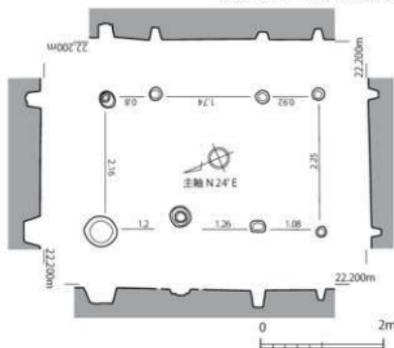
第314図 SB003遺構実測図(1/80)

SB004 (第315図)

調査区中央の北東寄りに検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB013と重複する。SB004の北西2m先にSB003が位置する。建物の規模は梁行2間、桁行5間で、身舎面積は19.68㎡である。SB003の梁行方向と、隣接するSB004の桁行方向のラインがほぼ同一であることから軒を連ねた関連する建物であろうか。南側の桁行柱穴の間隔が北側と比べると短くなっている。柱穴からは土師質土器の小片が出土したが図示できなかった。



第315図 SB004 遺構実測図 (1/80)



第316図 SB005 遺構実測図 (1/80)

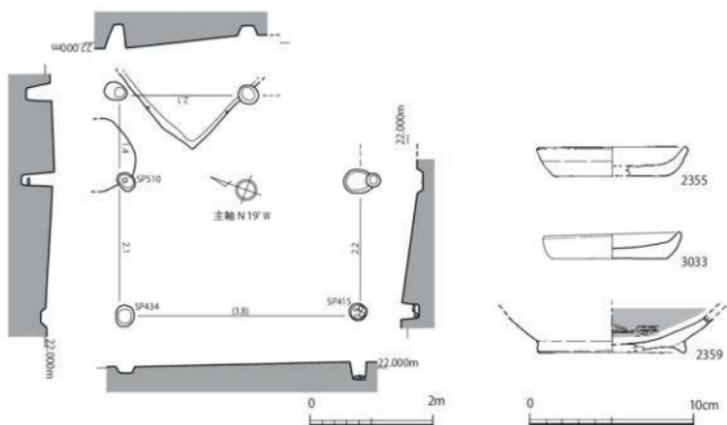
SB005 (第316図)

調査区北西に検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB005の西1m先にSE015が位置する。建物は梁行1間、桁行3間の規模で、身舎面積は7.72㎡である。桁行方向は南北とも整然とした配置ではなく、西側は柱穴間隔が短い。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SB006 (第317図)

調査区北西側に検出した南北方向に長軸をもつ建物である。この付近はSB009～012が位置し重複しており、複数時期の建て替えが行われている。中世土坑のSK155を切る。建物東側は近世土坑のSK050に切られるため、その全容が不明である。その規模は梁行2間、桁行2間以上で、身舎面積は8.41㎡+αである。西側の梁行方向の柱穴(SP510)で完形の土師質土器小皿が正位置な状態で検出されている。建物を埋める際になんらかの祭祀が行われたものか。

SB006では土師質土器、黒色土器が出土している。2355(SP415)・3033(SP510)は土師質土器小皿である。いずれも内彎気味に開く器形で、外面底部切り離しは糸切りである。2359(SP434)は黒色土器A類椀である。高台は外方へ開く。



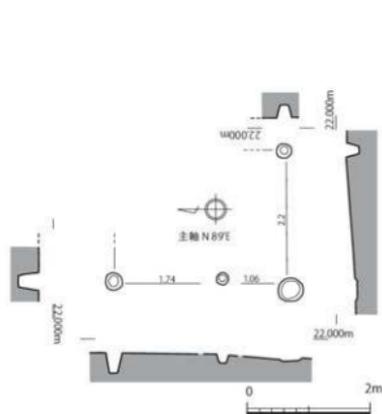
第 317 図 SB006 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB007 (第 318 図)

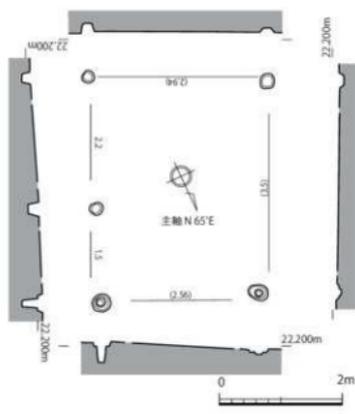
調査区中央の北西寄りに検出した南北方向に長軸をもつ建物である。SB007 の北東 3 m 先に SB006 が位置する。建物の東側は近世土坑の SK032 に切られるため、その全容が不明である。建物の規模は梁行 2 間、桁行 1 間で、身舎面積は $3.08 \text{ m}^2 + a$ である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SB008 (第 319 図)

調査区中央の北寄りに検出した南北方向に長軸をもつ建物である。中世溝の SD070 と、SB009、SA004 と重複する。建物は梁行 1 間、桁行 2 間の小規模で、身舎面積は $9.9 \text{ m}^2 + a$ である。柱穴からは土師質土器、瓦器椀の小片が出土したが図示できなかった。



第 318 図 SB007 遺構実測図 (1/80)

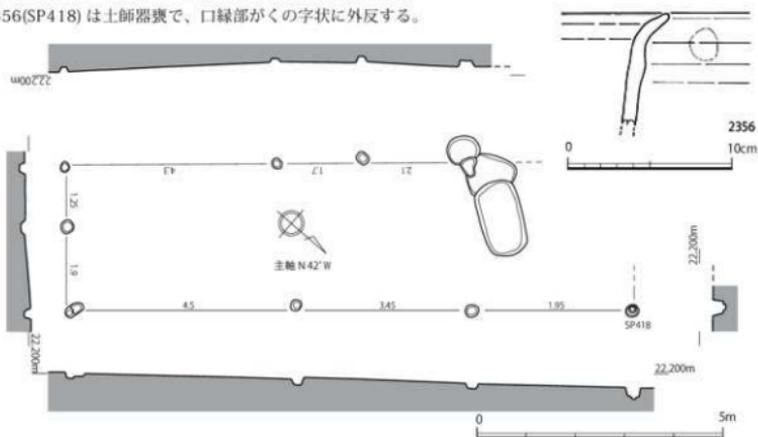


第 319 図 SB008 遺構実測図 (1/80)

SB009 (第320図)

調査区北西側に検出した東西方向に長軸をもつ大型建物である。この付近はSB006・008～12が重複しており、複数時期の建て替えが行われている。平面形は長大な長方形をなす。梁行2間、桁行3間の規模と考えられるが、西側の桁行方向は判然としない。身舎面積は18.9㎡+αを測る。桁行方向の柱穴間隔は広い箇所がみられることから、本来は多少の柱穴が位置した可能性がある。

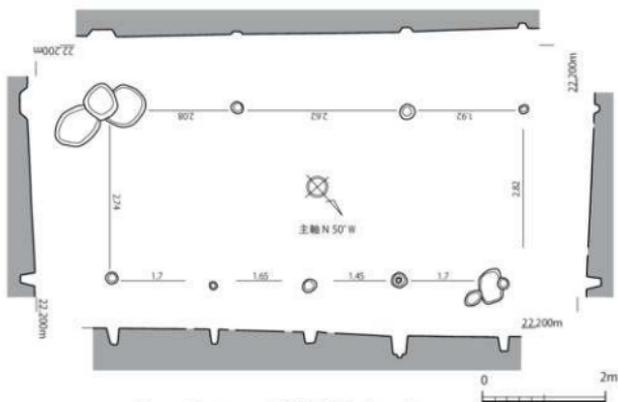
2356(SP418)は土師器甕で、口縁部がくの字状に外反する。



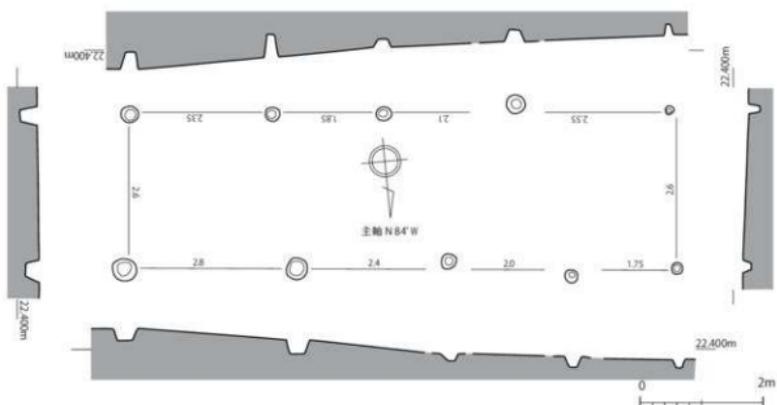
第320図 SB009遺構・出土遺物実測図(1/100・1/3)

SB010 (第321図)

調査区北西側に検出した東西方向に長軸をもつ建物である。この付近はSB009・011・012が位置し重複する。平面形は長方形をなし、梁行1間、桁行4間で、身舎面積は18.24㎡である。北側の桁行柱穴の間隔が南側と比べると短くなっている。柱穴からは土師質土器小片が出土したが図示できなかった。



第321図 SB010遺構実測図(1/100)



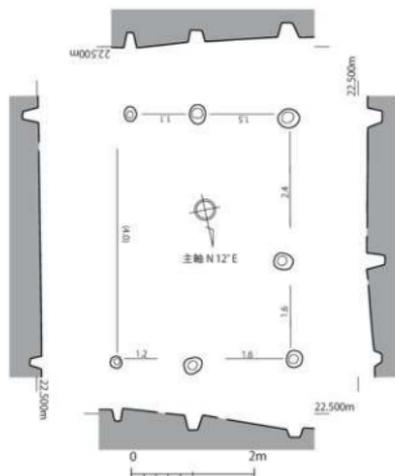
第 324 図 SB013 遺構実測図 (1/80)

SB014 (第 325 図)

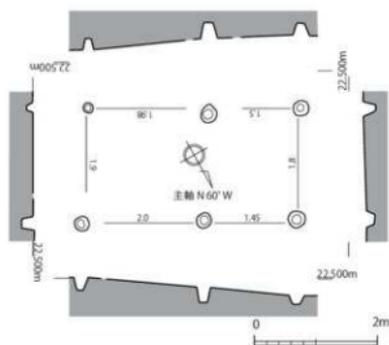
調査区中央の東端に検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB015・016 と重複する。建物の東側は柱穴を確認できなかった。梁行 2 間、桁行 2 間以上の規模で、身舎面積は 5.4 m² である。建物の梁行は旧地形と同じく東から西に向かって緩斜している。柱穴からの出土遺物はみられなかった。

SB015 (第 326 図)

調査区中央の東端に検出した東西方向に長軸をもつ建物で、SB014・016 と重複する。梁行 1 間、桁行 2 間で、身舎面積は 3.20 m² である。建物の桁行は旧地形と同じく東から西に向かって緩斜している。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



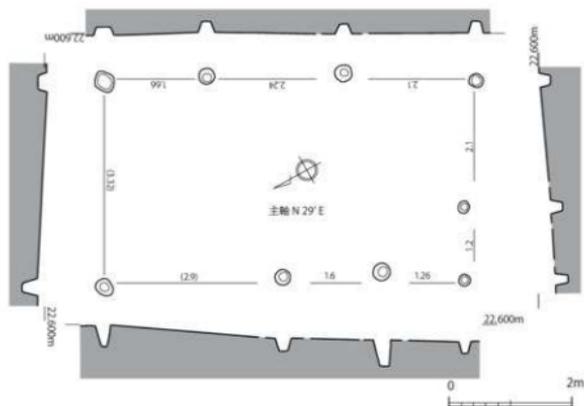
第 325 図 SB014 遺構実測図 (1/80)



第 326 図 SB015 遺構実測図 (1/80)

SB016 (第327図)

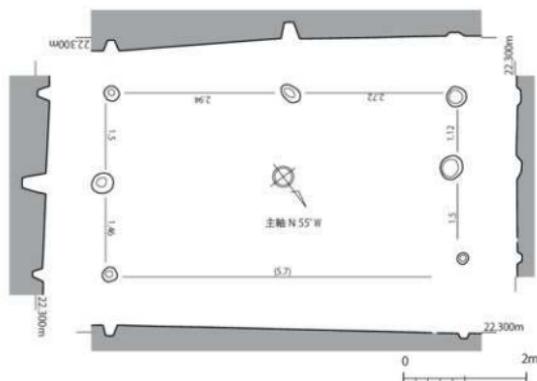
調査区中央の東端に検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB014・015と重複する。梁行2間、桁行2間の規模と考えられるが、桁行の柱穴は整然と配していない。身舎面積は19.46㎡である。建物の梁行は旧地形と同じく東から西に向かって緩斜している。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



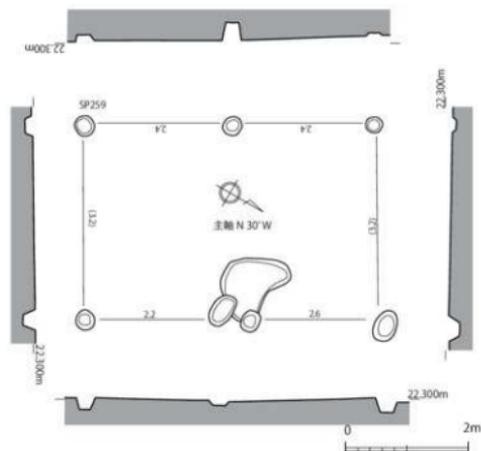
第327図 SB016 遺構実測図 (1/80)

SB017 (第328図)

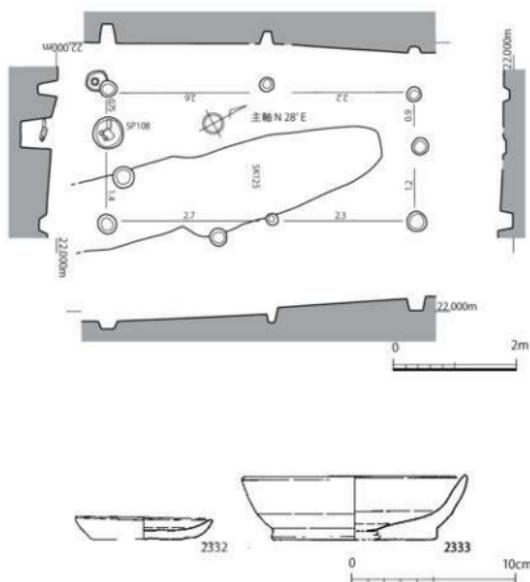
調査区南東に検出した東西方向に長軸をもつ建物である。SB018～020と重複し、複数時期の建て替えが行われている。建物北側の桁行の柱穴は確認できなかったが、梁行2間、桁行2間以上の規模と考えられる。身舎面積は15.85㎡である。



第328図 SB017 遺構実測図 (1/80)



第 329 図 SB018 遺構実測図 (1/80)



第 330 図 SB019 遺構・出土物実測図 (1/80・1/3)

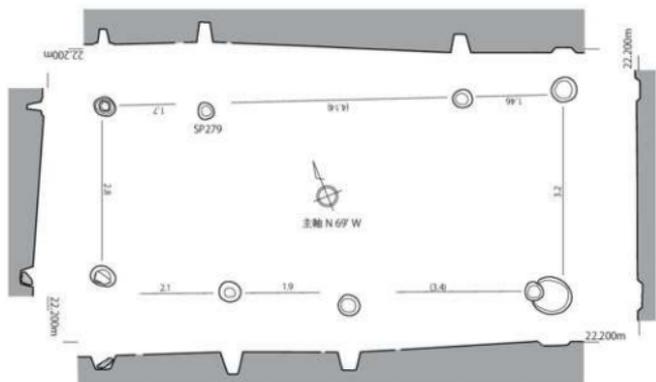
SB018 (第 329 図)

調査区南東に検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB017・019・020と重複する。SB018の北側には中世土坑のSK110が隣接する。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は15.36㎡である。2344 (SP259)は土師質土器小皿で、内罎気味に開く器形である。

SB019 (第 330 図)

調査区南東に検出した南北方向に長軸をもつ建物で、SB017・018・020と重複する。また中世土坑のSK125と重複するが、SB019が時期的に新しい。平面形は長方形をなし、梁行2間、桁行2間の規模で、身舎面積は10.41㎡である。梁行の柱穴の間隔が桁行と比べると大きい。

柱穴からは土師質土器が出土している。2332 (SP108)は小皿、2333 (SP108)は環で、いずれも内罎する器形である。



第331図 SB020 遺構実測図 (1/80)

SB020 (第331・332図)

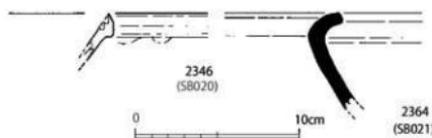
調査区南東に検出した東西方向に長軸をもつ建物で、SB017～019、SA004・005と重複する。中世土坑のSK125と重複するが、SB020が時期的に新しい。平面形は長方形をなし、梁行1間、桁行3間の規模で、身舎面積は22.05㎡である。南北の桁行方向の柱穴間隔にバラツキがみられる。

柱穴からは中国産白磁が出土している。2346 (SP279) は碗で、玉縁口縁をなす。

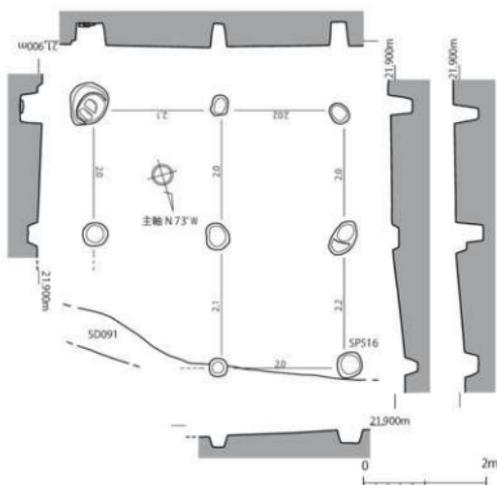
SB021 (第332・333図)

調査区中央から西寄り検出した南北方向に長軸をもつ建物である。中世と考えられるSD091と重複し、SB021が時期的に新しい。平面形は総柱的な柱穴配置をなしている。柱間距離は2～2.2mで、おおむね等間隔である。建物東側の柱穴は確認することができなかったが、梁行2間、桁行2間の規模とみられる。身舎面積は9.49㎡+aである。

柱穴からは須恵質土器が出土している。2364 (SP516) は甕と考えられるもので胴部は外方に張り、口縁部は短く外反する。



第332図 SB020・SB021 出土遺物実測図 (1/3)

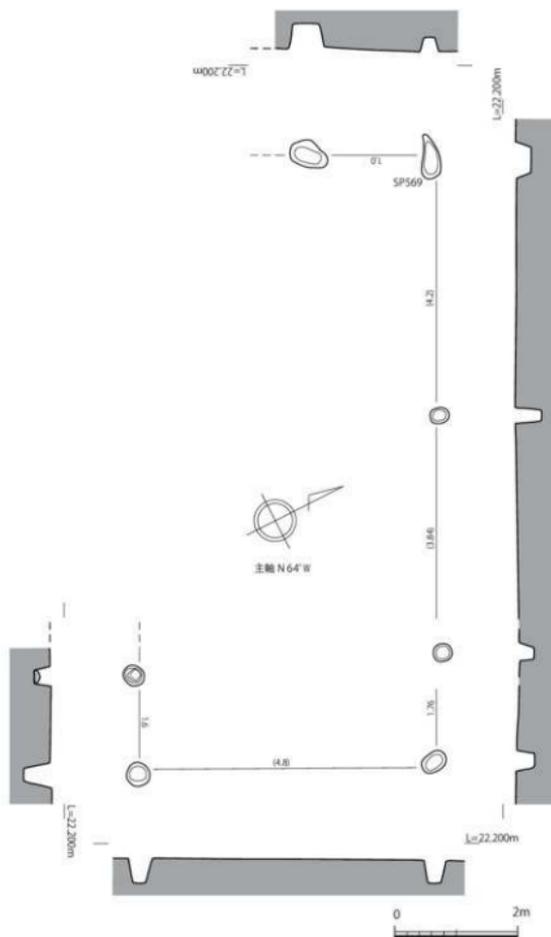


第333図 SB021 遺構実測図 (1/80)

SB022 (第334図)

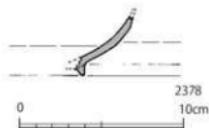
調査区南端で検出した東西方向に長軸をもつ大型建物である。SB022の南に中世土坑のSK120が隣接する。建物西側は柱穴を確認することができなかったが、梁行2間、桁行4間以上の長方形と考えられる。身舎面積は $16.53 \text{ m}^2 + a$ である。北側の桁行方向の柱間距離にバラツキがある。

柱穴からは瓦器が出土している。2378 (SP569) は椀で断面三角形の高台が付く。

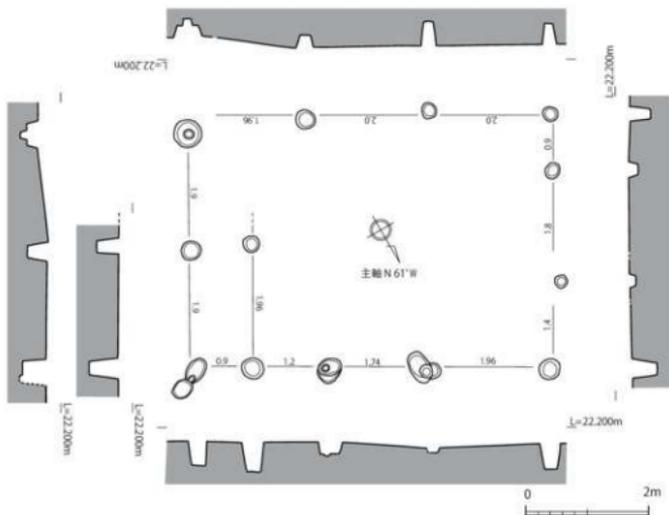


SB023 (第335図)

調査区南端で検出した東西方向に長軸をもつ建物である。中世土坑SK100が北側に隣接する。この付近ではSB021・024～026の建物が集中し、複数時代の建て替えが行われている。そのうちSB023と024が重複している。建物の主軸はSB021・022、SK100とはほぼ同じ方向である。またSB024と022の梁行のラインがほぼ同一であることから軒を連ねた建物であろうか。SB023の規模は梁行2～3間、桁行4間である。身舎面積は $23.23 \text{ m}^2 + a$ である。南側の桁行方向の柱穴を確認できなかったが、東側に庇をもつものとみられる。建物の梁行方向の柱穴は東西とも間隔にバラツキがみられる。柱穴からは土師質土器、白磁皿の小片が出土したが図示できなかった。



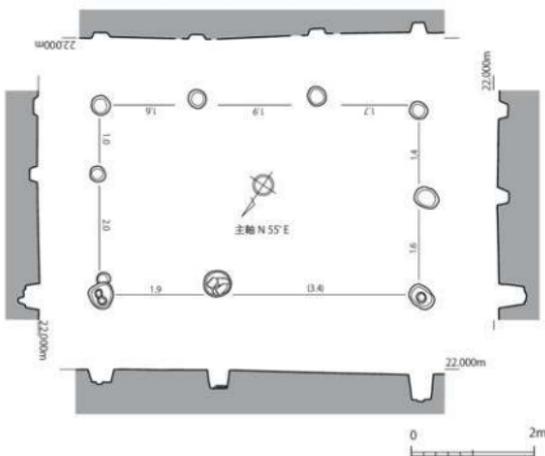
第334図 SB022 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)



第 335 図 SB023 遺構実測図 (1/80)

SB024 (第 336 図)

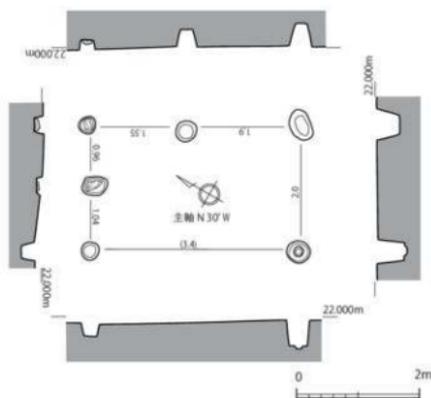
調査区南端で検出した、南北方向に長軸をもつ建物である。建物南側に中世土坑 SK115、SA006 が隣接し、主軸方位が同じであることから関連性が示唆される。建物の規模は梁行 2 間、桁行 3 間で、身舎面積は 15.75 m² である。東側の梁行柱穴の間隔が西側と比べると短くなっている。北側の桁行方向の柱穴では、底面に扁平な川原石が重なっていた。根石であろうか。柱穴からは土師質土器小片が出土したが図示できなかった。



第 336 図 SB024 遺構実測図 (1/80)

SB025 (第337図)

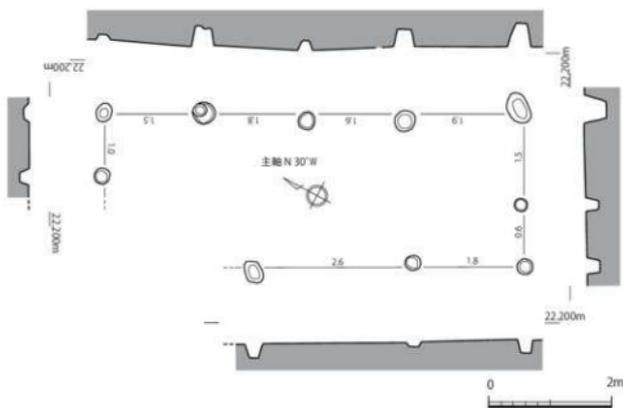
調査区南西端で検出した南北方向に長軸をもつ建物である。SB026と重複する。建物の規模は梁行2間、桁行2間の長方形をなし、身舎面積は6.83㎡である。建物北側の梁行方向の柱穴底面には扁平な川原石を配したものを2基検出している。根石として利用されたものであろう。柱穴からは土師質土器が出土しているが、図示できなかった。



第337図 SB025 遺構実測図 (1/80)

SB026 (第338図)

調査区南西端で検出した南北方向に長軸をもつ建物である。SB025・027と重複する。建物の平面形は長方形をなす。北側の梁行は明確ではないが、梁行2間、桁行4間の規模をもつものとみられる。身舎面積は8.68㎡+αである。東西の梁行方向の柱穴間隔にバラツキがみられる。柱穴からは土師質土器が出土しているが、図示できなかった。



第338図 SB026 遺構実測図 (1/80)

ロ、柵跡（第310・311図）

SA001（第339図）

調査区北東端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。ピットの間隔にバラツキがみられる。SB002の西側梁行方向ラインが同じであることから建物との関連が示唆される。

SA002（第339図）

調査区北東端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。SA002の西側にはSA003が隣接しており、主軸の違いから建て替えが行われたものとみられる。ピットの直径、深さに違いがあり、柵跡中央のピットは浅い。おおむね等間隔に配している。ピットからは黒色土器A類の小片が出土しているが図示できなかった。

SA003（第339図）

調査区北東端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。SA003の東にSA002が隣接する。ピットは旧地形と同じく北から南に向かって緩斜している。ピットからは土師器製の小片が出土しているが図示できなかった。

SA004（第339図）

調査区南端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡で、SB020と重複する。SA004の西側にはSA005が隣接しており、主軸の違いから建て替えが行われたものとみられる。ピットの間隔、深さにバラツキがみられる。ピットからは土師器製、土師質土器小片が出土しているが図示できなかった。

SA005（第340図）

調査区南端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡で、SB020と重複する。SA004と比べると、ピットは等間隔に配し、深さは10cmである。SA004・005の東側に位置するSK125とほぼ同じ主軸方位であり、その関連が想定される。ピットからは土師質土器、瓦器小片が出土しているが図示できなかった。

SA006（第340図）

調査区南端で検出した東西方向に主軸をもつ柵跡である。北側にSB024、南側に中世土坑のSK115が位置する。いずれの遺構の主軸が直交していることからその関連性が示唆される。ピットの間隔、深さにバラツキがみられる。ピットからは土師質土器小片が出土しているが図示できなかった。

SA007（第340図）

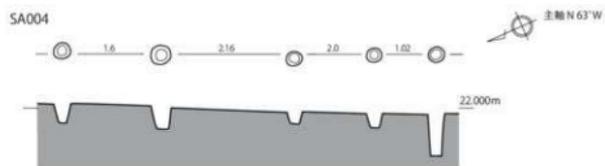
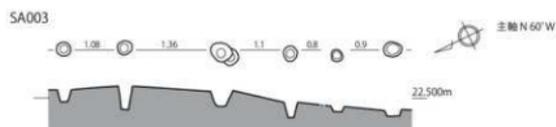
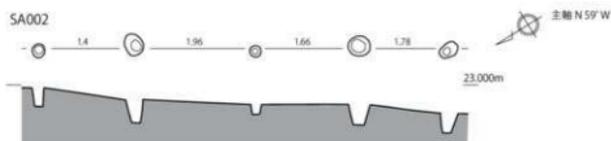
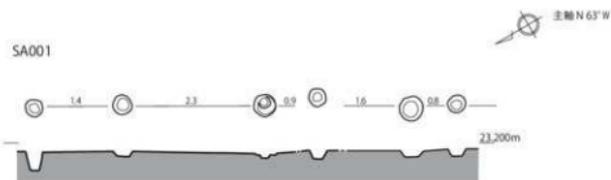
調査区南西端で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。SA007の南にSB026が位置する。おおむね等間隔にピットを配している。旧地形と同じく南から北に向かって緩斜する。ピットからの出土遺物はみられなかった。

SA008（第340図）

調査区東側で検出した東西方向に主軸をもつ柵跡である。SA008の北はSB004・013、南はSB014・016が位置する。建物と建物の境界を示すようにピットを配する。旧地形と同じく東から西へ緩斜している。ピットの間隔、深さにバラツキがある。ピットからの出土遺物はみられなかった。

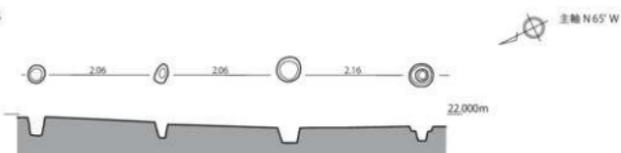
SA009（第340図）

調査区南端で検出した東西方向に主軸をもつ柵跡である。SA009の北側にSB019、中世土坑のSK125が位置する。南北を主軸とするSA004と重複する。旧地形と同じく東から西へ緩斜しており、等間隔にピットを配している。ピットの間隔、深さにバラツキがある。ピットからは土師質土器鍋、白磁小片が出土しているが図示できなかった。

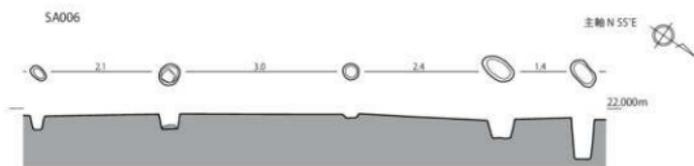


第 339 図 柵跡実測図① (1/80)

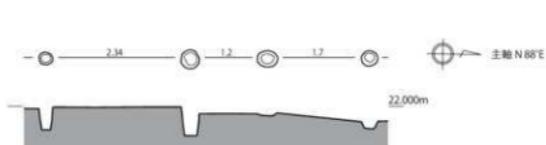
SA005



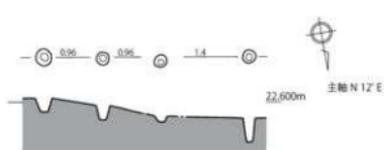
SA006



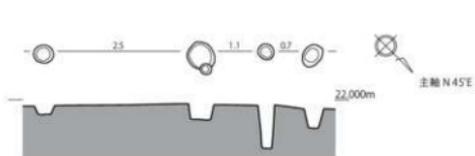
SA007



SA008



SA009



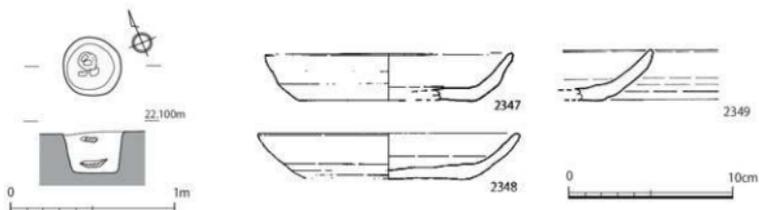
第 340 図 槽跡実測図② (1/80)

ハ、その他のピット

ここでは土器がまとまって出土した SP400・410、その他の柱穴出土遺物について触れる。

SP400 (第341図)

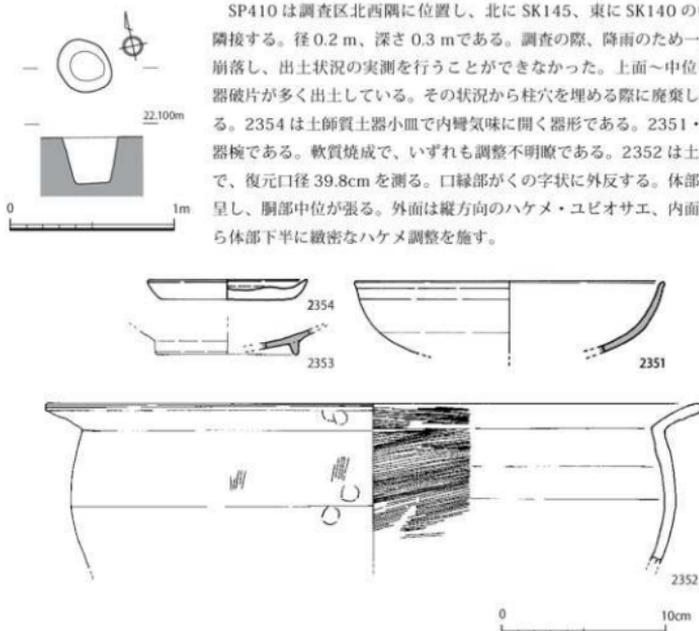
SP400は調査区北西で検出した柱穴で、北にSB006が隣接する。径0.3m、深さ0.2mを測る。上面から土器小片が多く出土し、底面より上で土師質土器環(2348)が正位置の状態で検出された。環の検出状況から、柱穴を埋める際に意図的に埋置したとみられる。隣接するSB006のSP510では、SP400と同様な出土状況が看取される。本遺構もなんらかの祭祀が行われたのであろう。2347～2349は土師質土器環である。いずれも器高は低く斜上方に開く。2348の口縁部端部はまるみをおびる。



第341図 SP400遺構・出土遺物実測図(1/30・1/3)

SP410 (第342図)

SP410は調査区北西隅に位置し、北にSK145、東にSK140の中世土坑が隣接する。径0.2m、深さ0.3mである。調査の際、降雨のため一部の壁面が崩落し、出土状況の実測を行うことができなかった。上面～中位の深さで土器破片が多く出土している。その状況から柱穴を埋める際に廃棄したとみられる。2354は土師質土器小皿で内彎気味に開く器形である。2351・2353は瓦器椀である。軟質焼成で、いずれも調整不明瞭である。2352は土師質土器鍋で、復元口径39.8cmを測る。口縁部がくの字状に外反する。体部は半球形を呈し、胴部中位が張る。外面は縦方向のハケメ・ユビオサエ、内面は口縁部から体部下半に緻密なハケメ調整を施す。



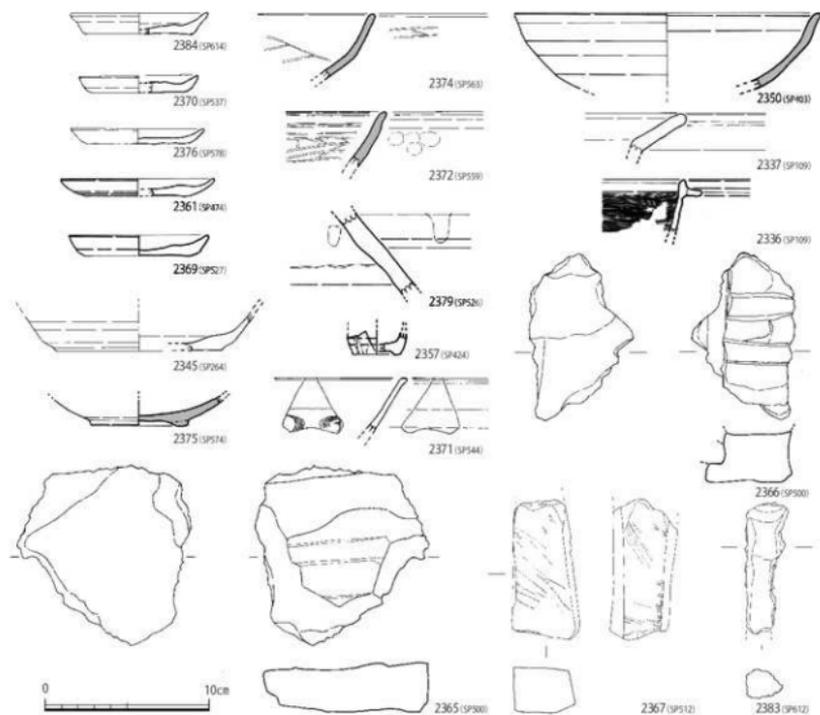
第342図 SP410出土遺物実測図(1/3)

第 343 図はその他の柱穴出土遺物で、中世の土師質土器、黒色土器、瓦器、瀬戸焼、中国産白磁、壁土、石製品、鉄製品がみられる。

2344・2361・2369・2370・2376・2384 は土師質土器小皿である。いずれも内彎気味に開く器形ある。2345 は土師質土器杯の底部で、外面底部に糸切り離しが残る。2362 は黒色土器 A 類の杯で、古代の所産と考えられる。底部は円盤状高台をなす。2350・2372・2374・2375 は瓦器椀である。2372 は和泉型瓦器、その他は軟質焼成の瓦器である。2375 は低い高台が付く。2350・2374 は口縁部端部がまるみをもつ。2337 は土師質土器鍋で、口縁部が比較的長い。2336 は土師質土器釜で、口縁部下に長い跨が付く。口縁部端部の内側は面取りを行う。体部内面は緻密な横方向のハケメ調整を施す。

2379 は瀬戸焼瓶か。胴部外面に自然軸がかり、色調は暗緑褐色を呈する。胴部内面に粘土接合痕がみられる。2357 は白磁小壺と考えられる。底部から内彎気味に立ち上がる。幅広の削り出し高台である。外面は板状工具による縦方向の型押しがみられる。軸は薄めにかかり、高台、体部内面は露胎である。軸調は淡白灰色、素地は灰白色を呈する。復元底径 3cm を測る。2371 は白磁碗で、端反口縁をなす。体部内面に白堆線、櫛歯文を施す。

2365・2366 は壁土片で、二次被熱を受ける。いずれも木舞、間渡の痕跡が認められる。2367 は頁岩製の砥石である。平面形は長方形をなし、上部が欠損する。正面と裏面に斜め方向の使用痕がみられる。2383 は鉄釘で、下端が欠損している。長さ 8cm + α 、幅 2.6cm を測り大型品である。



第 343 図 ビット出土遺物実測図 (1/3)

二. 溝状遺構

中世の溝状遺構は2条検出している。

SD030 (第344図)

SD030は調査区北西隅に位置する。溝の両端は調査区外に延びる。長さ6m + α、深さ0.2mを測る。溝の壁面は緩やかに立ち上がり、北に向かって緩斜する。埋土は暗灰褐色粘質土である(第344図)。

SD030では土師質土器、黒色土器、瓦器が出土している。土師質土器の切り離しは、いずれも糸切りである。

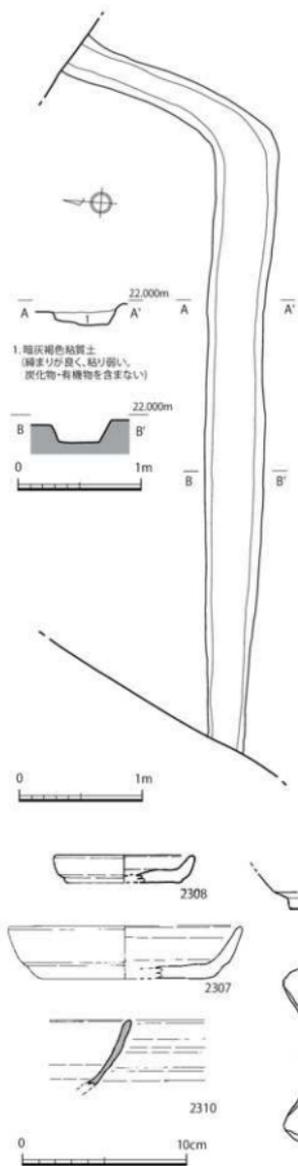
土師質土器小皿(2308)・坏(2307)とも底部から斜上方に開く。2312は黒色土器A類の坏か。内面は一定方向のヘラミガキが施される。外面底部は「×」を二重に重ねた線刻が認められる。2309・2310とも軟質焼成の瓦器椀である。2309は高台が高く、外方に張る。内面底部に重ね焼き痕が認められる。

SD070 (第345図)

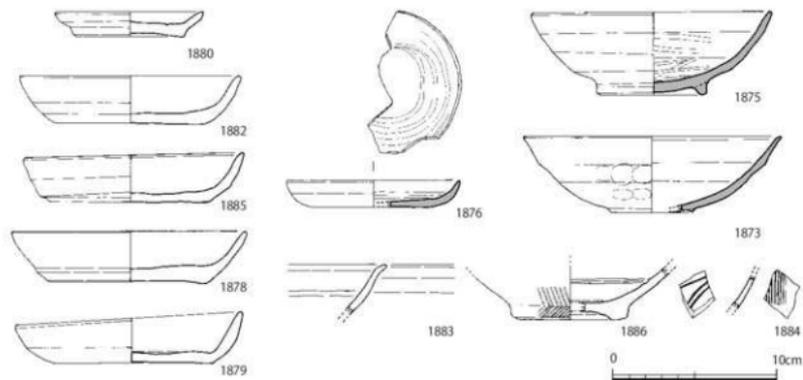
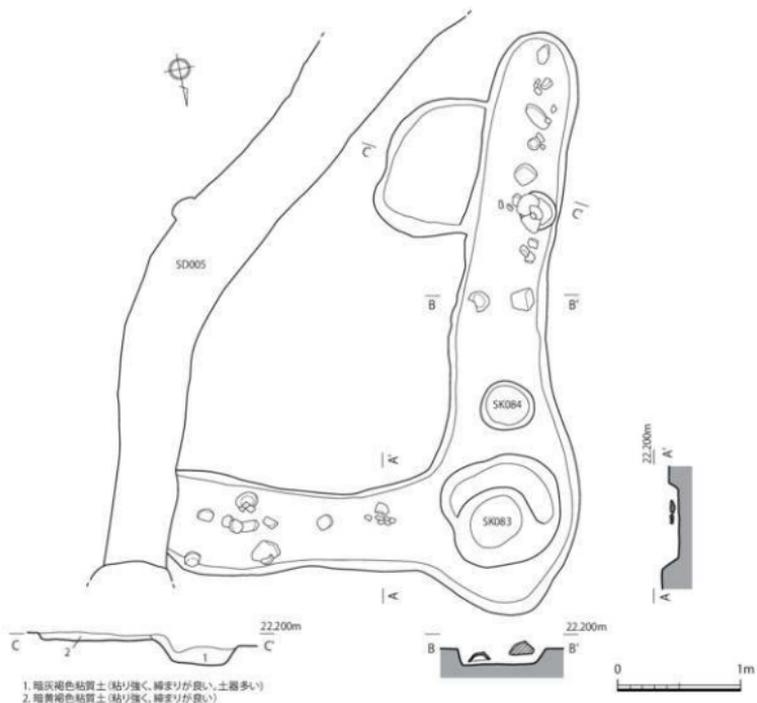
SD070は調査区ほぼ中央に位置する。北西方向に屈曲するが、溝の東側は近世のSD005、溝の中央は近世埋裏のSK083・084に切られている。また溝の南東側は土坑を切るが、土坑の時期は遺物が皆無のため不明である。溝の長さは7.5m + α、深さは0.2~0.3mを測り、北から南に向かって緩斜する。溝の壁面は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。埋土は暗灰褐色粘質土で、土器を多く含んでいる(第345図)。

SD070では土師質土器、瓦器、中国産白磁・青磁が出土している。土師質土器の切り離しは、糸切りである。1880は土師質土器小皿で、底部は円盤状をなす。底部から斜上方に開く。口縁部外面端部は面取り気味に仕上げる。1878・1879・1882・1885は土師質土器坏で、底部から斜上方に開く器形である。1879・1882・1885は口縁部下に屈曲がみられる。

1875・1876は瓦器で、いずれも軟質焼成である。1876は小皿で、底部から内彎気味に開く。内面は同心円のヘラミガキを施す。外面はナデ調整である。1875は椀で、高台がやや外方に張り、体部下半に屈曲が認められる。内面はヘラミガキを施す。1873は和泉型瓦器椀である。口縁部下で屈曲し、体部はまるみをもつ。矮小な高台が付く。体部はナデ・ユビオサエ調整である。内面は調整不明瞭である。1886は白磁碗の底部である。1884は同安窯系青磁碗で外面体部に櫛描文を施す。1883は龍泉窯系青磁碗か。口縁部は短く外反する。軸が薄めにかかる。



第344図 SD030遺構・出土遺物実測図(1/40・1/3)



第 345 図 SD070 遺構・出土遺物実測図 (1/40・1/3)

SK040 (第 347 図)

SK040は調査区北西に位置するもので、平面が不整形を呈するものである。土坑の北側はピットに切られる。土坑の規模は、長軸1m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。土坑の壁面は緩やかに立ち上がり、床面は中央付近が窪んでいる。埋土は暗灰褐色粘質土である。粘りはよわく、炭化物が混じる。遺物は土坑西側のほぼ地山直上で出土している。土器は口縁部を上にした状態がみられる。土坑の形状、土器の出土状況から、廃棄土坑と考えられる。

第347図はSK040出土遺物で、土師器・黒色土器・鉄釘がみられる。2275は土師器皿と考えられるもので、完形品である。口径11.8cm、器高2.7cm、底径7.3cmである。底部から外彎気味に大きく開く。底部は円盤状を呈する。体部と底部の境は不明瞭である。外面底部はヘラ切り離しのちナデ、体部は回転ナデである。色調は赤褐色を呈する。

2276は土師器坏で、底部が円盤状高台をなすものである。体部は直線的に伸び口縁部が短く外反する。口縁部端部はまるみをもつ。外面体部上半はロクロ痕が明瞭に残る。外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。色調は赤褐色を呈する。口径14.2cm、器高5.4cm、底径6.8cmを測る。

2274・2277・2998は黒色土器A類碗である。2274・2277とも緻密なヘラミガキを施す。2277の色調は淡橙褐色～暗黒褐色を呈する。2274は見込から体部にかけてミガキをかき上げる。外面底部には断面方形の低い高台が付く。色調は淡黄橙褐色を呈する。2998は畿内産の黒色土器(河内産)である。口縁部端部はすぼまり、体部がまるみをおびる。断面三角形の低い高台が付く。外面は摩滅が著しいが、ヘラミガキが認められる。内面は、口縁部～体部が同心円、底部を一定方向の緻密なヘラミガキを施す。外面の口縁部～体部中位にかけて焼成により黒化している。胎土は石英・長石を含む。法量は復元で、口径16.2cm、器高5.2cm、高台径8.6cmを測る。

2278は鉄釘で、上・下端が欠損している。



第 347 図 SK040 遺構・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

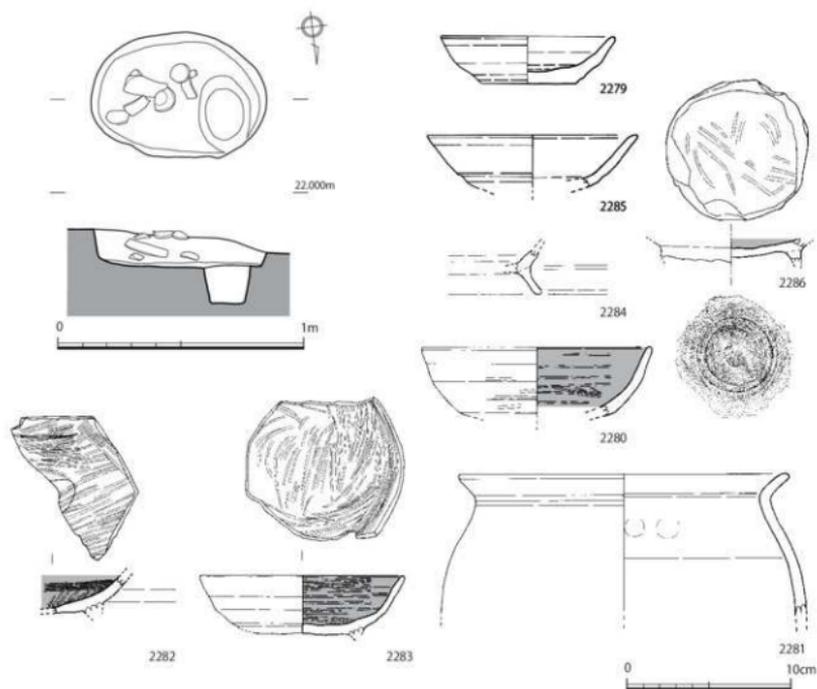
SK045 (第348図)

SK045は調査区北西に位置する。土坑の平面は円形をなし、長軸0.7m、短軸0.5mを測る。遺構上面は後世の削平を受ける。床面はおおむね平坦であるが、土坑北隅にピットが掘られる。検出面からピット底面の深さは0.3mである。埋土は暗灰褐色粘質土である。土坑の上面を中心に遺物が出土している。ピットからの遺物は皆無であった。遺物は土師器、黒色土器が出土している。

2279・2285は土師器坏である。2279は体部中位に屈曲をもつもので、底径に比して口径が大きく開く。外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。2285は口縁部内側に段を有する。2284は土師器碗である。足高台の形態を有し、高台が外方に大きく開く。

2280・2282・2283・2286は黒色土器A類碗と考えられるもので、2280以外はいずれも高台が欠損している。意図的に打ち欠いたものか。2282の内面調整は、底部から体部のかき上げと、体部が横方向の緻密なヘラミガキを施している。外面の色調は明褐色を呈する。2283は体部中位が屈曲するもので、内面は2282と同様な調整を施す。外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。復元口径12.4cmを測る。外面の色調は明褐色～黒褐色を呈する。2286の外面底部は回転ヘラ切り離しが残る。内面のヘラミガキは雑である。

2281は土師器甕で、口縁部がくの字状に短く外反し、胴部が張る。口縁部端部はまるみをもつ。体部内面にユビオサエを施す。復元口径20cmを測る。



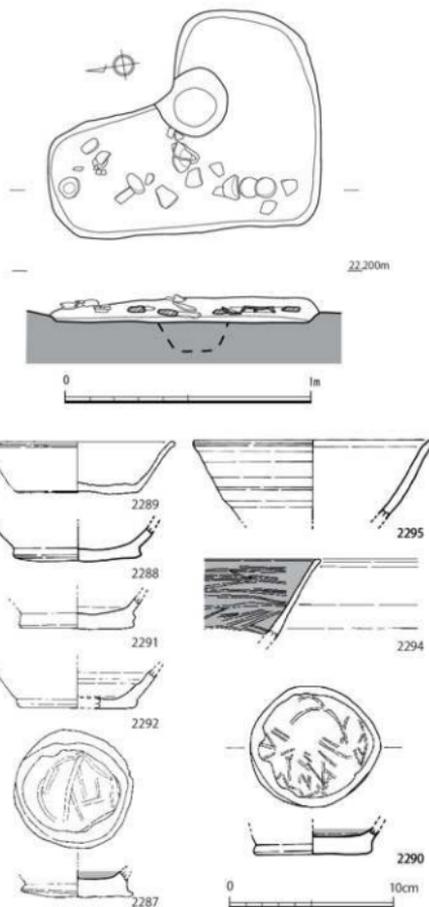
第348図 SK045 遺構・出土遺物実測図 (1/20・1/3)

SK055 (第349図)

SK055はSD070の北西に位置する。土坑の平面は不整形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.15mを測る。遺構上面は後世の削平を受ける。床面はおおむね平坦である。土坑の壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰褐色粘質土である。床面から10cm上に遺物が出土しており、土器は土坑北西側を中心に、南北を軸に配している。土器は口縁部を上にしたもの、うつ伏せにしたものがみられ、底部片が多く占める。口縁部、体部は意図的に打ち欠いたであろう。遺物は土師器、黒色土器が出土している。いずれも底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。

2288・2289・2291・2292・2295は土師器環である。2289は底部から直線的に伸び口縁部端部が外反する。口縁部端部はまるみをもつ。復元口径11.7cm、器高3.1cmである。色調は暗茶褐色～暗灰褐色を呈する。2288・2291・2292は底部が円盤状高台を有し、体部と底部の境は不明瞭である。2291は底部の器壁が厚い。2295は大振りの器形で口縁部が緩やかに外反する。外面体部はロクロ痕が残る。色調は暗褐色を呈する。

2287・2290・2294は黒色土器A類である。2287・2290は環で円盤状高台を有する。2287の内面底部は不定方向のヘラミガキを施し、単位が幅広くである。2290の内面底部は不定方向のヘラミガキを施す。ミガキの単位は細い。2294は大振りな器形であることから碗と考えられる。体部は直線的に伸び口縁部端部が外反する。内面は緻密なヘラミガキを施す。



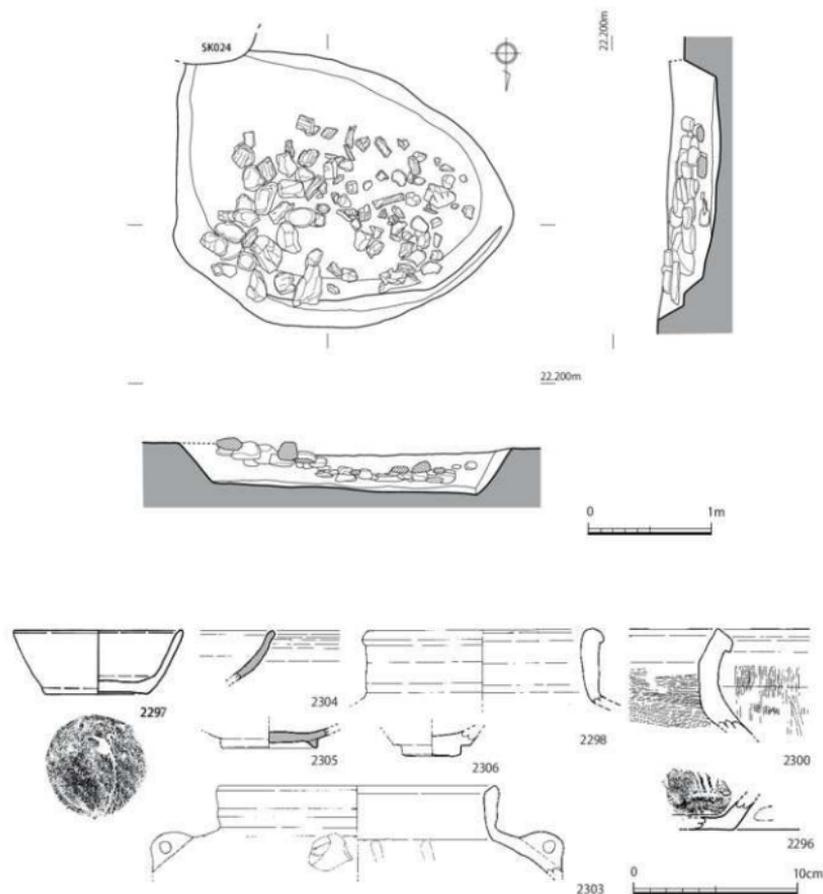
第349図 SK055遺構・出土遺物実測図(1/20・1/3)

SK065 (第350図)

SK065は調査区北西に位置し、土坑の南東部分は近世土坑(SK024)に切れ、上面は後世の削平を受けている。土坑の平面は楕円形を呈し、長軸2.8m、短軸2.2m、深さ0.3mを測る。床面は東から西に向かって緩斜する。埋土は暗灰褐色粘質土である。土坑の北側は幅10cmのテラスが一段付く。土坑上面から径15～20cmの川原石が検出されている。石類は土坑中央から西側を中心に集中しており、東から西に向かって投棄したとみられる。石類は被熱を受けていない。遺物は床面から10～20cm上で出土している。

出土遺物は土師質土器、瓦器、瓦質土器、備前焼、中国産黒釉陶器がみられる。2297は土師質土器環で、底部から直線的に開く。外面底部は糸切り離しが残る。復元口径10.2cm、器高3.9cmである。2304・2305は瓦器碗で、軟質焼成である。2305は断面三角形の高台が付く。2300・2303は瓦質土器である。2300は裏で、

口縁部は外傾気味に立ち上がる。口縁端部は断面方形状に肥厚する。口縁部下は縦方向、内面は横方向の緻密なハケメ調整を施す。色調は暗灰褐色を呈する。2303は茶釜である。口縁部が垂直気味に立ち上がり、内側は面取りを施す。肩部に縦耳が付く。色調は暗灰褐色を呈する。2296・2298は備前焼である。2296は播鉢の底部で、色調は灰褐色を呈する。2298は壺の口縁部片である。口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部の肥厚が小さい。色調は赤茶褐色をおびる。2306は黒釉陶器碗で、建窯産と考えられる。底部の割り込みは浅い。外面は露胎で、素地は青灰色である。

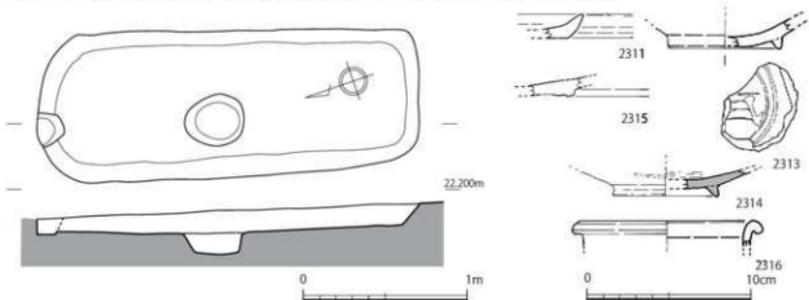


第350図 SK065遺構・出土遺物実測図(1/40・1/3)

SK085 (第351図)

SK085は調査区中央の南東寄りに位置する。土坑の平面は長方形をなし、長軸2.3m、短軸1m、深さ0.15mを測る。おおむね南北に主軸をもつ。埋土は暗灰褐色である。土坑のほぼ中央にピットが掘られる。ピットからの遺物は皆無である。

出土遺物は土師質土器、瓦器、中国産白磁がみられる。2311・2313・2315は土師質土器である。2311は小皿である。2315は坏か。底部は円盤状を呈する。2313は椀で、底部はまるみをおびる。外面底部に4条の線刻が認められる。2316は白磁四耳壺の口縁部片である。口縁部端部は外側に折り返し肥厚する。内外面とも施軸され貫入は認められない。軸調は淡灰白色を呈する。復元口径10.4cmを測る。

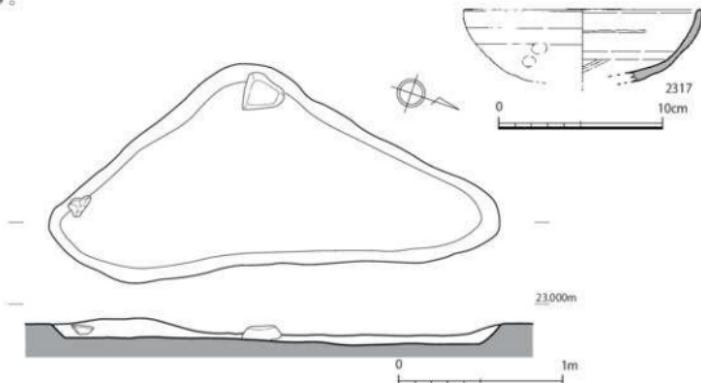


第351図 SK085 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK086 (第352図)

SK086は調査区北東に位置し、土坑周辺は遺構密度が希薄である。土坑の平面は不整形を呈し、長軸2.6m、短軸1.2m、深さ0.1～0.2mを測る。遺構上面は後世の削平を受ける。出土遺物は少なく、土坑南隅に瓦器椀1点のみの出土であった。

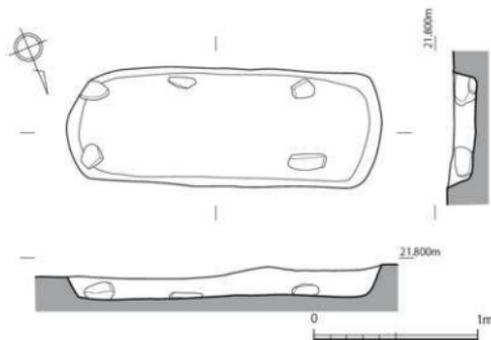
2317は瓦器椀で、軟質焼成である。口縁部は内彎気味に開く。外面体部下半はユビオサエ、内面体部はヘラミガキを施す。



第352図 SK086 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK089 (第 353 図)

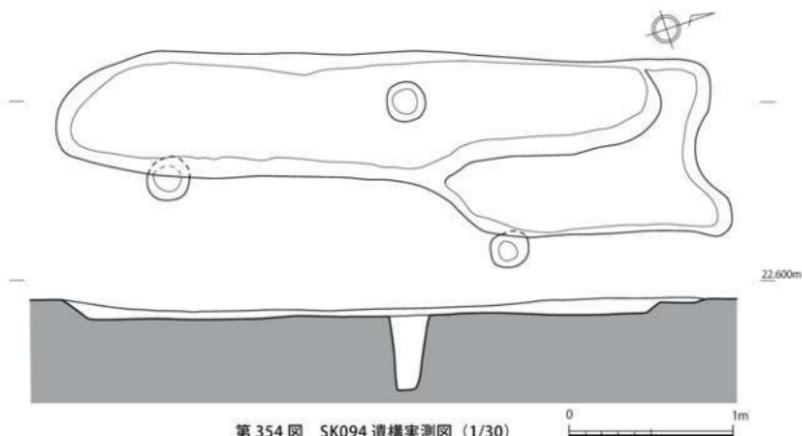
SK089 は調査区中央の南西寄りに位置する。土坑の平面は長方形をなし、長軸 1.8 m、短軸 0.7 m、深さ 0.2 m である。おおむね東西に主軸をもつ。土坑の床面はほぼ平坦である。土坑の壁面に沿って、径 10～15cm の扁平な川原石を等間隔に配している。土坑中央の北側は石類を確認できなかったが、本来は位置していたとみられる。これらの石類は被熱を受けていない。この形態をもつ中世の土坑墓は大部分区内で確認されており、杵築市八坂中遺跡に事例がある。土師質土器片が出土しているが細片のため図示しえなかった。鉄釘など鉄製品は出土しなかった。



第 353 図 SK089 遺構・出土遺物実測図 (1/30)

SK094 (第 354 図)

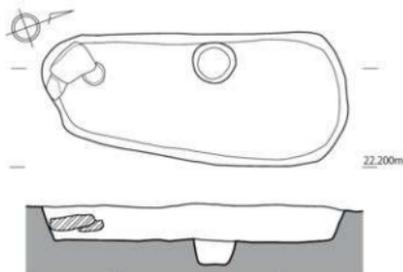
SK094 は調査区北東に位置し、SK086 の西側にあたる。土坑の平面は長方形をなし、長軸 3.7m、短軸 0.7 m、深さ 0.1 m である。おおむね南北に主軸をもつ。遺構上面は後世の削平を受ける。土坑東側に幅 0.6m のテラスが一段付き、土坑中央にピットが掘られる。土坑の埋土は暗灰褐色であり、その埋土から中世の所産と考えられる。出土遺物はみられなかった。



第 354 図 SK094 遺構実測図 (1/30)

SK096 (第 355 図)

SK096 調査区南西に位置し、土坑周辺は多数のピットが確認されている。土坑の平面は長方形をなし長軸 1.5 m、短軸 0.7 m、深さ 0.3 m である。おおむね南北に主軸をもつ。土坑の床面は平坦で、ほぼ中央にピットが掘られる。出土遺物は土師質土器片が出土したが細片のため図化しえなかった。



SK100 (第 356 図)

調査区南西に位置する大型竪穴状遺構である。土坑南東隅はSD091に切られる。平面は楕円形を呈するが、土坑の北側は半円形の張り出しを有する。土坑の規模は長軸 7.4 m、短軸 4.2 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m を測る。土坑の南側は上場ラインに沿って長軸 4.2 m、短軸 1.1 m、深さ 0.1 m を測る落ち込みが認められる。土層は第 1 層（暗黄褐色粘質土）、第 2 層（暗灰褐色粘質土）に分層ができ、いずれもしまりがよい（第 356 図参照）。潜水した痕跡は確認することができなかった。土層の堆積状況から人為的に埋められたものと考えられる。SK100 の東側は掘立柱建物を数棟検出しているが、そのうちSB021・023は、SK100 と主軸ラインが同一であり、同時期に併存した可能性が高い。SK100 の性格は明らかにはしないが、建物に付随する関連施設と考えたい。

第 355 図 SK096 遺構実測図 (1/30)

第 356 図は SK100 出土遺物で、土師質土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・黄釉陶器、土鍾、鉄製品がみられる。

2320 は土師質土器小皿で、口縁部端部がすぼまる。2321 は瓦器椀で、焼成は軟質である。比較的高い高台が付き底部は丸底である。内外面の調整は不明瞭である。2327 は東播系須恵器鉢で、口縁部が玉縁状に肥厚する。

2323・2326 は白磁碗である。2326 は端反口縁で、体部内面に白堆線がみられる。2323 は口縁部が直口する。体部内面に白堆線を施す。全面施釉で釉が厚めにかかる。釉調は淡灰白褐色、素地は灰白色をおびる。貫入は認められない。

3016 は磁窯窯系の黄釉陶器盤の口縁部である。口縁部は外側に折り返し、端部が肥厚する。内面体部中位から下は黄釉がかかり、その他は露胎である。胎土は白色粒子が微量混じる。素地はおおむね暗茶褐色を呈する。

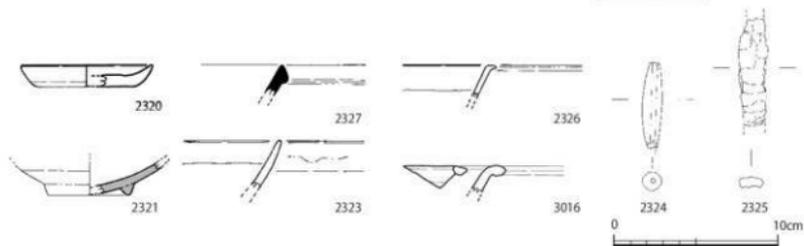
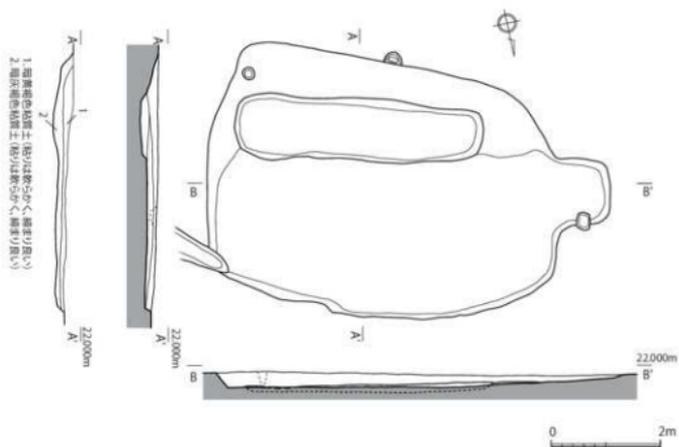
2324 は土師質土器の管状土鍾である。2325 は鉄製品で種類は不明である。断面形は扁平をなしている。

SK105 (第 357 図)

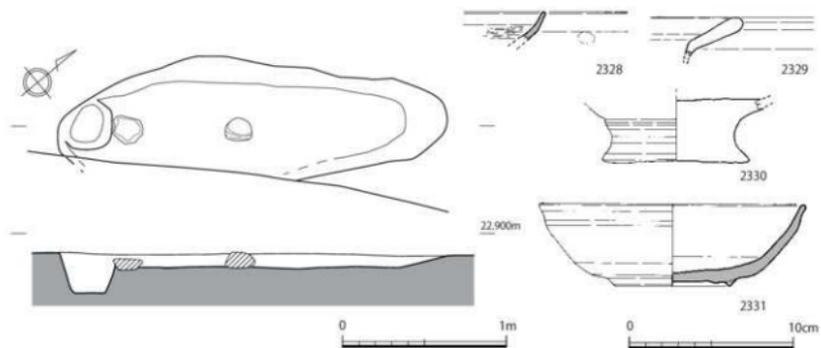
SK105 は調査区南東隅に位置し、土坑の東側は調査区外に延びる。平面は楕円形をなし、おおむね南北に主軸をもつ。土坑の規模は長軸 2.5 m、短軸 0.7 m + a、深さ 0.15 ~ 0.3 m を測る。土坑南隅にピットが掘られている。遺構上面は後世の削平を受けるが、ほぼ地山直上に遺物が出土している。遺物は土師質土器、瓦器がみられる。

2329・2330 は土師質土器である。2330 は燭台か。上部が欠損している。体部が彎曲する器形で、器壁が厚いものである。底部下端は外方へ張り出している。内面底部は平坦である。器高 3.6 cm、復元底径 9 cm を測る。調整は不明瞭である。色調は橙褐色を呈する。胎土に赤色粒が認められることから在地産と考えられる。2329 は銅で口縁部は比較的長く、端部が肥厚する。

2328・2331 は瓦器椀である。2331 は底部から内側匂味に開く器形で、口縁部端部はまるみをもつ。高台は低く断面三角形を呈する。調整は不明瞭である。復元口径 16 cm、器高 5 cm、復元底径 7 cm を測る。軟質焼成であり、胎土に金雲母を含む。2328 は和泉型瓦器である。口縁部下に屈曲がみられる。内面はヘラミガキ、外面はユビオサエ調整である。外面に重ね焼き痕が認められる。



第 356 図 SK100 遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3)

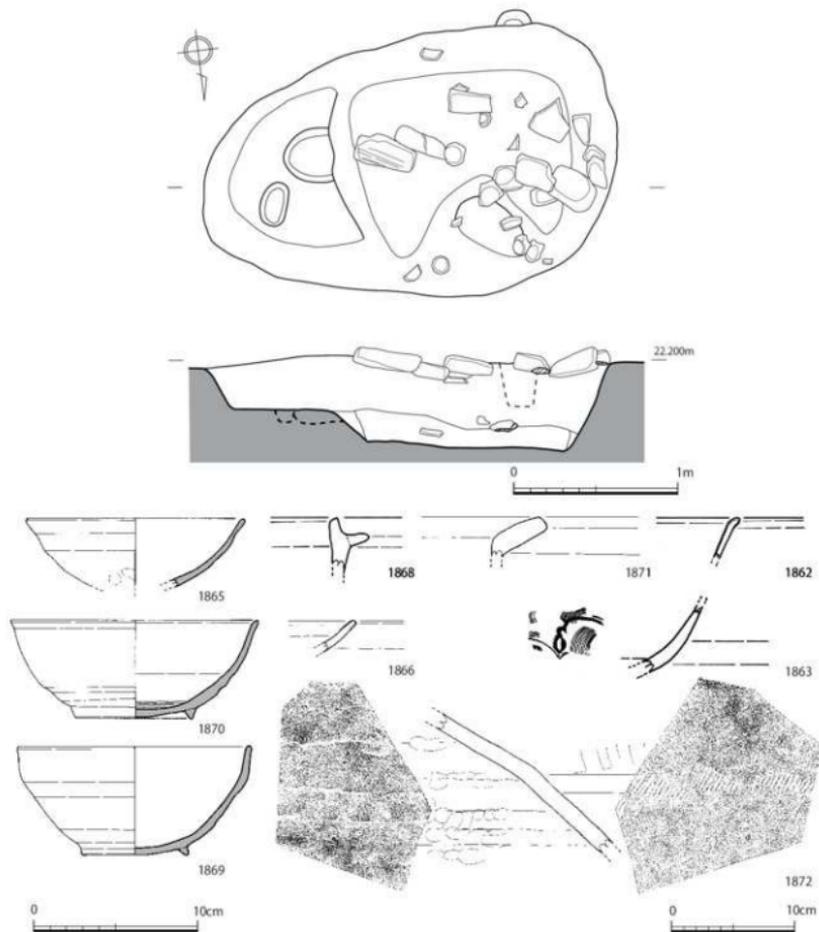


第 357 図 SK105 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK110 (第 358 図)

SK110は調査区南東にあたり、北2m先にSK135、南1.5m先にSK125が位置する。おおむね東西に主軸をもつ。土坑の平面は楕円形をなし、長軸2.5m、短軸1.6m、深さ0.3~0.6mである。土坑東側は幅0.9mのテラスが一段付き、ピット2基が掘られる。遺構埋土は暗灰褐色粘質土である。土坑西側を中心に土器、石類が出土している。石類は径30cmの川原石が上面を中心に検出され、土器は上面から床面直上にわたって出土している。遺物は土師質土器、瓦器、常滑焼、中国産白磁・青磁が出土している。

1865・1869・1870は瓦器碗である。1869・1870は軟質焼成である。1869は体部下半がまるみをもつ。口縁部が垂直気味に立ち上がり、高台は外方へ張り出し底部は丸底である。1870は底部から内鬲気味に開く器



第 358 図 SK110 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3・1/4)

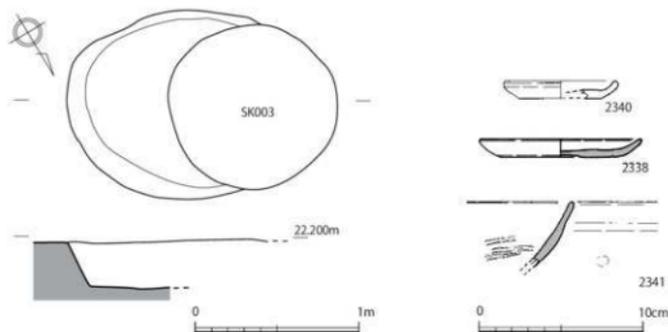
形を有する。内面底部を中心に同心円のヘラミガキを施す。1865は和泉型瓦器である。口縁部下に段を有し、外面体部下半はユビオサエが残る。

1868・1871は土師質土器である。1871は銅で、体部に比して口縁部が肥厚する。1868は釜で、口縁部下に鈎が付く。口縁部内側は斜め方向に面取りを施す。1872は常滑焼裏の胴部である。外面は押印文の叩きを施す。内面はユビオサエ、粘土接合痕がみられる。

1862・1866は白磁である。1866は皿で外面体部中位が露胎である。1862は端反口縁の碗である。1863は龍泉窯系青磁碗である。外面は無文、内面はヘラ・櫛状工具で花文を施す。釉調は暗オリーブ色を呈し、貫入が認められる。

SK111 (第359図)

SK111はSK135の西側に位置し、土坑の西側は近世埋壊土坑(SK003)に切られる。土坑の平面は円形を呈し、径0.6m、深さ0.3mである。出土遺物は土師質土器、瓦器がみられる。2340は土師質土器小皿で、底部から内彎気味に開く。2338・2341は瓦器である。2338は小皿である。外面底部は糸切り離しが残る。2341は和泉型瓦器碗である。口縁部下に段を有する。



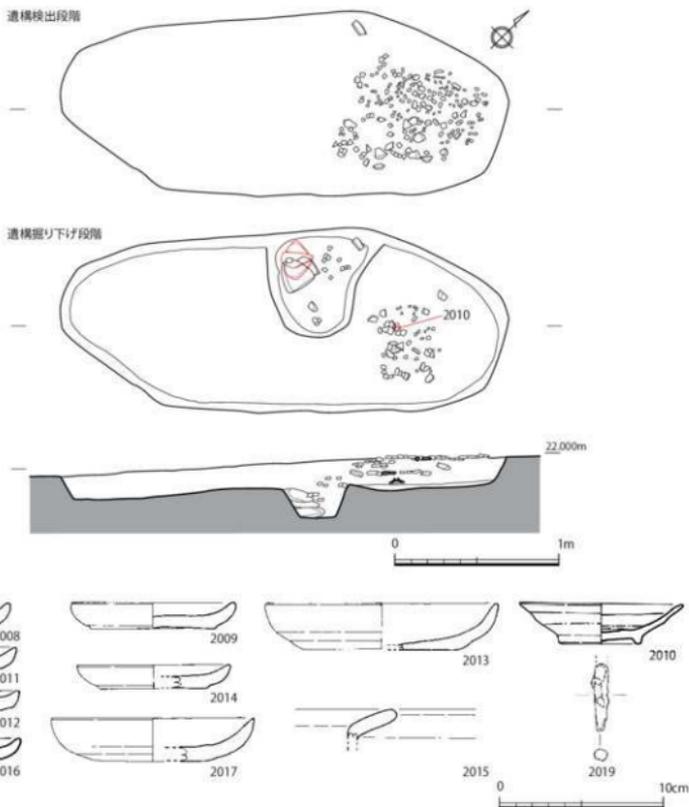
第359図 SK111遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK115 (第360図)

SK115は調査区南西に位置し、おおむね東西に主軸をもつ土坑である。土坑の平面は長楕円形をなし、長軸2.6m、短軸1.1m、深さ0.2～0.5mを測る。遺構検出時に土坑北側で土師質土器の細片が集中する土器溜まりが検出された。土器溜まりは幅0.8mの範囲で確認することができた(第360図遺構検出段階を参照)。調査は土坑の長軸に沿って半截し土層観察を行った。土層は第1層(暗灰褐色粘質土、層厚0.2m)、第2層(暗茶褐色粘質土、層厚0.5m)に分層ができ、第1層は土器溜まりを範囲とする。土器は坏・小皿が主体で径3cm程度の細片が多い。意図的に打ち欠いたものであろう。小石は含まない。第2層は第1層の下層にあたるが、土器集中範囲の周囲は第2層で検出できる。第2層が埋まったのち土坑北側で土器細片を廃棄したとみられる。土坑の床面は平坦であるが、土坑中央の西側にピットが掘られる。ピット内は西側に径20cmの川原石が重なった状態で検出している。土器片は少なかった。

第360図はSK115出土遺物で、土師質土器、中国産白磁、鉄釘がみられる。土師質土器小皿・坏は土器溜まり(第1層)、2010は土器溜まりの下部で伏せられた状態で、2015・2019は第2層から出土している。小皿・坏とも体部下半で屈曲し内彎気味に開く。2010は白磁高台付皿で、見込は蛇ノ目軸剥ぎ、外面体部下半から下は露

胎である。2019の鉄釘は上端が欠損する。SK115の性格は、細片を主体とする土器溜まりの状況から、なんらかの祭祀が行われたと考えられる。



第360図 SK115遺構・出土物実測図 (1/30・1/3)

SK120 (第361・362図)

SK120は調査区南端に位置し、おおむね東西に主軸をもつ土坑である。土坑の北東側は円形土坑 (SK101・104) に切られる。SK120の平面は楕円形をなし、長軸4m、短軸2m、深さ0.2~0.3mである。床面は平坦であるが、北から南に向かって緩斜する。

土層は3層に分層ができ (第361図参照)、とくに第2層で土器が多く出土している。土器は破片が多く占めており、土坑全体に出土している。土層観察から遺構の重複関係が考えられたが、平面では確認ができなかった。遺物の出土状況から単一の土坑として把握している。

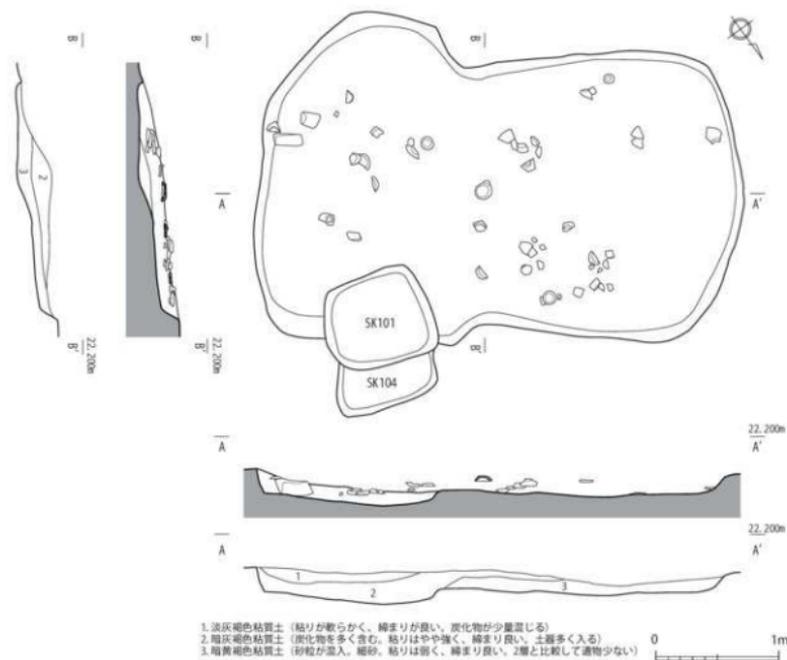
第362図はSK120出土遺物で、土師質土器、黒色土器、瓦器、中国産白磁・青白磁がみられる。土師質土器小皿・坏とも底部切り離しは糸切りである。

土師質土器小皿（2006・2007・2023・2024・2045・2046）は器高が1.4cm前後で、底部から斜上方に開く。2045は口縁部下で屈曲し、底部が丸底をなす器形である。口縁部端部はすぼまる。外面底部は糸切り離しが残る。色調は橙褐色で土師質を呈するが、器形などから瓦器未焼成と考えられる。2022・2026・2037は土師質土器坏である。2037の内面底部はロクロ痕が明瞭に残る。2026は口縁部端部がまるみをおび、体部中位は屈曲する器形である。

2042・2053は土師質土器椀である。2042の高台は断面方形をなし、底部は丸底気味である。外面底部に「×」？の線刻が施される。2053は比較的高い高台で断面三角形を呈する。2030は黒色土器A類椀である。内面底部に幅広いヘラミガキを不定方向に施す。2041は和泉型瓦器椀である。外面体部はナデ・ユビオサエ、内面体部はヘラミガキ調整である。

瓦器小皿（2032）は完形品で、口径8.8cm、器高1.4cm、底径7.8cmを測る。口縁部下で屈曲し、底部は丸底気味である。内面は口縁部から底部へとなだらかである。内面は同心円のヘラミガキを施す。外面底部の周縁に糸切り離しが残り、底部中央はナデ調整である。色調は灰茶褐色～灰白色で、軟質焼成である。

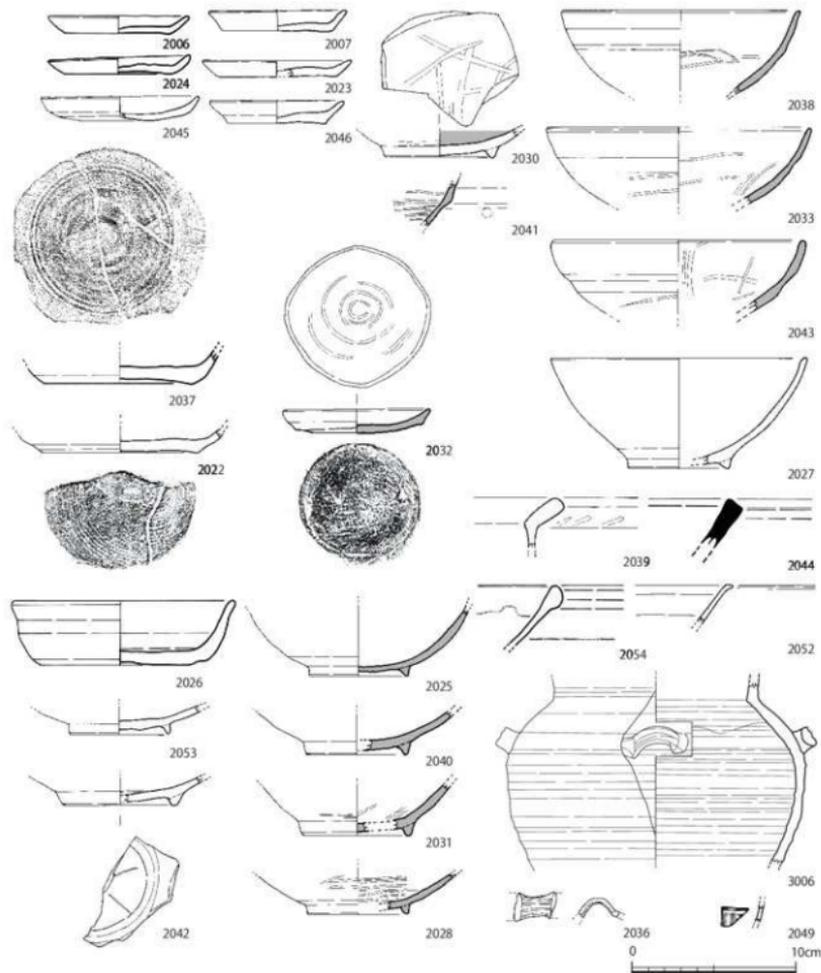
瓦器椀（2025・2027・2028・2031・2033・2038・2040・2043）は軟質焼成をなすものである。椀の底部は断面三角形の高台が付き丸底を呈する。2028・2031は内外面とも緻密なヘラミガキを施す。椀の器形



第361図 SK120 遺構実測図（1/40）

は内傾気味に開く。2033・2038・2043とも口縁部端部はまるみをもつ。2027は口縁部上端を平坦に仕上げ、深い体部を有する。底部には低い高台が付く。調整は不明瞭である。色調は黄白色を呈するが、瓦器未焼成である。

土師質土器鍋(2039)は体部に比して口縁部が肥厚する。口縁部外面端部は面取り気味に仕上げる。東播系須恵器鉢(2044)は口唇部がすぼまり、断面方形をなす。



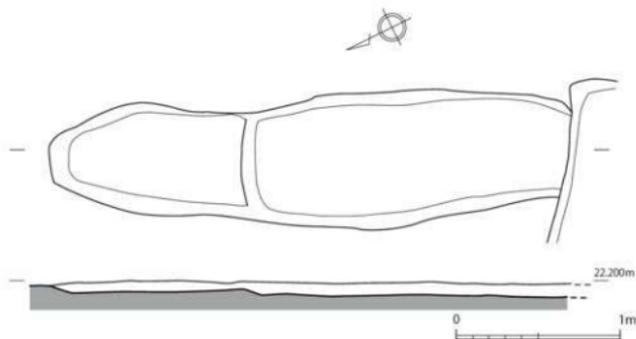
第362図 SK120出土遺物実測図(1/3)

2036・2049・2052・2054・3006 は白磁である。2052 は端反口縁、2054 は玉縁口縁の碗である。2052 は体部内面に白堆線を施す。2054 は外面体部下半が露胎、内面体部に釉溜まりが認められる。3006 は四耳壺である。頸部は垂直気味に立ち上がる。肩部に横耳が付き、胴部はまるみをおびる。内面肩部上半から下半以外は厚めの釉がかかる。貫入は認められない。胴部内外面はロクロ痕が明瞭に残る。素地は白灰色をおびる。2036 は四耳壺の横耳部分にあたるものと考えられる。素地は白灰色をおびる。

2049 は青白磁合子の身である。外面体部に菊弁文の陽刻を施す。外面は施釉、内面は露胎である。素地は灰白色を呈する。

SK121 (第 363 図)

SK121 は調査区中央の東寄りに位置し、おおむね南北に主軸をもつ。土坑の南側はカクラン坑に切られる。土坑の平面は長楕円形を呈し、長軸 $3\text{m} + \alpha$ 、短軸 0.8m 、深さ 0.1m を測る。土坑北側は長さ 1m 、幅 0.8m のテラスが一段付く。出土遺物は土師質土器・瓦器がみられるが、小片のため図化しえなかった。



第 363 図 SK121 遺構実測図 (1/30)

SK125 (第 364 ~ 366 図)

SK125 は調査区中央の南端にあたり、おおむね東西に主軸をもつ。北 2m 先に SK110 が位置している。土坑の平面は長楕円形を呈し、長軸 7m 、短軸 1.2m 、深さ $0.2 \sim 0.5\text{m}$ を測る。遺構の埋土上面は 6 基のピットが掘られており、切り合い関係をもつ。なお土坑西側は試掘調査を実施した箇所にあたり、遺構上面の一部を掘り下げている。

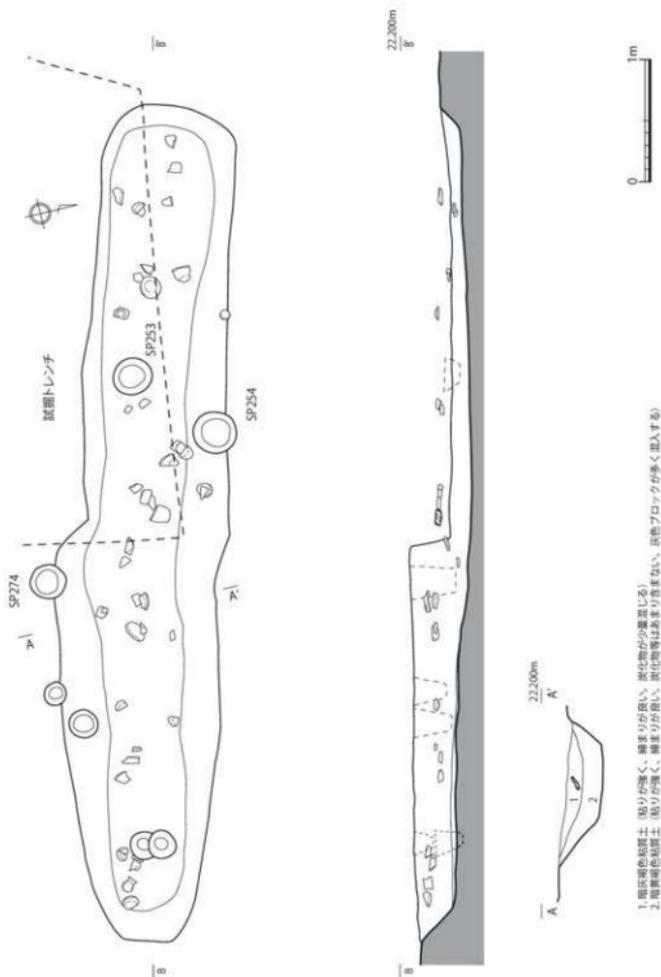
土坑の床面は中央に向かってくぼみ、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は第 1 層 (暗灰褐色粘質土)、第 2 層 (暗黄褐色粘質土) に分層ができる (第 364 図)。遺物は第 1・2 層ともみられるが、そのうち第 1 層の出土割合が高く、個体の出土が多い。第 2 層では灰色ブロック土が多く混じることから滞水した可能性がみられる。

第 365・366 図は SK125 出土遺物で、土師質土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・青磁・黄釉陶器・鉄釘がみられる。土師質土器小皿・環の底部切り離しはいずれも糸切りである。

土師質土器小皿 (2066・2075・2078) は器高が 1.2cm 前後である。2066 は内彎気味に開く。2075・2078 は底部から斜上方に開く器形である。

土師質土器帯 (2056・2061・2064・2067・2070) は器高が 3.2cm 前後である。2056・2064・2067 は底部から直線的に斜上方へ開く。2061 は底部から内燗気味に開く器形である。2064 は口縁部端部がすぼまる。

2068・2073・3010・3011 は土師質土器であるが、いずれも底部の器壁が厚く、柱状高台を有するものである。そのうち 3011 は燗台である。2073 は他の柱状高台のものに比べると、ひとまわり小さいものである。底径 3.4cm を測る。外面底部はナデ調整のため切り離しは不明である。2068・3010・3011 は体部下半が彎曲する器形である。底部下端は外方へ張り出している。3010 の上部は欠損するが、大型品である。SK105 出



第 364 図 SK125 遺構東測図 (1/40)

土の2330と器形が類似している。内面底部は平坦で、ロクロ痕が残る。外面底部は糸切り離しのちナデである。器高は4.6cm + α 、底径9.8cmを測る。3011は燭台である。内面底部中央に心棒を立てる穿孔がみられるが、貫通はしていない。体部が彎曲する器形で、底部下端は外方へ張り出している。法量は器高5.7cm、底径6.4cmである。調整は不明瞭である。

2076は吉備系土師器碗である。口縁部端部がまるみをもち、体部中位は張る。調整は不明瞭である。法量は、復元口径14.8cm、器高5.2cm、高台径5.8cmである。色調は明褐色を呈する。

瓦器碗(2057・2058・2071・2072・2074・3007～3009)は、軟質、硬質焼成がみられる。2058・3008・3009は硬質、その他は軟質焼成である。2072・2074の高台は外方へ張り出し、底部が丸底気味である。2072の外面底部は「×」を重ねた線刻がみられる。2058は口縁部上端を平坦に仕上げ、体部はややまるみをおびる。外面底部は糸切り離しのちナデである。内面体部に同心円状のヘラミガキが認められる。2057は体部がまるみをもつもので、高台は外方へ張り出す。内面体部に同心円のヘラミガキが認められる。外面体部下半はユビオサエ調整である。3009は体部中位に強い段を有する器形である。口縁部端部はまるみをおびる。内面底部は同心円のヘラミガキが認められるが、体部は不明瞭である。外面体部下半はユビオサエ調整である。法量は、口径15.4cm、器高6.2cm、底径6cmである。3008は口縁部上端を平坦に仕上げ、体部はややまるみをおびる。外面底部は無高台で、糸切り離しのちナデである。内面体部下半は幅広のヘラミガキが認められる。口縁部外面に重ね焼きの跡が確認できる。底部の形態、器形から東国東型瓦器碗と考えられる。口径15.6cm、器高6.9cm、底径6.4cmを測る。3007は和泉型瓦器碗である。断面三角形の低い高台が付き、底部から斜上方に大きく開く。内面は、体部が同心円、底部が平行線のヘラミガキを施す。外面はユビオサエが顕著である。

2055は土師質土器鍋で、体部に比して口縁部が肥厚する。口縁部上端は面取りを施す。口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整である。復元口径34cmを測る。

3013は東播系須恵器鉢である。口縁部は玉縁状に肥厚し、外面端部は面取りを施す。体部は直線的に伸び底部へいたる。内外面ともロクロ痕が明瞭に残る。外面底部は糸切り離しのちナデである。内面体部は使用痕が認められ、摩滅が著しい。復元口径29.4cm、器高10.5cm、底径8.8cmである。

2062・2069は白磁碗である。2069は玉縁状口縁をなす碗の底部である。高台の削り込みが浅い。2062は端反口縁で、体部内面に白堆線を施す。外面体部下半は露胎である。体部内面上半に釉溜まりが認められる。

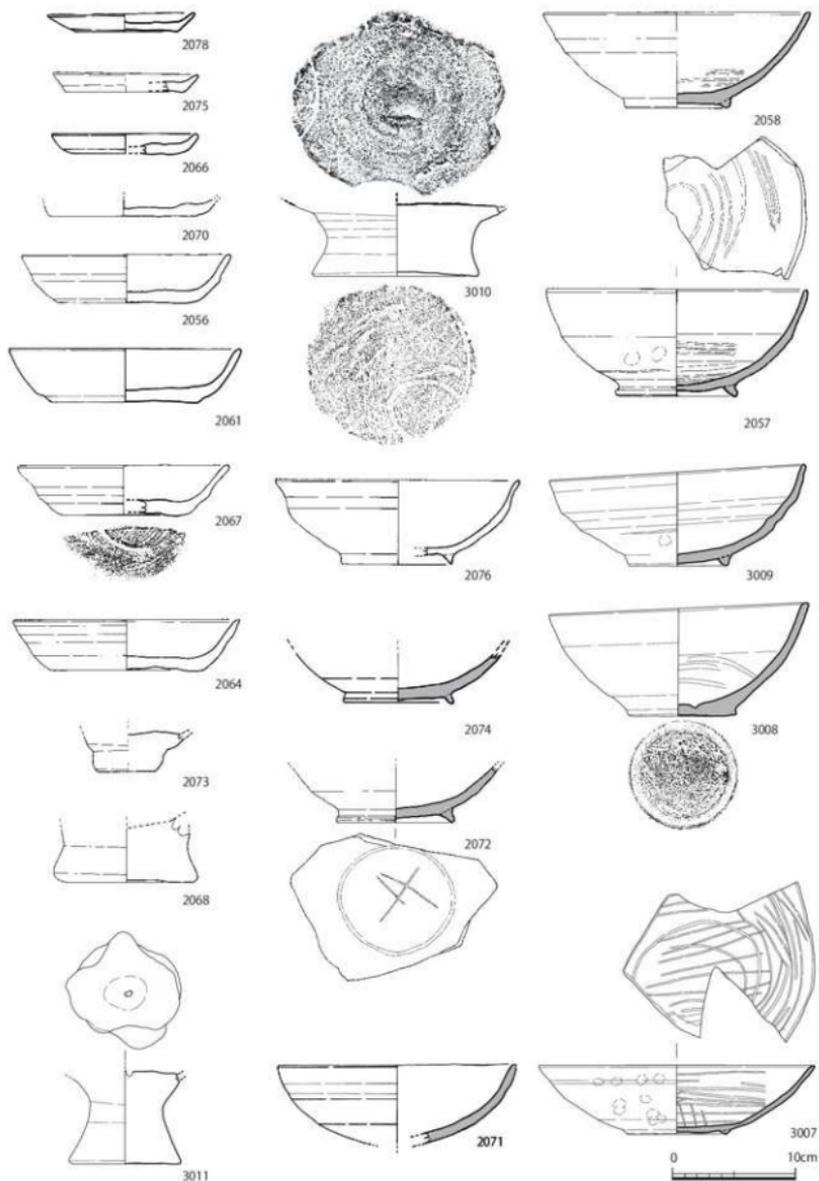
2059・2060は同安窯系青磁である。2059は皿で、見込は幾何学文を施す。外面底部は露胎である。2060は碗で、外面は櫛描文、内面は幾何学文を施す。外面体部下半は露胎である。

2063・2065・2084は龍泉窯系青磁である。2084は平底皿で、口縁部が外傾気味に立ち上がる。釉が厚めにかかり、外面底部の一部は露胎である。見込に草文を施す。釉調は暗オリブ色を呈し、貫入が認められる。2063・2065は碗の底部で高台が低い。いずれも畳付・高台裏は露胎である。

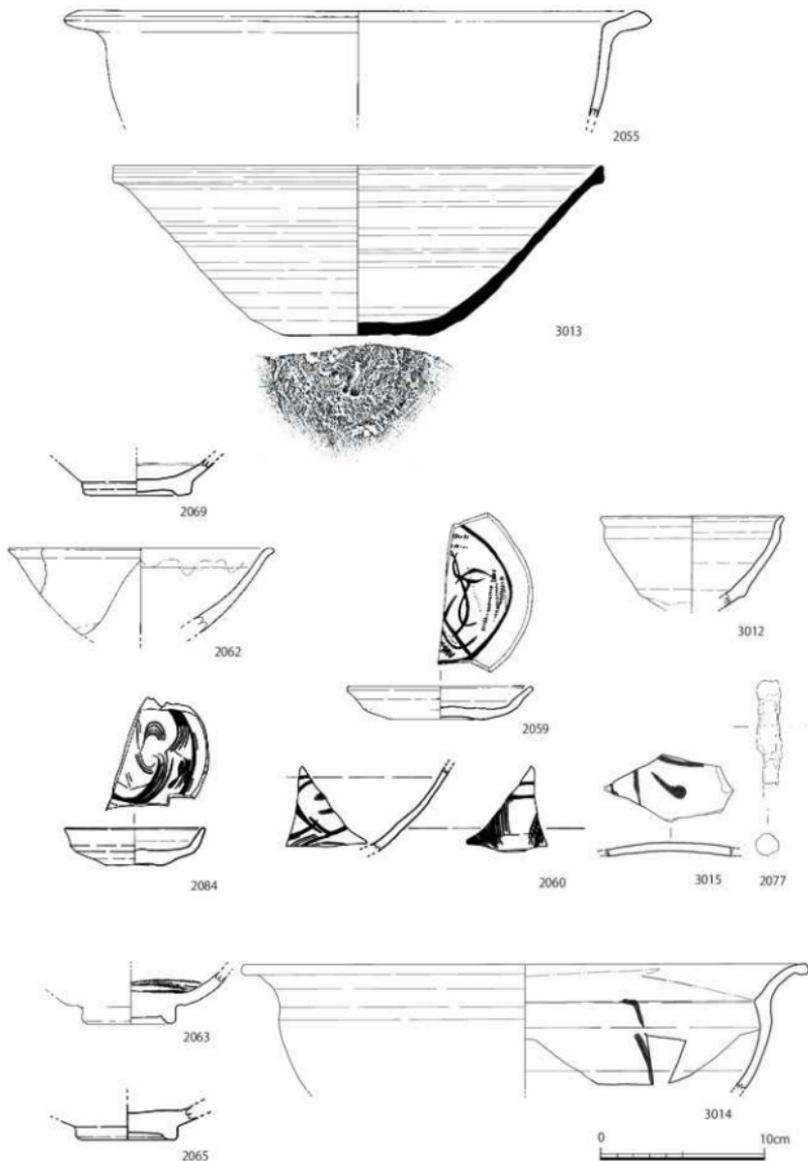
3012は黒釉陶器碗で、建窯産と考えられる。口縁部が短く外反し、口縁部端部はまるみをもつ。口縁部下で屈曲し体部は直線的に伸びる。釉が厚めにかかり、外面体部下半は露胎である。素地は灰褐色を呈する。なお本資料はSE080最下層の出土資料と接合している。

3014・3015は磁甗窯系の黄釉陶器の盤である。3014は口縁部がくの字状に長く外反し、端部が肥厚する。体部上半は張り、まるみをもちながら底部へいたる。口縁部の一部・体部の内面に黄釉が薄めかかり、縦方向に鉄絵が施される。色調は口縁部が灰褐色、外面体部は暗赤茶色をおびる。胎土は緻密で白色粒子を微量含んでいる。復元口径34.2cmを測る。3015は盤の底部片とみられ上げ底である。内面は黄釉が薄めにかかり鉄絵が施される。外面は露胎で色調は赤茶色を呈する。

2077は鉄釘で下端が欠損する。



第 365 図 SK125 出土遺物実測図① (1/3)

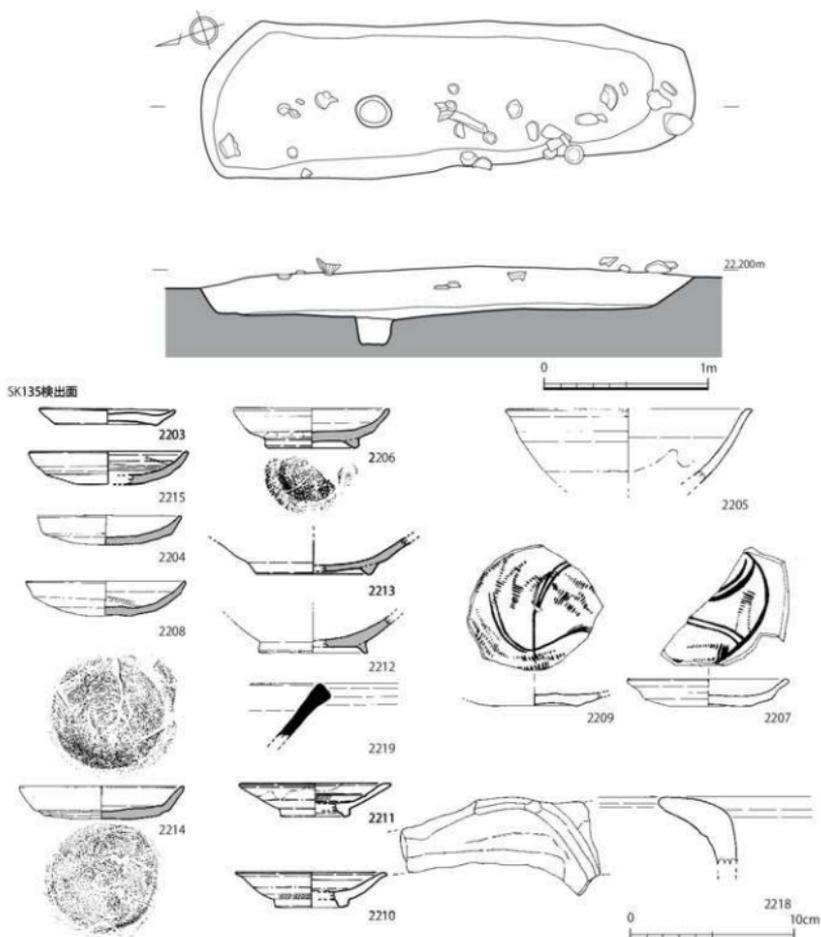


第 366 図 SK125 出土遺物実測図② (1/3)

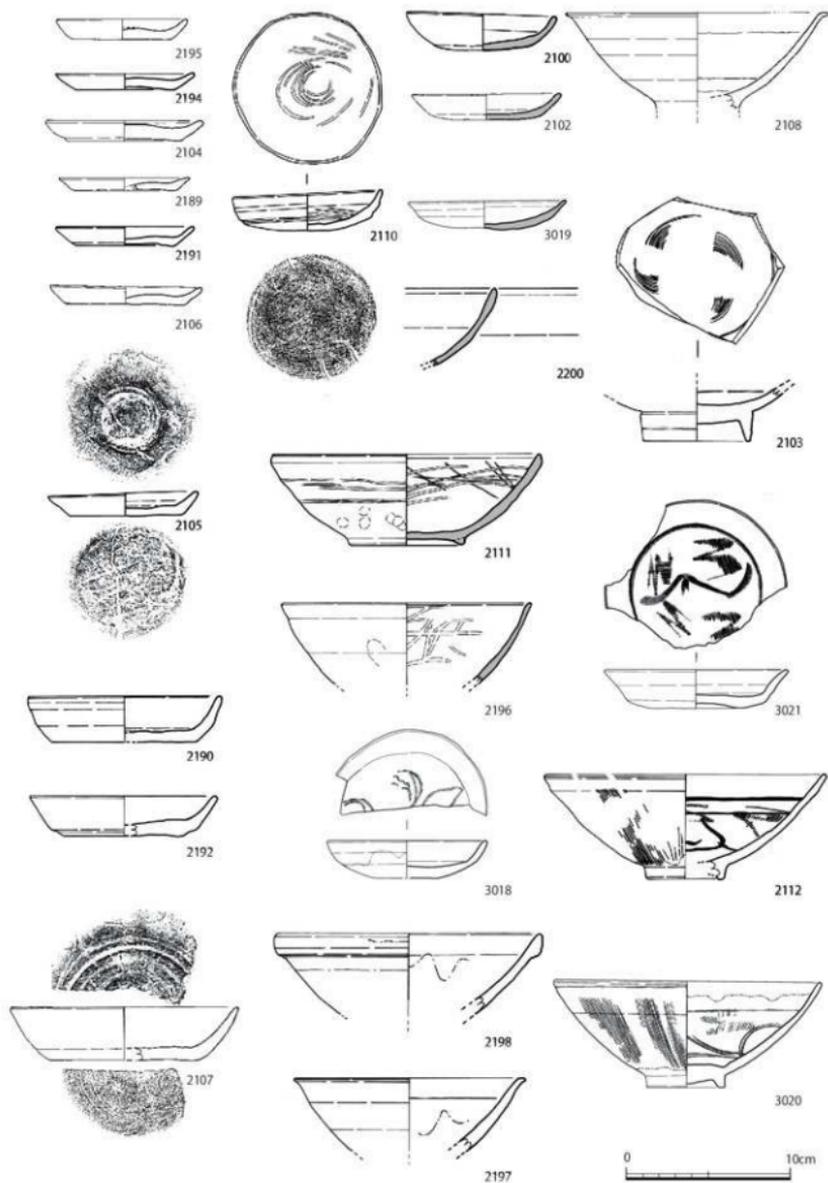
SK135 (第 367・368 図)

SK135 は調査区中央の南寄りにあたり、おおむね南北に主軸をもつ。北 2 m 先に SK085、南 1.5 m 先に SK110 が位置する。遺構検出では土坑プランを把握することができなかった。そのため掘り下げを進めながら土坑プランを確定した。土坑の平面は長楕円形を呈し、長軸 2 m、短軸 0.9 m、深さ 0.2 ~ 0.5 m である。床面は平坦であるが、土坑の中央にピットが掘られている。土坑の壁面は緩やかに立ち上がる。遺構埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は土坑の上面から中ほどで出土している。

第 367 図は SK135 検出時に出土した遺物で、土師質土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・青磁のほか、竈



第 367 図 SK135 遺構・出土遺物実測図① (1/30・1/3)



第368図 SK135出土遺物実測図②(1/3)

の土製品がみられる。

2203は土師質土器小皿で、底部から斜上方に開く。2204・2206・2208・2212～2215は瓦器で、いずれも軟質焼成である。2204・2208・2214は小皿である。2204・2208は口縁部下で屈曲し、底部が丸底である。外面底部は糸切り離しのちナデである。2214は口縁部下で屈曲し、底部は平底気味である。外面底部は糸切り離しのちナデで、糸切り未調整痕が認められる。内面底部はロクロ痕をナデ消している。2206は高台付き皿で、口縁部下は屈曲し、底部は平底気味である。外面底部は糸切り離しのちナデである。2212・2213は椀である。2219は東播系須恵器の鉢である。

2205・2210・2211は白磁である。2210・2211は高台付き皿である。体部は直線的に伸び、口縁部が短く反する。いずれも外面体部下・高台は露胎、見込みは輪状に軸を掻き取る。2207・2209は同安窯系青磁皿である。見込みは櫛・ヘラ状工具による幾何学文を施す。外面底部は露胎である。2218は土師質土器の移動式甕である。甕の上部に位置するもので、口縁部は屈曲し底を有する。口縁部上端は平坦である。胎土は金雲母を含む。色調は暗茶褐色を呈する。

第368図はSK135のプラン確定後に出土した遺物である。土師質土器、瓦器、中国産白磁・青磁がみられ、遺構検出の遺物との時期差はみられない。土師質土器小皿・環の底部切り離しは糸切り離しである。

土師質土器小皿(2104～2106・2189・2191・2194・2195)は、底部から斜上方に開く器形である。器高は0.8～1.5cmである。2105は内面底部にロクロ痕が残る。

2107・2190・2192は土師質土器環である。底部から斜上方に開き、口縁部端部はまるい。2107は内面底部にロクロ痕が残る。2110は小皿である。口縁部下で屈曲し底部が丸底をなし、ほぼ完形品である。口径9cm、器高2.5cm、底径7.8cmを測る。内面底部は渦状のヘラミガキを施している。外面底部は糸切り離しが残る。色調は橙灰色で土師質をなすが、器形・調整から瓦器の未製品と考えられる。

2100・2102・3019は瓦器小皿で、軟質焼成である。いずれも内彎する器形で底部は丸底を呈する。外面底部は糸切り離しが残る。2100は完形品で、口径9cm、器高2.4cm、底径6cmを測る。2111・2196・2200は椀で、軟質(2111・2200)と、硬質(2196)焼成がみられる。2111は内彎気味に開く器形で、口縁部外面端部は面取りを施す。外面底部はナデである。外面体部上半は横方向のヘラミガキ、下半はクビオサエが顕著である。内面体部上半は同心円状のヘラミガキを施す。また等間隔に斜め方向のコテ当て痕が認められる。2196は和泉型瓦器か。

2103・2108・2197・2198・3018は白磁である。3018は平底皿で、口縁部は直線的に伸び体部中位で屈曲する。見込みに花文を施す。軸は厚めにかかり氷裂が認められる。外面底部は露胎である。2198は玉縁状口縁の碗である。2103・2108・2197は口縁部が端反をなす碗である。2112・3020・3021は同安窯系青磁である。3021は皿で、底部から緩やかに反する。見込みは幾何学文を施す。外面底部は露胎である。2112・3020は碗で内彎気味に開く器形である。外面は櫛描文、内面体部は幾何学文を施す。外面体部下・高台は露胎である。

SK140 (第369～373図)

SK140は調査区北西にあたり、北1m先にSK145が位置する。おおむね南北に主軸をもつ。SK140は土器の出土状況、埋土の相違が認められる土坑である。土坑平面は長楕円形を呈し、長軸2.4m、短軸1.4m、深さ0.6mを測る。

遺構の埋土から、上層の暗灰黒褐色粘質土(層厚20cm、炭化物を多く含む)と、下層の暗茶褐色粘質土(層厚40cm、炭化物は含まない。しまりがよい)に分層ができる。

上層では土器を配した状態が検出された(第369図上層出土状況を参照)。土器は約70個体近くみられ、完形品は33個体出土している。出土状況は、口縁部を上にしたもの、うつ伏せにしたもの、斜めにしたものなどがみられる。そのうち、口縁部を上にしたものが多い。とくに土坑南半分を中心に壁面から中央に向かってレンズ状に土器を配している。土器は企画性をもった配置ではなく、雑である。また土坑中央の北側では土師質土器

1 cm 程度の細片が集中する箇所が2ヶ所ほど認められる。土坑の南西隅には方形状に扁平な結晶片岩を配した箇所がみられる。石類は被熱を受けていない。石類を除去すると、その下から土師質土器小皿を直線状に並べた状態や、土器の細片を検出している（第369図石敷下出土状況を参照）。

下層は、上層とは異なり、破片・細片が多くを占める。調査当初、遺物の出土状況、埋土の違いから別遺構の可能性が考えられたが、下層の土坑プランが上層と同じ規模をもつことから、上層・下層とも一連の埋没過程と

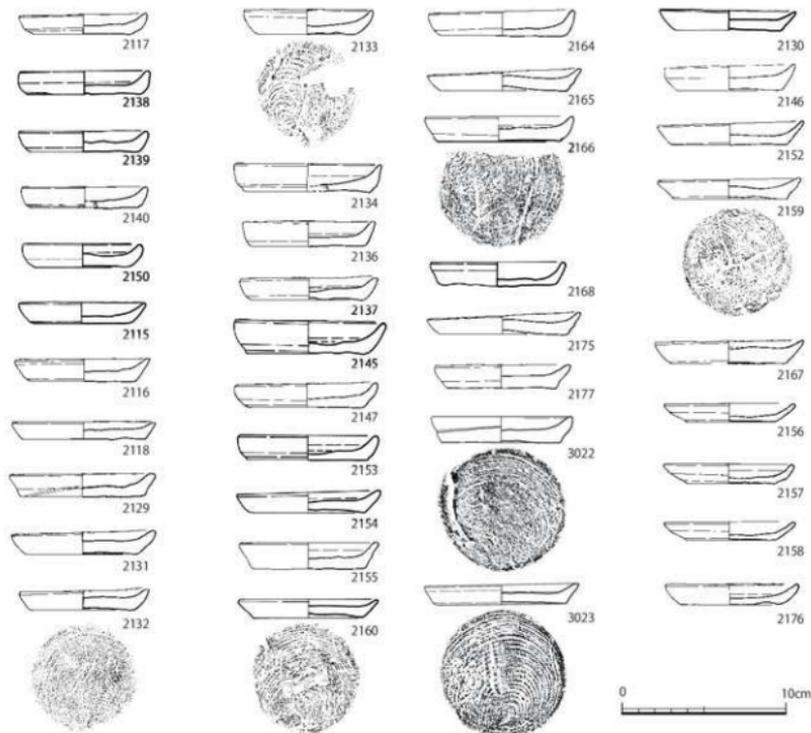


第369図 SK140 遺構実測図 (1/20)

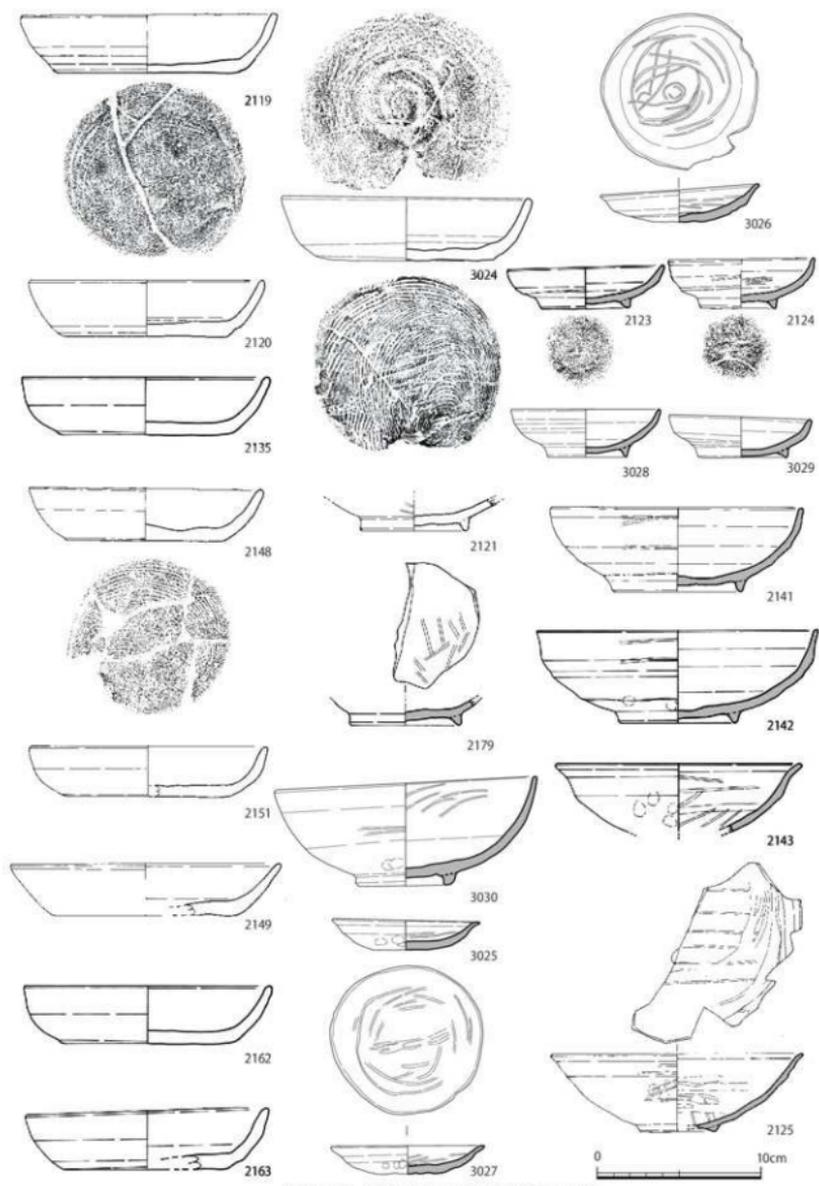
して判断している。下層の遺物時期は、SK140 と大幅な時期差はないものとみられ、下層が埋まったのち、はやい段階にその上面（SK140 上層）で土器を配したものと考えられる。遺物については上層、石敷き下、下層に分け報告する。

第370～372図はSK140上層の出土遺物である。土師質土器、瓦器、中国産白磁・青白磁・土鍾が出土している。遺物の出土状況から、一括性が高いものとみられる。土師質土器小皿・杯の底部切り離しは糸切り離しである。

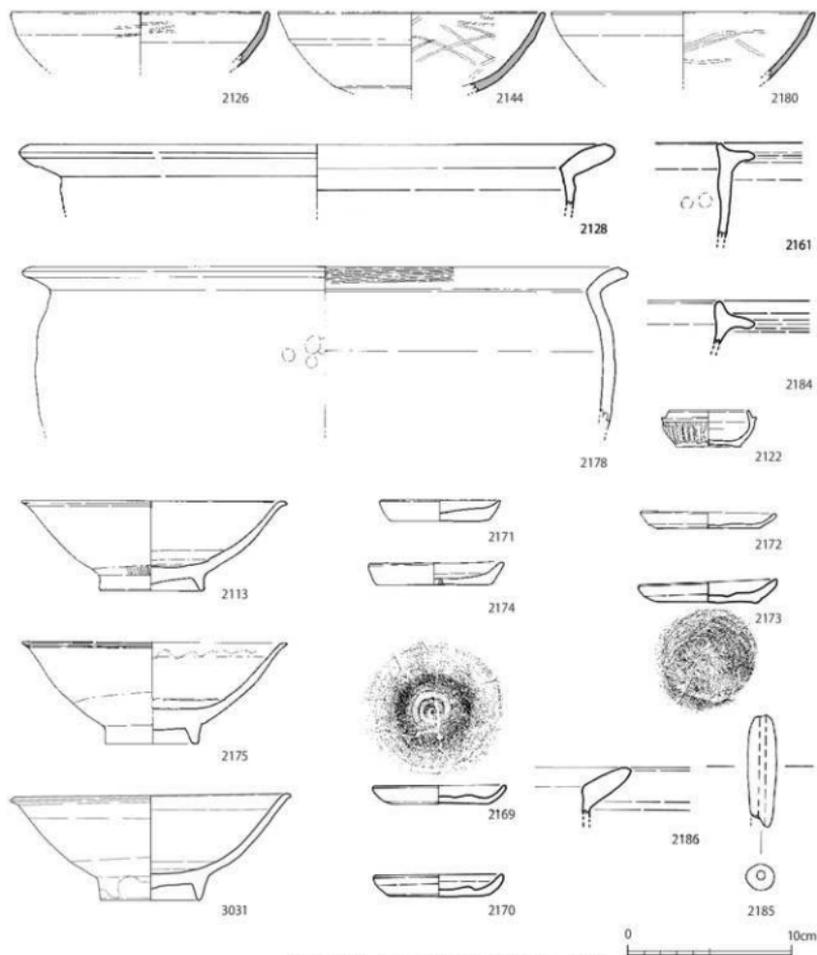
第370図は土師質土器小皿で、いずれも底部切り離しは糸切りである。小皿の法量は口径7.2～9.3cm、器高1.0～2.1cmである。調整はおおむね、内外面体部は回転ナデ、内面底部はナデであり、外面底部は糸切り離しのちナデである。器形から、体部が内彎気味に開くもの（2117・2131～2134・2138～2140・2146・2147・2150・2153・2164・2166・2168）、体部が斜上方に開き口縁部端部がまるみをもつもの（2118・2129・2136・2137・2145・2154・2155・2159・2177・3022・3023）、体部が斜上方に開き口唇部がすばまるもの（2115・2116・2130・2152・2160・2167・2175）、斜上方に開き器壁が薄いもの（2156～2158・2176）に分けることができる。とくに内彎気味に開くものが大半を占めるようである。器壁が薄いもの（2156～2158・2176）は、石敷下の出土土器（第372図2169・2170・2172・2173）と類似する。なお、2160・3023は外面底部に板状圧痕が残る。



第370図 SK140出土遺物実測図①(1/3)



第371図 SK140出土遺物実測図② (1/3)



第372図 SK140 出土遺物実測図③ (1/3)

土師質土器坏 (2119・2120・2135・2148・2149・2151・2162・2163・3024) の法量は、口径 14～15.8cm、器高 3.1～3.9cm である。調整はおおむね、内外面体部は回転ナデ、内面底部はナデであり、外面底部は糸切り離しのちナデである。器形は、外面体部中位に段を有し、内彎気味に開くものが大半を占めるようである。3024 は内面底部にロク口痕、外面底部に板状圧痕が残る。2121 は土師質土器碗で、外面にヘラミガキが認められる。

2123～2125・2141～2143・3025～3030 は瓦器で、軟質・硬質焼成がみられる。3026 は小皿で、口縁部下で屈曲し丸底である。見込みは同心円のヘラミガキを施す。外面底部は糸切り離しのちナデである。口径

9.5cm、器高2.3cmを測る。軟質焼成で、色調は暗灰褐色を呈する。2123・2124・3028・3029は高台付き皿である。口縁部は内彎気味に立ち上がり、口縁部下で屈曲する。底部は丸底をなし、比較的高い高台が付く。法量は口径8.5～9.4cm、器高2.6～3.1cmである。ヘラミガキは不明瞭なものが多い。外面底部は糸切り離しのちナデである。以上の瓦器小皿・高台付き皿は軟質焼成である。

2141・2142・2179・3030は椀で、いずれも軟質焼成である。体部がまるみをもつ内彎する器形で、口縁部端部はまるみをもつ。比較的高い高台が付く。ヘラミガキは不明瞭なものが多い。外面底部はナデ、2141・2142の内面底部はロクロ痕をナデ消している。3030の法量は口径16.7cm、器高6.6cm、高台径5.6cmを測る。2125・2143・3025・3027は和泉型瓦器で、いずれも硬質である。3025・3027は小皿で、口縁部下で屈曲し底部は丸味をおびる。3027は完形品である。外面の調整はナデ・ユビオサエ、内面体部は同心円、底部は平行線のヘラミガキを施す。口径9.2cm、器高1.7cm、底径3.6cmを測る。2125・2143は椀である。2143は口縁部が外反する。内面体部に同心円、平行線のヘラミガキを施す。2125は口縁部が短く外反し、体部は丸味をおびる。断面三角形の低い高台が付く。内面は体部が同心円、底部が平行線のヘラミガキを施す。2126・2144・2180は瓦器椀でいずれも硬質焼成である。内彎気味に開く器形である。在地産か。

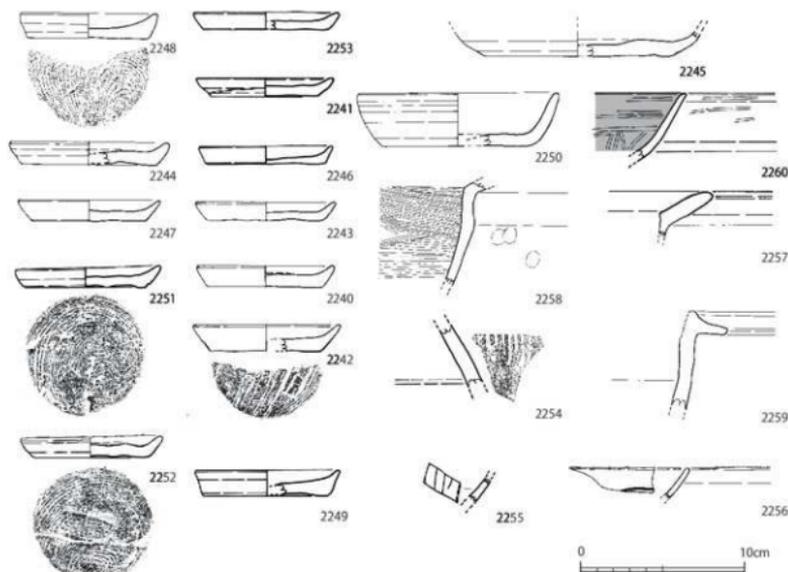
2128・2178は土師質土器鍋である。2128は体部に比して口縁部が肥厚する。口縁部端部はまるい。復元口径35cmを測る。2178は口縁部が短く外反し体部は半球形である。口縁部内側に緻密なハケメ調整が認められる。復元口径35.6cmである。2161・2184は土師質土器釜で、口縁部下に比較的最長い鈎が付く。

2113・2175・3031は白磁碗で、端反口縁をなすものである。いずれも外面体部下半、高台は露胎である。2113の見込は輪状に軸を挿き取る。2122は青白磁合子の身である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、内面に受部をつくる。体部はまるみをおび、底部は上げ底である。外面体部に菊弁文の陽刻を施す。口縁部外面、外面体部下半から底部は露胎である。内面に貫入が認められる。復元口径4.8cm、器高2.2cmである。

つぎに石敷き下で出土した遺物について触れる(第372図)。2169～2174は土師質土器小皿である。なお2169・2172・2173は直線状に配置した小皿である。2169・2170・2172・2173は器壁が薄いつくりで、2169・2173は完形品である。内彎気味に開く器形である。内面底部は平滑でなく、ロクロ痕が残るもの(2169)や、ロクロ痕をナデ消している(2173)。色調は黄橙色である。法量は口径7.8～8.8cm、器高1.1～1.4cmを測る。2186は土師質土器鍋で、体部に比して口縁部が肥厚する。2185は土師質土器の管状土鍾である。

第373図はSK140下層の出土遺物である。遺物は、土師質土器、黒色土器、常滑焼、中国産白磁がみられる。土師質土器小皿・杯の底部切り離しは、糸切りである。

土師質土器小皿(2240～2244・2246～2249・2251～2253)は、いずれも底部から斜上方に開く器形を有する。口縁部が短く肥厚するもの(2248)、体部が内彎気味に開くもの(2244)、口縁部が比較的長く、斜上方に開くもの(2240・2241・2243・2246・2247・2251～2253)、底部の器壁が厚いもの(2242・2249)に分けることができる。なお2242・2252の外面底部に板状圧痕が残る。2245・2250は土師質土器杯である。2260は黒色土器A類椀で、内面にヘラミガキを施す。色調は明褐色を呈するが、古代の所産か。2257・2258は土師質土器鍋である。2257の口縁部は肥厚し、比較的長い。2258は半球形をなす体部で、内面に緻密なハケメ調整を施す。2259は土師質土器釜で、長い鈎が付く。鈎より下に煤が付着する。2255は白磁碗で、外面体部に縦方向のヘラ描きを施す。釉調は白灰色を呈する。2256は龍泉窯系青磁の皿か。口縁部は直線的に伸びる。体部内面に横方向のヘラ描きが認められる。貫入が著しい。2254は常滑焼製の胴部である。外面に押印文の叩きを施す。



第 373 図 SK140 下層出土遺物実測図 (1/3)

SK145 (第 374 ~ 377 図)

SK145 は調査区北西端に位置し、主軸が南北方向にもつ土坑である。周辺は掘立柱建物、中世・近世土坑が集中する箇所にあたる。SK145 は中世土坑の SK155、近世土坑の SK059 に切られている。平面形は長楕円形をなし、土坑西端では西寄りにくびれている。長軸 5.4m、短軸 1.3 m、深さ 0.3 m を測る。床面はおおむね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。土坑の埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は土坑全体にみられるが、とくに土坑東側を中心に出土し、個体になるものが多い。口縁部を上にしたもの、うつ伏せにしたものなどがみられる。そのうち、口縁部を上にしたものが多い。遺物は土坑の長軸に沿って上面を中心に出土している。土坑下面は遺物の出土は少ない。遺物の出土状況、土層から廃棄土坑と考えられる。

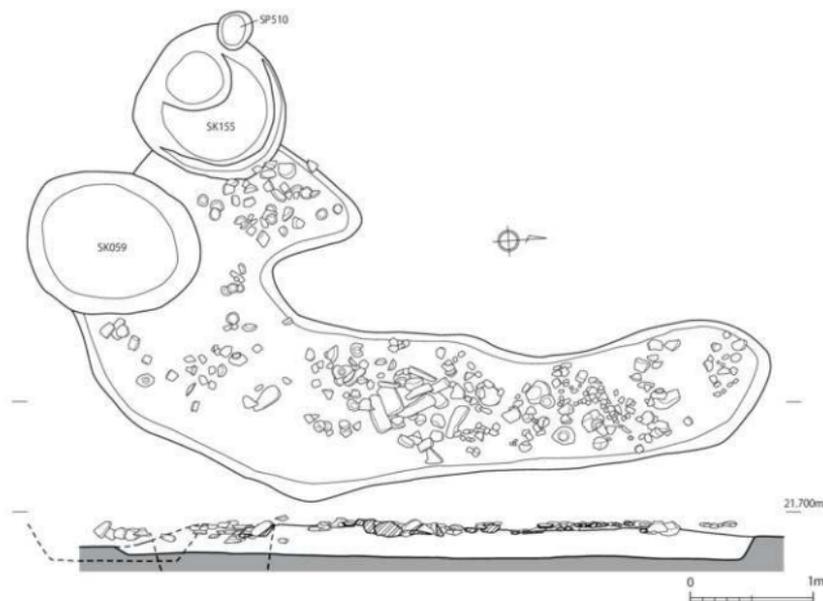
第 375 ~ 377 図は SK145 出土遺物であり、土師質土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・青磁・青白磁・鉄釘がみられる。

土師質土器小皿 (1937・1938・1948・1949・1951・1954・1961・1962・1968 ~ 1970・1972・1973・1976・1977・1983 ~ 1989・1993) は、おおむね底部から斜上方に開く器形である。いずれも底部切り離しは糸切りである。法量は 8 ~ 9.1cm、器高 0.9 ~ 1.9cm である。小皿の器形から、体部が内彎気味に開くもの (1937・1954・1969・1970・1972・1976・1985 ~ 1989)、体部が斜上方に開き口縁部端部がまるみをもつもの (1938・1951・1961・1962・1968・1973・1977・1983)、体部が斜上方に開き口唇部がすばまるもの (1948・1949・1984) に分かれる。そのうち内彎気味に開くものが多く占めている。

土師質土器環 (1939・1944・1950・1955・1959・1971・1980) は、いずれも底部切り離しは糸切りである。口縁部下の屈曲がつよいもの (1944・1980)、底部から内彎気味に開くもの (1939・1955・1959・1971)、底部の器壁が厚く、器高が高いもの (1950) に分かれる。そのうち内彎に開くものが多くみられる。

1936 は土師質土器碗である。断面三角形の低い高台が付き、体部はまるみをおびる。色調は橙褐色を呈する。

1953・2000 は瓦器の高台付き皿である。1953 はやや硬質、2000 は軟質焼成である。いずれも体部が内



第374図 SK145 遺構実測図 (1/40)

轉し底部は丸底気味である。断面三角形の高台が付く。1953の外面底部の調整は糸切り離しのちなデである。1933・1934・1943・1964・1998は瓦器の小皿である。いずれも底部切り離しは糸切りである。1964はやや硬質、その他は軟質焼成である。1933・1998は完形品である。1933・1934・1998は底部から内彎気味に開く。1998の内面底部は同心円のヘラミガキを施す。1943は底部から斜上方に開く器形で、口縁部下で屈曲する。1964は口縁部が短く外反し、底部は丸底気味である。外面体部に横方向、内面底部は同心円のヘラミガキを施す。1931・1932・1945・1952・1960・1963・1982・2003は瓦器椀である。2003は硬質、その他は軟質焼成である。1931の内面底部は不定方向のヘラミガキを施す。1932は断面三角形の高台が付き、体部はまるみをもつ。外面体部のヘラミガキは緻密である。1963は底部から内彎に開き、口縁部が垂直気味に立ち上がる。内面底部は同心円のヘラミガキを施す。1982は器高が高く深い椀形態をなすもので、斜上方に開く器形である。2003は底部から内彎気味に開く器形である。高台は断面方形状をなす。体部内面は不定方向のヘラミガキを施す。内面に重ね焼き痕が認められる。

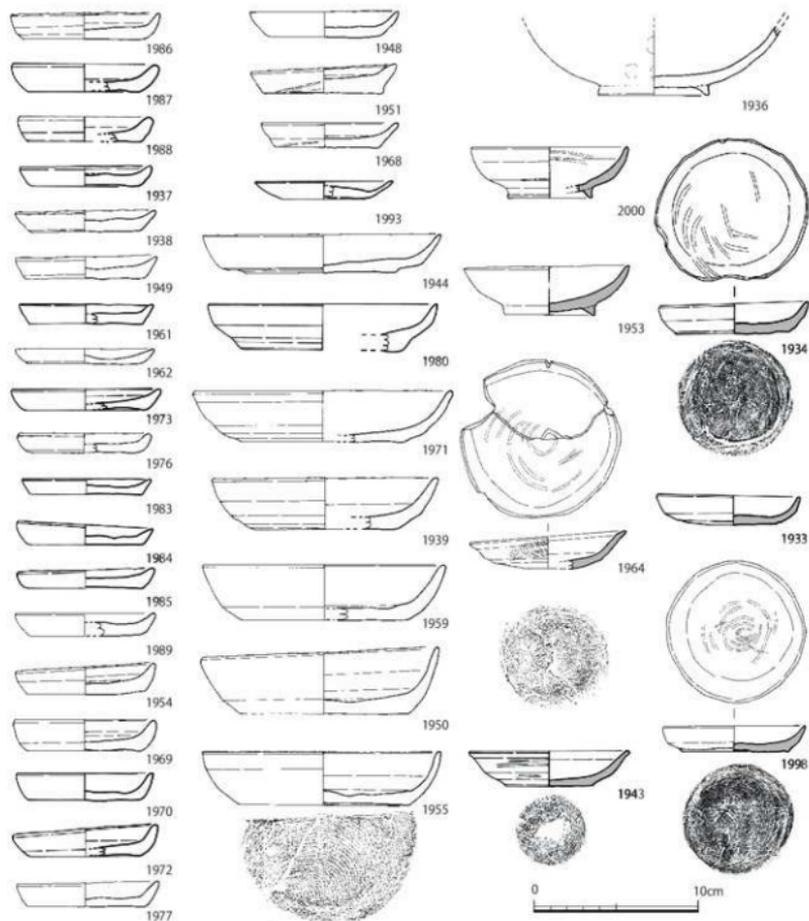
1942・1967・1995・1997・2001は和泉型瓦器で硬質焼成である。1942・1995・1997は小皿である。いずれも口縁部下で屈曲し底部は丸底気味になる。外面はユビオサエ・ナデ調整である。内面は体部が同心円、底部を平行線のヘラミガキを施す。1967・2001は椀である。2001の内面は平行線状のヘラミガキを施す。高台は低い。

1999・2002は瓦器椀で、硬質焼成である。在地産か。1999は口縁部が短く外反する。体部内面は緻密なヘラミガキを施す。2002は口縁部下で屈曲し体部はまるみをおびる。

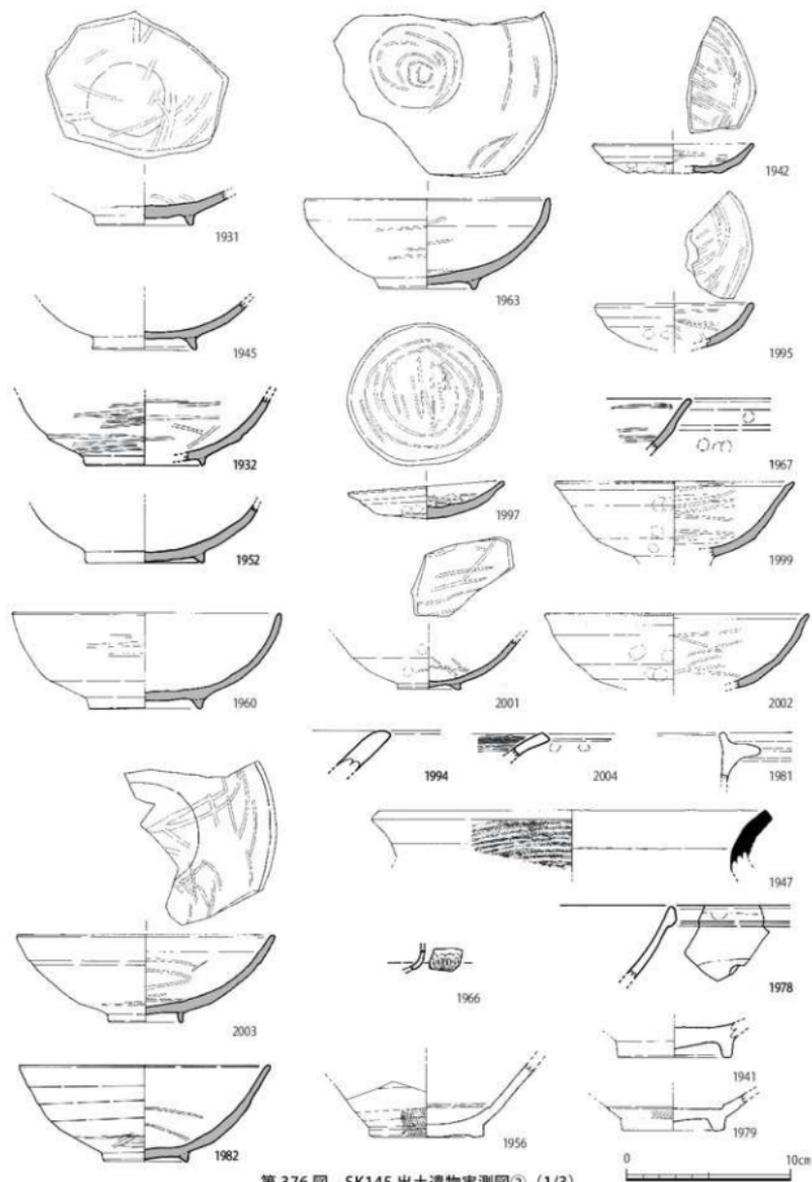
1994・2004は土師質土器鍋である。1994は口縁部が肥厚する。2004は内面に横方向の緻密なハケメ調整を施す。1981は土師質土器釜である。口縁部は垂直気味に立ち上がり、口縁部下に鈎が付く。1947は須恵質土器甕で、口縁部は緩やかに外反する。口縁部下に平行明きを施す。

1940・1941・1956・1958・1974・1978・1979は白磁碗である。1958・1978は下縁口縁をなし、外面体部下半は露胎である。1956は高台の削り込みが浅い。1979の内面は輪状に軸を掻き取る。1940・1974は端反口縁をなすものである。1940の内面は白堆線、沈圈線を施し、見込みの軸を輪状に掻き取る。1957は同安窠系青磁碗である。外面は柳描文、内面はジグザグ状の文様を施す。1966は青白磁合子の身である。外面体部は菊弁文を陽刻し、軸がかかる。内面は自然軸がかかる。

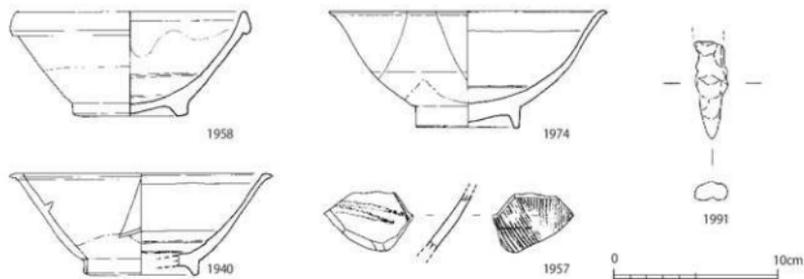
1991は鉄釘と考えられ、下端は尖り気味である。断面は扁平をなす。



第 375 図 SK145 出土遺物実測図① (1/3)



第 376 図 SK145 出土遺物実測図② (1/3)

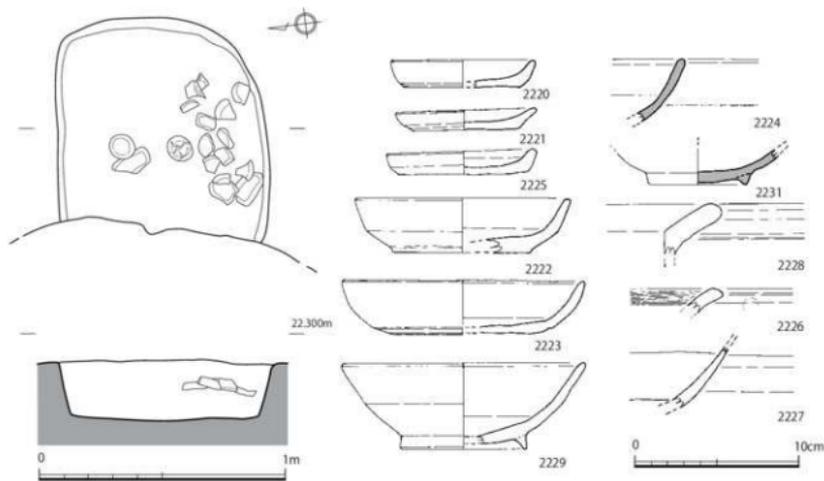


第 377 図 SK145 出土遺物実測図③ (1/3)

SK150 (第 378 図)

SK150 は調査区北西端に位置し、北に SK145 が隣接する。SK150 の北側は近世土坑の SK049・058 に切られている。土坑の主軸は東西方向で、平面は楕円形を呈する。規模は長軸 0.9 m、短軸 0.7 m、深さ 0.2 m を測る。遺構埋土は暗灰褐色粘質土である。土坑の壁面は垂直気味に立ち上がり、床面は平坦である。遺物は土坑南側を中心に出土し、土師質土器、瓦器、中国産白磁がみられる。口縁部を上にしたもの、うつ伏せにしたものがみられる。

2220・2221・2225 は土師質土器小皿である。2221 は底部の器壁が厚く、大きく外方へ開く。2225 は底部から垂直気味に立ち上がり、口縁部が肥厚する。2222・2223 は土師質土器杯である。2222 は体部下半で屈曲し底部へいたる。2223 は内彎気味に開く器形で、口縁部端部がすぼまる。2229 は土師質土器椀である。高台は外方に張りだし、底部は丸底を呈する。2224・2231 は瓦器椀で、軟質焼成をなすものである。2226・2228 は土師質土器鍋である。2228 は体部に比して口縁部が肥厚する。2226 は内面に緻密な横方向のハケメ調整を施す。2227 は白磁碗である。体部内面に白堆線、沈線を施す。

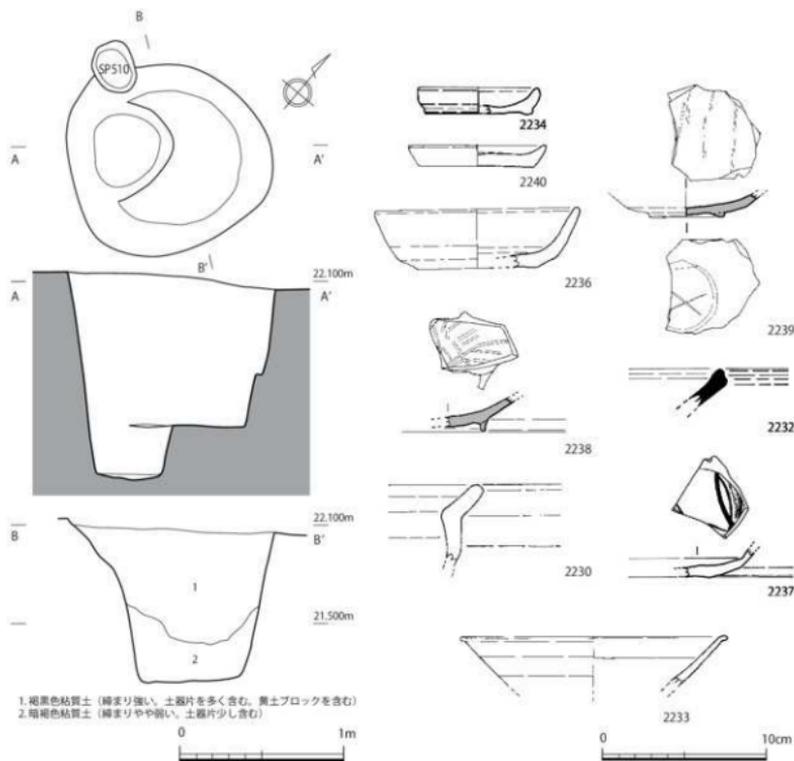


第 378 図 SK150 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

SK155 (第379図)

SK155は調査区北西端にあたりSK145・SP510と重複する。切り合い関係はSK145→SK155→SP510の順になる。土坑の平面は円形をなし、径1.1m、深さ1.1mを測る。土坑の北側に幅0.5～0.6mのテラスが付き、階段状を呈する。底面は階段状のテラスの東側にあり、幅0.4mである。SK155の土層は2層に分層ができる(第379図)。土層の堆積、土坑の形状から、素掘りの井戸と考えられる。遺物は第1層(褐色粘質土)を中心に多く出土している。遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・青磁が出土している。

2234・2240は土師質土器小皿である。2236は土師質土器杯である。体部下半で屈曲し底部へいたる。2238・2239は瓦器椀で、硬質焼成である。2238は断面方形の高台が付く。内面は不定方向のヘラミガキを施す。内面に重ね焼き痕が認められる。2239は和泉型瓦器で、高台は低い。内面底部は平行線のヘラミガキを施す。外面底部に「×」線刻がみられる。2232は東播系須恵器の鉢である。口縁部端部を摘み上げ段をつくる。2230は土師質土器鍋である。口縁部がくの字状に外反する。外面に煤が付着する。2233は白磁碗で端反口縁をなす。体部内面に白堆線を施す。2237は同安窯系青磁皿で櫛描文を施す。外面底部は露胎である。



第379図 SK155 遺構・出土遺物実測図 (1/30・1/3)

へ、井戸跡

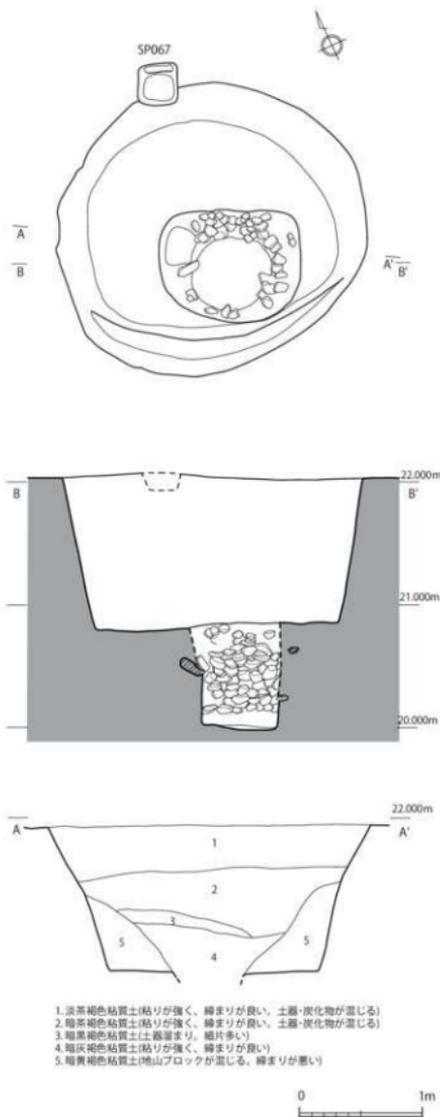
中世井戸は2基検出している。SE015は石組み、SE080は素掘りを呈するものである。

SE015 (第380～382図)

SE015は調査区北端にあたり、東側にSB005が位置している。井戸の平面は円形を呈し、径2.6m、深さ2mを測る。検出面から1.2mの深さで井戸側を検出した。井戸側は深さ0.7mで、壁面は川原石を雑に組んでいる。井戸断面形態は検出面から底面に向かってすぼまっていることが分かる。SE015の土層は5層に分層ができる(第380図)。第5層(暗黄褐色粘質土)は石組みの裏込め土、第4層は井戸側にあたる。第1～第3層は井戸廃棄時に埋め戻したものであるが、とくに第3層(暗黒褐色粘質土)では、土師質土器細片が集中する土器溜まり層がみられた。土器溜まり層は井戸の東側中央で検出ができ、幅0.8mの範囲でみられる。何らかの祭祀が行われたのであろう。遺物は、土師質土器、瓦器、須恵質土器、渾美焼、中国産白磁・青磁、土製品が出土している。各層に分けて報告する。

第1層(淡茶褐色粘質土) 1796は瓦器小皿で、軟質焼成である。底部から内彎気味に開き、口縁部端部はすぼまる。外面底部は糸切り離しのちナデで、板状圧痕が残る。2997は渾美焼裏の胴部である。胴部中位が張る。1783は土師質土器鍋で、口縁部が肥厚する。1803・1807・1814は白磁碗である。1803は玉縁、1807は端反口縁をなす。1814の内面体部は沈凹線がめぐる。

第2層(暗茶褐色粘質土) 1770・1774・1778・1782は土師質土器小皿である。1774は底部の器壁が厚く口縁部は短く立ち上がる。1770・1778は底部から斜上方に開く。1790・1811は土師質土器で、柱状高台をなし器壁が厚いものである。外面底部の下端は外方へ張り出す。上部が欠損しているため、器種は不明である。1786は土師質土器坏である。1794・1797・1799は瓦器碗である。1794 平高台を呈する底部である。糸切り離しのちナデで、板状圧痕が残る。硬質焼成である。1787・1810は白磁碗である。1787は断面方形の高台を有する。1810は端反口縁で、

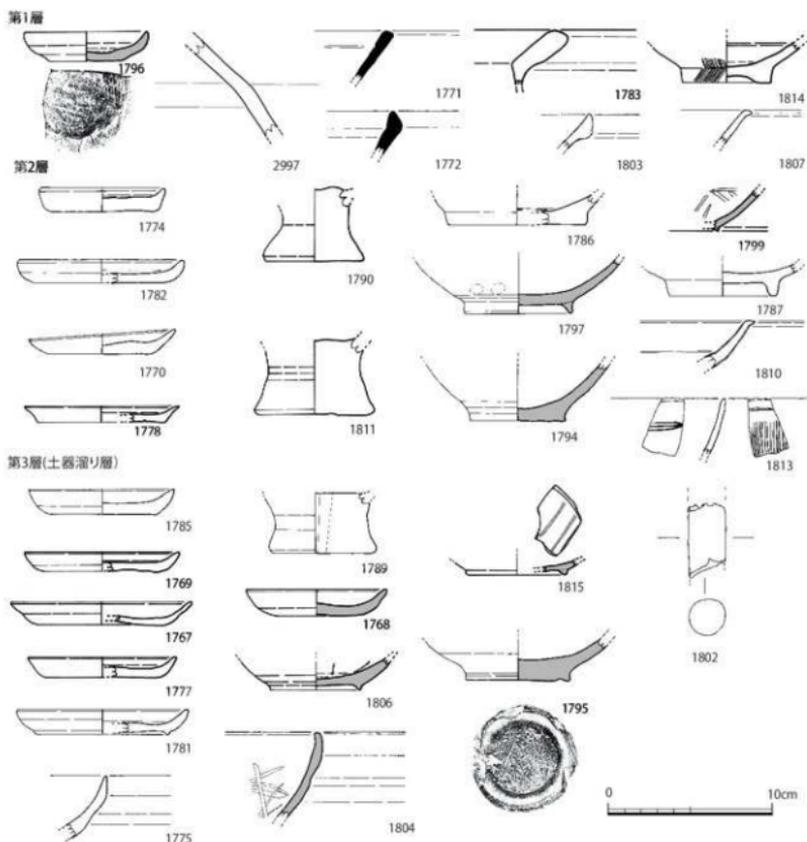


1. 淡茶褐色粘質土(粘りが強く、締まりが良い。土器・炭化物が混じる)
2. 暗茶褐色粘質土(粘りが強く、締まりが良い。土器・炭化物が混じる)
3. 暗茶褐色粘質土(土器溜まり。細片多い)
4. 暗灰褐色粘質土(粘りが強く、締まりが良い)
5. 暗黄褐色粘質土(地山ブロックが混じる。締まりが悪い)

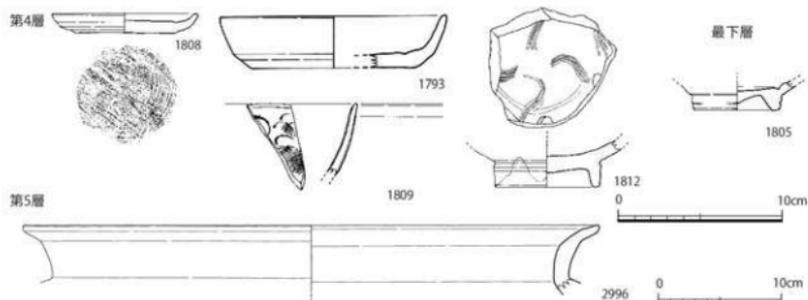
第380図 SE015遺構実測図(1/40)

体部内面に白堆線を施す。1813は同安窠系青磁碗で、外面は柳描文を施す。

第3層(暗黒褐色粘質土) 土器溜まり層である。土師質土器小皿(1767・1769・1777・1781・1785)は底部から斜上方に開く器形である。1785は底部の器壁が厚い。1775は土師質土器環で、口縁部端部がすぼまる。1789は土師質土器で、1790・1811と同じく、柱状高台を呈するが、穿孔を上部から底部にかけて施している。燭台として利用されたものと考えられる。底部は糸切り離しのちナデである。1768・1804・1806は瓦器である。1768は小皿で、斜上方に開く器形を有する。底部は上げ底気味である。外面底部は糸切り離しのちナデである。1804・1806は椀である。1806は底部形態から東国東型瓦器椀と考えられる。1815は和泉型瓦器椀である。内面底部は平行線のヘラミガキを施す。1795は瓦器椀の底部か。平底を呈するもので、底部外端はナデによって窪む。外面底部はナデ調整である。1802は土師質土器であるが、器種は不明である。上・下端は欠損し、断面は円形を呈する。



第381図 SE015出土遺物実測図①(1/3)



第382図 SE015 出土遺物実測図② (1/3・1/4)

第4層(暗灰褐色粘質土) 1808は土師質土器小皿で、外面底部は糸切り離し、板状圧痕が残る。1793は土師質土器環である。1812は白磁碗で見込に柳描文を施す。1809は龍泉窯系青磁碗で内面に花文を施す。

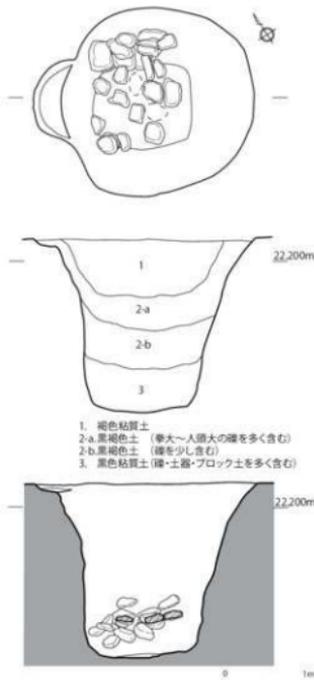
第5層(暗黄褐色粘質土) 2996は瀧美焼である。頸部は垂直気味に立ち上がり口縁部が短く外反する。口縁部内部側に段を有する。内外面とも施軸は刷毛塗りで施され、暗黒黒褐色を呈する。素地は黄褐色を呈する。復元口径46.8cmを測る。

最下層 第4層の下層、井戸側底面にあたる。1805は同安窯系青磁碗で、外面体部下半、底部は露胎である。

SE080 (第383～387図)

SE080は調査区南東に位置し、周辺は遺構密度が低い箇所にあたる。平面は円形をなすが、西側は半円形の張り出しがみられる。井戸は素掘りで、径2.8m、深さ2.2mを測る。井戸底面は平坦で幅1.2mで、底面から垂直気味に立ち上がる。井戸の埋土はおおむね3層に分層ができる(第383図)。そのうち第2層は礫の含む量により、土層が細分できる。第1層・第3層で土器が多く出土している。とくに第3層(黒色粘質土)の下部では径0.2～0.3cmの礫、土器がまとまって出土した。井戸の機能停止直後に土器・石類を廃棄したのであろう。この底面から出土した黒軸陶器碗が、SK125の資料と遺構間接合をしている。各遺構の時期を考えるうえで参考になる。遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器、常滑焼、中国産白磁・青磁が出土している。各層に分けて報告する。

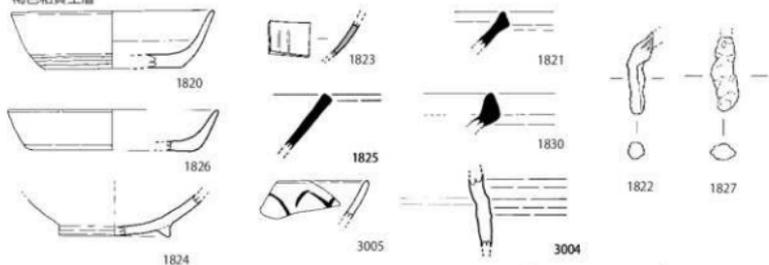
第1層(褐色粘質土層) 1820・1826は土師質土器環で、底部から斜上方に開く。1824は土師質土器椀である。底部は丸底で、高台は外方へ張り出す。色調は淡黄褐色をおびる。瓦器の未製品か。1823は和泉型瓦器碗で、体部内面は平行線のヘラミガキを施す。1821・1825・1830は東播系須恵器の鉢で、口縁部にバリエーションがみられる。1821・1830は玉縁、1825は断面方形をなす。3005は龍泉窯系青磁碗である。外面に幅広の蓮弁文を施す。3004は褐軸陶器の壺か。色調は暗赤褐色である。1822・1827は鉄釘で、上端が欠損する。



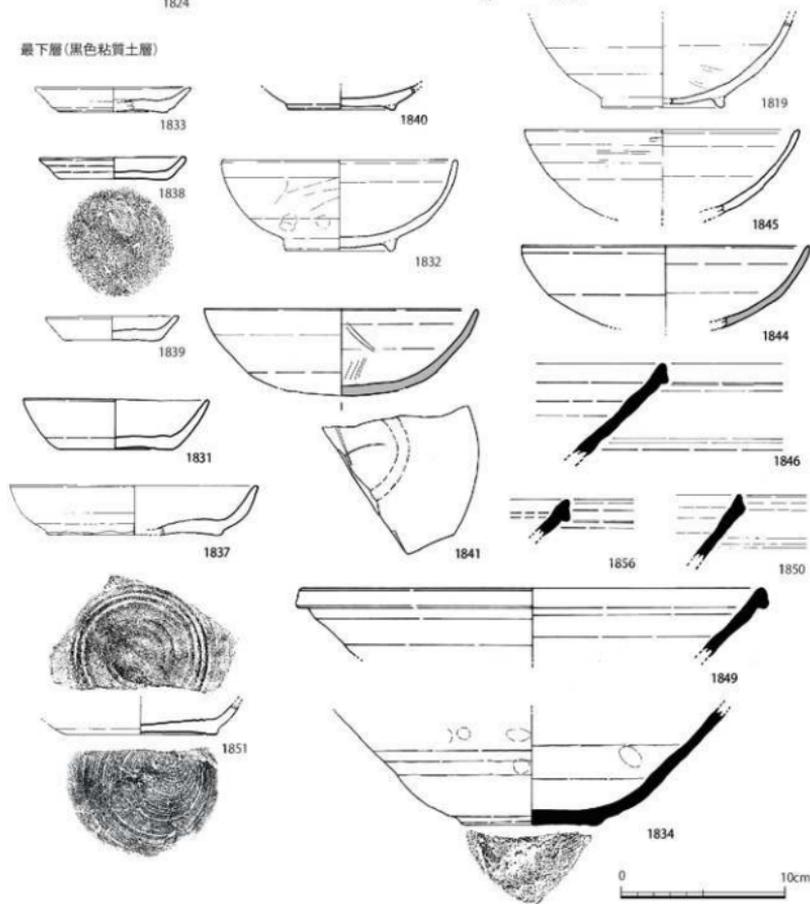
1. 褐色粘質土
- 2-a. 黄褐色土 (礫～人頭大の礫を多く含む)
- 2-b. 黄褐色土 (礫を少し含む)
3. 黒色粘質土(礫・土器・ブロック土を多く含む)

第383図 SE080 遺構実測図 (1/60)

褐色粘質土層



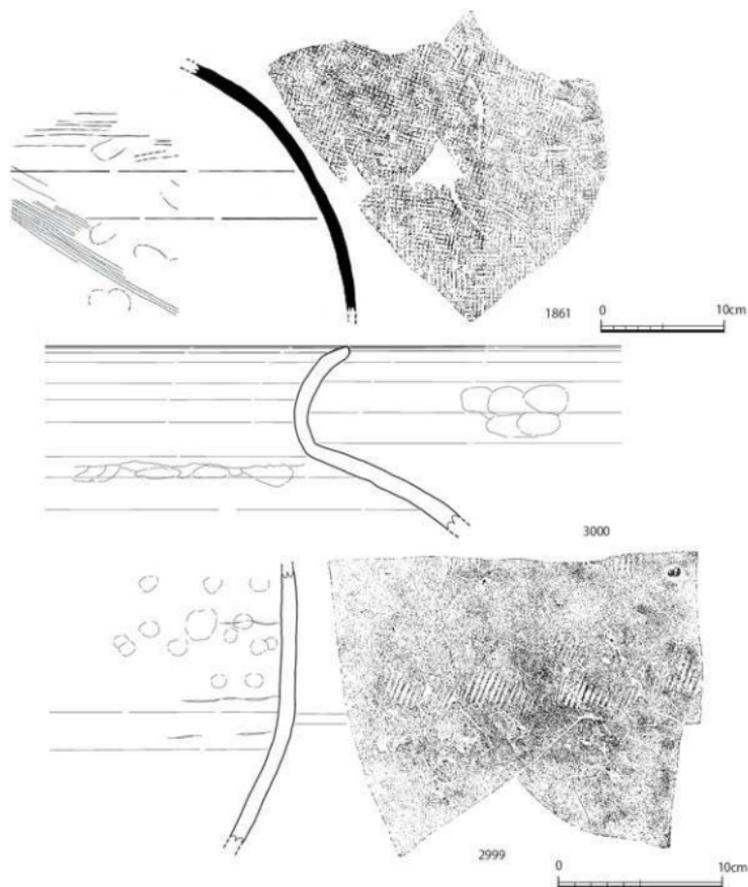
最下層(黒色粘質土層)



第384図 SE080 出土遺物実測図①(1/3)

第3層（黒色粘質土） 最下層から出土した遺物で、土器・陶磁器がまとめてみられる。1833・1838・1839は土師質土器小皿である。いずれも底部から斜上方に開く。1831・1837・1851は土師質土器杯である。1837・1851の外面底部は糸切り離しの未調整痕が残る。1851の内面底部はロクロ痕が明瞭に残る。1819・1832・1840・1845は土師質土器碗である。1819は高台が低く底部が丸底である。内面はヘラミガキが確認できる。色調は黄橙白色を呈する。瓦器の未製品か。1832は底部から内彎気味に開く器形である。外面体部はユビオサエを施す。色調は橙褐色をおびる。瓦器の未製品か。1845も内彎気味に開く器形である。外面にヘラミガキが確認できる。色調は暗灰褐色～橙褐色を呈する。瓦器の未製品か。

1841・1844は瓦器碗で、内彎気味に開く器形である。いずれも軟質焼成である。1841は高台が欠損している。外面底部に「×」の線刻を施す。

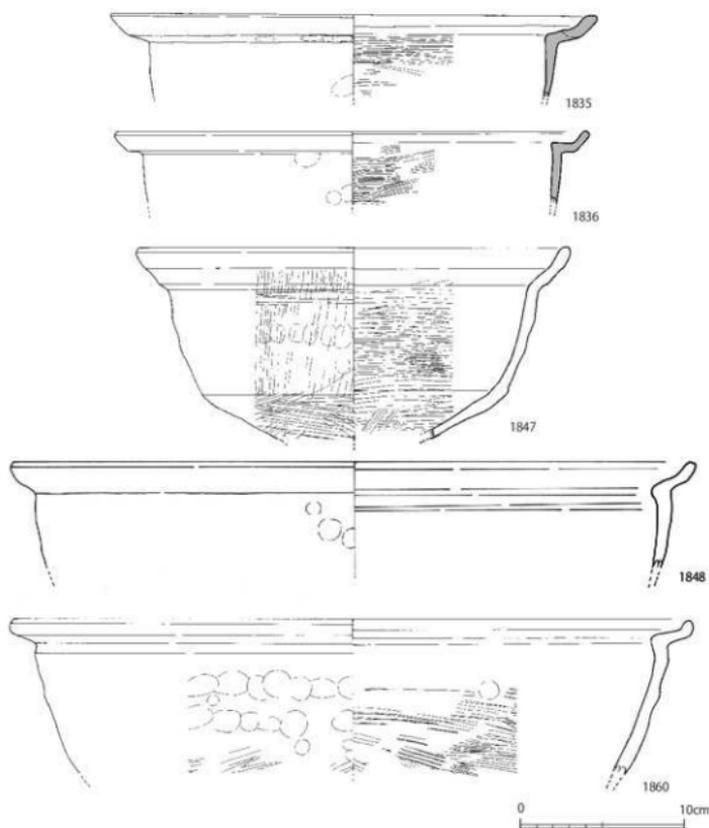


第385図 SE080 出土遺物実測図② (1/3・1/4)

1834・1846・1849・1850・1856は東播系須恵器の鉢である。1846・1849・1850・1856は口縁部下端を外方に揃みだしている。1834の外底部は糸切り離しが残る。1861は東播系須恵器の裏と考えられる。胴部はまるい。外面格子目叩き、内面はへら状工具ナデである。色調は暗灰褐色を呈する。

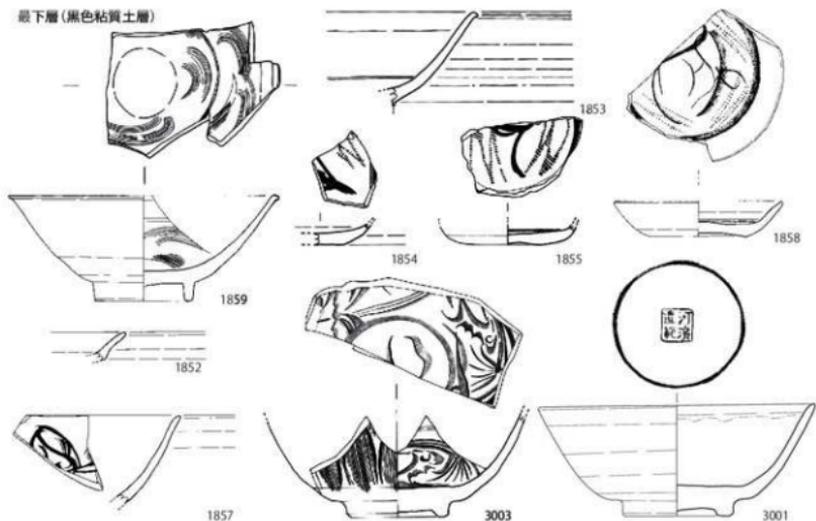
2999・3000は常滑焼甕である。3000は頸部が緩やかに外傾し、口縁部外面端部は面取り気味である。胴部はまるみをおびる。口縁部・頸部はヨコナデ、胴部がナデ・ユビオサエ調整である。2999は胴部片である。胴部上半は直線的に伸び、下半は内傾する。外面は押印文の叩きを施す。内面はユビオサエ、ナデ調整で、粘土接合痕が認められる。いずれも色調は暗灰褐色を呈する。

1835・1836は瓦器質の鍋で、山城系と考えられる。いずれも口縁部はL字に屈曲し内面に受部をつくる。口縁部端部は外方へ開く。体部は直線的に伸びる。調整は外面がユビオサエ、内面は横方向のハケメ調整を施す。1836の外底部に煤が付着する。復元口径は1835が29.4cm、1836が28.8cmを測る。色調は暗灰褐色を呈し、軟質焼成である。1847は土師質土器鍋で、瀬戸内系と考えられるものである。口縁部は斜上方に外反し比較的长度い。体部は直線的に伸びるが、下半で屈曲する。外面の調整は縦、不定方向のハケメ、ユビオサエである。内



第386図 SE080出土遺物実測図③(1/3)

最下層(黒色粘質土層)



面体部は横方向のハケメ調整を施す。外面体部に煤が付着する。色調は明褐色を呈する。復元口径26cmを測る。1848・1860は土師質土器器で、色調は橙褐色を呈するものである。1860は外面体部は顕著なユビオサエ、内面体部は雑なハケメ調整を施す。復元口径は1848が41.4cm、1860が41.1cmを測る。器形は1835・1836と類似するが、体部がまるみをもつ、内面の屈曲が張り出す、のほか、口縁部端部がまるみをもつ(1848)、口縁部端部を上方に擴みだす(1860)などの相違がみられる。以上のことから、1848・1860は山城系の模倣と考えられる。胎土に結晶片岩を含むことから在地で生産された可能性がある。今後の資料増加をまちたい。

1853・1859は白磁碗で、端反口縁をなすものである。1853は内面に白堆線、沈圈線がめぐる。1859は白堆線、柳描文を施す。いずれも外面体部下半・底部は露胎である。1854・1855・1858は同安窯系青磁皿で、見込みに幾何学文を施す。外面底部は露胎である。1852・1857・3001～3003は龍泉窯系青磁である。そのうち1852の他は碗である。3001・3002は完



第387圖 SE080 出土遺物実測圖④ (1/3)

形品である。1852は平底皿か。口縁部下に屈曲がみられる。全面施軸である。3001は見込に「河濱遺範」の銘がみられる。畳付・高台裏は露胎である。1857の内面は片切彫りによる草花文を施す。外面は無文である。3002は内面に片切彫りによる蓮華文がみられる。花卉を3箇所施している。外面は無文、畳付・高台裏は露胎である。3003の外面は蓮華文、その上に柳描文を施す。内面は蕉葉文を施している。畳付・高台裏は露胎である。

ト. 包含層

第9地点で検出された古代・中世包含層について触れる。古代・中世包含層は、SX130・165・170の3箇所で確認できた(第388図)。以下、各包含層の詳細についてみていく。

SX130(第389図)

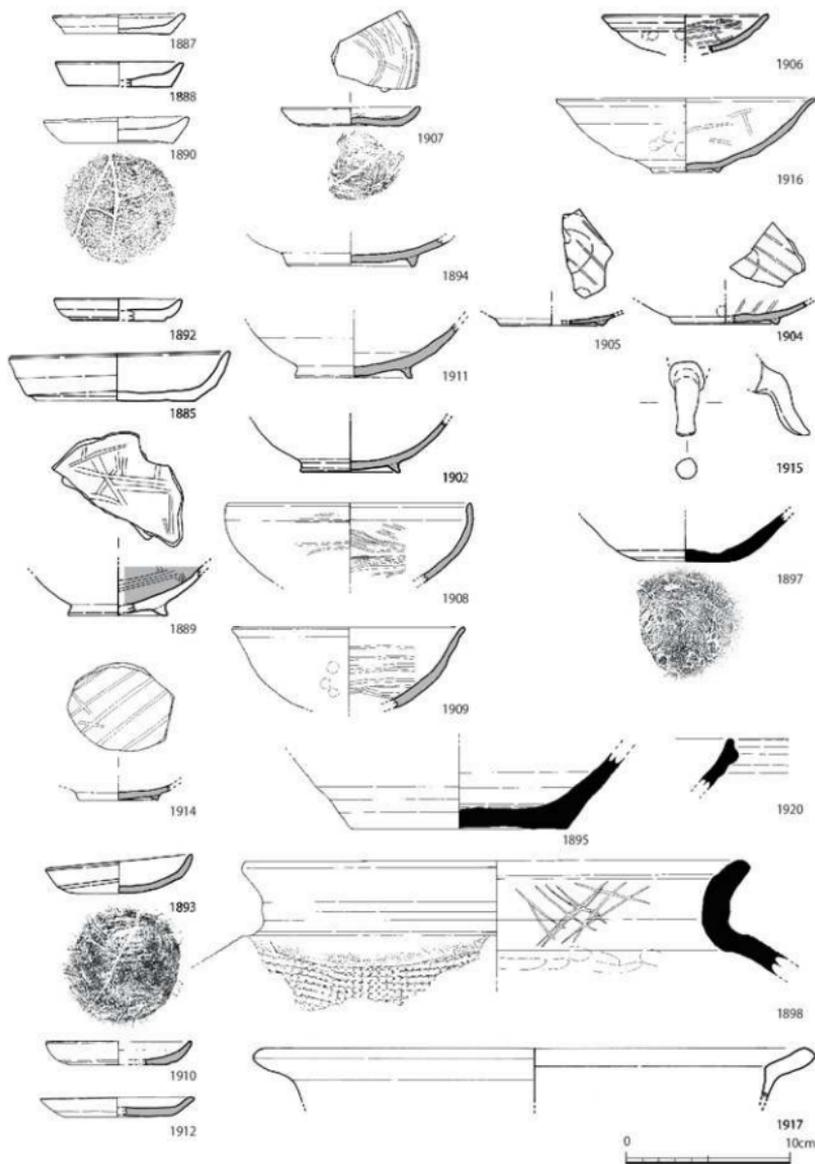
調査区北西に位置する中世包含層である。長軸約10m、短軸約6mの範囲で遺物が出土している。包含層下でSK140・145・150・155の中世土坑を検出している。SX130の遺物は土師質土器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、中国産白磁・青磁が出土している。

1887・1888・1890・1892は土師質土器小皿で、底部切り離しは系切りである。底部から斜上方に開く器形である。1888・1890は底部の器壁が厚い。1889・1914は黒色土器A類椀である。1889の高台は外方へ開く。内面は不定方向のヘラミガキを施す。古代の所産か。1914は断面三角形の低い高台が付く。内面底部は平行線のヘラミガキが認められる。外面底部はナデ調整である。

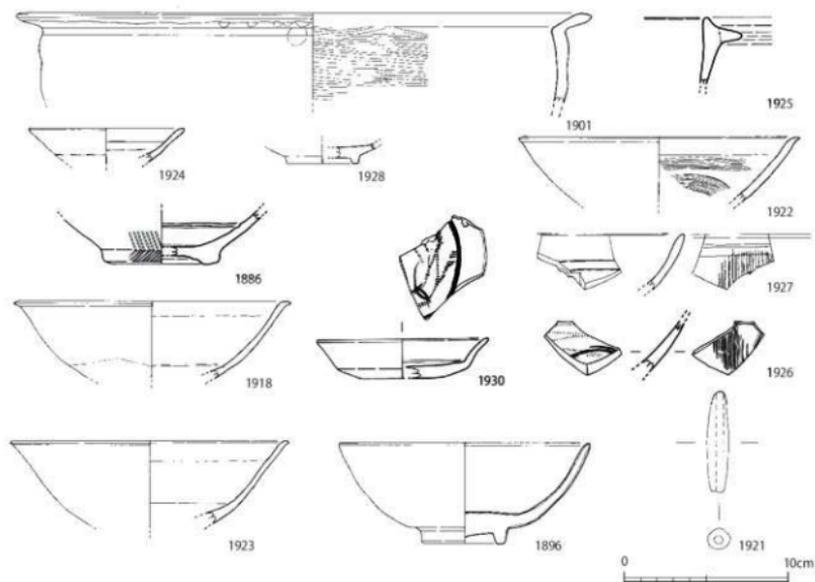
1893・1907・1910・1912は瓦器小皿で、軟質焼成である。1893は完形品である。口縁部は外傾気味に立ち上がり、底部が丸底を呈する。外面底部は系切り離し、板状圧痕が残る。1907・1912は底部から斜上方に開き、器高が1.1cmで低い。1907の内面は同心円のヘラミガキが残る。1894・1902・1908・1909・1911は瓦器椀である。1894・1902は軟質焼成で、その他は硬質である。1894・1902・1911とも底部が丸底である。1908は口縁部が内傾気味に立ち上がる。1909は外方に開く器形で、外面体部中位が張り気味になる。外面体部はユビオサエが残る。1904～1906・1916は和泉型瓦器である。1906は小皿で、口縁部下で屈曲し丸底気味になる。外面体部はユビオサエ調整である。内面は、体部が同心円、底部が平行線のヘラミガキを施す。



第388図 包含層位置図(1/400)



第 389 図 SX130 出土遺物実測図① (1/3)



第390図 SX130出土遺物実測図②(1/3)

1904・1905・1916は椀で、断面三角形の低い高台が付く。1904・1905とも内面底部は平行線のヘラミガキを施している。1916は口縁部が短く外反し、底径に比して体部が大きく開くものである。外面体部下半はエビオサエがみられる。1915は瓦器で軟質焼成をおびるものである。三足付きのミニチュア羽釜の脚か。色調は暗灰褐色を呈する。胎土は石英、長石を含む。

1895は産地不明の須恵質土器の鉢で、底部の器壁が厚い。外面底部はナデ調整である。1897・1920は東播系須恵器の鉢である。1897は糸切り難しのちナデ調整である。1920は口縁部下ほどに段がつくものである。1898は須恵質土器の甕で、亀山焼と考えられる。復元口径30.4cmを測る。口縁部は短く外反し、頸部は垂直気味に立ち上がる。外面体部は緻密な格子目叩きを施す。内面は「×」を重ねた線刻がみられる。色調は暗灰褐色を呈する。

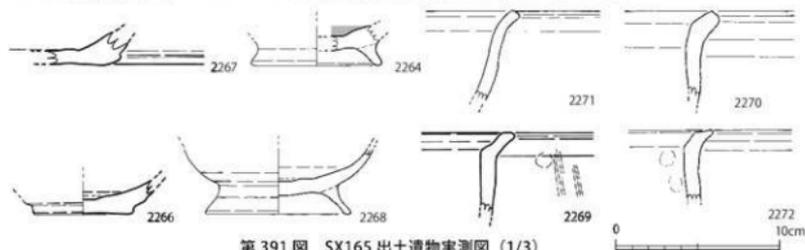
1901・1917は土師質土器鍋である。1917は体部に比して口縁部が肥厚するものである。1901は口縁部が強く外折し、体部は直線的に伸びるものである。口縁部の外面は面取りを施す。内面体部はやや雑な横方向のハケメ調整を施す。1925は土師質土器釜で、口縁部下に鐙が付く。口縁部内側は面取りを施す。

1918・1922～1924・1928は白磁である。1924・1928は皿で、その他は碗である。1924は体部が直線的に伸びる。内面体部下半は露胎である。1928は断面方形の高台が付く。見込は輪状に軸を掻き取る。1918・1922・1923は端反口縁をなすものである。1918の内面は白堆線、沈圈線を、1923は白堆線がめぐる。1922の内面は白堆線、櫛描文を施している。1926・1927・1930は同安窯系青磁である。1930は皿で、その他は碗である。1930は口縁部が外傾気味に開く。見込は幾何学文を施す。外面底部は露胎である。1926・1927は外面体部に櫛描文、内面に幾何学文を施す。1896は龍泉窯系青磁碗で、内外面無文である。外面体部下半が張る。畳付・高台裏は露胎である。暗オリーブ色をおびる。貫入が著しい。1921は土師質土器の管状土鉢である。

SX165 (第391図)

調査区北西に位置する古代包含層である。ほぼSX130と同じ範囲であり、層位的にSX130下の遺構面直下で検出したものである。なおSX165直下でピットが検出されている。SX165の遺物は、土師器、黒色土器が出土している。

2266・2267は土師器環で、回転ヘラ切り離しのちナデである。2266の底部は円盤状を呈する。2264は黒色土器A類椀である。足高台で外方へ張る。外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。2268は土師器椀で、2264と同様な器形である。外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。2271は鉢か。2269・2270・2272は土師器甕である。2269・2272は企救型甕で、口縁部上端は平坦に仕上げる。

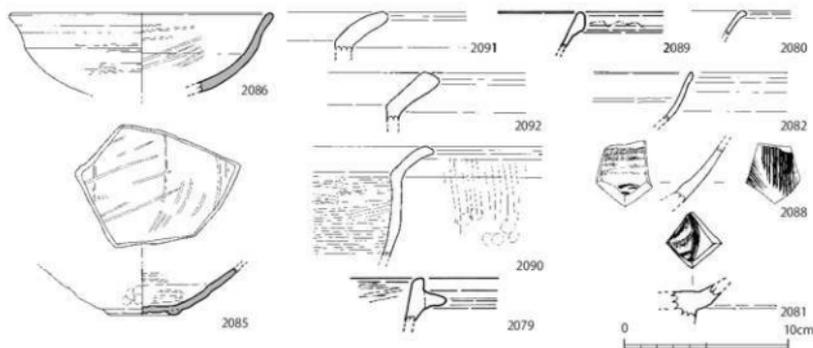


第391図 SX165出土遺物実測図(1/3)

SX170 (第392図)

SX170は調査区南端に位置する中世包含層で、長軸約12m、短軸約6mの範囲で遺物が出土している。包含層下でSK110・125のほか、ピットを検出している。遺物は土師質土器、瓦器、中国産白磁・青磁が出土している。

2085・2086は瓦器椀である。2086は口縁部が肥厚気味である。外面体部中位で屈曲する。内外面ともヘラミガキが認められる。2085は和泉型瓦器椀である。断面三角形の低い高台が付く。底径に比して体部は大きく開く。内面は同心円、平行線のヘラミガキを施す。2090～2092は土師質土器鍋である。2090は口縁部が比較的長く、くの字状に外反する。口縁部の外面端部は面取りを施す。外面は口縁部下ほどから縦方向のハケメ調整を施す。内面体部はやや緻密な横方向のハケメ調整を施す。外面体部下に煤が付着している。2079は土師質土器釜で、口縁部下に鈎が付く。口縁部内側は面取りを施す。2080・2089は白磁碗である。2089は玉縁、2080は端反口縁をなす。2082・2088は同安窯系青磁碗である。2081は龍泉窯系青磁碗である。見込は片切彫りの蓮華文を施す。軸調は暗オリーブ色を呈する。貫入が認められる。



第392図 SX170出土遺物実測図(1/3)

(2) 近世・近代

第9地点では中世遺構のほか、近世・近代遺構が多数検出されている。ここでは近世・近代遺構について概略的に触れる。近世・近代遺構は調査区中央から北西部分と、調査区南西端の部分で検出している(第393図)。遺構種別の内訳は、土坑39基、喪埋設土坑6基、井戸6基、溝状遺構4条、道路状遺構1条のほか、ピット数基である。各遺構からは、17～19世紀後半頃の遺物が出土している。とくに18・19世紀代の遺構が集中しているようである。地元の方の聞き取りでは、現在、水田・山林が広がる字野邊田・栗林付近は明治期まで居住域であったという。検出した遺構から、調査区付近一帯は近世・近代のあいだ連続と居住空間として営まれたとみられる。

SD005・SF010直上の現況は畦道で、位置的に踏襲されている。SD005・061・090・095、SF010は、屋敷



第393図 近世・近代遺構配置図(1/300)

表2 近世・近代遺構観察表①

遺構番号	性格	規模(m)	時期	出土遺物	備考
SK001	埋裏遺構	0.8×0.8×0.4	時期不明	土師質土器甕	甕上部欠損
SK002	埋裏遺構	1.2×1.4×0.4	18世紀前半?	土師質土器甕、肥前系磁器碗 (陶胎染付碗)	甕上部欠損
SK003	埋裏遺構	10×1.0×0.5	時期不明	瓦質土器甕	SK003>SK111 (中世) 甕上部欠損
SK004	埋裏遺構	1.0×0.8×0.2	時期不明	土師質土器甕、白磁碗 (12世紀)	甕上部欠損
SD005	溝状遺構	29×0.6×0.2	19世紀前半	肥前系磁器碗(端反) 肥前系陶器播鉢、土師質土器甕 瓦質土器蓋、平瓦、砥石	SD061>SD005
SK006	埋裏遺構	1.8×0.8×0.3	時期不明	土師質土器甕	甕上部欠損
SE007	井戸	1.7×1.6×1.2	時期不明	瓦、石臼	石組み井戸
SE008	井戸	1.8×1.6×1.5	19世紀後半	肥前系磁器碗 (型紙刷り、広東) 肥前系陶器播鉢、瓦質土器鉢・火入	SE008>SD061 (近世) 石組み井戸
SK009	土坑	1.7×1.4×0.5	19世紀後半	肥前系磁器碗 (型紙刷り)・仏飯器 瓦質土器火入、鉄釘	
SF010	道路伏道構	12×1.2×0.2	19世紀前半	肥前系磁器碗 (広東、青磁) 肥前系陶器播鉢、土師質土器甕 備前焼播鉢 (15世紀) 黒色土器A類坏 (古代)	SD005と並ぶ
SE011	井戸	1.8×1.6×0.7	18世紀末	肥前系磁器碗 (端反、広東) 肥前系陶器壺・播鉢、平瓦	木組み井戸 壁土多い
SE012	井戸	1.6×1.2×0.8	時期不明	肥前系磁器碗、瓦質土器火入、壁土	SE026 (近世) > SE012 木組み井戸
SK013	土坑	1.4×1.3×0.5	18世紀中頃?	肥前系磁器皿、平瓦	
SK017	土坑	3.0×1.6×0.1	18世紀後半	肥前系磁器碗	
SK018	土坑	0.8×0.8×0.4	時期不明	平瓦	
SK019	土坑	5.2×1.4×0.4	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗、肥前系陶器鉢	大型土坑
SK020	土坑	1.3×1.0×0.5	時期不明	遺物なし	
SK024	土坑	1.6×1.6×0.5	17世紀後半～ 18世紀前半	肥前系磁器碗、白磁碗 (12世紀)	SK024>SK065 (中世)
SK025	土坑	1.6×1.4×0.1	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗 (端反) 白磁碗 (12世紀)、平瓦	
SE026	井戸	1.8×1.6×0.8	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗 (端反)・猪口 瓦質土器壺、土師質土器甕、壁土	SE026 (近世) > SE012 木組み井戸
SP027	柱穴	0.4×0.4×0.1	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗 (陶胎染付) 肥前系陶器鉢	
SK028	土坑	2.2×1.6×0.3	17世紀後半～ 18世紀前半	肥前系磁器碗 (陶胎染付) 京焼風陶器碗	大型土坑
SK029	土坑	0.9×0.8×0.3	18世紀後半?	肥前系磁器碗、土師質土器甕	
SK031	土坑	4.0×1.2×0.5	18世紀前半～ 後半	肥前系磁器碗・皿、肥前系陶器鉢	大型土坑
SK032	土坑	2.6×1.4×0.3	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗 (端反・陶胎染付)	SK032>SK072 (近世) 大型土坑
SK033	土坑	1.0×0.9×0.3	19世紀前半	肥前系磁器碗 (端反)、平瓦	
SK034	土坑	1.4×0.9×0.1	18世紀前半?	肥前系陶器鉢	
SK035	土坑	1.5×1.4×0.3	18世紀後半	肥前系磁器碗 (青磁)、 瓦質土器火鉢・羽釜力、土師質土器甕 同安煮系青磁碗 (12世紀)	
SK036	土坑	2.8×1.7×0.1	19世紀前半	肥前系磁器碗 (端反)、瓦質土器火鉢	大型土坑

表3 近世・近代遺構観察表②

遺構番号	性格	規模(m)	時期	出土遺物	備考
SK037	土坑	2.4×2.0×0.3	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗(青磁染付)	大型土坑
SK038	土坑	3.6×0.6×0.1	時期不明	肥前系磁器碗	大型土坑
SK039	土坑	1.5×1.4×0.2	19世紀前半	肥前系磁器碗(端反)	
SE043	井戸	2.0×2.0×0.8	18世紀前～中頃	肥前系陶器火入、土師質土器甕	素掘り井戸
SK044	土坑	1.1×1.0×0.2	時期不明	肥前系磁器碗	
SK046	土坑	0.8×0.4×0.2	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗、肥前系陶器挿鉢	SK046>SK124 (近世) 壁土・炭化物多い
SK048	土坑	1.1×0.6×0.1	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗	土壌腐?骨片・木片多い
SK049	土坑	1.5×0.5×0.1	19世紀前半	肥前系磁器碗・徳利?、肥前系陶器鉢	SK049>SK058 (近世) 壁土・炭化物多い
SK050	土坑	1.4×0.6×0.4	19世紀前半	肥前系磁器碗、瓦質土器鉢	碗1点の高台裏に焼継文字あり 『坂ノ□□』
SE051	井戸	2.2×2.0×0.6	19世紀前半	肥前系磁器碗(端反)	石組み井戸
SK052	土坑	3.0×1.5×0.5	19世紀前半	肥前系磁器碗、肥前系陶器挿鉢 関西系陶器蓋、瓦質土器甕、壁土	大型土坑
SK053	土坑	3.0×1.6×0.2	19世紀前半	肥前系磁器碗(端反)、瓦質土器甕?	大型土坑
SK054	土坑	1.1×0.6×0.1	18世紀後半? ～19世紀前半?	肥前系磁器碗、土師質土器甕 青銅製かんざし	
SK056	土坑	2.5×0.4×0.1	時期不明	壁土	
SK057	土坑	1.2×1.2×0.7	時期不明	遺物なし	井戸?桶組み遺構
SK058	土坑	1.3×1.0×0.2	時期不明	壁土	SK049>SK058 炭化物多い
SK059	土坑	1.4×1.2×0.4	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗、碗	礎多く含む 完形礎出土
SD061	溝状遺構	26×0.8×0.3	時期不明	土師質土器甕	SE008>SD061>SD005
SK063	土坑	1.1×1.1×0.4	時期不明	平瓦	
SK068	土坑	0.9×0.7×0.1	18世紀前半	肥前系陶器碗	
SK069	土坑	0.8×0.6×0.3	19世紀後半	肥前系磁器碗(型紙刷り)	
SK072	埋裏遺構	1.0×0.9×0.3	18世紀後半～ 19世紀前半	土師質土器甕	SK032>SK072 甕上部欠損、底部欠く
SK079	土坑	0.8×0.6×0.1	18世紀後半～ 19世紀前半	肥前系磁器碗	
SK083	土坑	1.0×1.0×0.4	時期不明	土師質土器甕	SK083・084>SD070 (中世) 埋裏遺構?
SK084	土坑	0.4×0.4×0.3	時期不明	土師質土器甕	SK083・084>SD071 (中世) 埋裏遺構?
SK087	埋裏遺構	1.0×0.8×0.5	時期不明	土師質土器甕	甕上部欠損
SD090	溝状遺構	16×1.2×0.3	17世紀後半～ 18世紀前半	肥前系磁器碗、肥前系陶器鉢 瓦質土器燈鉢、備前焼挿鉢(15世紀) 瓦質土器火鉢 (16世紀?、瓦頭縁手飛雲文スタンプあり)	SD095 (近世) >SD090
SD095	溝状遺構	12×1.0×0.6	18世紀前半	肥前系磁器碗(陶胎染付) 肥前系陶器壺・瓶・鉢、土師質土器甕	SD095>SD090
SK124	土坑	1.0×1.0×0.4	19世紀前半	肥前系磁器碗(陶胎染付) 関西系陶器土瓶・鍋	SK046>SK124
SK131	土坑	1.5×0.7×0.4	18世紀前半	肥前系磁器碗	
SP326	柱穴	0.2×0.2×0.2	時期不明	肥前系磁器瓶?	



SD005・SF010検出状況



SK059検出状況



SK048検出状況



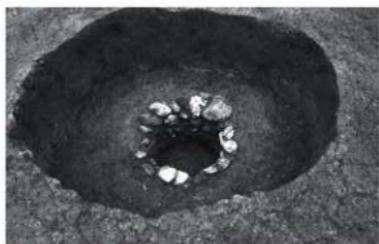
SK003検出状況



SK087検出状況



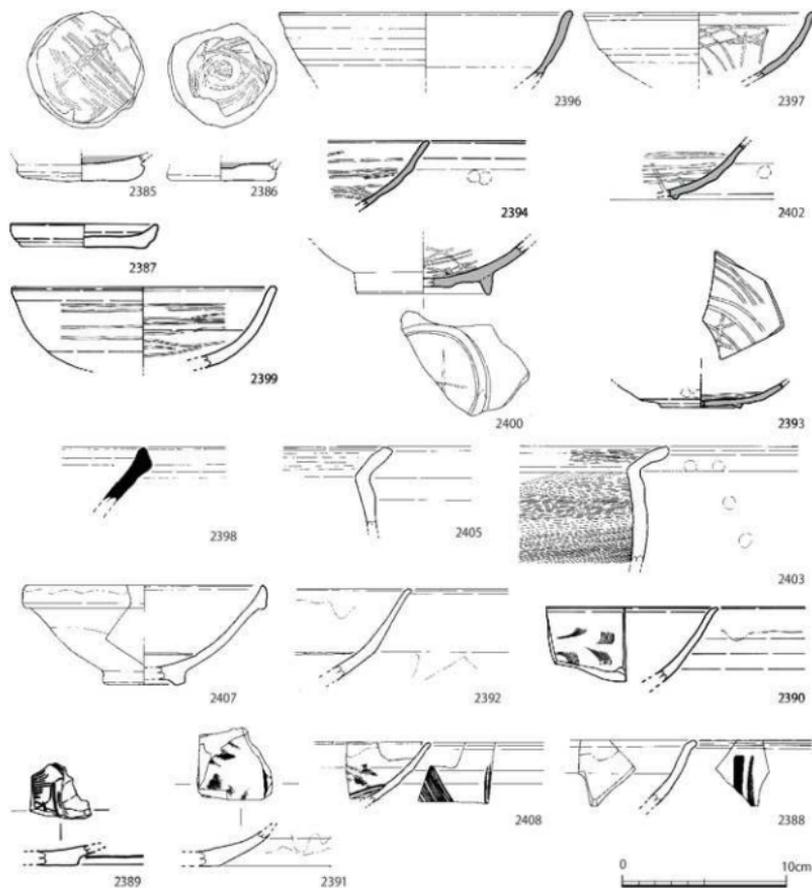
SK057検出状況



SE051検出状況



作業風景



第 394 図 表土剥ぎ・遺構検出出土遺物実測図 (1/3)

区画に伴うものと考えられる。調査区北西では径2～4mを測る大型土坑が検出されている。これらの土坑は遺物出土が僅少であり、床面・壁面とも窪みがみられる。用途を明らかにしえないが、土を採取した土坑であろうか。各遺構の詳細については表2・3を参照されたい。

子、その他の出土遺物 (第 394 図)

第 394 図は表土剥ぎ、遺構検出時に出土した古代・中世遺物である。

2385・2386 は黒色土器 A 類の坏で、底部は円盤状を呈する。外面底部は回転ヘラ切り離しのちなデである。内面底部は不定方向のヘラミガキを施す。2387 は土師質土器小皿である。2399 は土師質土器椀である。浅い椀形態で口縁部端部はまるい。内外面とも横方向のヘラミガキを施す。色調は明褐色を呈する。2396・2400

は瓦器碗で軟質焼成である。2400 は高い高台が付き、内面は不定方向のヘラミガキを施す。外面底部に「×」の線刻が認められる。2393・2394・2397・2402 は和泉型瓦器碗である。2394・2397 は口縁部下に段を有する。2397 の内面は同心円、平行線のヘラミガキを施す。2393・2402 は断面三角形の低い高台が付く。2402 の内面は同心円、平行線のヘラミガキを施す。2398 は東播系須恵器の鉢で、断面三角形の口縁部をなす。2403・2405 は土師質土器鍋である。2403 の内面は緻密な横方向のハケム調整を施す。外面はナデ、ユビオサエ調整である。2390・2392・2407 は白磁碗である。2407 は玉縁口縁をなすものである。見込に沈圈線が認められる。外面体部下半、高台は露胎である。2390・2392 は、端反口縁をなす。2390 は内面に櫛描文を施している。軸が薄めにかかる。2388・2389・2391・2408 は同安窯系青磁である。2389・2391 は皿、その他は碗である。2389・2391 の見込は幾何学文を施している。2388 は口縁部が短く外反する。外面体部にヘラ状工具で縦方向に施文し、内面は無文である。軸調は淡黄緑色を呈する。2408 は外面に櫛描文、内面に幾何学文を施す。

第3節 小結

第9地点では中世、近世の遺構・遺物が多く検出された。本節では中世を中心に、時期的変遷を整理し、小結とした。遺物等の詳細な検討は考察で触れたい。

第9地点は調査区中央付近を中心に、9・10世紀段階から遺構が確認でき、そのうち10世紀代が中心時期と考えられる。古代の遺物を包含するSX165およびSX165下のビット、SK040・045・055が挙げられる。本調査区では、円盤状高台を有する土師器杯・黒色土器A類杯、黒色土器A類碗のほか、畿内産の黒色土器A類碗(SK040・2998)が出土している。10世紀代の土器様相を考えるうえで貴重な手掛かりとなろう。9・10世紀代の集落の様相は、遺構が少なく明確ではないものの、本調査区が位置する微高地を中心に小規模な集落が営まれたものとみられる。

11世紀～12世紀中頃は遺構が確認できない状況である。12世紀後半頃～13世紀代に遺構が展開するようになる。多数の掘立柱建物、柵跡のほか、井戸跡、土墳墓と考えられる遺構が検出されている。建物には重複関係があり複数段階の変遷が認められる。総じて建物の配置については明確な企画性はみられないようである。建物の規模はSB013・020・023のように中型建物が見られるが、屋敷を区画するような溝等は検出されなかった。同じ微高地に立地する第10地点では当該時期に比定される土墳墓が検出されている。これらの状況から第9地点・第10地点が位置する微高地を中心に、屋敷地が展開したとみられる。

遺物は土師質土器、瓦器、東播系須恵器、常滑・渥美焼の国産陶器、白磁・青磁・青白磁・黄釉陶器の中国産陶磁器が出土している。そのうち、渥美焼甕、白磁四耳壺、黄釉陶器盤など当該地域では流通希少な製品がみられる。また本調査区では、胎土に結晶片岩を含み、軟質焼成をなす瓦器が出土している。胎土の特徴から在地産と想定されるものである。瓦器は小皿、高台付き皿、碗がみられ、黒灰色・暗灰色をおびるものである。碗は底部押し出し技法をなし、小皿、高台付皿の底部は糸切り離しが残る。大分市域では、在地産と想定される瓦器がまとめて出土したのは初めてであり、周辺地域で瓦器生産が行われた可能性が予想される。これらの在地産瓦器は、考察で「海部型瓦器」として検討を行っている。詳細は第16章第1節(2)を参照されたい。第9地点は、流通希少な製品、瓦器の一定量出土などから、丹生川上流域における拠点的な位置を担った集落として考えることができる。歴史的に当該時期は、丹生郷もしくは丹生荘成立の過渡的段階とみられ、本遺跡はその遺構規模、出土内容から、在地領主層もしくは荘官クラスの屋敷地と想定される。

遺跡は13世紀後半頃には遺構・遺物ともみられなくなり、再び集落が営まれるのは近世にはいつからである。周辺の発掘調査の成果から14・15世紀代の集落遺跡が、対岸の沖積地縁辺、台地上で確認されている。第9地点の中世集落廃絶については、丹生郷から丹生荘の政治的背景に伴う集落の移動によるもの、または微高地の水田等の開発に伴う集落の移動によるもの、等が想定される。第9地点の集落の成立、廃絶については、丹生川上流域の地域史を考えるうえで重要なポイントになるものと考えられる。

第11章 第10地点の調査

第1節 調査の内容

第10調査地点は、丹生川東岸に位置し、大字「丹川」字「ウル島」にあたる。当調査区は第9調査地点の200 m北に位置し、調査面積は250 m²である。調査地点の現況は水田である。丹生川の河岸段丘上に位置しており、遺構の検出標高約24 mである。検出遺構は埋裏・竪穴建物跡・ピット・土壌墓である。出土遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・青銅製品・陶磁器・瓦器などである。

第2節 遺構と遺物

(1) 概要

第10調査地点で検出した遺構は、埋裏1基・竪穴建物跡7基・土坑数基・中世土壌墓1基・ピットなどである。出土遺物は、各遺構とも少量である。弥生時代の範疇と推定される竪穴建物跡は、丘陵側の調査区南側は他に比べると残存状況は良いほうであるが、平野部側の調査区北側は残存状況は不良で、主柱穴に関連する土坑が残るのみである。また他のピットも埋土からすると竪穴建物跡の主柱穴と考えるのが妥当と思われる。埋裏遺構は第3地点でも2基確認できている。また土壌墓は、第9地点の時期と同時期のものであり、関連があるものと思われる。

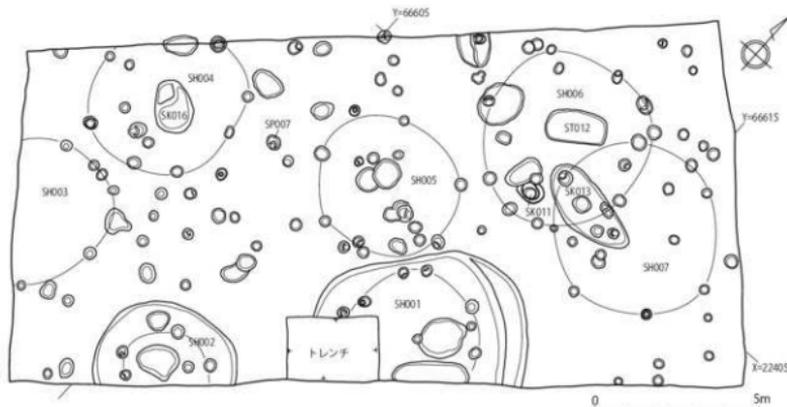
(2) 縄文時代

イ. 土坑 (SK)

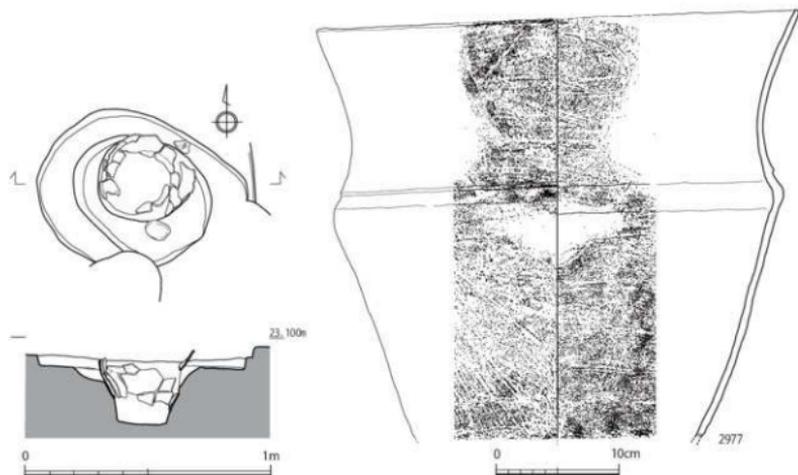
当調査区で埋裏1基を確認した。

SK011 (第396図)

遺構は調査区北側で検出した。平面プランは楕円形状で、1段テラスがつく。土坑の西側は、別遺構に切られ、上端ラインは不明である。裏埋置箇所は土坑内のやや東側である。土坑規模は長軸0.85 m、短軸0.65 m、最大深0.32 mを測る。掘り方土は褐色粘質土礫を含んでいる。出土遺物(第396図)は縄文土器深鉢である。底部は欠いている。埋められた段階で意図的に欠いていたと考えられる。胴部は上方にかけて外側に開き、屈曲部を境に内傾しながら立ち上がり、口縁部上方で緩やかに外反していく。調整は外面は屈曲部より上方で横方向条痕文、屈曲部下方で横方向へ斜め方向条痕文を施す。内面は屈曲部より上方で横方向条痕文、屈曲部下方で横方向条痕文を施す。内部からは骨など遺物は確認できなかった。



第395図 第10地点遺構配置図 (1/150)



第396図 SK011 遺構実測図 (1/20)・出土遺物実測図 (1/4)

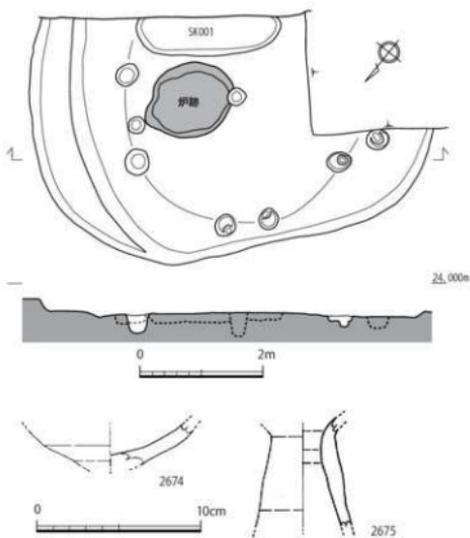
(3) 弥生時代

この時代の遺構は、円形竪穴建物跡7基を確認した。調査区に展開する他のピットも埋土などが類似することから、竪穴建物跡などに関連する柱穴であると推定される。また調査区南側にあるSH01とSH02は竪穴の掘り方が残存するが、それ以外の建物跡は残存状況は不良で、主柱穴のみ残る。これは竪穴建物跡の掘り込み面の直上層が中世の遺物を包含する層であるため、中世以降の造成で削平をうけた可能性が高い。出土遺物はどの遺構も少量で、時期比定が困難である。

イ. 竪穴建物跡 (SH)

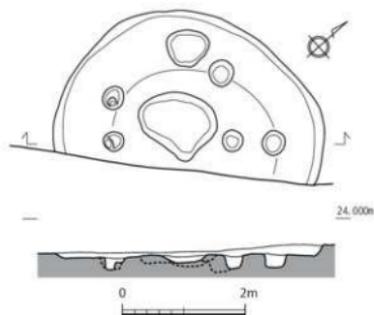
SH001 (第397図)

遺構は調査区南側で検出した。遺構の南東側を試掘トレンチで削った。平面プランは北側が調査区外に延びるため、全体プランは不明であるが、楕円形状になると推定される。北東側に1段テラスを設ける。規模は東西軸6.5m、南北軸4.1+a m、最大深0.3mである。主柱穴は円形で5基、土坑を1基(長軸2.35m、短軸0.6+a m、最大深0.1m)を



第397図 SH001 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

を確認した。炉跡の両端に小穴を確認しており、関連がありそうである。また炉跡内部の焼土を科学分析を行っており、イネ科などの植物遺体を検出している。(第20章参照)。出土遺物(第397図)は高環の破片が2点出土した。



第398図 SH002 遺構実測図 (1/80)

SH002 (第398図)

遺構は調査区南東で検出した。遺構の南側は調査区外にかかるため、全体プランは不明であるが、円形竪穴建物跡になりそうである。規模は断面計測点軸で4.4m、最大深0.2mを測る。床面に円形に廻るであろう主柱穴5基と土坑2基を検出した。埋土は褐色粘質土で、1層のみの検出であった。出土遺物は土器小片のみで少量である。

SH003 (第399図)

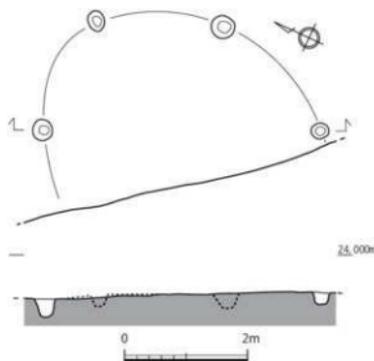
遺構は調査区西側で検出した。竪穴の掘り方ラインは後世の削平により、検出できなかったが、円形状に廻ると推定される主柱穴を確認した。主柱穴間の推定直径は4.5mである。出土遺物は主柱穴から土器小片のみであった。

SH004 (第400図)

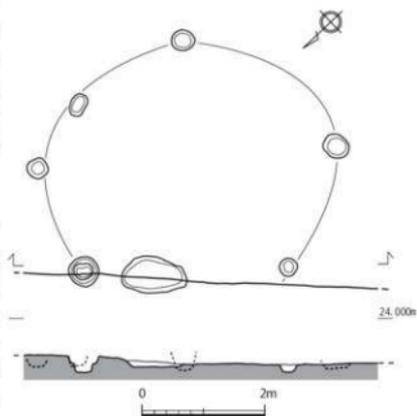
遺構は調査区西側で検出した。竪穴の掘り方ラインは後世の削平により、検出できなかったが、円形状に廻ると推定される主柱穴を確認した。主柱穴間の推定最大直径は5.0mである。主柱穴内側で、北西部に調査区境目に土坑を検出した。この建物跡に伴うものと思われる。出土遺物は主柱穴から土器小片のみ少量である。

SH005 (第401図)

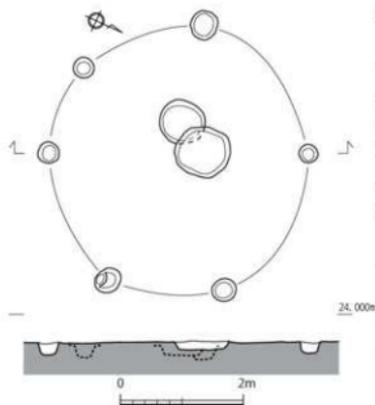
遺構は調査区中央で検出した。竪穴の掘り方ラインは後世の削平により、検出できなかったが、円形状に廻ると推定される主柱穴を確認した。主柱穴間の直径は4.3mである。主柱穴内側の中央付近で土坑が切りあう状況で検出した。埋土はとも類似しており、この竪穴建物跡に関連する土坑であると考えられる。出土遺物は主柱穴から少量の土器小片のみであった。



第399図 SH003 遺構実測図 (1/80)



第400図 SH004 遺構実測図 (1/80)



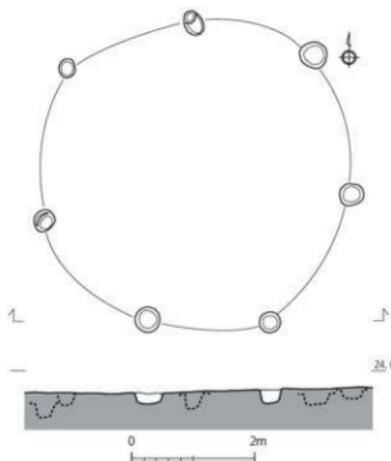
第401図 SH005遺構実測図(1/80)

SH006 (第402図)

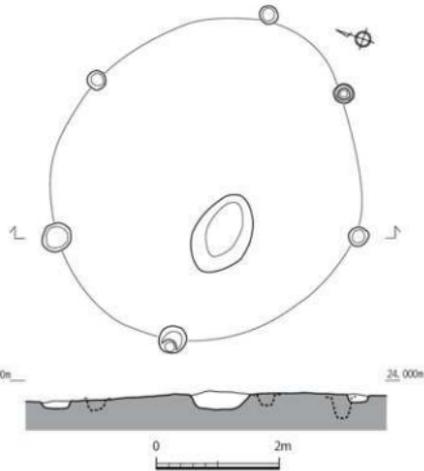
遺構は調査区北側で検出した。竪穴の掘り方ラインは後世の削平により検出できなかったが、円形状に廻ると推定される主柱穴を確認した。SH007との切り合い関係が確認されるが、前後関係は不明である。主柱穴間の最大直径は5.3mである。出土遺物は主柱穴から土器少量のみであった。

SH007 (第403図)

遺構は調査区北側で検出した。竪穴の掘り方ラインは後世の削平により検出できなかったが、円形状に廻ると推定される主柱穴を確認した。SH06との切り合い関係が確認されるが、前後関係は不明である。主柱穴間の最大直径は5.6mである。主柱穴内側の西側に土坑が1基確認できた。この土坑はSK013と複数のピットに切られる状況で検出した。SH007に伴うものであると考えられる。出土遺物は主柱穴から土器少量のみであった。



第402図 SH006遺構実測図(1/80)



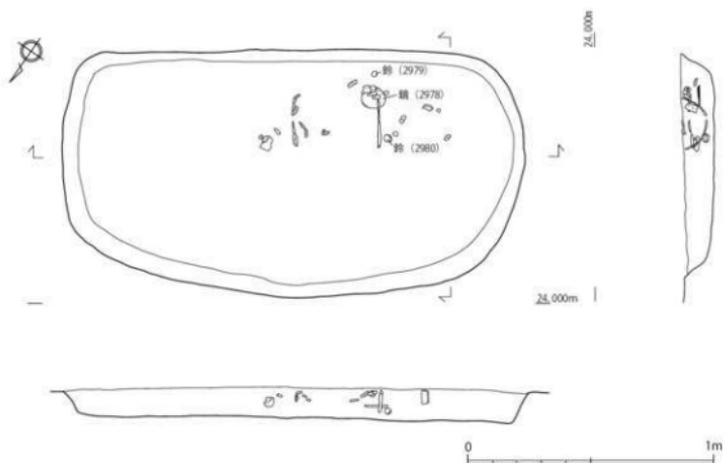
第403図 SH007遺構実測図(1/80)

(4) 中世

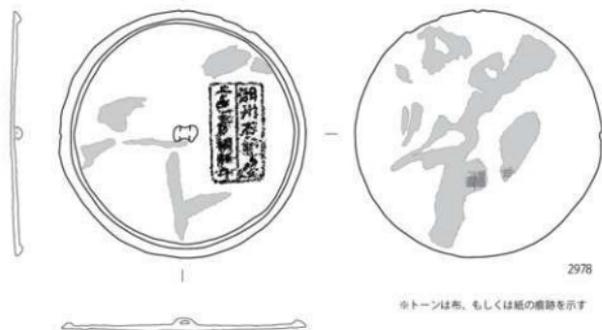
中世の遺構は、土塚墓1基と包含層を確認した。包含層からは中世土師質土器小片が少量出土したのみである。

ST012 (第404図)

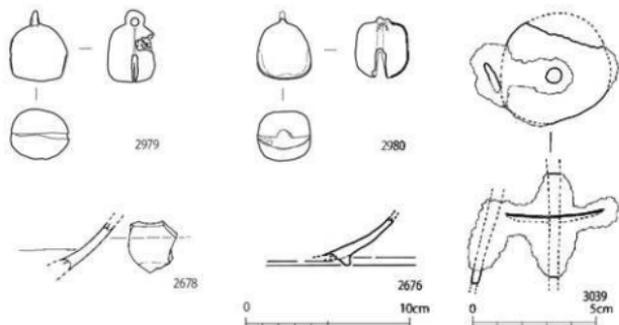
遺構(第404図)は調査区北東部で検出した。遺構の残存状況は良好ではなかった。平面プランは長方形プランで、規模は長軸1.87m、短軸1.02m、最大深0.23mを測る。埋土は暗褐色粘質土1層のみ確認できた。内部構造は床面直下に一部であるが、板材を敷いているのがわかった。しかしながら断面観察結果、立ち上がりの板材自体や痕跡の確認はできず、残存状況が不良ということもあるが、推定で木棺ではなく、床面に板材を敷いて、遺体を埋置し、土で埋めたとも考えられる。板材に若干であるが小さい白いものが確認でき、骨の小片と



第404図 ST012 遺構実測図 (1/20)



※トーンは布、もしくは紙の痕跡を示す

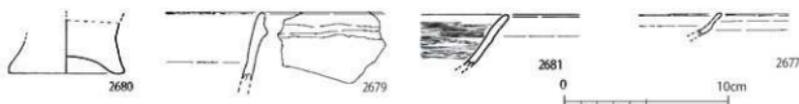


第405図 ST012 出土遺物実測図 (1/2)

推定される。遺物は床面より若干高い位置で推定骨小片よりも上で確認できた。遺物の中で一番下に確認できたのは、湖州鏡でその上に長方形に廻る鉄線と片方の両端に青銅製鈴が出土した。これは遺体の上に鏡を副葬したのち、鉄線で固定された有機物の容器を置き、その容器の飾り金具として青銅製鈴が付いていたと考えられる。また若干の距離をおいて、白磁片と瓦器椀片が出土した。出土遺物(第405図)は2978は湖州鏡である直径10cm、厚さ0.2cmを測る。裏面に「湖州石□□二〇照子」という銘が入る。また表裏面とも繊維の痕跡が確認でき、副葬時に布などに包んで埋置したものと考えられる。2979・2980は青銅製鈴である。2979は鈴胴部に一部欠損が認められるが、内部に不明な青銅の物体があり、中空の中に玉が入っていたと考えられる。2980も同様である。2678は白磁碗小片である。2676は瓦器椀片で底部である。また他にも鉄線や3039の鉄製紡錘車なども出土している。

その他の遺構・遺物(第406図)

SK16から古代もしくは中世の土師器が出土した。



第406図 その他の遺構出土遺物実測図(1/3)

第3節 小 結

第10地点の遺構は、縄文時代晩期末から弥生時代早期の埋喪1基、弥生時代の竪穴建物跡7棟+α、中世の土壌墓1基を確認した。

埋喪遺構は、深鉢の底部を意図的に欠いて埋置している状況で検出した。深鉢内部に人骨などの遺物は確認できなかったが、他の調査事例などを踏まえると、墓としての利用の可能性が高いと考えられる。また埋喪遺構は第3地点でも確認している。当地点との相違点は、立地(丘陵上と低地:比高差4m)と土器の形態である。第3地点出土埋喪は下黒野式土器と呼ばれる深鉢であるが、当地点出土鉢は、下黒野式土器と相違する。推定ではあるが、埋喪を行う立地の選定は高い場所から低い低地へ移行していき、背景には生活基盤自体が低地に移行していった状況を表しているとも考えられる。

弥生時代の竪穴建物跡は残存状況は不良であったが、7棟+α確認した。出土土器は極少量であったため、すべての建物跡の時期比定は難しいが、埋土が類似する状況と土器片から考えると弥生時代中期～後期頃のものとして推定される。丹川地区ではこの時代の建物跡は確認されておらず、当時の生活復元には欠かせない遺構となろう。

中世の土壌墓は1基を確認した。床面に板材を敷いている状況は確認したが、木棺のような箱型になるような状況は平面観察、断面観察からは確認できなかった。遺物は推定人骨小片と湖州鏡1面、青銅製鈴2個、鉄製品、白磁片、瓦器椀片などであった。白磁は大宰府分類5類に該当するものである。これらから土壌墓の被葬者は、当地点から150mほど離れた第9地点と同時代の所産であり、第9地点が有力者・丹生庄の荘官クラスの屋敷跡と考えられることから、関連がありそうである。

第12章 第11地点の調査

第1節 調査の内容

丹生川坂ノ市条里跡第11地点は、大分市大字延命寺字光蓮寺に所在する。遺跡は丹生川上流域の沖積地にあり、丹生川左岸の低位段丘上にあたる。遺跡周辺は丹生川が西側に大きく蛇行する部分にあたり、丹生川は蛇行したのち北へほぼ直線に海岸へと延びる。

第11地点の調査面積は約290㎡である(第407図)。遺跡の対岸、約200m東に12～13世紀を主体とする第9地点が位置する。

発掘調査の結果、調査区を縦断する近現代の攪乱溝や攪乱坑がみられたが、中世と考えられるピット、掘立柱建物2棟(SB001～002)、土坑を検出している(第407図)。調査区中央よりやや南は遺構の希薄部分のみみられるが、ほぼ全面に遺構が展開している。

第11地点の現況は水田であり、水田下に暗茶褐色粘質土が15cmほど堆積し、その直下で遺構面が確認できる(第407図土層模式図を参照)。遺構の検出標高は約23mである。遺構埋土は、黒褐色粘質土・茶褐色粘質土・黒灰茶色粘質土がみられる。そのうち、黒褐色粘質土・茶褐色粘質土が大半を占める。地山は暗赤褐色砂礫土である。次節では遺構・遺物の詳細について記すことにする。

第2節 遺構と遺物

(1) 中世

イ. 掘立柱建物

掘立柱建物は2棟確認でき、東西方向に長軸をもつ。いずれの建物も遺物の出土はみられなかったが、その埋土から中世に位置付けられるものと考えられる。

SB001 (第408図)

調査区中央からやや北よりに位置する。主軸方位N66°Wである。梁行1間、桁行2間の小規模な建物で、身舎面積は9.24㎡である。

SB002 (第408図)

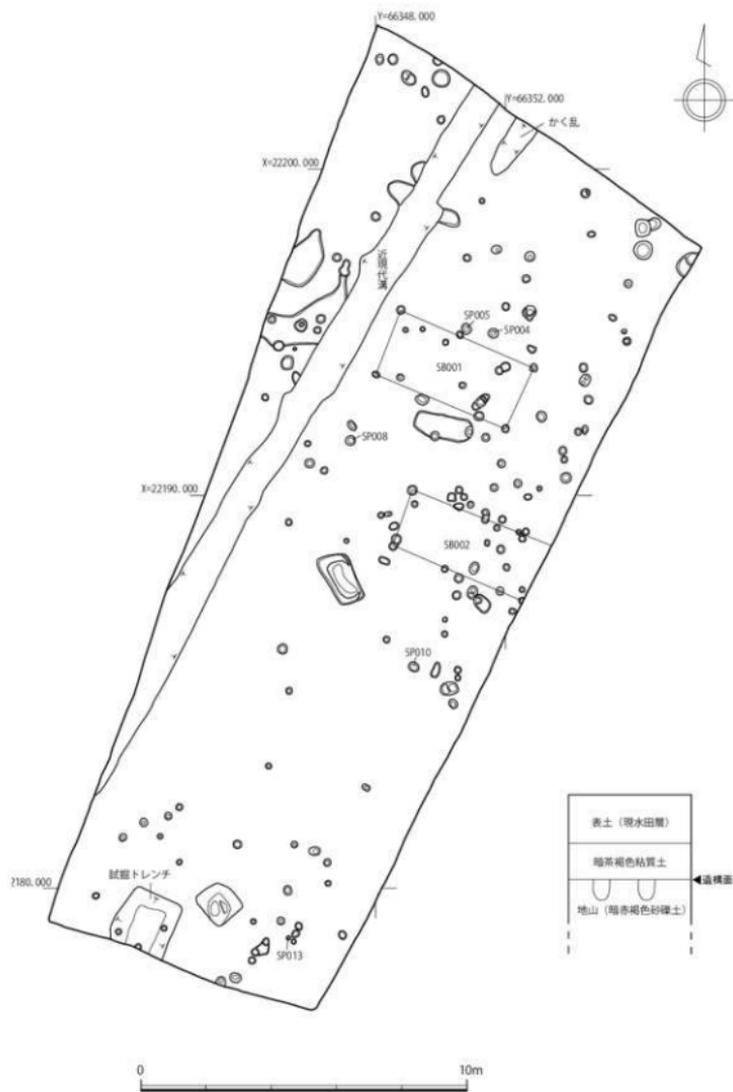
SB001より南に位置する建物で、主軸方位N63°Wである。建物の東側は調査区外に及ぶが、梁行は1間、桁行は3間の規模を有するものと考えられる。身舎面積は12.4+α㎡である。

ロ. その他の出土遺物 (第409図)

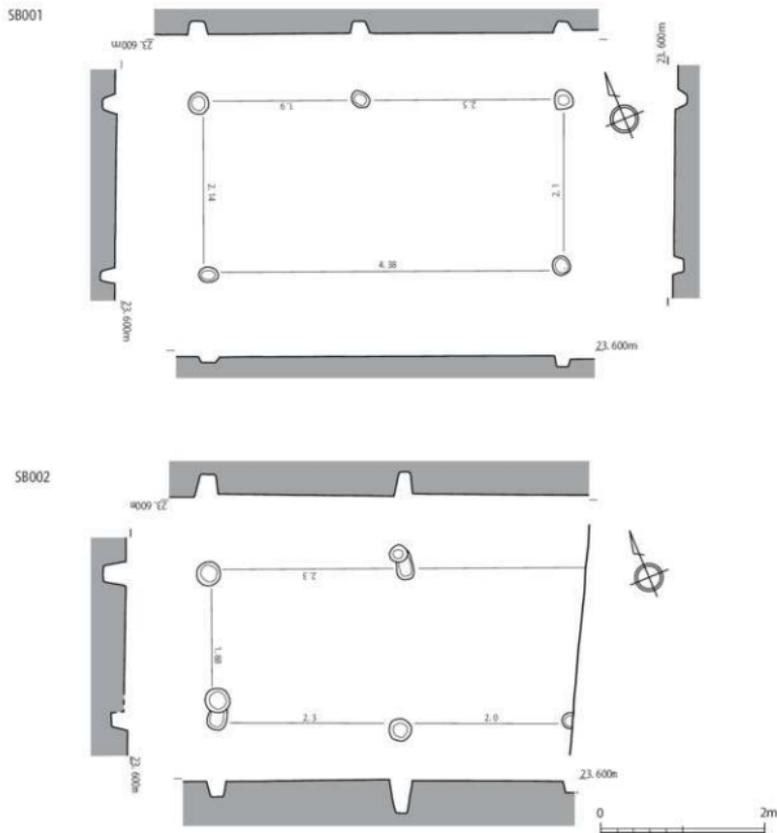
ピットから出土したものである。遺物は少量であるが、おおむね中世を主体とするものである。土坑からの出土遺物は皆無であった。

2672(SP013)は土師質土器環で、体部中位ほどで屈曲する。口縁部端部はまるみをおびる。12～13世紀を主体とするものか。2669(SP010)は瓦器小皿で、特徴から和泉型瓦器である。外面体部中位より下はナデ、体部内面は同心円状のヘラミガキを施す。12世紀後半～末頃と考えられる。2671(SP022)は白磁碗で、端反の口縁部である。貫入が認められる。12世紀後半頃である。2666(SP005)・2673(SP013)は土師質土器鍋である。2666は体部に比して口縁部が肥厚する。口縁部は比較的長い。2673は口縁部がくの字状に外反する。口縁部端部は面取りを施す。外面はユビオサエ、体部はやや緻密なハケメ調整を施す。外面に煤が付着する。口縁部径32cmを測る。なお2666は豊前・豊後の広域に出土分布が認められる。2673は第9地点の他、杵築市八坂遺跡群、大分市下郡遺跡群・横尾遺跡群など別府湾岸地域に出土分布が認められるものである。いずれも12世紀代である。

2665(SP004)は瓦質土器甕で、口縁部が短く外反し、外面端部は面取りを施す。2668(SP008)は瓦質土器鉢鉢の底部。内面体部と見込みの境に5条単位の播目が等間隔に施される。外面底部はナデである。2665・2668は詳細な時期比定は困難であるが、14～15世紀と考えたい。



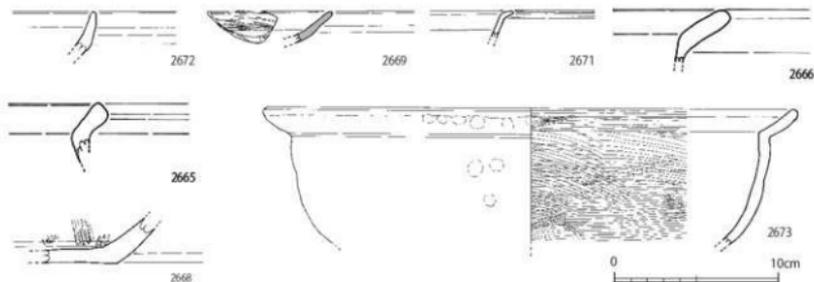
第 407 図 第 11 地点遺構配置図 (1/150)・土層模式図



第3節 小 結

第11地点では、掘立柱建物、土坑を確認した。遺構・遺物とも少ないが、中世を主体とする時期と考えられる。第11地点では延命寺、光蓮寺の寺地名が残ることから、寺院関連遺構の発見が期待された。しかし今回の調査では、遺構・遺物とも少なく、寺院的な性格として考えることは困難である。遺跡の性格については、広義の中世集落跡として考えたい。出土遺物から、時期については、和泉型瓦器小皿、白磁碗、土師質土器土銅の12世紀後半～末頃を上限とする。下限は2655・2688の瓦質土器から14～15世紀代と考えられるが、この段階の様相は不明である。

対岸に位置する第9地点では、12～13世紀代の集落跡が確認されているが、第11地点周辺もこの時期の集落の広がりが示唆される。ただ第9・11地点を比較すると、第11地点は遺構密度、遺物量とも低調であることがいえそうである。この違いを、階層差によるものかは明らかにしえないが、第9・11地点の位置関係が示すように、集落域が点々と散在した可能性を考慮する必要があるだろう。



第409図 ビット出土遺物実測図(1/3)

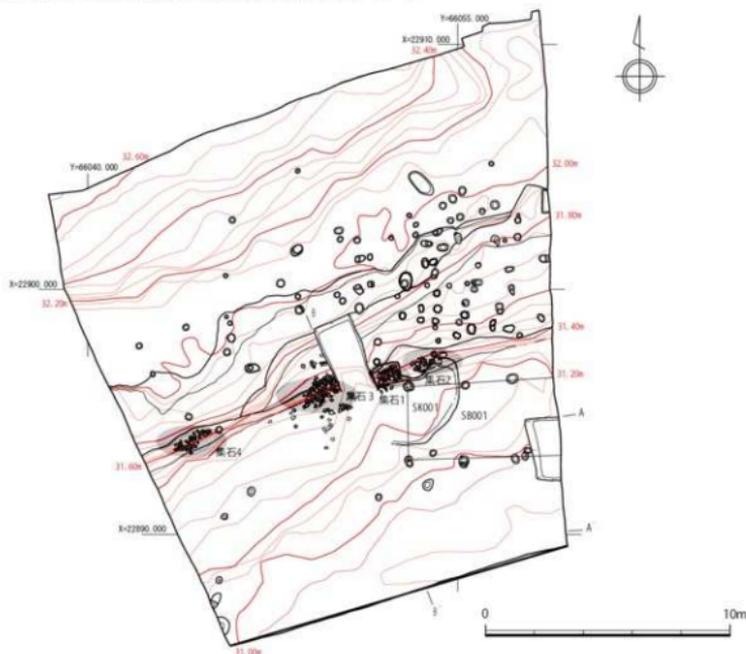
なお、第11地点より南東側は約1～2m比高差の低地が広がっている。低地一帯は、試掘調査において、現水田直下に準大の礫を含む砂礫層を確認しており、旧河道跡と考えられる。この旧河道は近代以降に水田開発されたものとみられる。第11地点周辺は低位段丘が南西方向に広がるが、掘立柱建物などの遺構が示すように、この一帯は居住に適した空間と考えられる。これは現在の集落（延命寺集落）がほぼこの低位段丘に位置していることから窺うことができる。

以上、他地点の中世遺跡と比べると、その情報は限られるものであったが、丹生川上流域の中世集落の様相を考えるうえで貴重な手掛かりを得ることができた。

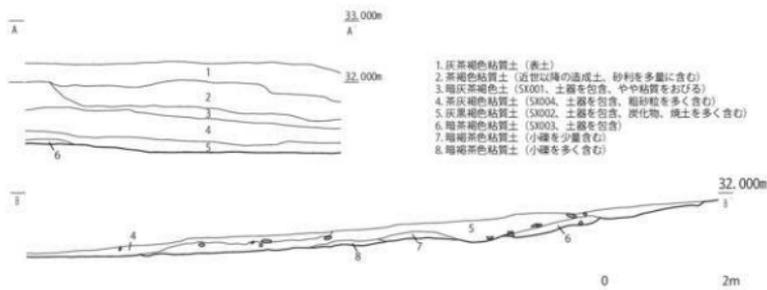
第13章 第12地点の調査

第1節 調査の内容

丹生遺跡群第12地点は、大分市大字野間字宮友にあたり、北東方向に延びる丘陵の斜面部分に位置する。第12地点南西約150m先の丘陵上には野間古墳群が位置している。



第410図 第12地点遺構配置図 (1/200)



第411図 調査区中央ベルト・北東隅土層断面図 (1/80)

第12地点の調査区面積は382㎡である(第410図)。調査区はおおむね正方形をなし、北から南に向かって地形的に緩斜する。調査区中央付近では東西にわたって緩斜部分が見られる。調査区南側はほぼ平坦な低地が広がる。

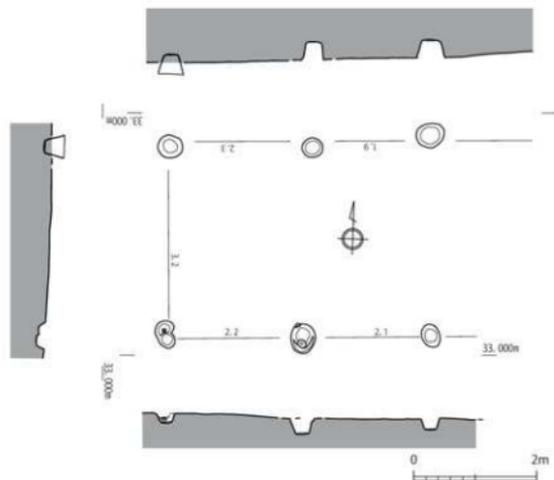
調査概要について触れる。第410図は第12地点の土層断面図である。現況は水田で、第2層(茶褐色粘質土)は近代以降の造成土である。第2層下の第3層(SX001、暗灰茶褐色土)、第4層(SX004、茶灰褐色粘質土)・第5層(SX002、灰黒褐色粘質土)・第6層(SX003、暗茶褐色粘質土)は古代、中世遺物を多く含む包含層である。これらの包含層は調査区中央の緩斜部分から低地を範囲に確認している。遺構面は、調査区北側では第2層下、緩斜部分から低地は第5層下で確認している。検出標高は31～32mである。地山は黄褐色粘質土である。遺構は古代を中心とし、ピット・土坑のほか、緩斜部分と低地の境付近を中心に4基の集石遺構を検出している。次節では各遺構、包含層の詳細について記す。

第2節 遺構と遺物

(1) 古代・中世

イ、掘立柱建物(第412図)

掘立柱建物は調査区南側の低地部分で1棟(SB001)検出している。SB001は梁行1間、桁行3間+aの規模で、建物東側は調査区外に延びる。建物の主軸は東西方向にち、主軸方位はN87°Eである。身舎面積は $9.01+a$ ㎡である。遺物は小片のため図示しえなかったが、中世所産の土師質土器片が出土している。中世段階の建物跡と考えられる。

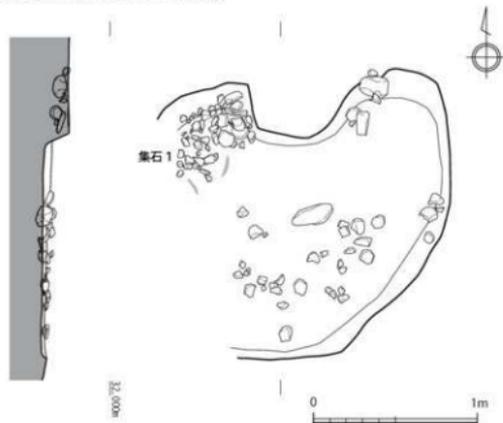


第412図 SB001遺構実測図(1/80)

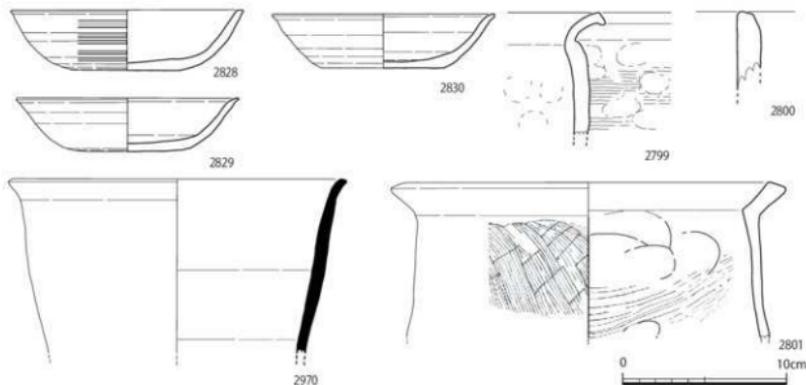
ロ. 土坑 (第413・414図)

土坑は調査区中央の低地部分に1基(SK001)を検出している。SK001の規模は長軸1.8m + α 、短軸1.4m、深さ0.1mを測り、平面は不整形プランを呈する。床面はほぼ平坦である。土坑の北西隅には集石1が位置し、重複関係をもつ。床面には拳大～人頭大の礫および土器がまばらに出土している。

第414図はSK001出土遺物である。2828～2830は土師器環である。おおむね底部から内彎気味に開く器形である。2828は口縁部上端を平坦に仕上げる。内外面体部は回転ヘラミガキ、外面底部は回転ヘラケズリである。2829・2830は口縁部が短く外反する。2830の外面底部は回転ヘラケズリが残る。2970は須恵器甕か。口縁部は緩やかに外反し、胴部は直線的である。2799・2801は土師器甕で、後者は企救型甕である。2799は口縁部が緩やかに外反し、外面端部は面取りを施す。2801は口縁部がくの字状に短く外反し、胴部は外方へ張り気味である。口縁部外面端部は面取りを施す。胴部内外面ともハケメ調整が認められる。2800は土師器で製塩土器である。体部は直線的で口縁部端部がすばまる。



第413図 SK001 遺構実測図 (1/30)



第414図 SK001 出土遺物実測図 (1/3)

ハ、集石遺構（第415～418図）

集石遺構は調査区中央の緩斜部分と低地の境を中心に、古代遺物を包含するSX003の直下で4基を確認した。いずれも径1～2mを範囲にまとまる。なお集石1の西側、集石3の東側は試掘調査時に掘り下げてしまったため、詳細な様相は不明である。

集石1（第415図）

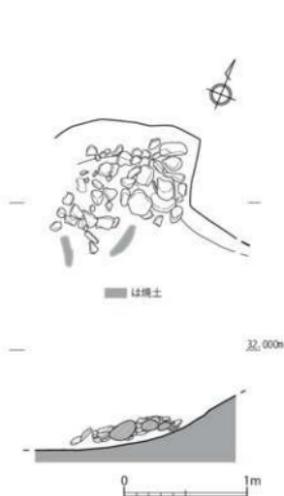
集石1は調査区中央にあたり、SK001の北西隅に位置する。SK001と重複関係をもつが、詳細な把握は確認することができなかった。平面は不整形を呈し、長軸1.4+a m、短軸1mの規模をもつ。集石は径20～30cm程度の礫がやや雑にまとまりをなし、礫同士の重なりは少ない。遺構の下位には集石に伴う掘り込みは確認できなかった。

集石2（第416図）

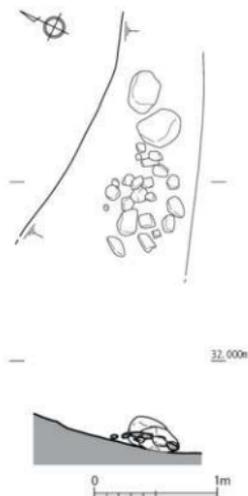
集石2は集石1の東0.5m先に位置する。平面は楕円形をなし、長軸1.5m、短軸0.6mの規模をもつ。集石2の西側は径10～20cm程度の礫が、東側は径40cm程度の大礫がまとまりをなす。礫同士の重なりは少ない。遺構下位には集石に伴う掘り込みは確認できなかった。

集石3（第417図）

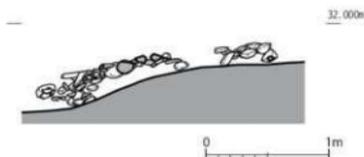
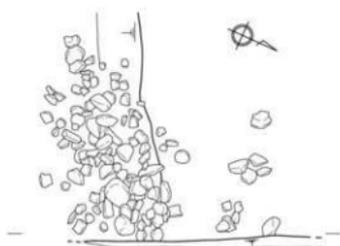
集石3は集石1の西1.2m先に位置する。平面は不整形をなし、径1.6mの規模をもつ。遺構の中央部分は集石が希薄である。北から南に向かって緩斜するように礫を配している。礫は径20～30cm程度がまとまりをなし、とくに西側は礫同士の重なりが多い。遺構からは刀子？と考えられる鉄製品が出土しているが、図化しえなかった。



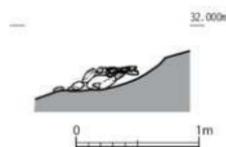
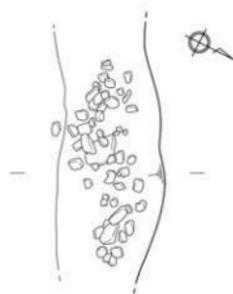
第415図 集石1遺構実測図(1/40)



第416図 集石2遺構実測図(1/40)



第 417 図 集石 3 遺構実測図 (1/40)



第 418 図 集石 4 遺構実測図 (1/40)

集石 4 (第 418 図)

集石 4 は調査区西側、集石 3 の西 2 m 先に位置する。平面は楕円形をなし、長軸 1.6 m、短軸 0.5 m の規模をもつ。斜面の窪みを中心に礫を配する。径 10cm 程度の礫が中心であり、礫同士の重なりは少ない。遺構下位には集石に伴う掘り込みは確認できなかった。

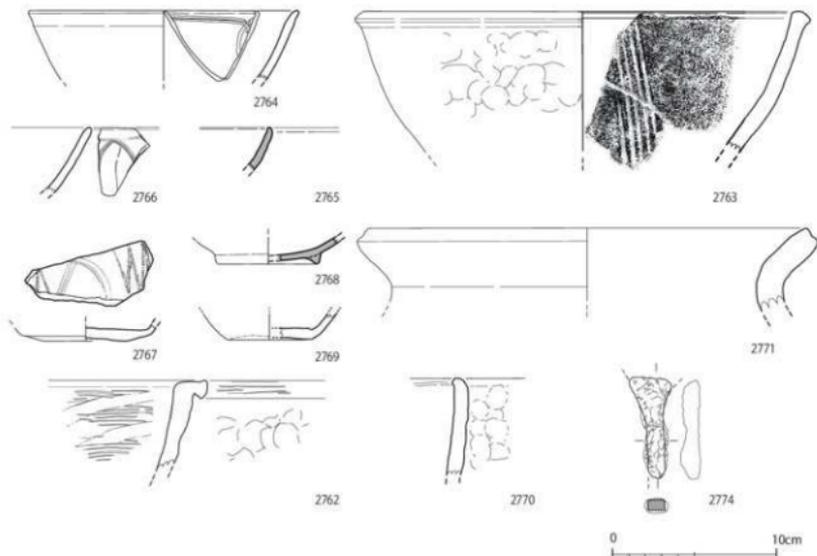
二. 包含層

第 12 地点では、緩斜部分から低地の遺構面上位に複数の包含層を確認することができた。土層の堆積状況から、上から SX001 → SX004 → SX002 → SX003 → 遺構面の順になる。各包含層は古代もしくは中世を中心とするものであり、とくに SX003 は多種多様な遺物がまぎらなって出土している。以下、各包含層出土遺物の詳細について触れる。

SX001 (暗灰茶褐色土、第 419 ~ 411 図)

SX001 は調査区の緩斜部分から低地全体で確認した層で、中世遺物が出土している。

2770 は土師器の製塩土器である。口縁部端部はすばまり内傾気味である。胴部外面はユビオサエが顕著である。2765・2768 は瓦器椀で軟質焼成である。2768 は断面三角形の高台が付く。2762 は瓦質土器鍋である。口縁部が短く外反し、端部はまるみをおびる。内面体部は横方向の雑なハケメ調整、外面体部はユビオサエが顕著である。2763 は瓦質土器播鉢である。口縁部端部はまるみをもつ。外面体部はユビオサエが顕著、内面体部は 5 条単位の描目を施す。2771 は瓦質土器甕で、口縁部が緩やかに外反する。口縁部端部は面取り気味に仕上げる。2769 は白磁皿の底部で、口禿げである。内外面ともほぼ全面施軸である。2767 は同安窯系青磁皿の底部。見込みに櫛・ヘラ状工具の幾何学文を施す。2764・2766 は龍泉窯系青磁碗である。2766 は外面体部に鎚蓮弁文を施す。2764 は体部内面にヘラ状工具による花文を施す。



第419図 SX001出土遺物実測図(1/3)

SX004 (茶灰褐色粘質土、第410・411・420図)

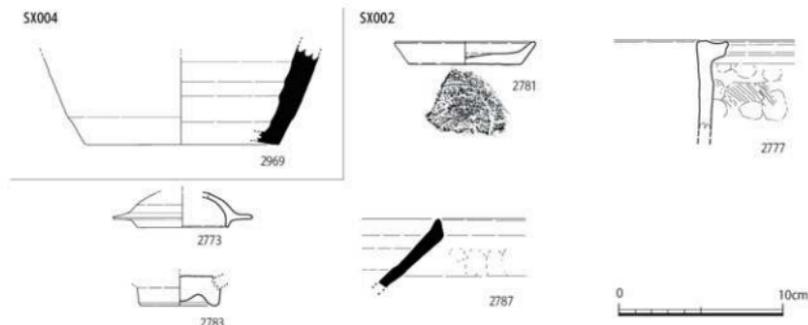
SX004はSX001の下位にあたり、SX002を掘り込む層である。平面では部分的に確認した層である。2969は須恵器壺か。上げ底を呈し、胴部内面はロク口痕が明瞭である。古代の所産であろう。

SX002 (暗灰黒褐色粘質土、第410・411・420・421図)

SX002は調査区の緩斜部分から低地全体で確認した層で、古代・中世遺物が出土している。

2781は土師質土器小皿で、底部から斜上方に開く。外面底部は糸切り離しが残る。2777は瓦質土器釜で、口縁部直下に断面方形の鐙が付く。外面体部は斜め方向のハケメを緻密に施す。外面体部に煤が付着する。2787は東播系須恵器鉢である。口縁部は内傾気味に立ち上がり、端部がすぼまる。2773は白磁壺蓋である。口縁部が内傾し、器形はまるみをおびる。受部は断面方形をなし比較的長い。外面は施釉、内面は露胎である。天井部に水裂がみられる。素地は白灰色、釉調は灰白色を基調とする。復元口径5.4cmを測る。2783は同安窯系青磁碗の底部で、体部を意図的に打ち欠き円盤状を呈する。再加工したものか。

2827は土師器皿か。断面方形の高台が付き、口縁部内側に明瞭な段を施す。体部内外面とも回転ヘラミガキを施す。色調は黄褐色を呈する。2826は土師器環である。底部から内彎気味に開く。内外面とも回転ヘラミガキを施す。外面底部は回転ヘラケズリが残る。2813・2821・2822・2825は土師器環である。2822は調整不明瞭であるが、その他の外面底部は回転ヘラ切り離しのちなデである。2821は器高が低く、口縁部が緩やかに外反する。2813は他の環と比べると深い。2811・2819は土師器蓋である。2811は天井部に摘みが付き、口縁部端部内側に明瞭な段が付く。2819は天井部に輪状摘みを有する。2815は須恵器蓋である。口縁部は直線的に伸びる。天井部は回転ヘラ切り離しが残る。2779・2784は土師器裏である。2779は企救型裏で、口縁部端部は面取り気味に仕上げる。胴部外面に縦方向のハケメ調整を施す。2784は頸部の境が鈍い。口縁部上端は



第420図 SX004・002 出土遺物実測図 (1/3)

平埴に仕上げ上げる。2778・2782・2785・2790は土師器の製塩土器である。いずれも器面はユビオサエが顕著である。2778・2782・2785は口縁部が内傾し、端部がすばまる。2790は丸底である。2789・2791は土師器の管状土甕である。

2775・2776・2793・2794は古代・中世の鉄製品である。2776は大振りの鉄釘である。2793は刀子の身であろう。切先はややまるみをおびる。

SX003 (暗茶褐色粘質土、第410・411・422～424図)

SX003は調査区の段落ちから低地全体を確認した層で、古代遺物の包含層である。とくに集石1の東側を中心にまとまって出土している。

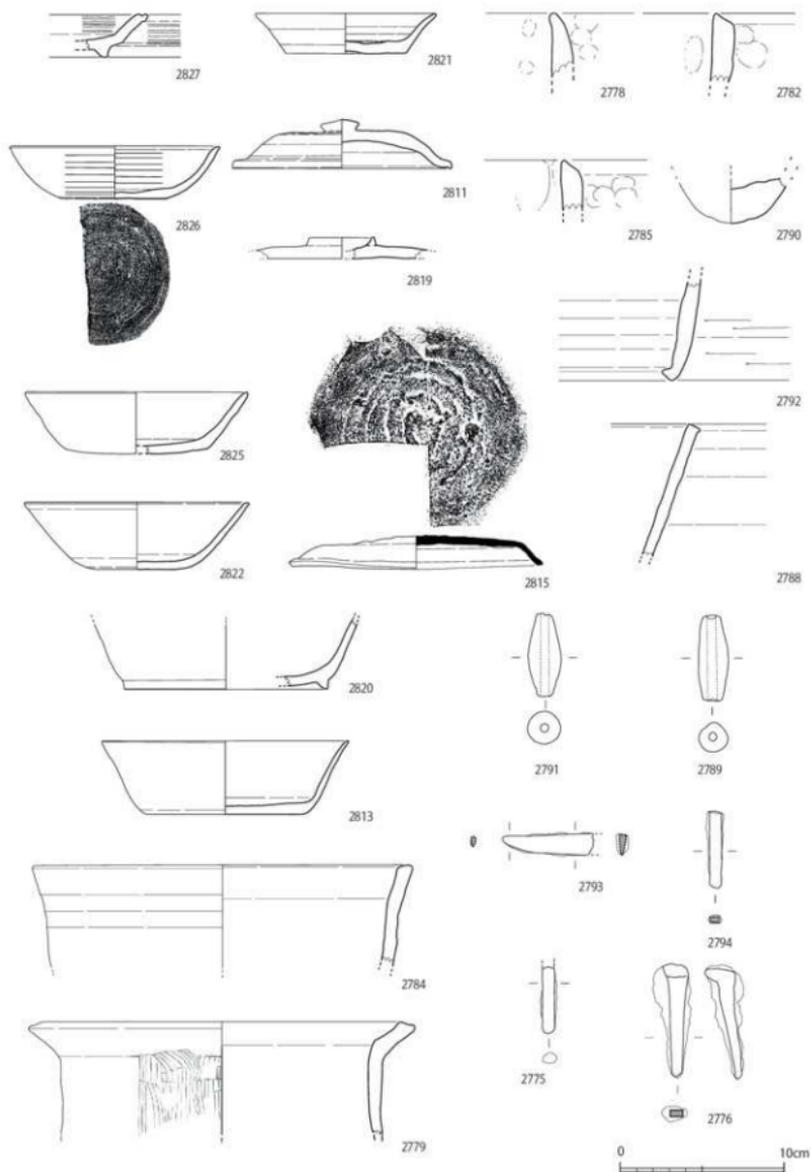
2804・2824は土師器蓋である。口縁部内側に明瞭な段が付く。調整不明瞭であるが、天井部内面に回転ヘラミガキを確認できる。2824は天井部に摘みが付く。

2805・2806・2809・2810・2812・2814・2816・2817・2823は土師器環である。2823は調整不明瞭であるが、その他の外面底部は回転ヘラ切り離しのちナデである。2805・2806・2809・2812・2816は口縁部端部がすばまる。2810・2814・2817は口縁部端部が外反する。2823は体部がまるみをもち、口縁部がすばまる。内外面体部に回転ヘラミガキを確認できる。2803・2808は土師器椀である。いずれも高台は外方へ張り、体部が直線的である。口縁部内側に段が付く。2803は内外面に回転ヘラミガキを施す。外面底部は回転ヘラ切り離しが残る。

2807・2818は須恵器環である。焼成不良であり淡灰褐色を呈する。いずれも底部から斜上方に開き、口縁部が外反する。外面底部は2807・2818は回転ヘラ切り離しのちナデである。

2967は須恵器の長胴瓶である。頸部・底部が出土しており、同一個体である。胴部は頸部との境が明瞭である。底部は高台が外方へ張る。2968は須恵器の壺で、胴部と底部が出土しており、同一個体である。胴部はロク口痕が明瞭に残る。底部は上げ底である。

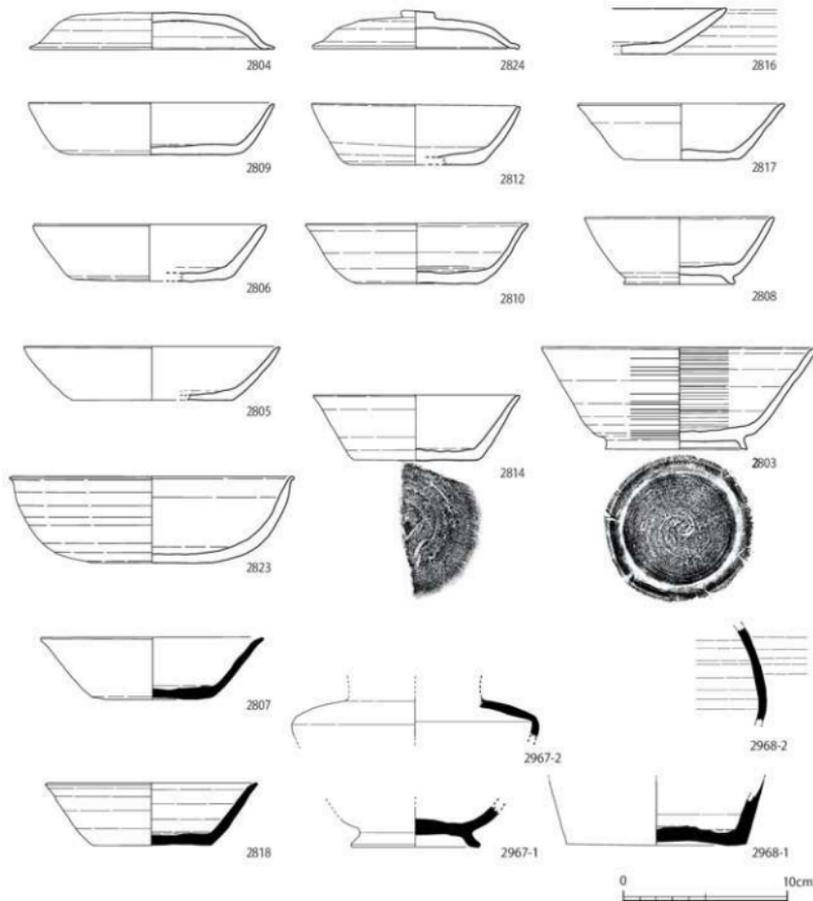
2973は土師器甕である。胴部に平行叩きを施す。2971は甕の底部で、尖底気味である。胴部外面は格子目叩き、胴部内面は平行叩きを施す。2971・2973とも須恵器の焼成不良である。2972・2974は須恵器甕で、口縁部・胴部が出土しており、同一個体である。口縁部は短く外反し、胴部上位は張り気味である。胴部外面は格子目叩き、胴部内面は同心円状叩きが残る。2978は土師器甕であろう。口縁部が短く外反し、胴部は張る。



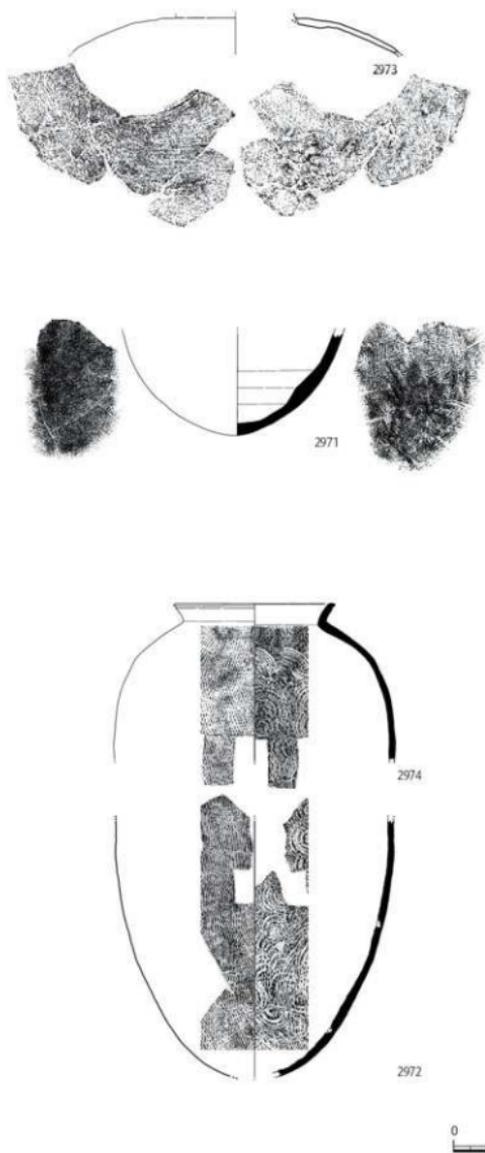
第 421 図 SX002 出土遺物実測図 (1/3)

2795・2797・2976は土師器の甕である。2795は底部内側に明瞭な段が付く。胴部内面はユビオサエが顕著である。2976は器形が直線的で、口縁部内側に段が付く。胴部内面の上～中位はヘラ状工具ナデ、下位はユビオサエ調整である。胴部上位に把手が付く。

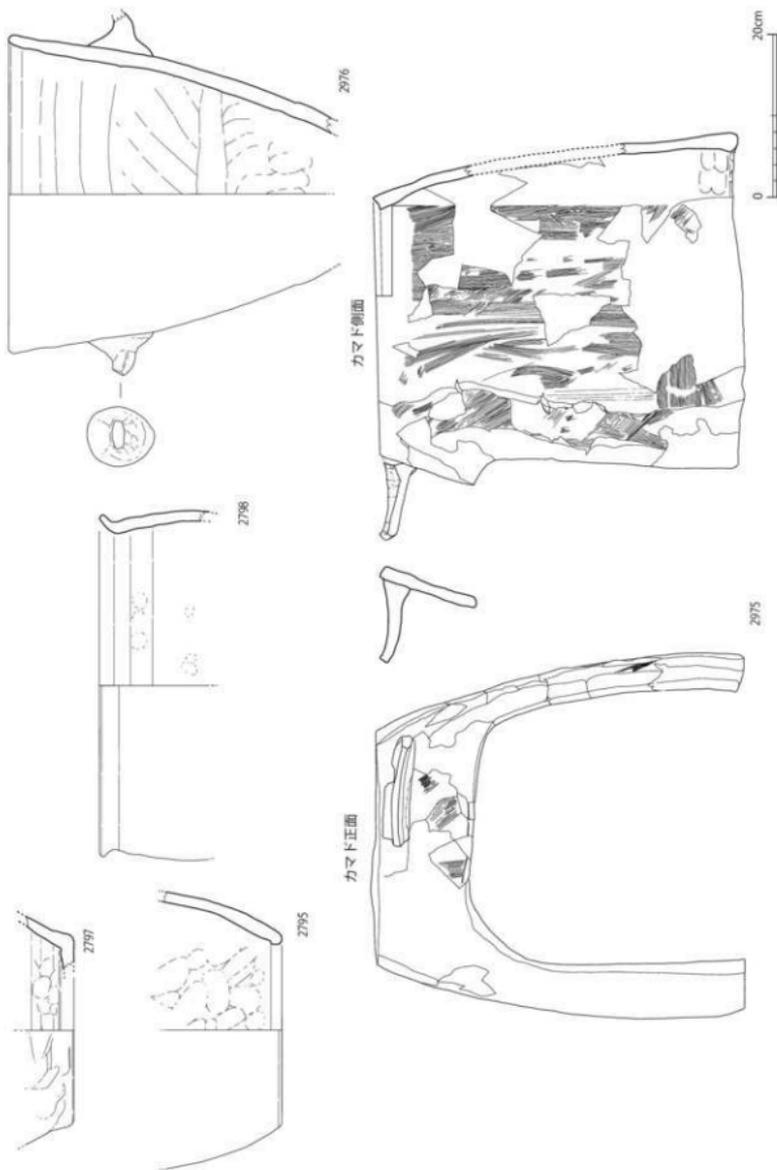
2975は移動式甕で、ほぼ全形を窺うことができる資料である。受け口の径31.4cm、器高45.6cm、底径42.8cmを測る。焚き口部分は復元で径32.5cm、高さ33cmである。口縁部下に比較的扁平な庇が付く。器形はおおむね内傾し、受け口は内側に向かって明瞭な段が付く。底部下端はまるみをもつ。庇は断面方形を呈する。調整は庇がユビオサエ、外面は縦、斜め方向のハケメ、内面はナデ・ユビオサエである。胎土は赤色粒子・雲母を含む。色調は橙褐色をおびる。



第422図 SX003出土遺物実測図①(1/3)



第423図 SX003 出土遺物実測図② (1/6)



第424図 SX003出土遺物実測図③ (1/6)

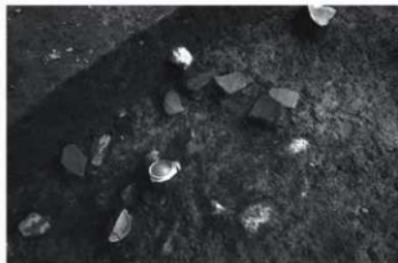
第3節 小結

第12地点では古代を中心とする集石遺構・土坑、古代・中世包含層を確認した。調査で分かったことを述べ、まとめたい。詳細な遺物の時期的検討は考察で触れる。

包含層は中世を主体とするSX001・004・002、古代を主体とするSX003に分かれる。土層観察から、これらの包含層は北方向から堆積し形成されたと考えられる。中世は遺物内容から、SX001が14世紀前半～中頃、SX002は13世紀後半代とみられ、時期的な大きな幅は見受けられないようである。SB001、流通希少な白磁壺蓋(2773)が示すように、周辺地内に中世遺跡が展開したとみられる。SX004は遺物が僅少なため詳細な時期を把握することができなかった。

SX003では多種多様な古代土器が多く出土した。そのうち、全形を窺うことができる移動式竈(2975)は当時の生活を考えるうえで重要な資料である。土師器環・蓋、須恵器の特徴から、SX003はおおむね9世紀前半～中頃を主体とするものと考えられる。SK001は、土師器環の特徴からSX003とはほぼ同時期と考えられる。集石遺構は緩斜部分と低地の境を中心に営まれている。遺物が僅少であるため詳細な把握は困難であるが、古代の所産と考えられる。集石の性格は、調理等の施設を想定できるが、いずれの集石も被熱を受けた礫が少ない状況である。集石の立地状況から、小規模な護岸施設もしくはなんらかの祭祀が行われた跡であろうか。

古代では、遺構・包含層出土遺物から、周辺地内に遺跡が展開していることが示唆され、第12地点の古代遺構は集落域の一部にあたるものと考えられる。第12地点の北200m先、沖積地縁辺を中心に、古代遺跡の第4・7・8地点が位置している。第12地点はこれらの遺跡と時期的に符合しており、古代集落の様相を考えるうえで注目できる。



SX003 遺物出土状況



SX003 遺物出土状況



SX003 竈出土状況



SK001 遺物出土状況(左奥は集石1)

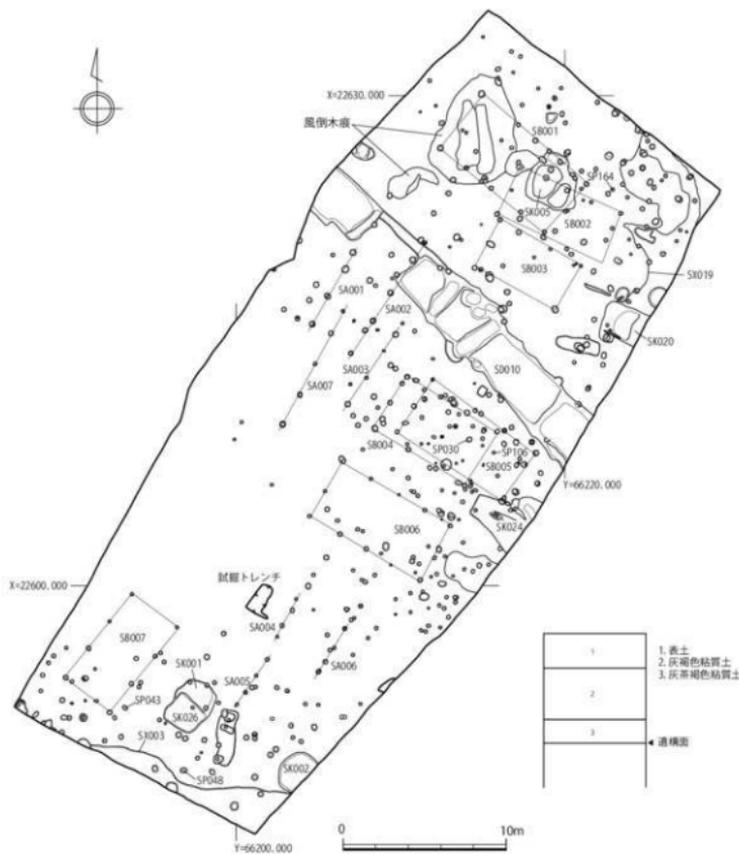
第14章 第13地点の調査

第1節 調査の内容

丹生川坂ノ市条里跡第13地点は、大分市大字丹川字原にあたり、丹生川左岸、北東方向に伸びる標高約30mの台地の先端部に位置している。台地東側と丹生川の間には沖積地が広がり、台地と沖積地の比高差は約10mである。第13地点北東約150m先の沖積地には、第3地点（縄文時代・中世）、第6地点（中世）が位置する。

調査区の全形はおおむね長方形をなし、調査面積は1007㎡である（第425図）。

第13地点の調査概要について触れる。現況は水田層で、第3層（灰茶褐色粘質土）直下が遺構面にあたる（第425図基本層序図を参照）。地山は黄褐色粘質土である。遺構面の検出標高は約20mで、おおむね平坦であるが、調査区東側および南側では旧地形の緩斜面を検出している。



第425図 第13地点調査区全体図 (1/300)・基本層序図

第13地点の遺構は、柱穴のほか、掘立柱建物7棟（SB001～007）、柵跡7列（SA001～007）、溝状遺構1条（SD010）、土坑6基（SK001・002・005・020・024・026）を検出している。これらの遺構は中世を主体とするものである。調査区を横断するSD010は、調査区北側に隣接する「堀ノ内」地名から、屋敷地に付随する関連施設が示唆される。掘立柱建物・柵跡を含め、遺跡の性格が目される。次節では各遺構の詳細について記す。

第2節 遺構と遺物

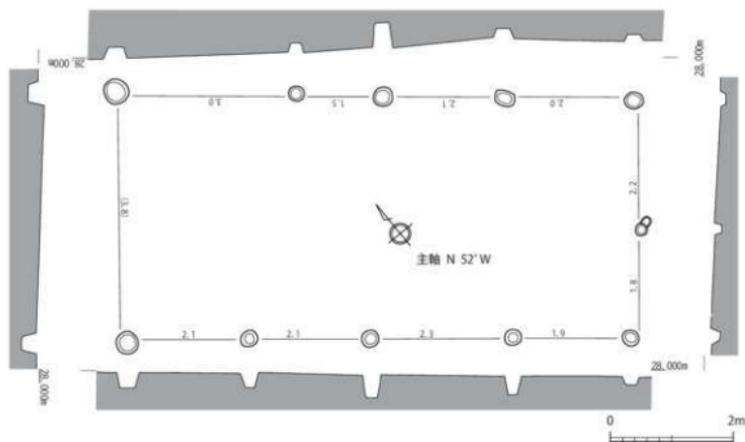
(1) 中世

イ. 掘立柱建物

掘立柱建物は調査区全体にわたって7棟を確認した。おおむね梁行2間、桁行4間規模を主体とし、SB007をのぞく他の建物は東西に長軸をもつ。

SB001 (第426図)

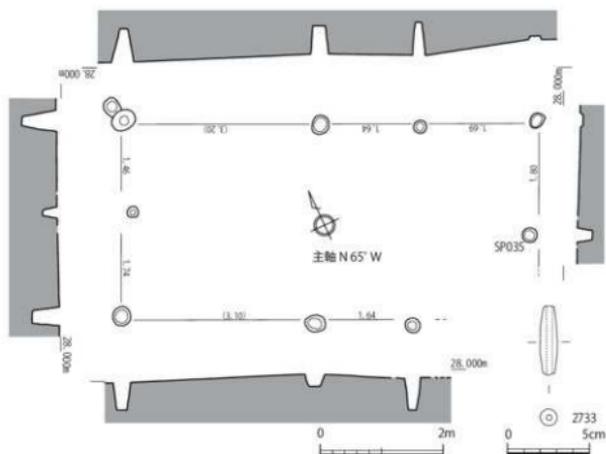
調査区北側で検出した、東西方向に長軸をもつ建物である。SB002、SK005と重複し、SB001・002はSK005が埋まったのち掘り込まれたものと考えられる。梁行2間、桁行4間の規模で、身舎面積は33.15㎡である。SB005とともに規模が大きい建物である。北側の桁行柱穴の間隔が南側と比べるとまばらである。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第426図 SB001遺構実測図 (1/80)

SB002 (第427図)

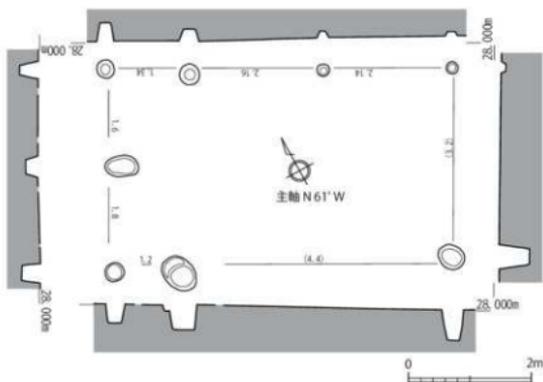
調査区北側で検出した、東西方向に長軸をもつ建物である。SB002、SK005と重複し、SB001・002はSK005が埋まったのち掘り込まれたものと考えられる。建物東と南側の柱穴を確認することができなかったが、梁行2間、桁行3間の規模をもつものと考えられ、身舎面積は14.09 + a㎡である。南側に隣接するSB003と主軸が類似しており、軒を連ねた建物であろうか。2733 (SP035) は土師質土器の管状土錘である。



第 427 図 SB002 遺構・出土遺物実測図 (1/80・1/3)

SB003 (第 428 図)

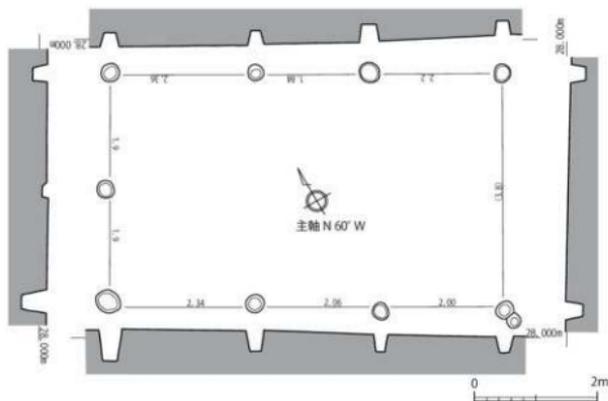
調査区北側で検出した、東西方向に長軸をもつ建物である。建物北側に SB002 が隣接する。建物東と南側の柱穴を確認することができなかったが、梁行 2 間、桁行 3 間の規模をもつものと考えられ、身舎面積は 18.55 m² である。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第 428 図 SB003 遺構実測図 (1/80)

SB004 (第429図)

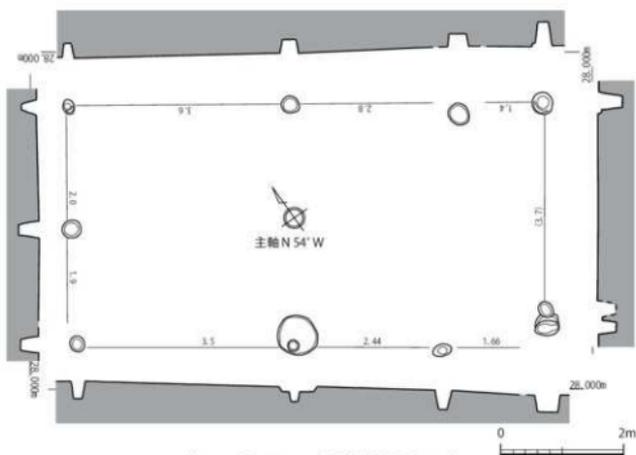
調査区中央、SD010の南側で検出した東西方向に長軸をもつ建物である。SB005と重複する。梁行2間、桁行3間の規模で、身舎面積は24.32㎡である。南北の桁行側の柱穴はおおむね等間隔に配する。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第429図 SB004遺構実測図(1/80)

SB005 (第430図)

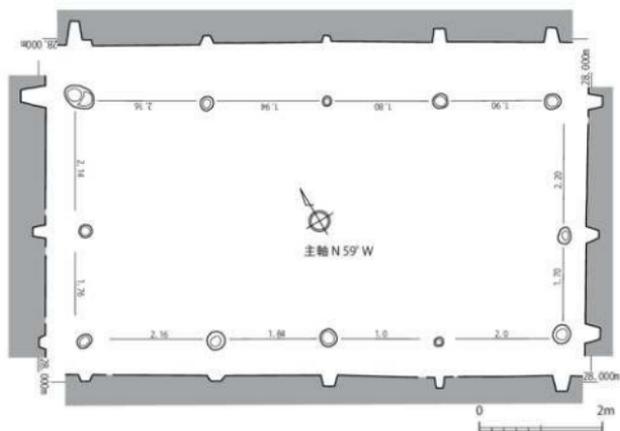
調査区中央、SD010の南側で検出した東西方向に長軸をもつ建物である。SB004と重複する。梁行2間、桁行3間の規模で、身舎面積は29.26㎡である。SB001とともに規模が大きい建物である。南北とも桁行側の柱穴間隔がまばらである。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第430図 SB005遺構実測図(1/80)

SB006 (第431図)

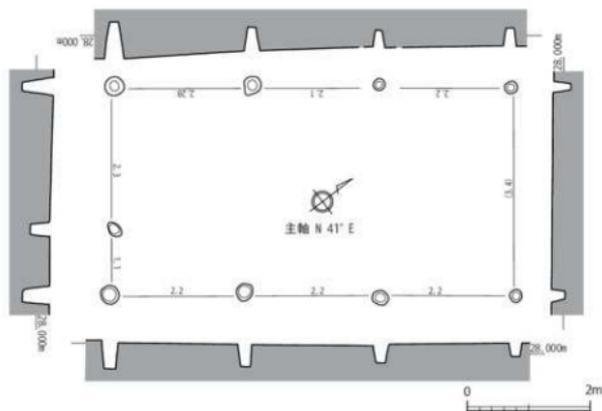
SB004・005の南側で検出した東西方向に長軸をもつ建物である。梁行2間、桁行4間の規模で、身舎面積は28.86㎡である。梁行・桁行とも整然と柱穴を配する。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第431図 SB006 遺構実測図 (1/80)

SB007 (第432図)

調査区南西隅で検出した南北方向に長軸をもつ建物である。梁行2間、桁行4間の規模で、身舎面積は22.41㎡である。南北の桁行側の柱穴はおおむね等間隔に配する。柱穴からの出土遺物はみられなかった。



第432図 SB007 遺構実測図 (1/80)

ロ. 柵跡

柵跡は7列を確認した。すべて南北に長軸をもつ。SD010付近に位置するSA001～003・007と、調査区南東に位置するSA004～006のまとまりがみられる。SD010、建物との関連が注目される。

SA001 (第433図)

調査区中央、SD010の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。東側にはSA002・007が隣接するが、そのうちSA002とはほぼ並ぶ。SA001・002付近はSD010が途切れる箇所にあたり、入り口部分を想定することができる。SD010との関連が示唆される。SA001のピットは深さにバラツキがみられる。

SA002 (第433図)

調査区中央、SD010の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。西側にSA001・007が、東側にSA003が位置する。ピットはおおむね等間隔に配する。2744(SP114)は龍泉窯系青磁碗で、口縁部が外反する。

SA003 (第433図)

調査区中央、SD010の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。西側にSA001・002・007が、東側にSB004・005が位置する。ピットの深さ、間隔にバラツキがみられる。

SA004 (第433図)

調査区南東、SB006の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。周辺にはSA005・006が位置しており、配置状況から関連性が考えられる。ピット間の間隔は短い。

SA005 (第433図)

調査区南東、SB006の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。周辺にはSA004・006が位置しており、配置状況から関連性が考えられる。ピット間の間隔は短く、深さにバラツキがある。

SA006 (第433図)

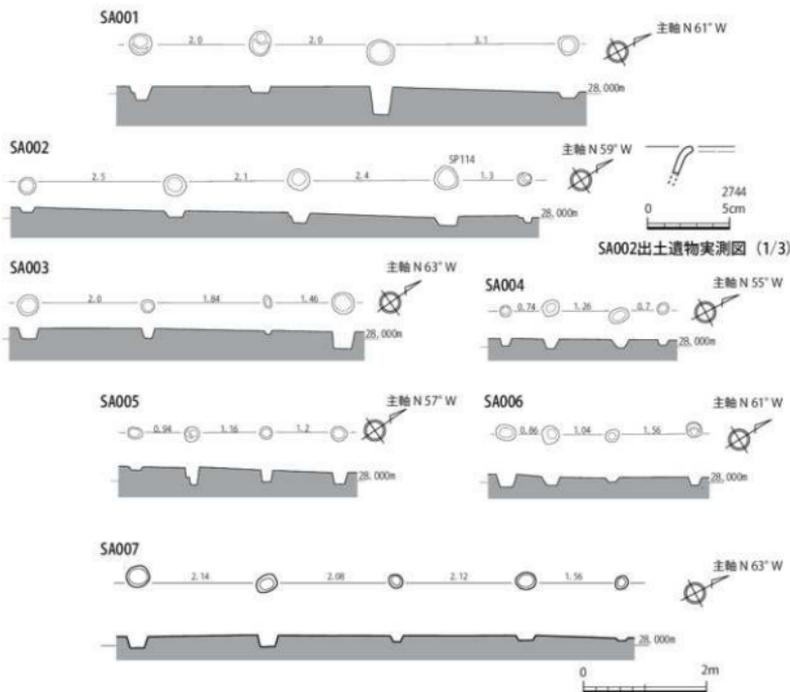
調査区南東、SB006の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。周辺にはSA004・005が位置しており、配置状況から関連性が考えられる。ピット間の間隔は短く、深さにバラツキがある。

SA007 (第433図)

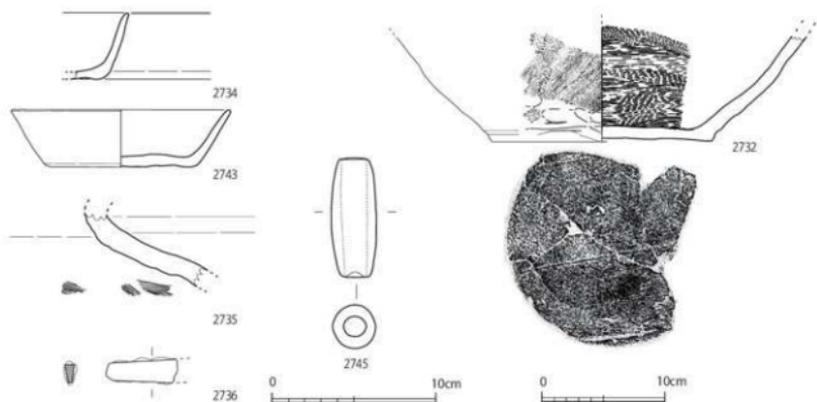
調査区中央、SD010の南側で検出した南北方向に主軸をもつ柵跡である。西側にSA001、東側にSA002・003が隣接する。SD010周辺の柵跡のうち、最も南側に位置する。ピットの深さにバラツキがあるものの、等間隔に配する。

ハ. その他のピット (第434図)

ここでは他のピットから出土した遺物について触れる。2734(SP043)・2743(SP106)は土師質土器環である。2734は底部から垂直気味に立ち上がり、器高が高い。2743は体部が斜上方に開く。2735(SP048)は瓦質土器甕である。頸部は緩やかに立ち上がる。胴部内面は雑なハケメ調整が認められる。2732(SP030)は瓦質土器甕の底部である。外面体部は縦方向、内面体部は横方向の緻密なハケメ調整を施す。出土状況は正位置に配していることから埋裏の可能性が考えられる。遺構上面は後世による削平がみられ、詳細な性格は把握することができなかった。2745(SP164)は土師質土器の管状土錘である。完形品で長さ7.3cmを測り、大振りである。2736(SP048)は鉄製品で刀子と考えられる。下端が欠損している。



第 433 図 SA001 ~ SA007 遺構実測図 (1/80)



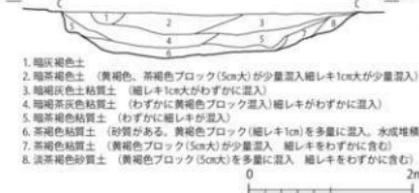
第 434 図 ビット出土遺物実測図 (1/3・1/4)

二. 溝跡

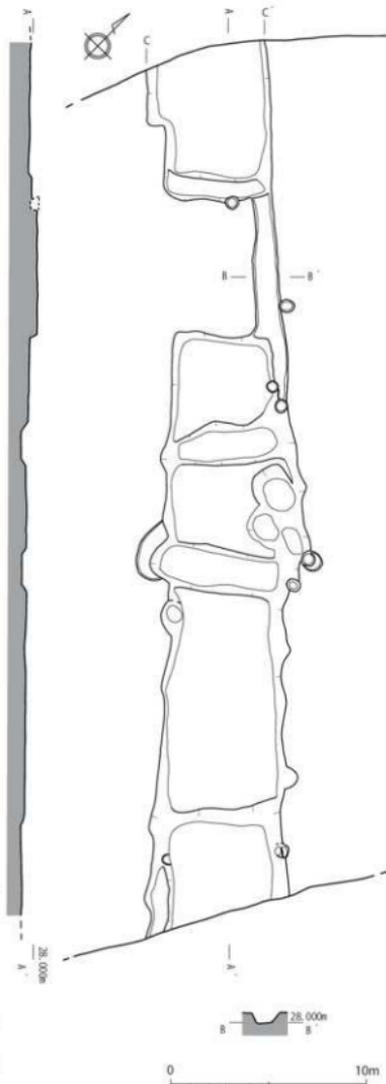
SD010 (第 435・436 図)

SD010は調査区北側に位置し、調査区をほぼ直線的に横断する溝である。溝は、長さ47+a m、幅2~8m、深さ0.1~0.5m、断面逆台形の規模である。溝の平面はおおむね長方形をなすが、北側では幅8mの窪み部分のみられ、これを境として東西に分断している。溝の底面はいくつかのテラス状の窪みをもち、西から東へ緩斜している。窪み部分では幅1m、深さ0.2m程度の掘り込みがみられるが、側溝的な性格をもつものであろう。溝は土層観察から複数段階の埋没過程が看取されるが、遺物の出土状況から大きな時期幅はないものと考えられる。総じて溝の埋土には拳大の礫が多く混入している。東西に分断する溝の性格から、入り口を有する屋敷などの区画性をもった溝と考えられる。

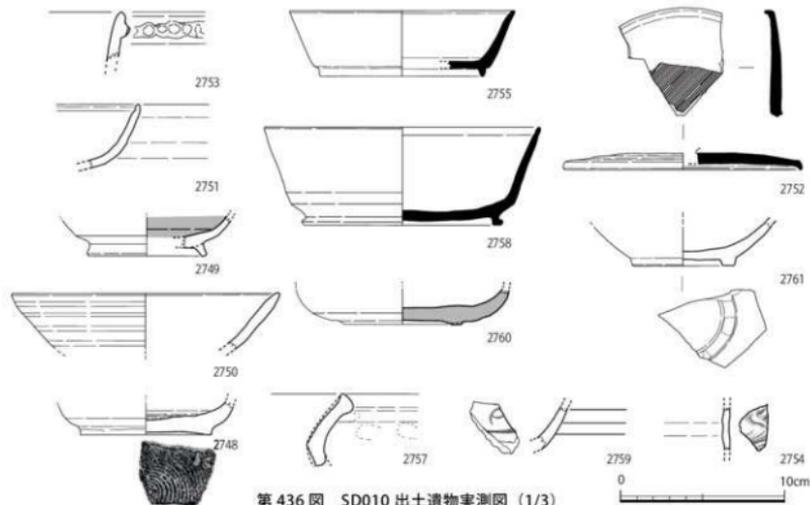
第436図はSD010出土遺物で、中世のほか、弥生土器、古代遺物がみられる。2753は弥生土器の深鉢で、口縁部に刻み目突帯が付く。2751は土師器環である。口縁部内側に明瞭な段が付く。2755・2758は須恵器の高台付き環である。2758は大振りな器形である。口縁部内側に段が付き、外面体部下半に強い屈曲がみられる。口径16.8cm、器高6cm、高台径12cmを測る。2752は須恵器蓋である。天井部内面に一定方向の磨減が認められ、転用碗として利用したものであろう。2749は黒色土器A類碗で、高台が高く外方へ張る。2748・2750は土師質土器環である。2750は口縁部端部がすぼまる。2760は瓦器碗で、矮小な高台が付く。2757は瓦質土器甕で、口縁部がくの字状に外反し端部が肥厚する。2761は越州窯系青磁碗である。断面方形の高台で、見込・高台裏に目跡が残る。軸調は淡緑灰色をおびる。2759は龍泉窯系青磁碗で、内面に花文を施す。2754は青白磁の梅瓶である。外面はヘラ状工具による文様を施す。全面施釉で、軸調は淡青白色をおびる。



1. 暗灰褐色土
2. 暗茶褐色土 (黄褐色、茶褐色ブロック(5cm)が少量混入。細レキ1cm大が少量混入)
3. 暗褐色土・粘質土 (細レキ1cm大がわずかに混入)
4. 暗茶褐色粘質土 (わずかに黄褐色ブロック混入) 細レキがわずかに混入)
5. 暗茶褐色粘質土 (わずかに細レキが混入)
6. 茶褐色粘質土 (砂質がある。黄褐色ブロック(細レキ1cm)を多量に混入。水成性塊)
7. 茶褐色粘質土 (黄褐色ブロック(5cm)が少量混入。細レキをわずかに含む)
8. 淡茶褐色粘質土 (黄褐色ブロック(5cm)を多量に混入。細レキをわずかに含む)



第435図 SD010 遺構実測図 (1/250・1/60)

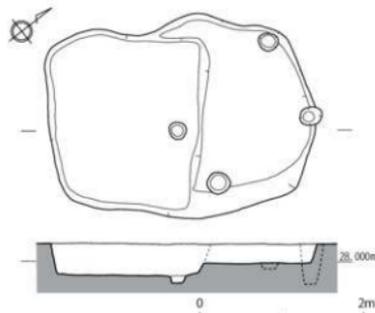


第436図 SD010 出土遺物実測図 (1/3)

ホ、土坑

SK001 (第437図)

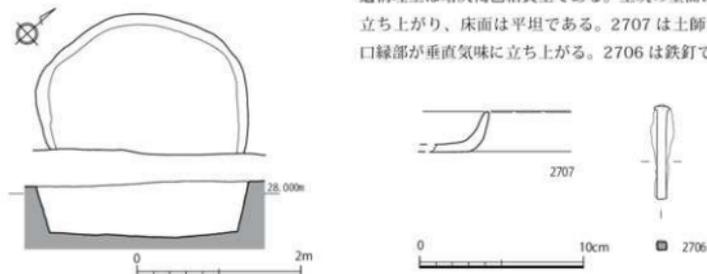
調査区南側に位置し、SK026 に切られる円形土坑である。SK001 の規模は長軸 1.9m、短軸 0.7 + α m、深さ 0.2m である。SK026 は平面が方形をなし、長軸 2.1m、短軸 1.9m、深さ 0.3m を測る。SK001 の床面は平坦で、北・南隅にピットが掘られている。土師質土器片が出土したが細片のため図化しえなかった。SK026 は出土遺物が皆無であり、時期は不明である。



第437図 SK001・026 遺構実測図 (1/60)

SK002 (第438図)

調査区南東に位置する円形土坑である。土坑の東側は調査区外に延びる。土坑の規模は径 2.3m、深さ 0.4m を測る。遺構埋土は暗灰褐色粘質土である。土坑の壁面は垂直気味に立ち上がり、床面は平坦である。2707 は土師質土器坏で、口縁部が垂直気味に立ち上がる。2706 は鉄釘である。

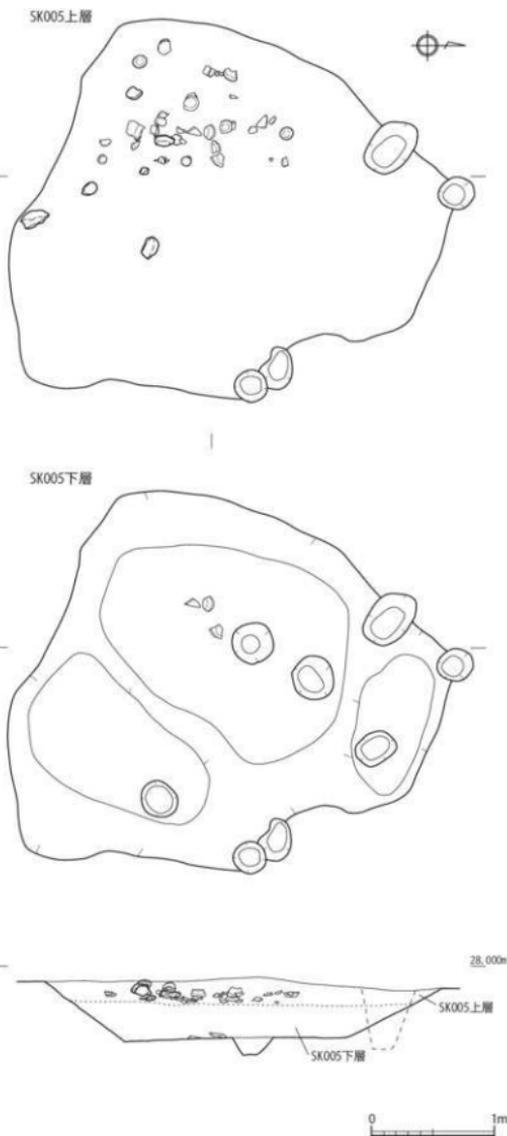


第438図 SK002 遺構・出土遺物実測図 (1/60・1/3)

SK005 (第439～441図)

SK005はSD010の北側にあたり、不整形を呈する土坑である。SK005の規模は長軸3.5m、短軸3m、深さ0.6mを測る。壁面は斜上方に立ち上がる。床面は平坦で、2基のピットが掘られる。土坑の北、南側に幅0.5～0.8mのテラスが付く。土坑埋土は暗灰黒褐色粘質土(上層)、暗灰褐色粘質土(下層)に分層ができる。上層では炭化物を多量に含み、土師質土器が多く出土している。とくに、土坑西側を中心に土師質土器の個体が正位置、うつ伏せの状態で出土している。これらは整然とした配置ではなく、まばらである。下層は炭化物を含まず、上層と比べると出土遺物が僅少である。床面に土師質土器環(2737・2740)、瓦質土器甕(2739)が出土している。出土遺物から上・下層とも大幅な時期差はないものと考えられる。

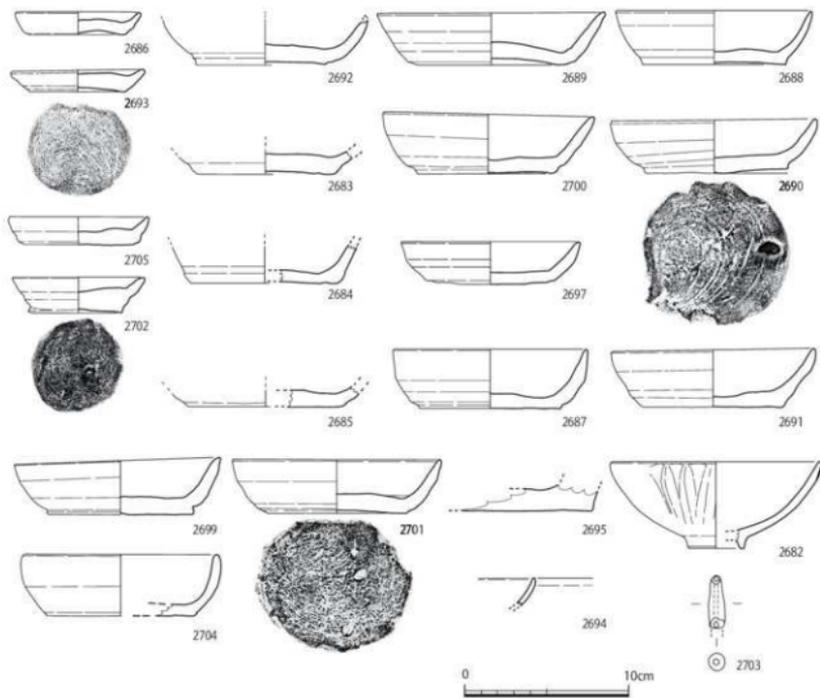
第440図はSK005上層の出土遺物である。土師質土器、中国産青磁、土鍾がみられる。土師質土器小皿・環の外周底部は糸切り離しのちなデである。2686・2693・2702・2705は土師質土器小皿である。2686・2693・2705は底部から斜上方に開く。2702は他の小皿と比べると、底部が厚い。体部下半から斜上方に開く。小皿の法量は口径7.5～7.9cm、器高1.3～2.2cm、底径5.4～5.7cmである。2683～2685・2687～2692・2697・2699～2701・2704は土師質土器環である。2689・2700は底部から直線的に伸びる。その他の環は底部から内彎気味に開き、口縁部が垂直気味に立ち上がる。2704は底部から大きく内彎する。環の法量は、口径12.2～12.8cm、器高3.3～3.7cm、底径8.4～8.9cmである。2695は土師質土器甕である。2694は白磁の



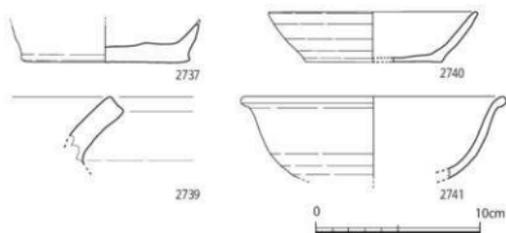
第439図 SK005 遺構実測図 (1/40)

皿で、口唇部がすばまる。2682は龍泉窯系青磁の碗である。小振りの器形をなし、外面体部に竊蓮弁文を施す。2703は土師質土器の管状土錘である。

第441図はSK005下層の出土遺物である。2737・2740は土師質土器環である。2740は底部の器壁が薄手である。体部は直線的に伸びる。2739は瓦質土器甕である。口縁部外面端部は面取りを施す。2741は龍泉窯系青磁碗である。体部はまるみをもち、口縁部が短く外反する。口縁部端部はまるみをおびる。



第440図 SK005上層出土遺物実測図(1/3)



第441図 SK005下層出土遺物実測図(1/3)

SK020 (第442図)

SK020はSD010の北側、調査区東端に位置する土坑で、東側は調査区外に延びる。平面は方形をなし、長軸 $2.4 + a$ m、短軸2.1m、深さ0.5mを測る。土坑は西から東に向かって緩斜しており、ほぼ旧地形に対応している。土坑中央に幅1.1mのテラスが付く。土坑南側にピットなどの遺構がみられるが、SK020と関連するものと考えられる。

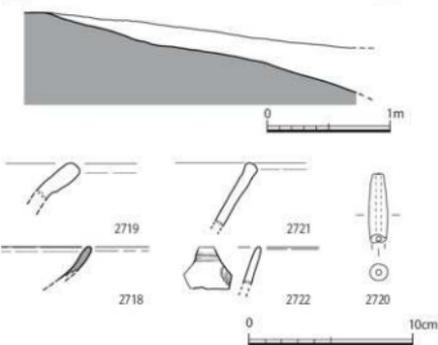
2718は瓦器椀で軟質焼成をおびる。口縁部端部はまるい。2719は土師質土器鍋である。2721は瓦質土器鉢である。体部は直線的に伸び、口縁部端部が肥厚気味である。2722は龍泉窯系青磁碗で、内面に花文を施す。2720は土師質土器の管状土鉢である。



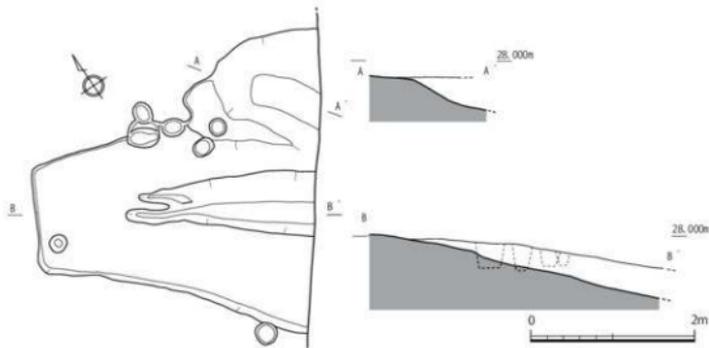
SK024 (第443・444図)

SK024はSD010の南側、調査区東端に位置する土坑で、東側は調査区外に延びる。平面は不整形を呈し、長軸 $2.9 + a$ m、短軸 $2.6 + a$ m、深さ0.5mを測る。SK020と同様に、西から東に向かって緩斜しており、ほぼ旧地形に対応している。土坑中央の底面には幅0.6mの溝状の掘り込みがみられる。溝状遺構の掘り込みから道路状遺構に関連するものと考えられる。

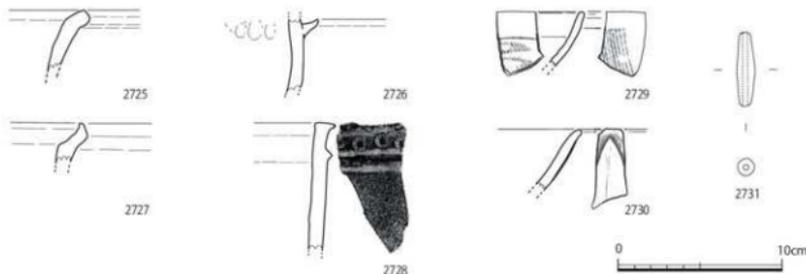
2725・2727は瓦質土器鍋である。2725は口縁部が短く外反する。2727は口縁部端部が内方に立ち上がり、口唇部はすぼまる。2726は瓦質土器の釜か。鈔部が上方に立ち上がる。2728は瓦質土器の火鉢(深鉢)である。口縁部端部が外方に突出す



第442図 SK020 遺構・出土遺物実測図 (1/40・1/3)



第443図 SK024 遺構実測図 (1/60)



第444図 SK024 出土遺物実測図 (1/3)

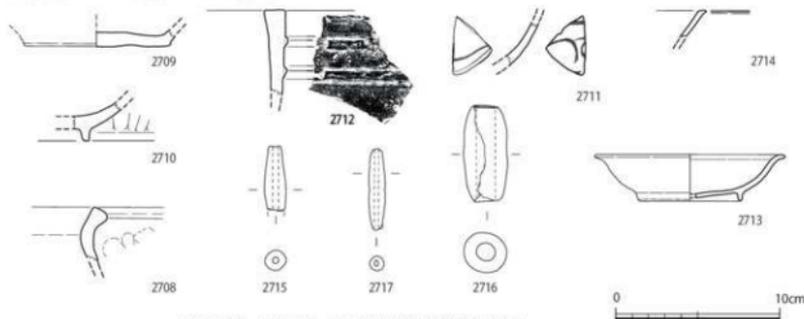
る。口縁部下に断面三角形の突帯が付く。口縁部と突帯間に菊花文単体スタンプが等間隔に施される。なお口縁部端部が外方に突出するタイプは津久見市津久見門前遺跡に出土事例がある。2729は同安窯系青磁碗である。外面に櫛描文、内面に幾何学文を施す。2730は龍泉窯系青磁碗で、外面に鎊蓮弁を施す。

ヘ、包含層 (第425・445図)

包含層出土遺物について触れる。包含層は調査区南側(SX003)、北東側(SX019)の旧地形が緩斜する部分で確認している。いずれも埋土は暗灰褐色粘質土である。第445図は包含層出土遺物で、2708～2710はSX003、その他はSX019出土である。

2709は土師質土器坏で、外面底部は系切り離しのちナデである。2708は土師質土器裏である。口縁部は緩やかに外反し、端部が肥厚する。2710は龍泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁を施す。

2712は瓦質土器の火鉢(深鉢)である。口縁部内面は内傾する。口縁部下に突帯が2条付き、突帯間に菊花文スタンプが等間隔に付く。2711は龍泉窯系青磁碗で、内外面にヘラ状工具による花文?を施す。2714は白磁碗で、端反口縁をなす。2713は白磁皿である。口縁部が緩やかに外反し、体部中位は張り気味である。高台は低い。全面施釉である。2715～2717は土師質土器の管状土鍾である。2716は他の土鍾と比して大振りである。長さ5.9cm、幅2.6cmを測る。



第445図 SX003・019 出土遺物実測図 (1/3)

第3節 小結

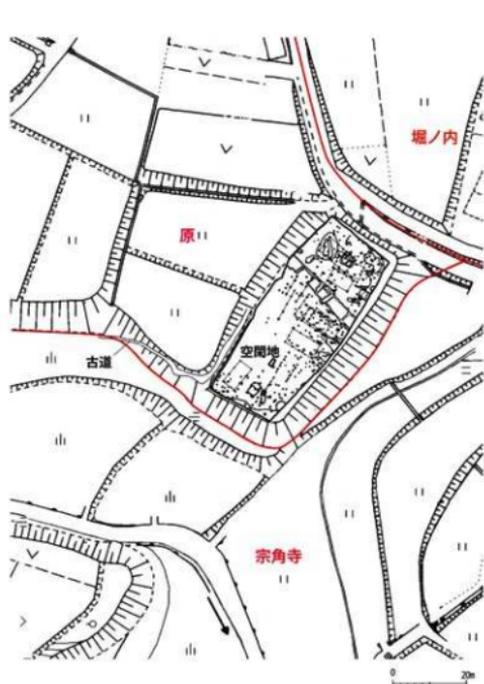
第13地点では中世を中心とする包含層・遺構を確認することができた。遺構はピットのほか、掘立柱建物、柵列、溝、土坑を検出している。ここでは調査で分かったことを述べ、まとめたい。

調査区中央で検出したSDO10はその規模および入り口の検出から、屋敷地に関連する区画性をもつ溝とみられる。溝の東側は調査区外に延びるため詳細は不明であるが、旧地形の斜面に接するものと考えられる。遺物は

古代土器の流れ込みがみられるが、14世紀前半～中頃には埋まったものと考えられる。土師質土器がまとまって出土したSK005は、器形・法量からSD010とほぼ同時期とみられる。遺物の出土状況から廃棄土坑であろう。

掘立柱建物・柵跡は調査区全体にわたって検出されたが、出土遺物僅少のため詳細な時期把握は困難である。ここでは現況周辺図（第446図）を参考にその様相について考えたい。第13地点北側の里道を字境として、北に字堀ノ内が位置する。現在の里道は戦後に造られている。調査区南側は崖面が急峻であるが、周辺の踏査で崖面斜面に沿う状況で古道を確認しており、台地下の沖積地につづくようである。台地上の古道が位置する調査区西側部分は遺構密度が低く、空閑地が広がっている。SD010南側の建物・柵跡は空閑地周囲に展開している。また空閑地の北側はSD010の入り口部分にあたるようである。古道の敷設時期は不明であるが、空閑地と古道、空閑地と建物・SD010の配置状況から有機的関連が示唆されるものである。検出した建物はSB007をのぞくと東西に主軸をもち、建物主軸方位はN50°W、N60°Wに分かれるようである。主軸方位から時期的変遷が示唆されるが、遺構配置の状況を鑑みると、SD010の開削時期の前後に建物群が展開したものと考えられる。

遺跡は14世紀代を中心に展開したとみられる。北側の字堀ノ内が示すように、第13地点は屋敷地に関連する遺構群の可能性が高いものである。遺跡東側の沖積地には14～15世紀代の第6地点が位置している。中世後半期の丹生川上流域における沖積地と台地の土地利用の検討が今後の課題である。



第446図 遺跡全体図及び現況周辺図 (1/1000)

第15章 試掘調査の結果

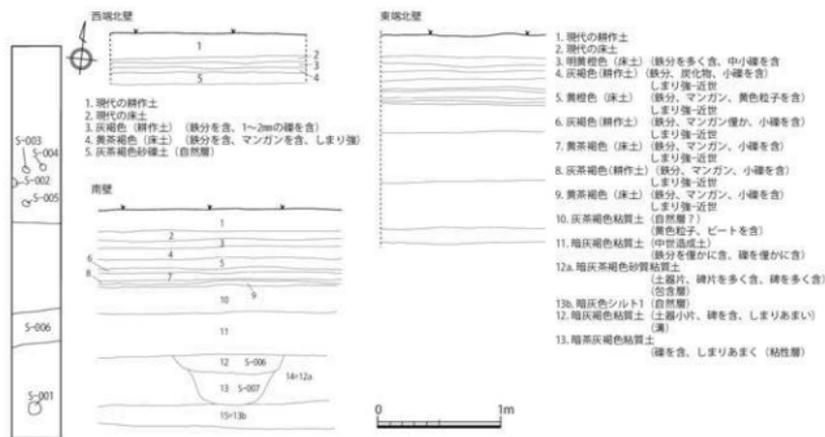
第1節 概要

試掘調査は、本事業が本格的に工事着工前の平成15年度末から、平成18年度末までの農閑期に行った。試掘調査範囲は圃場整備対象地域全域に及んでいる。また平成17・18年度は文化財課国庫補助事業で実施している。

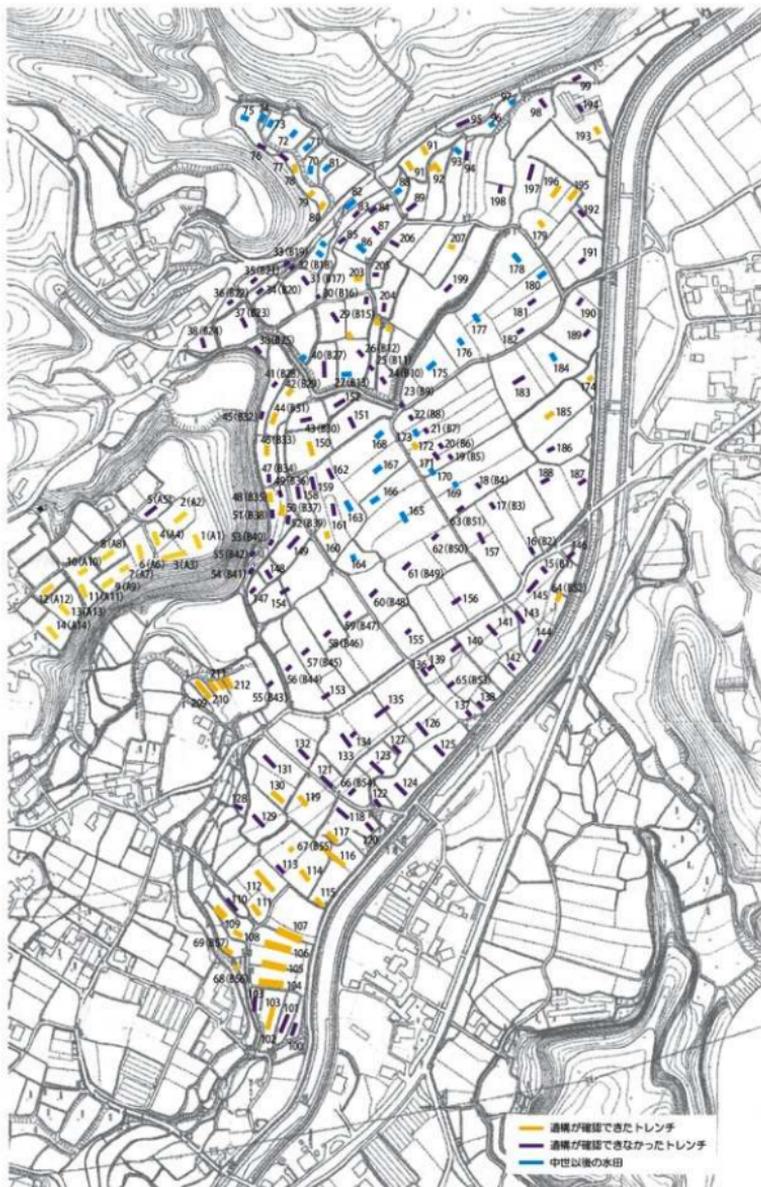
試掘調査結果は第447図～第449図に示しているとおりである。遺跡が確認された箇所は県中部振興局と大分市耕地地林業課・文化財課の三者で協議を重ねながら、できるだけ遺構保存できるように努めた。しかしながら遺跡が確認された一部は水掛りなどの関係から遺構保存が極めて難しいことから、本発掘調査への移行を余儀なくされた。

この章では、試掘調査で出土した遺物の一部を本調査に移行していない箇所を中心に掲載している。トレンチ(以下T〇〇)は、T90・91・172・185は詳細なトレンチ平面図も併せて掲載している。なお、遺物の詳細な記述は遺物観察表を参照してほしい。

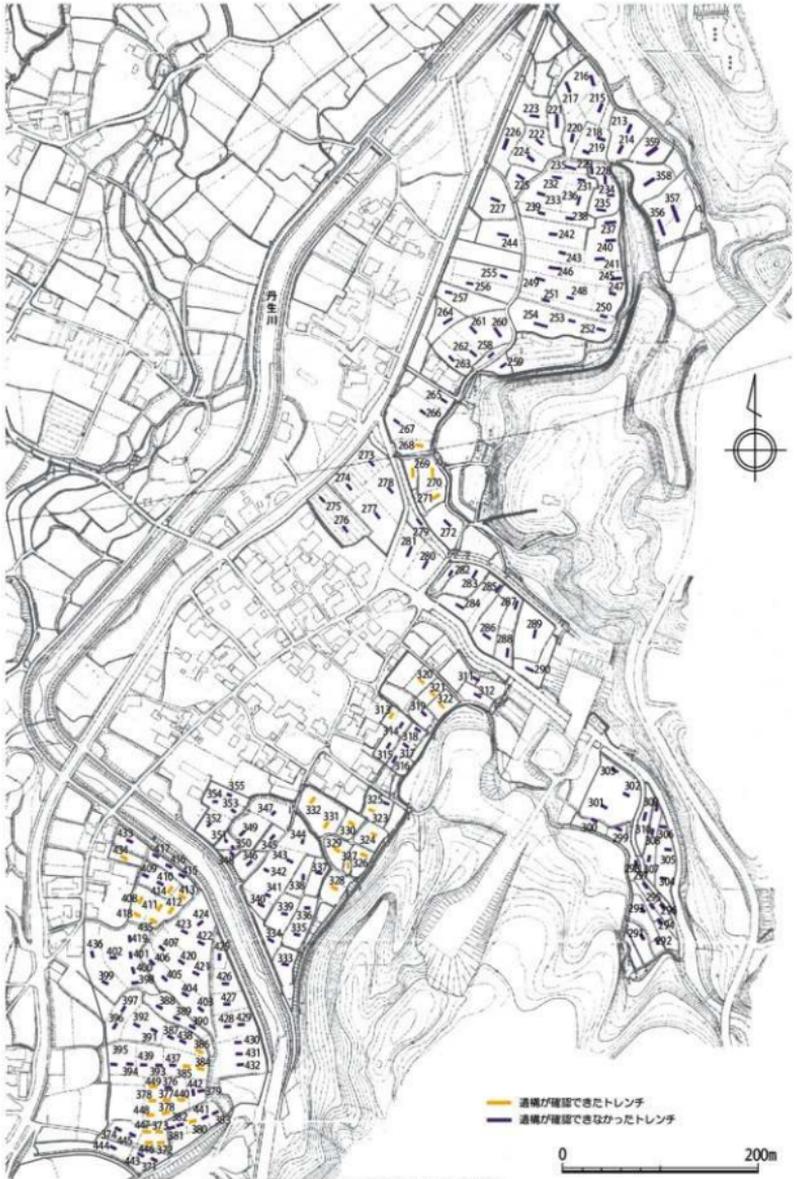
T90・91(第447・450・451・452図)は、第8調査地点の隣接地に位置している。T90・91は古代9～10世紀くらいを中心とした土師器・須臾器が出土した。これは第8地点の遺構時期とほぼ重複するものであり第8地点の遺構群がその周辺まで展開していることは間違いない。特にT90のS1は井戸と推定され、素掘りの掘り方であった。またT90のSD6とT91検出の溝は関連がある可能性がある。T90検出のピットは掘立柱建物跡などを構成するものか。T172(第454図)は縄文時代晩期末～弥生時代早期の遺物包含層を検出した。下黒野式深鉢などを中心に出土した。下黒野式土器深鉢は第3地点と第10地点で、墓と推定される埋蔵として検出している。T185(第455・456・457図)は丹生川に隣接する西岸にあたる。検出遺構は溝状遺構と土坑を検出した。S1はP1・2・3で取り上げを行い同一遺構である。S1出土遺物は259・268・270・264・261・263・272・274などである。S2は溝状遺構で、P1は273である。S3は断面のみで観察でき、レンズ状床面をもつ土坑と



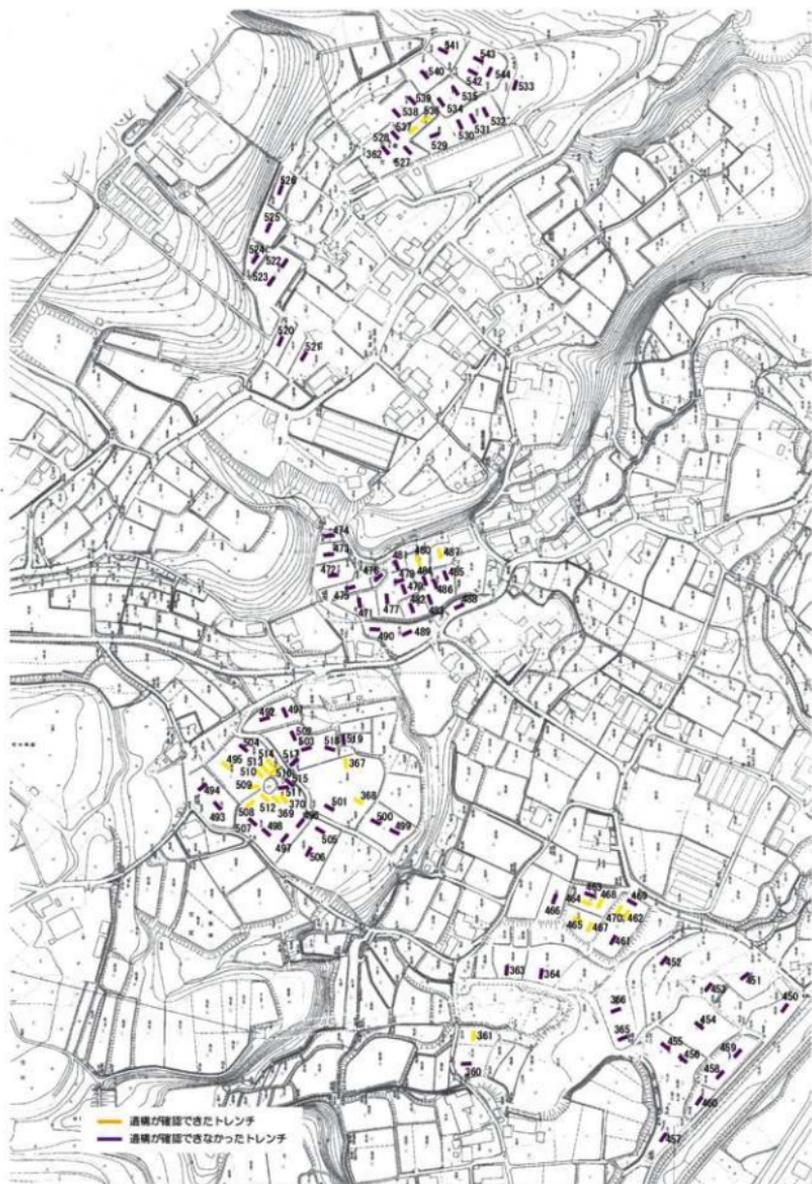
第447図 T90遺構実測図(1/40)



第 448 図 トレンチ配置図

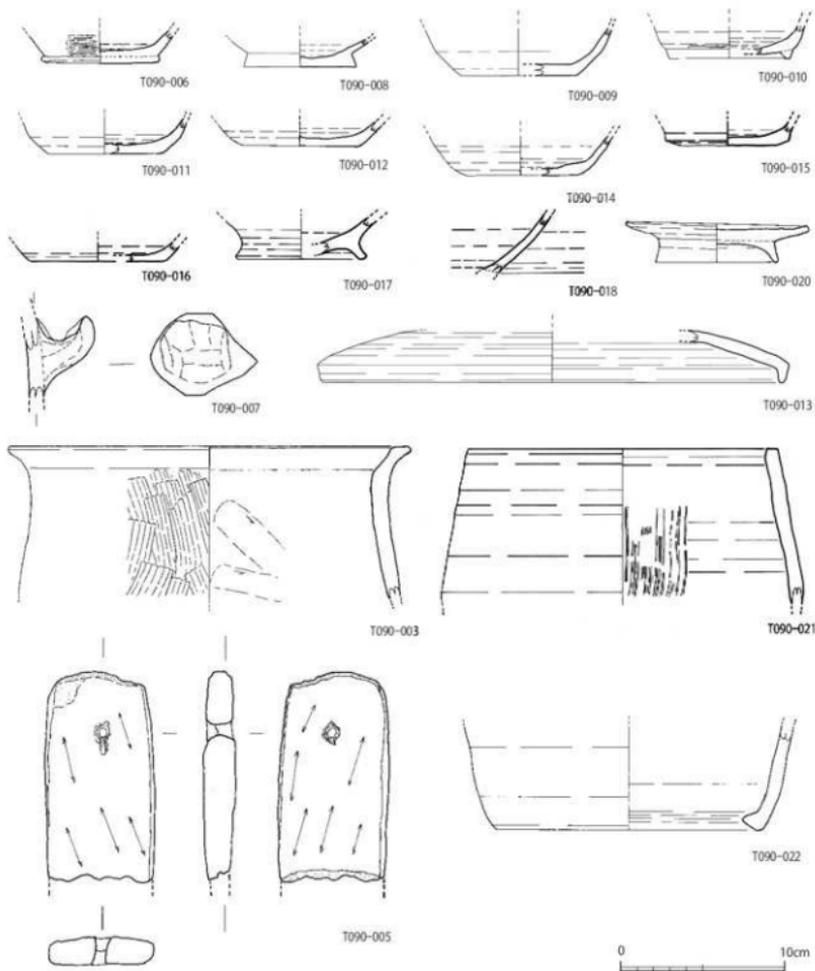


第 449 図 延命寺地区周辺トレンチ状況

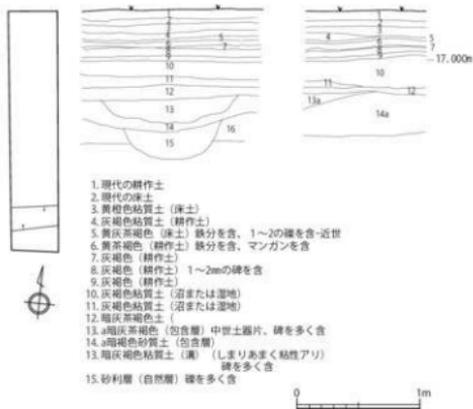


第450図 野間地区周辺トレンチ状況

考えられ、埋土は焼土塊が充填されており、その下部に土器が積み重なった状態で出土した。出土遺物は 265・266・267 などである。古墳時代前期の遺物群であろう。T117 は第 6 地点周辺に位置し、土製の仏像片などが出土し、出土状況から中世に伴うものである。T143 は縄文時代包含層出土で、213 は西平式土器、204 や 205 は三万田式であろう。縄文時代後期から晩期中心の包含層と考えられる。T174 からは、古墳時代後期頃の土師器、須恵器が多量に出土した。今回の調査でこの古墳時代後期の遺物が出土したのはこの周辺だけである。

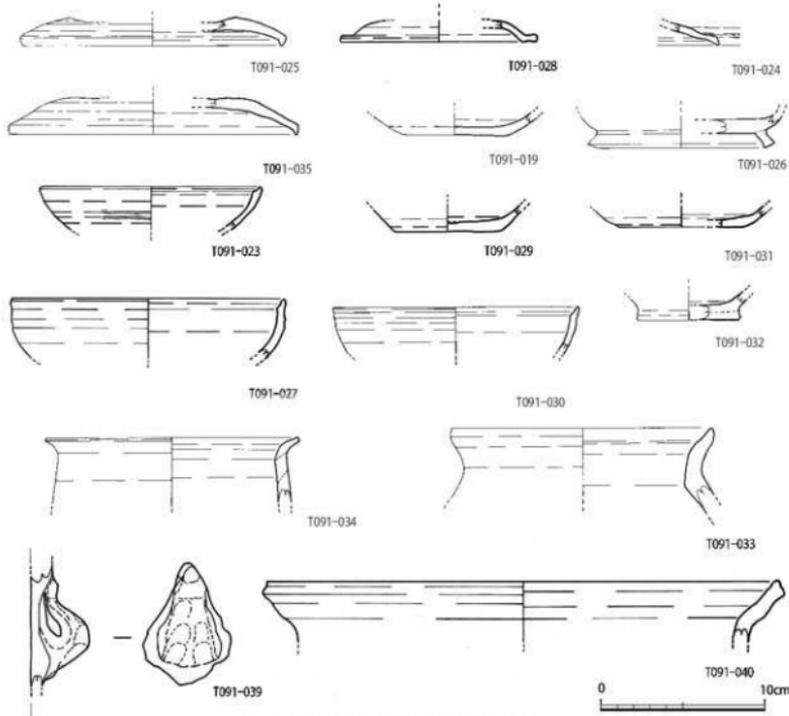


第 451 図 T90 出土遺物実測図 (1/3)

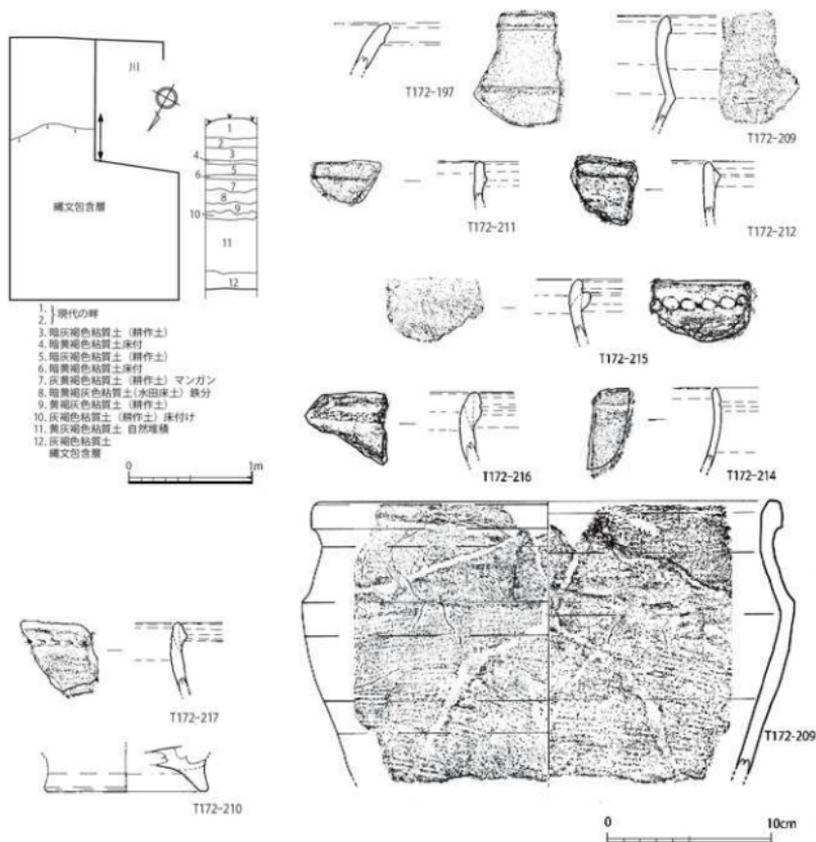


1. 現代の耕作土
2. 現代の雑土
3. 黄褐色粘質土 (雑土)
4. 灰褐色粘質土 (耕作土)
5. 黄灰茶褐色 (雑土) 鉄分を含む、1~2の礫を含む-近世
6. 黄灰褐色 (耕作土) 鉄分を含む、マンガンを含む
7. 灰褐色 (耕作土)
8. 灰褐色 (耕作土) 1~2mmの礫を含む
9. 灰褐色 (耕作土)
10. 灰褐色粘質土 (沼または湿地)
11. 灰褐色粘質土 (沼または湿地)
12. 暗灰茶褐色土
13. a暗灰茶褐色 (包含層) 中世土器片、礫を多く含む
14. a暗褐色粘質土 (包含層)
13. 暗灰褐色粘質土 (礫) (しまりあまく粘性アリ) 礫を多く含む
15. 砂利層 (自然層) 礫を多く含む

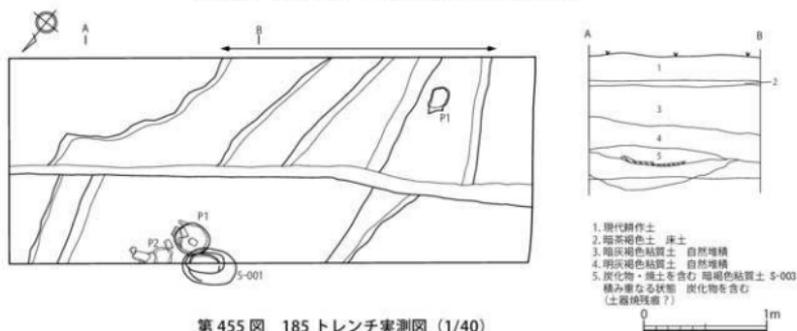
第 452 図 T91 遺構実測図 (1/40)



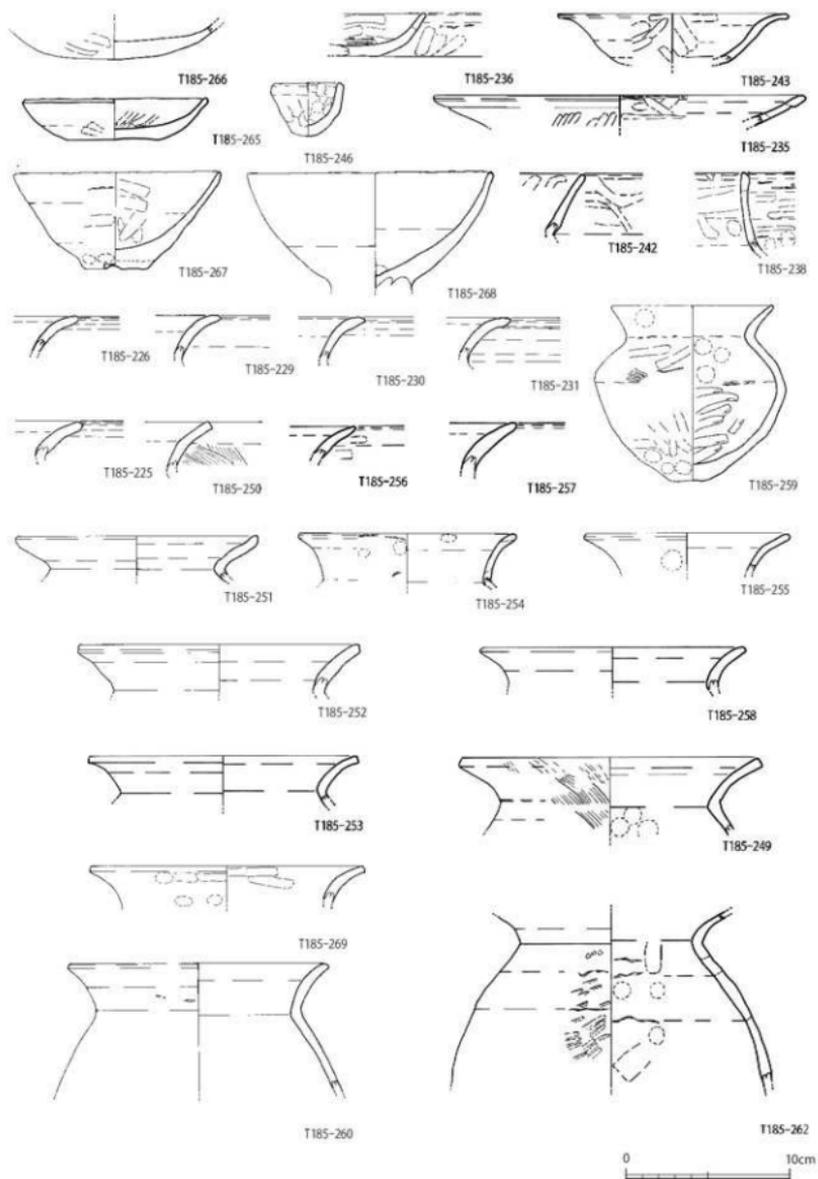
第 453 図 T91 出土遺物実測図 (1/3)



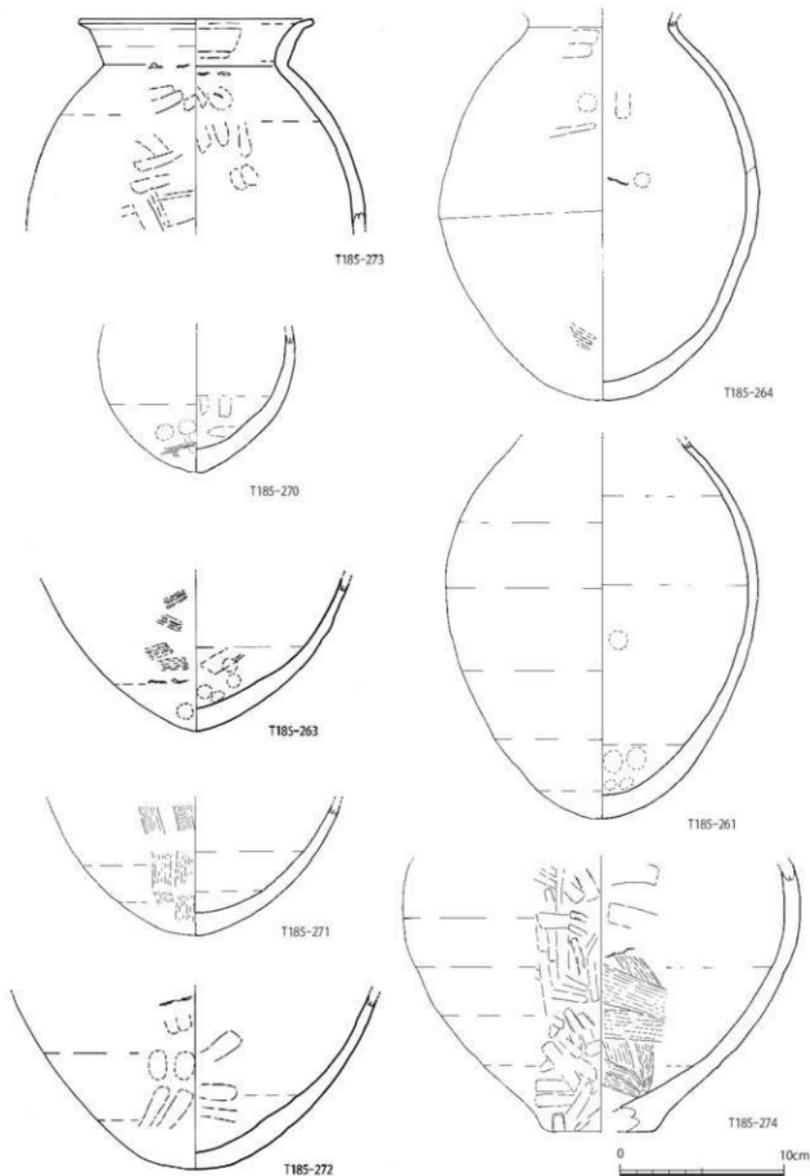
第 454 図 T172 遺構・出土遺物実測図 (1/40・1/3)



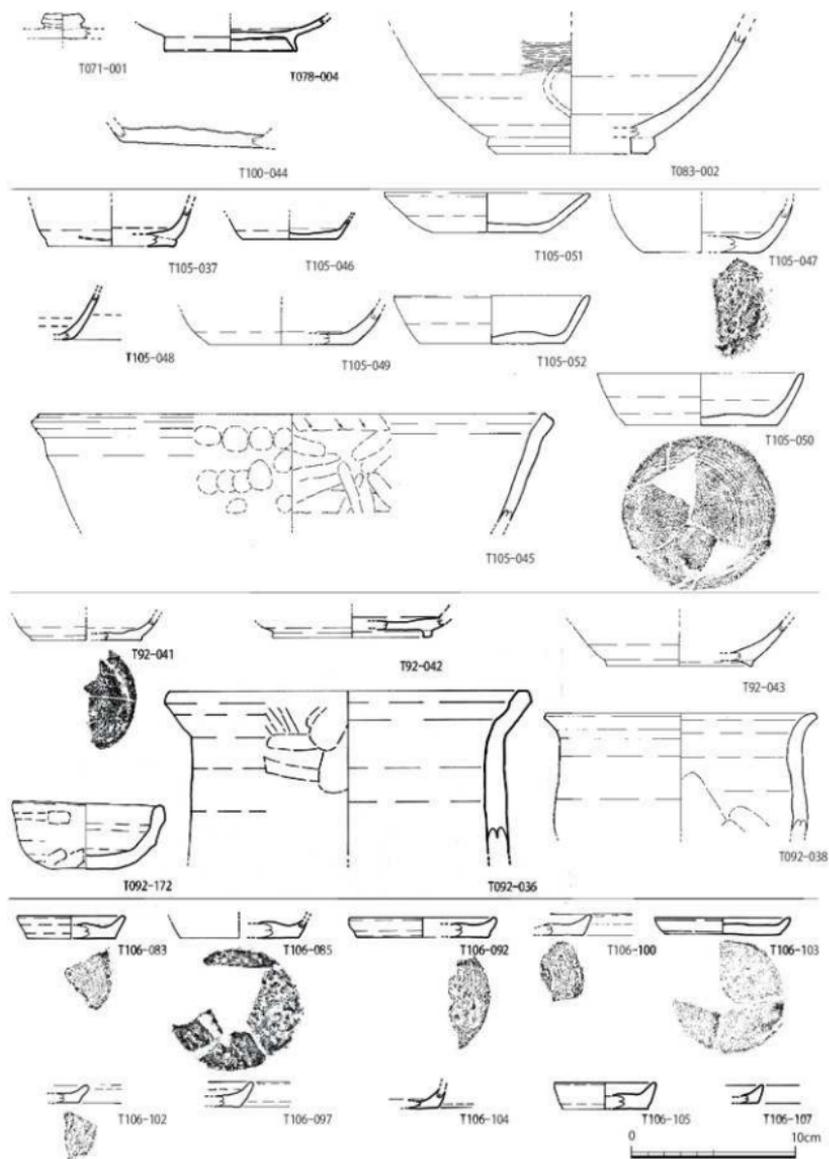
第 455 図 185 トレンチ実測図 (1/40)



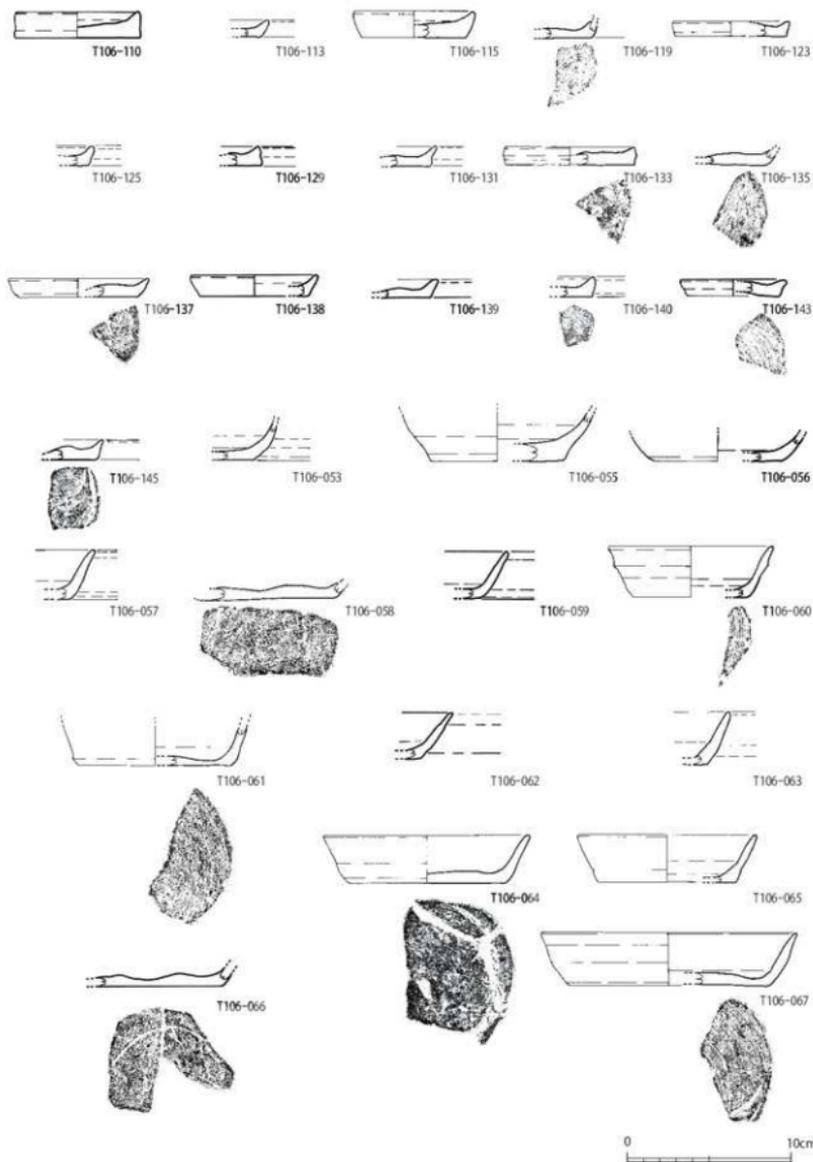
第 456 図 T185 出土遺物実測図① (1/3)



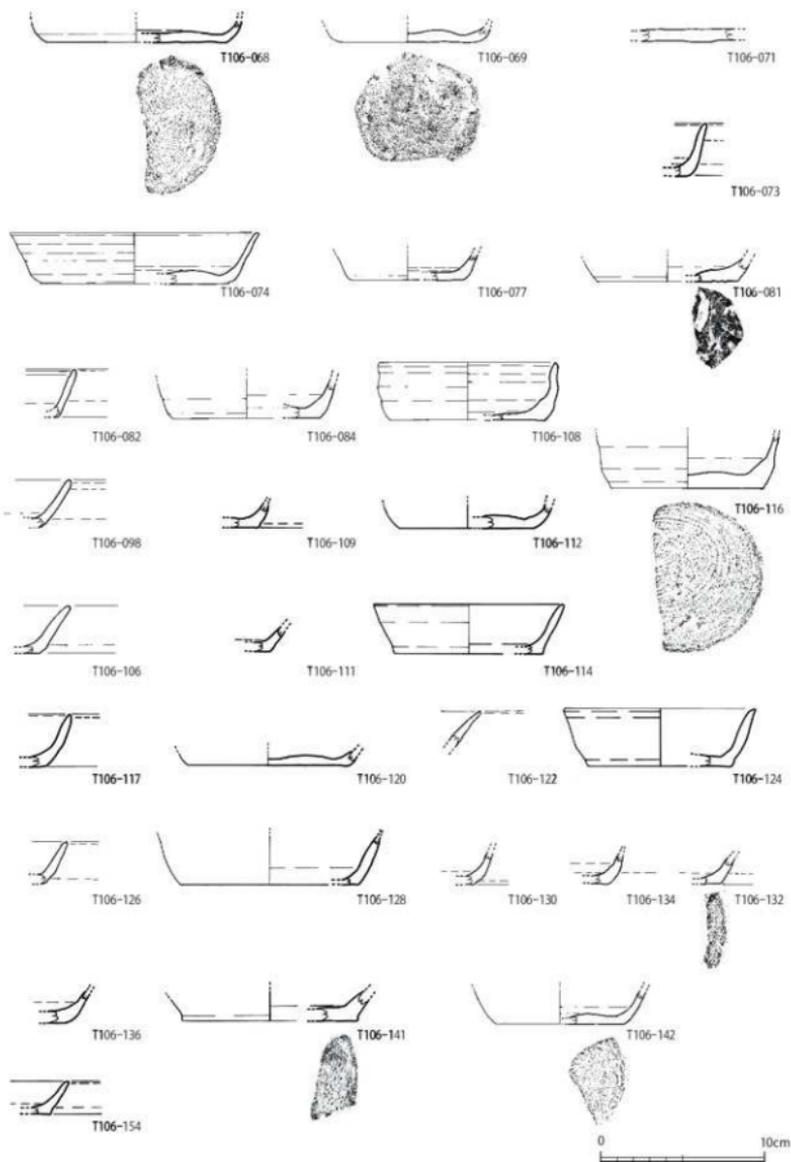
第457圖 T185出土遺物実測図②(1/3)



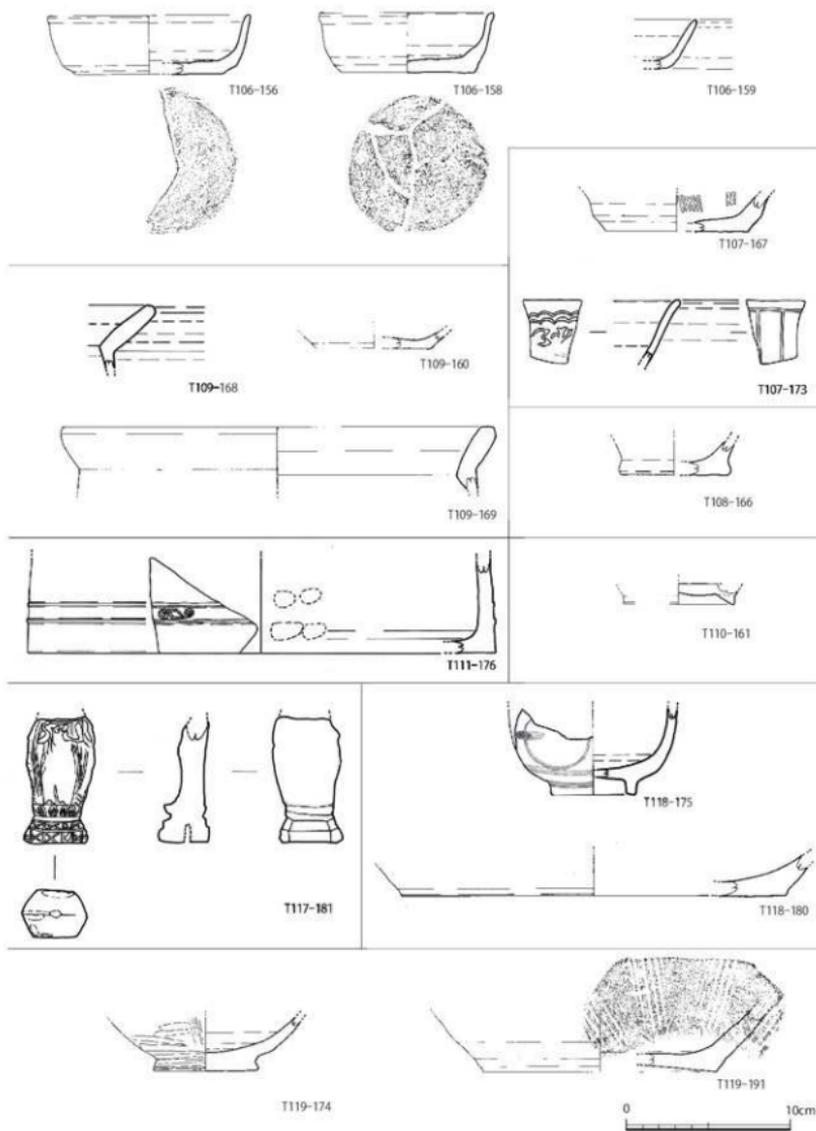
第458図 その他のトレンチ出土遺物実測図①(1/3)



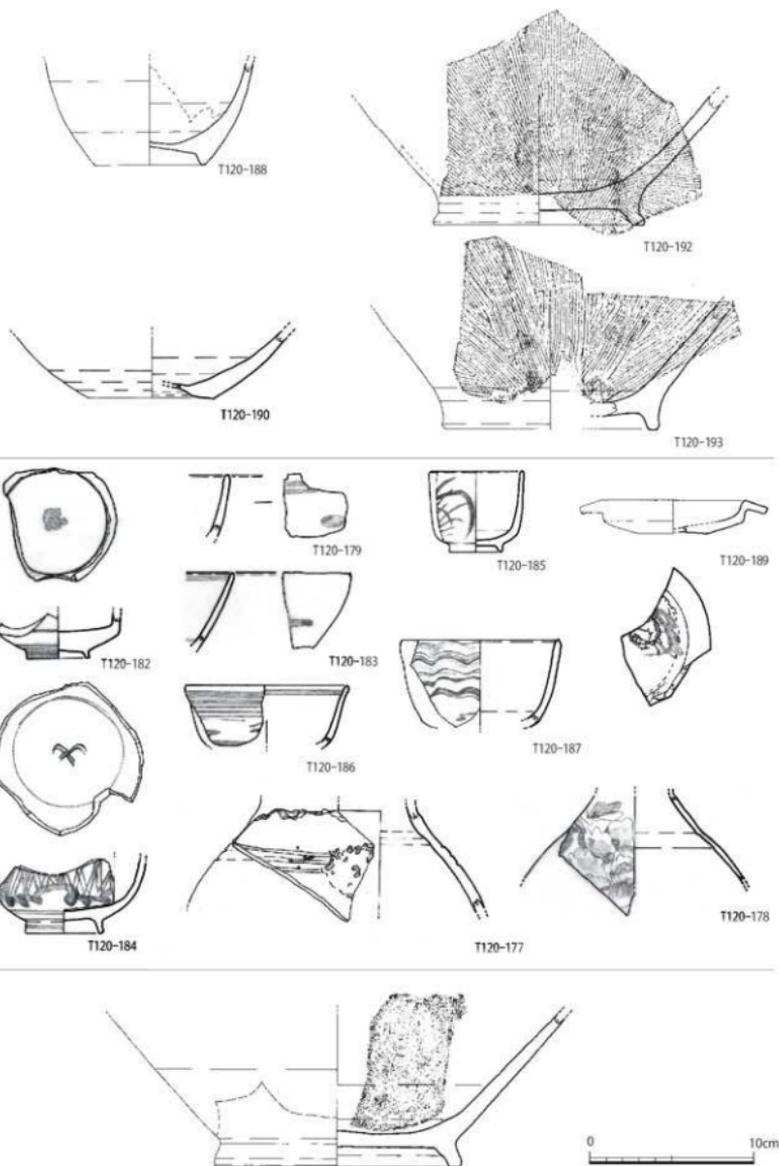
第 459 図 その他のトレンチ出土遺物実測図② (1/3)



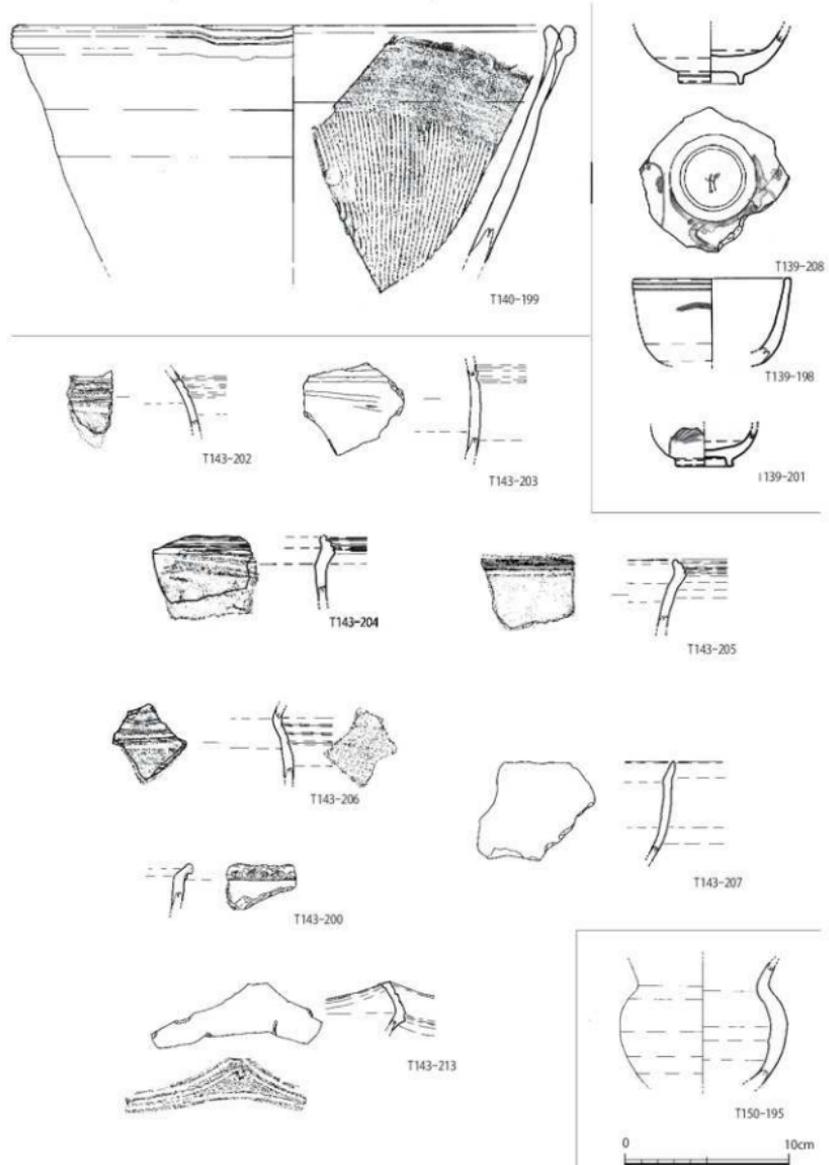
第 460 図 その他のトレンチ出土遺物実測図③ (1/3)



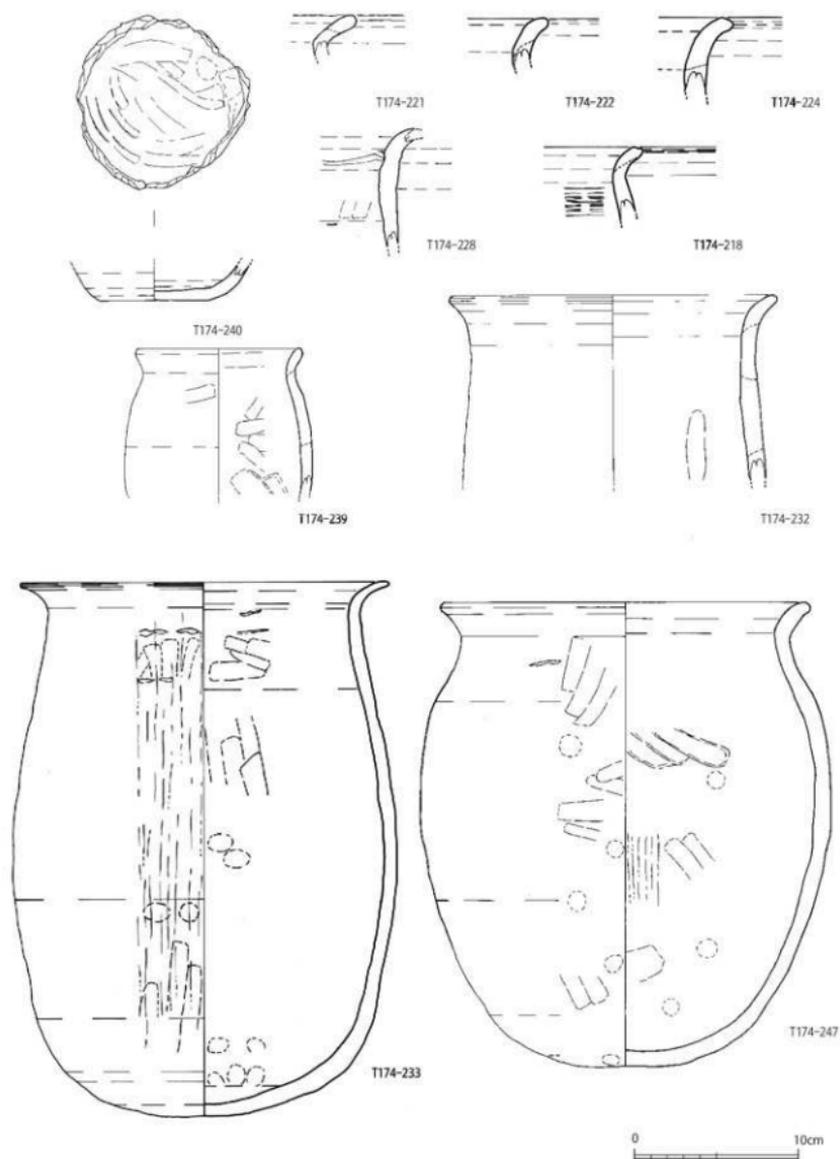
第 461 図 その他のトレンチ出土物実測図④ (1/3)



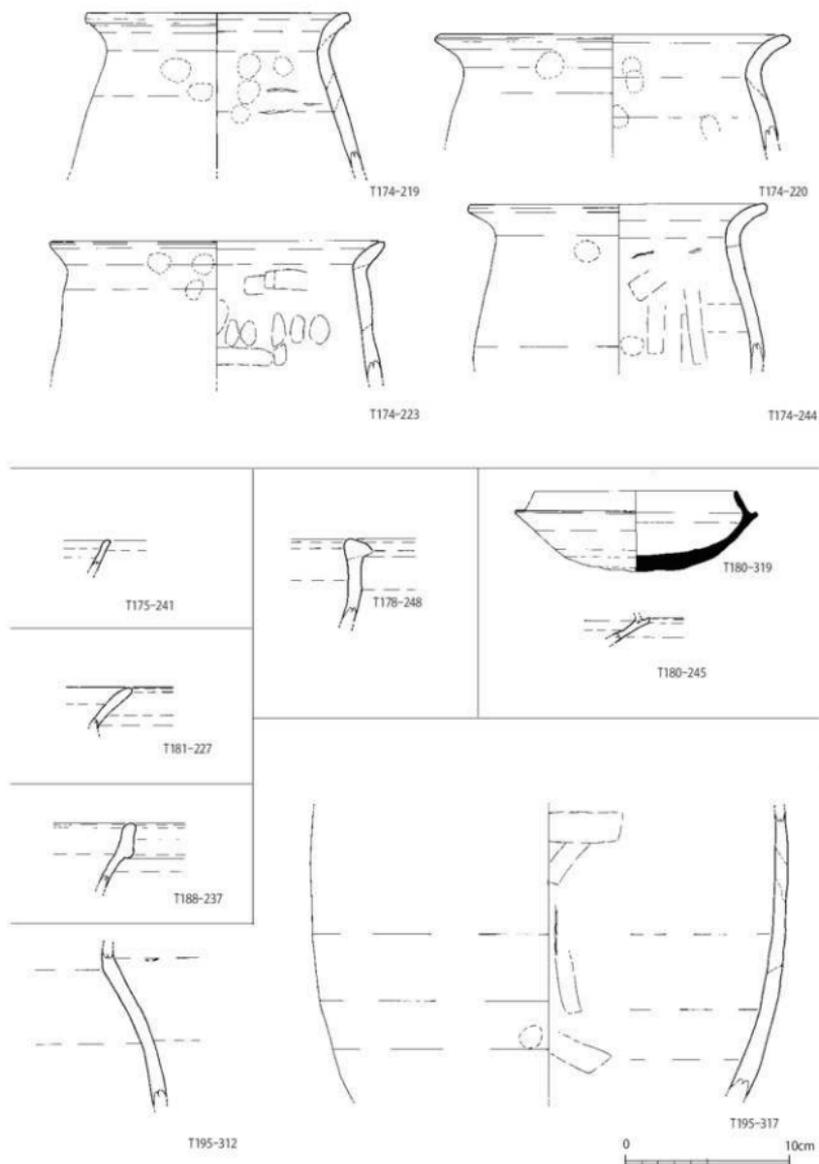
第462図 その他のトレンチ出土遺物実測図⑤ (1/3)



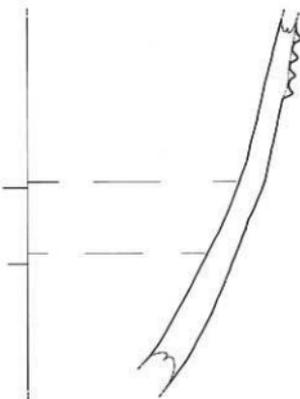
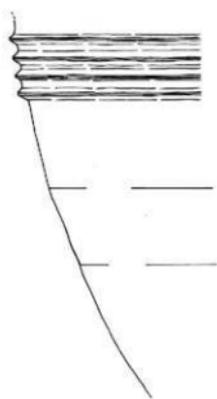
第 463 図 その他のトレンチ出土遺物実測図⑥ (1/3)



第 464 図 その他のトレンチ出土遺物実測図⑦(1/3)



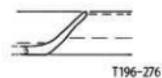
第465図 その他のトレンチ出土遺物実測図® (1/3)



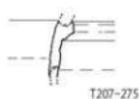
T195-318



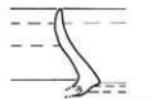
T196-277



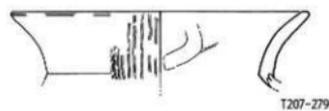
T196-276



T207-275



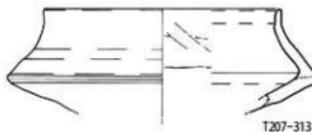
T207-278



T207-279



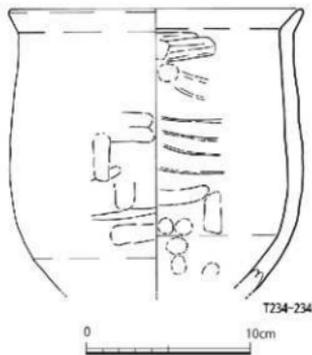
T207-316



T207-313



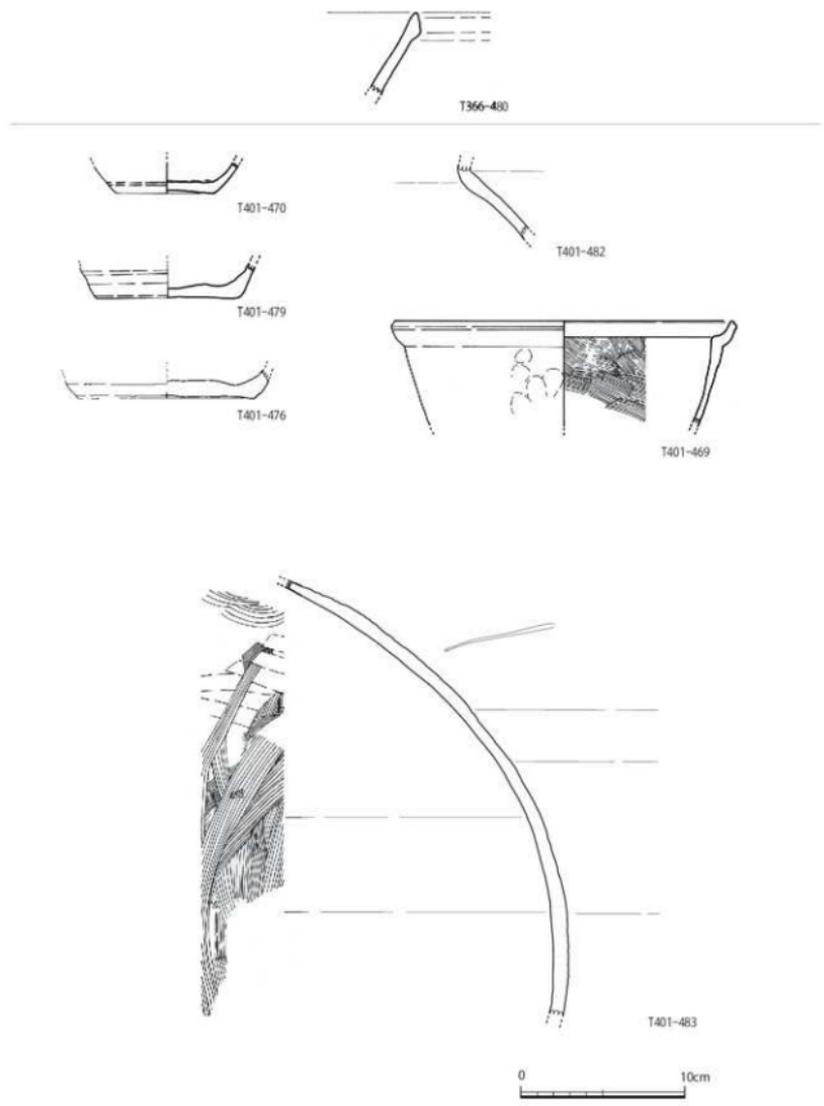
T207-315



T234-234

0 10cm

第 466 図 その他のトレンチ出土遺物実測図⑨ (1/3)



第 467 図 その他のトレンチ出土遺物実測図⑩ (1/3)



T90 S1



T102(字「宗角寺」内)推定井戸跡



T106(NSJ6に収録)



T111(NSJ6に収録)



T172



T185

第16章 考察

第1節 丹生郷・丹生庄域の出土遺物分類・編年

(1) 縄文時代～古代の土器

大分市東部に位置する丹生川流域では、これまで発掘調査の件数はわずかであったが、近年大規模事業が入るようになり、発掘調査件数は増加している。この節では、これまでの発掘調査成果を踏まえながら、今回の丹川地区で出土した土器の分類・編年を試み、丹生川流域に展開する遺跡の性格解明に迫りたい。対象地域としては、丹生川中上流域の古代は丹生郷、中世でいう丹生庄に該当する地域を中心とした土器を中心に取り上げていくが、隣接する郷域や庄域で良好な資料などは、部分的に使用している箇所もある。対象とした時代は縄文時代～中世までを取り扱う。分類・編年図で使用している記号は、ローマ数字は大分類の時代・時期をさし、スモールのアルファベット、アラビア数字の順に中・小時期として細分類している。

縄文時代（I期）は丹生台地上で縄文時代早期などに推定される遺物も出土しているが、小片のためここでは取り上げなかった。今回の調査では縄文時代後晩期の遺物・遺構が確認された。

I-a期は小池原上層式に位置づけられる。ただし、出土状況が明確に確認できていないことを付け加えておく。

I-b期はR21・R213の資料が該当する。R21はT449の出土で、コウゴー松式深鉢である。R213はNSJT143の出土資料で、R213は西平式土器浅鉢片である。

I-c期はNSJ10SK11の埋裏の資料である。突帯文が付く前段階であり、胴部から口縁部にかけての屈曲部に粘土痕跡及び調整痕をのこす。またこの期の埋裏は底部を大きく打ち欠く行為を行っており、その点で後述する晩期末の埋裏とは異なる。

I-d 1期はNSJT172の資料をあてた。包含層からの出土である。出土資料は鉢であり、R215以外は口縁部外面に無刻目突帯をめぐらす。R215は刻目突帯文である。よってこの包含層は刻目文と無刻目突帯文土器が混在している。この期は縄文時代晩期末（弥生時代早期）に該当しよう。

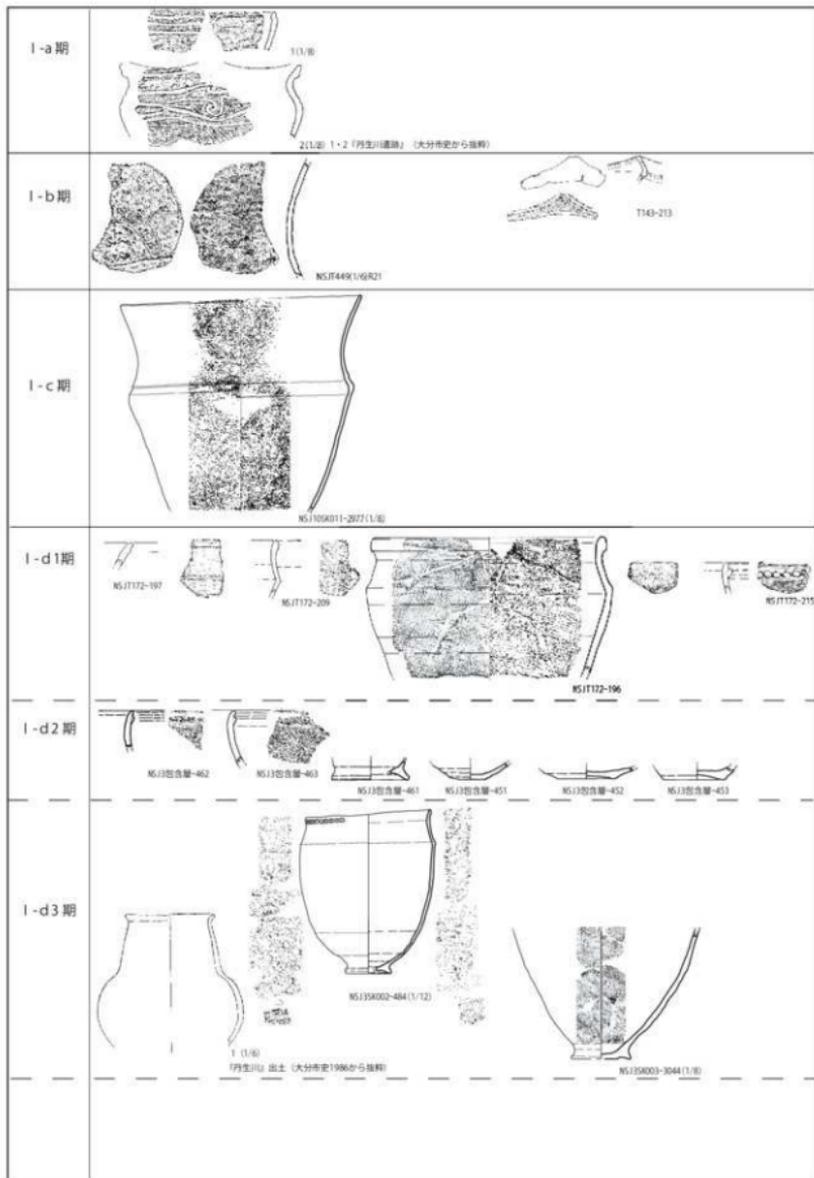
I-d2期はNSJ3 包含層資料を充てる。この包含層はI-d3期の埋裏が出土した遺構に切られている。I-d 1期の無刻目突帯文と刻目突帯文土器が混在する文化期からこの期の刻目突帯文単純期に続くと思われる。

I-d3期はR484とR3044の資料及び丹生川遺跡出土壺をあてる。R484はNSJ3SK02、R3044はNSJ3SK01の出土で、両遺物ともに埋裏遺構の性格である。R484は底部に穿孔を1つあけている。口縁部外面には刻目突帯文をめぐらし、底部は上げ底である。いわゆる下黒野式である。一方で、R3044には意図的な打ち欠きなどは認められない。I-c期の資料と比べると同じ埋裏遺構であるが、打ち欠き方などに違いがあり、遺構が立地する場所もまた相違する点がある。埋裏はI-c期はやや比高の高い丘陵上に立地していたが、I-d3期は低地に位置する。また埋裏の底部打ち欠き行為は大きく打ち欠く行為から穿孔へと変化し、R3044がR484よりも新しい遺構となれば、まったく打ち欠き行為がなくなることになる。他に1は壺で、大分市史1986の記述を参照している。

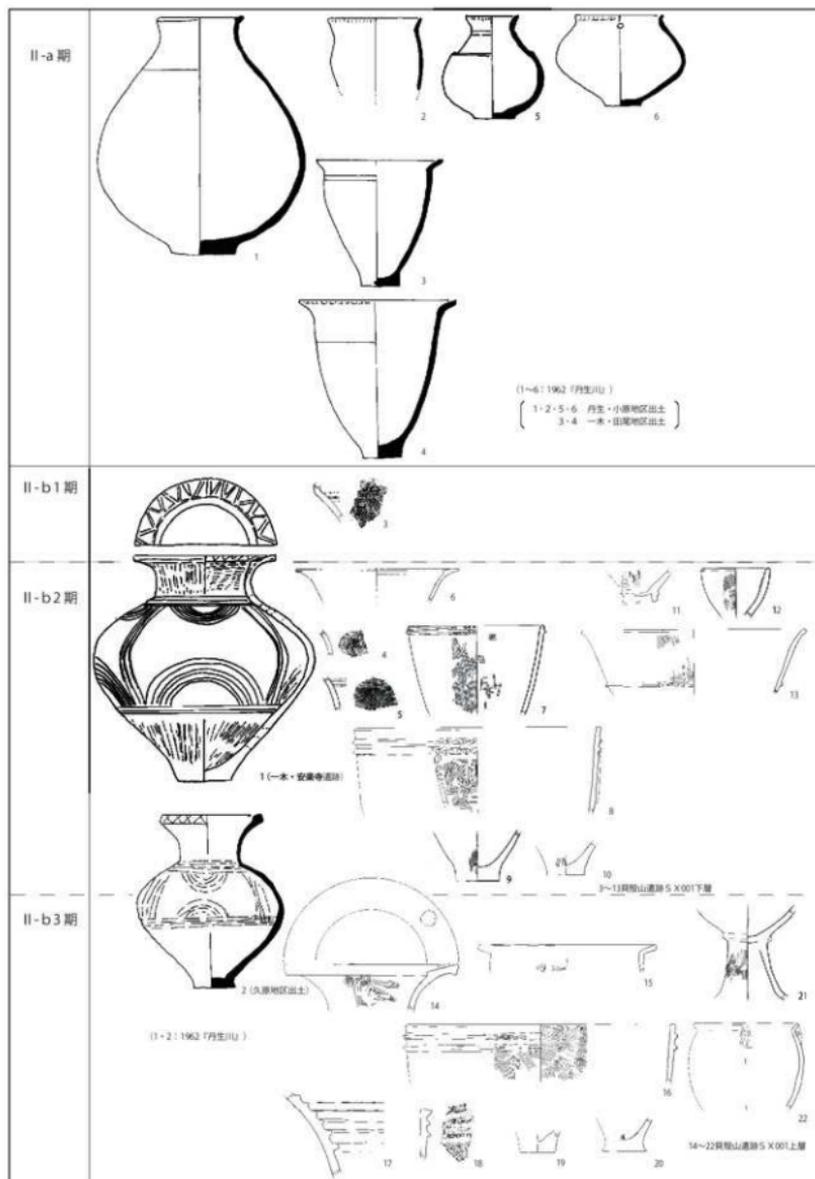
I期は主に縄文時代をみてきたが、縄文期の遺構は埋裏しか確認されず、竪穴建物跡や土坑などは確認できていない。ただし、縄文時代後晩期にかけて包含層などから多量に土器が出土するようになり、埋裏の遺構が築かれることは、周辺に生活の基盤があったからにほかならない。またI-d期は埋裏の性格等を鑑み、縄文時代晩期末として扱ったが、弥生時代早期と設定されている時期でもある。

II期は弥生時代をみていく。弥生時代のこの地域では前期と中期の資料に乏しく、そのほとんどを『丹生川』（大分大学1962）で扱っている資料を充てている。そのため出土地点などが不明瞭なため、参考程度の取扱とさせていただきます。弥生時代の後期以降は最近の岡遺跡群などの発掘調査で竪穴建物跡や竪穴、土坑などから良好な資料が出土し、小柳和宏氏がその報告書のなかで弥生時代後期土器の分類と編年作業（大分県教委2007）を行っている。また今回の調査では、NSJ1・2・10などで弥生時代後期以後の遺構が出土し、終末まで検出される。

弥生時代前期は、I-d3期からほぼ時期差なく続き、丹生川中流域の一本地区や小原地区出土の資料をあてる。前述したように明確な出土状況は不明なため、参考程度とする。



第468図 縄文-古代の土器①(1/6・1/8)



第 469 図 縄文-古代の土器② (1/6・1/8)

Ⅱ-a期は「丹生川」所取の小原地区出土のもので、確認できる器種は、壺・甕・鉢などである。口縁部は内傾しながら端部は外反させ、胴部における最大径が中央より下にもってくる。甕は外面端部に刻目をもつものなどがある。5は壺、6は鉢で、5は武蔵町内田遺跡出土資料などに類似する。この期はほぼ弥生時代前期にあたるが、出土状況や地点が不明瞭なため、前期の中をさらに細分することは控えておく。

Ⅱ-b期は、弥生時代中期をあてる。豊後国のとくに海岸部では前期末から下城式と呼ばれる刻目突帯文や重孤文などを器面に施すものなどが出土しはじめ、中期に隆盛する。まずⅡ-b1期は該当する遺構が確認できていないが、丹生川遺跡出土の下城式壺や後述する貝殻山遺跡SX01最下層から古相の壺片が出土している。中期前葉くらいであろう。Ⅱ-b2期は、貝殻山遺跡出土資料SX01最下層をあてる。報告ではSX01は溜井状遺構とされ、出土資料を上層と下層に分別し報告している。一括資料としては劣るが、このほかに良好な資料がないため、SX01上層資料と下層資料に分別して取り扱う。最下層資料は3～13である。構成器種は壺・甕・(台付)鉢・高坏などである。高坏は、須玖式の影響を受けているものが多い。4・5の壺片は文様がミガキにより消され、やや新しい様相を呈している。Ⅱ-b3期は貝殻山SX01上層資料で14～22をあてる。構成器種は壺・甕・鉢・高坏などである。壺形土器は口縁上部には浮文をめぐらす。15・20は東北部九州系の甕である。16・18・19は下城式甕である。SX01の上層と下層であるが、時間的には中期前葉から後葉の位置を占めるものが多いようである。弥生時代中期についても今後の丹生川流域での調査成果に期待を寄せるところである。

ところでⅡ-b期に丹生川遺跡(大分大学1962)において、ナスビ形の木製品などが出土し、水田耕作に伴うような矢板列の跡なども確認されている。よって丹生川流域での水田耕作のはじまりは弥生時代後期までは遡ることができそうで、さらに中・前期まで上がるかどうかは今後の調査に期待するところである。

弥生時代後期は近年、岡遺跡群や上辻遺跡の成果報告が上げられており、弥生時代後期の土器編年が小柳和宏氏により行われている(大分県教委2006)。岡遺跡群では弥生時代後期を岡1期～5期までに細別し、後期全体の分類と編年を行っている。丹生川流域中上流域では、岡遺跡群の他には当期の良好な遺跡は少なく、今回の丹川地区出土資料を若干加えながら、ほぼ踏襲する状況で述べていきたい。

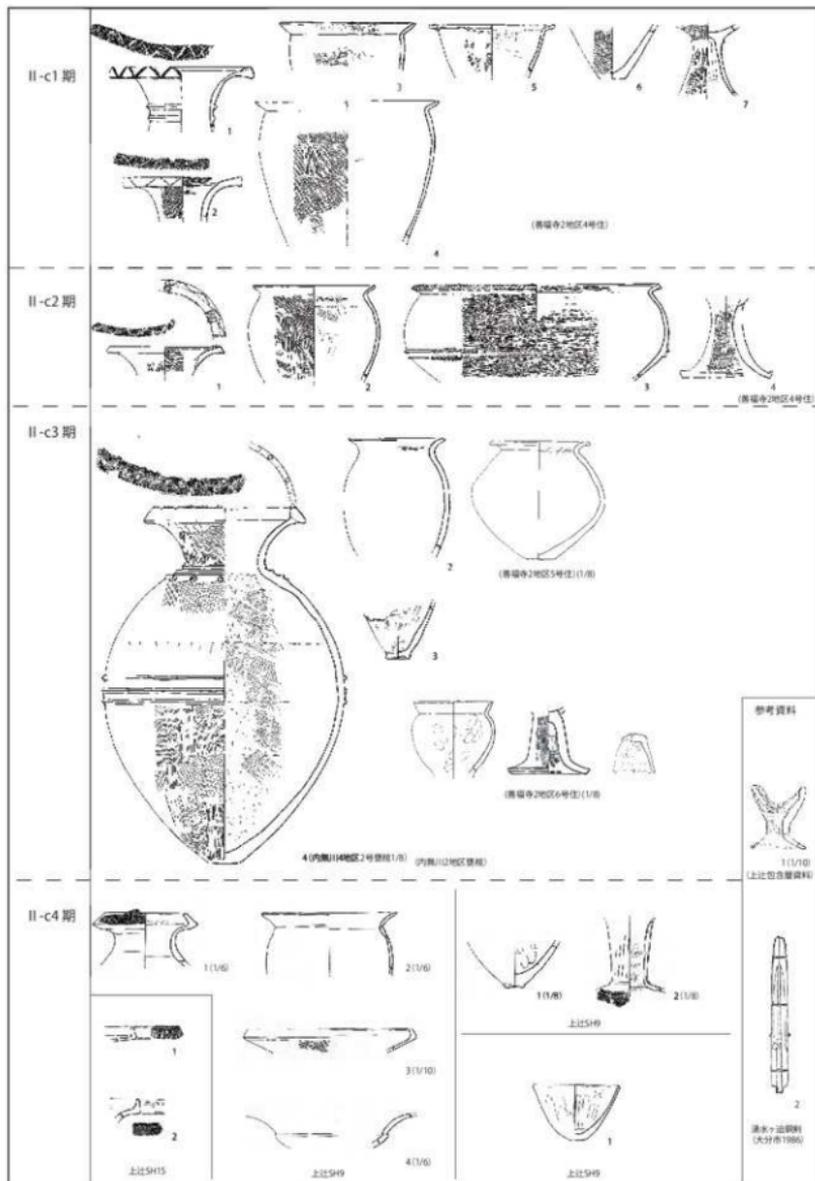
Ⅱ-c1期は岡遺跡群善福寺2地区4号住の資料を中心とする。中期に隆盛した下城式土器の出土量は激減し、かわって後期になると安国寺式とよばれる複合口縁をもつ壺が出現してくる。Ⅱ-c1期は後期初頭にあたり、岡1期に平行する。壺は口縁端部外面に連続山形文を施す。甕は「く」の字状を意識しはじめる。5は跳ね上げ口縁を呈し、九州東北部系の甕である。このほかに高坏や鉢などの出土がある。

Ⅱ-c2期は岡遺跡群の岡2期平行である。ここでは岡遺跡群善福寺2地区2号住の資料をあてる。壺は連続山形文が引き続き施される。甕は「く」の字状を呈するようになる。甕の底部は上げ底を呈している。高坏なども出土している。このほかに内無川4地区においても同期の鉢などの資料が出土している。

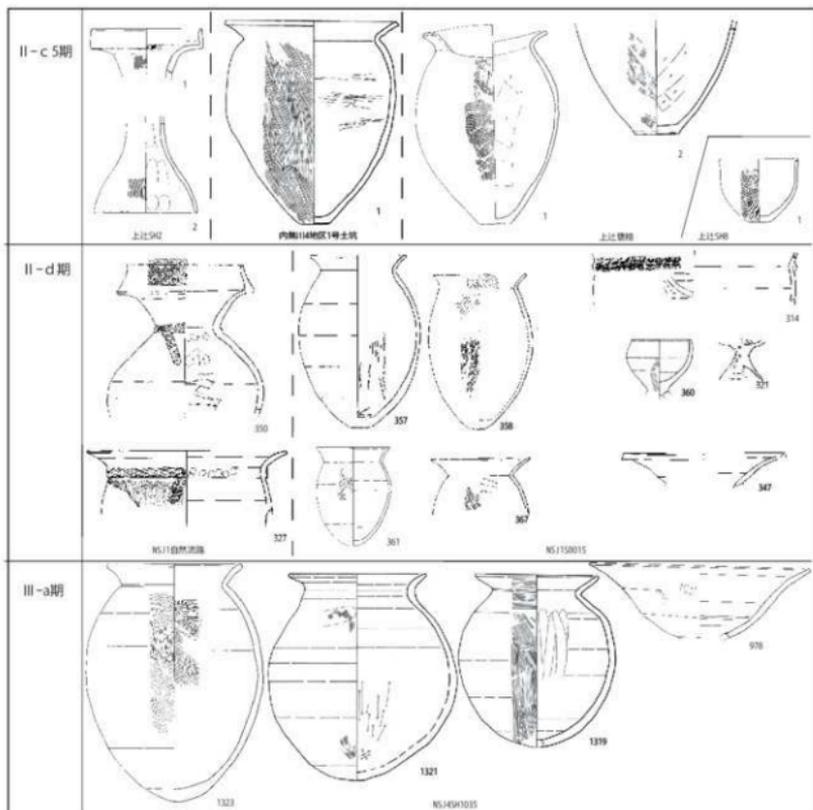
Ⅱ-c3期は岡遺跡3期に平行する。岡遺跡群ではこの期で、二重口縁の成立期と位置付けている。ここでは岡遺跡群内無川2地区2号甕棺墓出土資料をあてる。壺に施されていた連続山形文は衰退し、波状文を施すようになる。また口縁上端も上方にやや突出するようになる。このほかの器種としては、甕・鉢・高坏などがある。

Ⅱ-c4期は岡遺跡群4期にほぼ平行する。岡遺跡群編年ではこの期で、後期土器の成立と位置付けている。ここでは岡・上辻遺跡SH9・10・15の資料をあてる。壺は口縁上部が内傾しながらやや延びる。器種構成は、壺・甕・鉢・器台・高坏などである。ところで参考資料の1は上辻遺跡包含層の出土で有翼器台である。有翼器台は大分市内の遺跡では横尾遺跡(多武尾遺跡)や賀来中学校遺跡などで出土しているが、大野川以東で発見されたのは初めてである。2は清水ヶ道遺跡出土の青銅製の剣である。岡遺跡群の弥生時代後期集落の立地に近くで出土しており、関連が期待できる。

Ⅱ-c5期は、岡遺跡群の岡5期に平行する。岡・上辻遺跡SH2・8、甕棺墓、内無川4地区1号土坑の資料をあてる。1の壺口縁部は徐々に立ち上がる。甕は底部が平底となるが、その径は短くなる。その他に、鉢や器台、高坏などの資料も上げられる。



第470図 縄文-古代の土器③ (1/6・1/8)



第 471 図 縄文-古代の土器④ (1/6・1/8)

II-d 期は、NSJ15D15、NSJ1 自然流路などの出土資料をあてた。壺は口縁部がやや内傾しながら、さらに上方へのび、頸部に突帯が巡る。甕は長胴化傾向で、底部は丸みをもつ傾向である。この期はまだ若干の平底を残すものが存在する。鉢などにも頸部に突帯が巡る。そのほか、高坏や鉢などの器種も存在する。弥生時代終末期である。

古墳時代(Ⅲ期)は、丹生台地上に多くの古墳が築かれるようになり、中でも丹生台地の北東にある亀塚古墳は県下最大級の前方後円墳である。丹生川中上流域では丹生台地上に野間古墳群をはじめ、最近調査された岡道跡群においても数基の古墳が発掘調査されている。ここでは古墳時代をⅢ期として扱っていく。

Ⅲ-a 期は NSJ4SH1035 の資料をあてる。器種は甕と高坏である。甕は口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部は丸みをもつ。底部は II-d 期の若干平底であったのが消え、丸みをおびようになる。1319 は口縁部端を上方につまみ上げている。布留式併行であり、古墳時代前期前葉くらいの時期であろう。

Ⅲ-b 1 期は新光遺跡 1 号住、一木 SH04、岡道跡群内無川 4 地区 4 号竈穴、NSJT369・508・510(第 450 図参照)の野間古墳群 7 号墳の周溝出土資料をあてた。甕は前期の流れで胴部は球形で、胴部径が口径よりも大

きい。またこの時期に小型丸底甕の比率が高くなる。岡遺跡群内無川4地点4号竪穴からはミニチュア土器が小型丸底甕などと相伴している。この期は4世紀末葉～5世紀前葉くらいに該当してこよう。一木遺跡SH04の資料は甕・高坏・小型丸底甕などが出土し、中でも6の古式須恵器と報告されているものは陶質土器の可能性もありうるだろう。しかしながら、相伴土器の小型丸底甕は口径よりも胴径が大きいが、1は長胴化傾向にあり、口径と胴径の差があまりないことから5世紀前半くらいであろう。

Ⅲ-b2期は一木遺跡SH02の資料をあてた。ここでは土師器椀が出土し、須恵器は小田編年Ⅱ期に該当する坏身が2点出土している。また人形と推定されている土製品も出土している。Ⅱ-b2期は5世紀中葉～後葉の時期であろう。

Ⅲ-c期は明確な遺構は見当たらないが、NSJT174・180の資料をあてた。土師器甕は胴部が長胴化し、器面調整も荒くなる。口縁部は外反するが、これまでのような明瞭な「く」の字状の屈曲はもたない。R319の須恵器坏身は小田編年ⅢB期に該当しよう。この期の竪穴建物跡が丹生川下流域の城原・里遺跡などで確認できている。

古代(Ⅳ期)はNSJ4・7・8・9・12地点などで遺構遺物が確認できた。NSJ4・8では公的施設と推定される掘立柱建物跡が見つかり、NSJ7では、祭祀遺構と思われる石敷遺構、NSJ9・12では、土坑や集石、包含層などが確認された。これら遺構に伴い、遺物も多く出土し、中には須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁・移動式カマド・石製及び土製紡錘車などがある。またNSJ7では円面硯などの破片と思われるものも出土している。ただし、墨書土器や刻書土器などの出土はない。

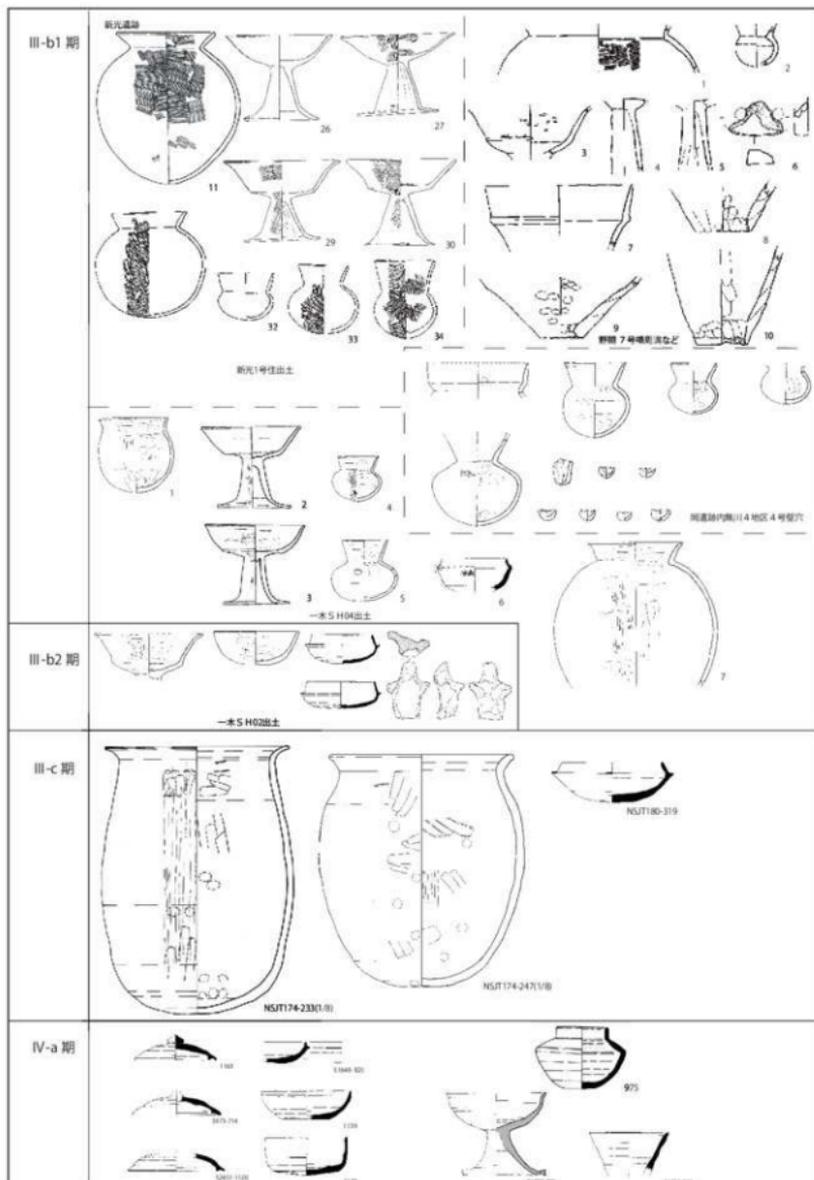
Ⅳ-a期は丹生川下流域の城原・里遺跡では、海部部の評価と推定される遺構が展開しはじめる時期である。ただ丹生郷域では遺構の検出はできていないが、遺物は一定量出土しているので、参考程度になるが、Ⅳ-a期を設定し紹介する。出土遺物の主体は須恵器である。蓋坏は乳頭状のつまみがつくもので、端部にはカエリが残存する。坏身はR825はカエリがあるものの、R1139・1018・1134・1137は口縁部は丸くおさめ、これらは金属器模倣系の坏身であろう。そのほか、高坏・短頸壺・小型の坏(椀)などが確認された。これらは小田編年Ⅳ～Ⅴ期に該当する時期であり、7世紀代を想定する。

Ⅳ-b期は久土遺跡の資料をあてた。久土遺跡SX01は土坑の資料である。構成器種は土師器坏・蓋・壺・高坏・盤で、須恵器は蓋・坏・椀・高坏などである。坪根・塩地編年(坪根・塩地2001)を参照すると7世紀末～8世紀前葉にあてている資料群である。土師器は坏などは古墳時代からの流れをくむものであろう。土師器椀は高台は「ハ」の字状に高く付ける。須恵器蓋はつまみがあるものとなないものが混在する。つまみがあるものの端部はカエリが残る。須恵器椀も高台部が「ハ」の字状に開く。

Ⅳ-c期は久土遺跡(Ⅳ-b期のSX01を切る)SK15、NSJ4の掘立柱建物跡、土坑の資料をあてる。土師器は蓋・坏が主体を占める。須恵器は蓋・椀・坏・壺などで構成される。須恵器蓋は天井部につまみが付くが、端部のカエリはなく、端部を真下に屈曲させる。また須恵器蓋はR1003のように径が大きくなるものもある。椀は高台が「ハ」の字状であり、高台の高さは低くなる。ほかに長頸壺などが出土している。NSJ4SK1029の出土資料は、土師器盤と蓋であり、重なる状況で出土した。土師器はR702の坏が引き続き残る。R902・908は口縁端部内面に沈線がはいるもので、都城系土師器で、坏の器高は低くなる。ただし暗文などは磨滅などにより明確ではない。須恵器坏は底部から逆「ハ」の字状にひらく。この期は概ね8世紀前半に該当しよう。

Ⅳ-d期はNSJ4・8・12地区出土の資料をあてた。NSJ12SX02・SK01、NSJ4土坑・ビョウ溝、NSJ8SK030出土資料である。土師器は坏・椀・盤・蓋などが出土し、須恵器は椀などが出土している。土師器蓋はR2189のように輪状のつまみをもつものがあり、端部は外側に折り曲げ、若干下方へ出すものもある。R852はNSJ4SK1695出土で、この遺構は須恵器甕を破砕した祭祀遺構と推定される。R505は小椀である。R1105の高台付盤は径が最大に大きくなるものが存在する。甕はR2801の企船型甕と豊後型のR1012などがある。R2800は製塩土器片である。須恵器椀は高台部が底部外側に付き、まっすぐ低く付く。このⅣ-d期は出土量で土師器が須恵器を凌駕してくる。これは豊後国で共通するところでもある。この期は概ね8世紀後半となろう。

Ⅳ-e期はNSJ4・7・8・12の出土資料をあてる。土師器は蓋・坏・椀・壺・甕・移動式カマドなどが出土し、須



第 472 図 縄文-古代の土器⑤ (1/6・1/8)

壺器は環・甕などである。R1348の蓋は内外面ともに隙間のある回転ヘラミガキを施す。環はヘラミガキが減少し、一部の環で器高が高くなり、口径は小さくなる傾向がある。801はNSJ4SSB4を切るピットからの出土である。口径端部は若干外反させるものが多くなる。甕は企敷型甕が残存する。須恵器R2844はNSJ7SX01出土の円面硯と推定される資料がある。この遺構には他に緑釉陶器なども出土している。R2807・2818は須恵器環で、胴部は直線的に外反してのびる。この期は概ね9世紀前半くらいであろう。この期にNSJ7の祭祀場と想定される石敷遺構が展開し、NSJ8やNSJ4には公的施設と思われる建物群が展開している。

IV-f期はNSJ4SD1139・SB17、NSJ7SX05の資料をあてる。土師器環は器高が低くなり、やや口径が広がる。調整はナデ調整である。R100は土師器環で胴部が底部から外反する。R957の須恵器は小型の壺か。R2888やR1005のように底部を突出させるものも出現しはじめ、円盤状高台の出現期であろう。概ね9世紀後半くらいか。

IV-g期は、NSJ4SP2471の資料をあてる。土師器は環・托などが出土し、須恵器は蓋が出土した。概ね10世紀前半くらいか。この期で8世紀～9世紀にかけて公的な建物群が展開したNSJ4・8の遺構は消えていき、NSJ7の石敷遺構なども衰退するが、NSJ4やNSJ8では、径30cmほどの丸柱穴で構成される掘立柱建物跡が存続し、建物構造の変化ともとれ、機能の変化の現れであろうか。

IV-h期は、NSJ9SK040の資料をあてる。NSJ9は鎌倉期の遺構が主体を占め、古代に該当するのは少ない。土師器は環・黒色土器が出土した。233は環でも胴部が大きく弧を描きながら外反する。R2276は高台部が若干円盤状になり、口径端部をやや外反させる。また内外面にクロコ痕跡を残す。R2998は内面黒色土器碗であるが、器壁は極薄で、畿内系のもので推定される。この期は概ね10世紀後半くらいであろう。

以上、丹生川中上流域の推定丹生郷域での縄文～古代の土器編年分類案を提示した。ただページ数の関係で研究史を大幅に割愛した点や使用したすべての土器が編年分類に耐えられる良好な土器群ではないことも含めて、今後も当該地域での遺物及び遺構の性格など含めて検討の余地は十分にあり、これからの調査にも期待するところである。(五十川 雄也)

[参考文献]

- 坪根伸也 2000「九州における弥生前期土器の諸相・口径下端凸状と下城式甕」(『突帯文と遠賀川』)
- 大分市教育委員会 2007『下部遺跡群』V
- 高橋徹 2000「下城式土器の周辺」(『突帯文と遠賀川』)
- 高橋徹 2001「大分の弥生・古墳時代土器編年」(『大分県立歴史博物館 研究紀要2』)
- 坪根伸也・塩地潤一 2001「豊後国の土器編年」(『大分・大友土器研究会論集』)
- 小田富士雄 1964「九州の須恵器編年序説」(『九州考古学』22)
- 北九州市埋蔵文化財調査会 1977「天観寺山原跡群」
- 福岡県教育委員会 1970「野添・大浦宮跡群」
- 大川清ほか編 1997『日本土器辞典』雄山閣
- 山本信大・山村信榮 1997「九州・南西諸島」(『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第71集)
- 大分大学芸学部 1962「丹生川」
- 大分市 1987『大分市史』上
- 林潤也・中西武高・今田しのぶ 2001「豊後における都城系土師器について」(『大分・大友土器研究会論集』)

(2) 中世の土器

丹生川上流域の各地点で出土した中世土器は、12～16世紀の長期間にわたってみられる。これは14～16世紀の豊後における政治的中枢であった大友館・中世大友府内町跡や、宇佐宮の神宮寺である弥勒寺、八坂川下流域に位置し物資流通拠点であった八坂遺跡群(杵築市)とならび、豊後における中世土器の様相・変遷を考えるうえで重要な手掛かりになるものである。

ここでは、各地点で出土した良好な一括資料を抽出し、中世前期をⅤ期(12世紀後半～13世紀後半)、中世後期をⅥ期(14～15世紀前半)・Ⅶ期(15世紀後半～16世紀後半)に分け、各期にa～cを付して、丹生川上流域の土器様相の把握につとめた。なお土師質土器については、小皿をA～D、環をA～Cの形式分類を行っている。以下、各期の様相について触れる。

・中世各期の分類・編年

V a 期 (第 475 図)

第 9 地点 (NSJ9) SK140 上層がこの段階に相当する。器種としては、土師質土器小皿・杯・鍋・釜、瓦器小皿・高台付き皿・椀、畿内産瓦器小皿・椀、白磁碗、青白磁合子などがみられる。

土師質土器小皿・杯とも底部切り離しは糸切りである。小皿は、小皿 A～C がみられる。小皿の法量は、口径 8.3cm、器高 1.4cm、底径 6.6cm である。小皿 A は、体部が斜上方に開く (2115・2116・2130・2136・2137・2145・2152・2154・2155・2159・2167・3023)。そのうち、底部の器壁が厚く、口唇部はすぼまるものもみられる。小皿 B は、底部から内彎気味に開く (2117・2131・2132・2133・2146・2147・2164・3022)。小皿 C は、器壁が全体的に薄手で、斜上方もしくは内彎気味に開く (2156～2158・2169・2170・2172・2176)。SK140 上層では、小皿 A・B が大半を占める。小皿 C は、黄橙褐色を基調とし、薄手なつくりで他の小皿と異なる。小皿 C は SK140 上層のみにみられ、出土状況 (第 10 章 284・285 ページを参照) から特注品的な性格をもつものと考えられる。

土師質土器杯 (2119・2148・2162・3024) は、底部から体部が内彎気味に開き、体部中に屈曲をもつ杯 A が主体である。杯の平均法量は、口径 14.9cm、器高 3.6cm、底径 10.4cm である。

大分市西部に位置する買来・城遺跡 SD01 (綿貫俊一 1997) では、土師質土器小皿・杯がまとまって出土している。SK140 上層と器形・平均法量 (小皿:口径 8.3cm・器高 1.2cm・底径 6.6cm、杯:口径 14.9cm・器高 3.4cm・底径 9.6cm) が類似しており、ほぼ近接する時期と考えられる。

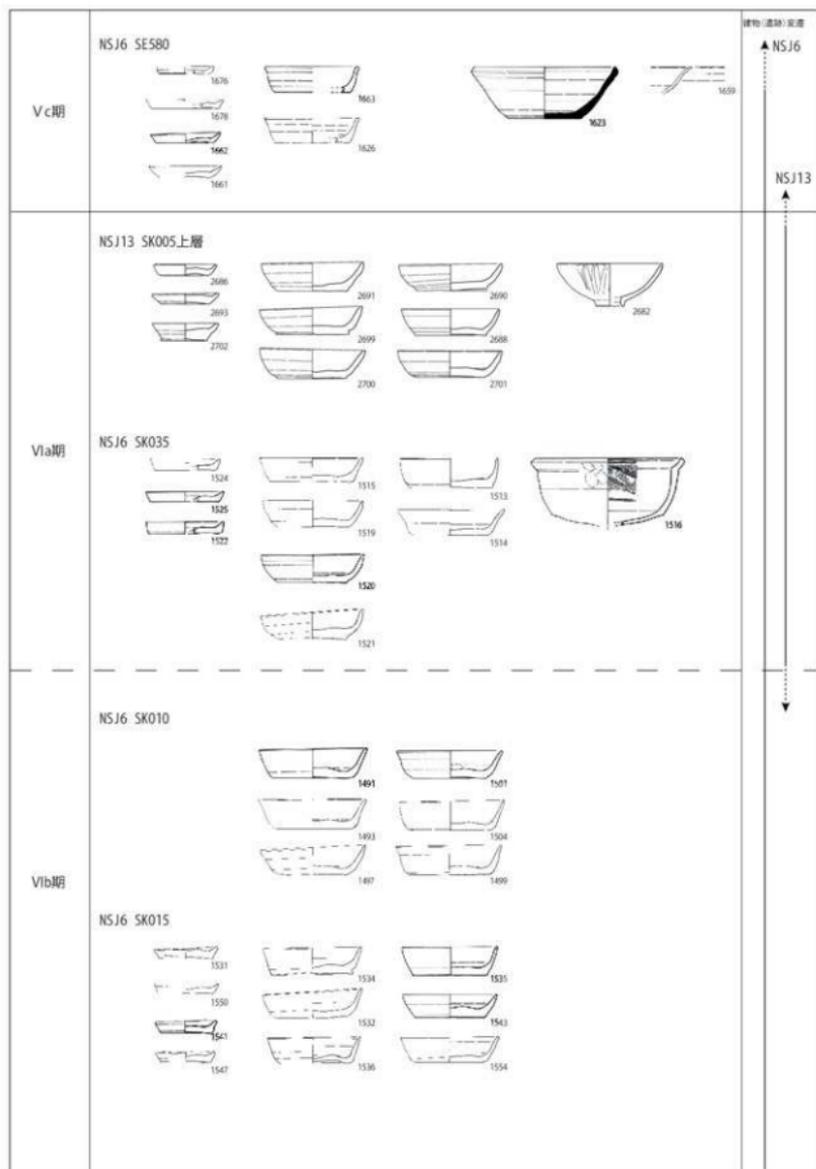
瓦器小皿 (3026)・高台付き皿 (2123・2124・3028・3029)・椀 (2141・3030) は、胎土・色調・調整から在産と考えられるものである。これらの瓦器は、口縁部が垂直気味に立ち上がり、体部中に屈曲をもつ。小皿・高台付き皿の底部は糸切り離しが残り、椀とともに底部を押し出している。小皿・高台付き皿・椀とも、外面体部は雑な横方向のヘラミガキ、内面体部に同心円状のヘラミガキを施す。本稿では、在産と考えられる瓦器をその特徴から、遺跡が位置する旧海部郡の郡名をとり、「海部型瓦器」と仮称した。海部型瓦器の詳細については後述する。小皿の法量は、口径 9.5cm、器高 2.3cm、底径 5.4cm である。高台付き皿の高台は断面三角形を呈し、比較的高いものである。高台付き皿の平均法量は、口径 8.9cm、器高 2.8cm、高台径 5cm である。椀の口径は 16cm を超え、大振りである (3030:口径 16.7cm、器高 6.6cm、底径 5.6cm)。椀の高台は高く、断面三角形 (2141)、方形 (3030) があり、バリエーションがみられる。海部型瓦器は V a 期、つぎの V b 期を通してみられる。

土師質土器釜 (2161・2184) は、口縁部端部内側に面取りを施す。土師質土器鍋は、口縁部が肥厚し体部の器壁が薄いもの (2128)、器形が半球形をなし体部にハケメ調整をもつもの (2178) がみられる。その分布から、2128・2161・2184 は豊前・豊後の広範囲、2178 は別府湾岸地域を中心にみられる (山本哲也 2007)。2178 の出土事例として、本報告の第 11 地点のほか、大分市横尾貝塚 (大分市教育委員会 2008)・下群遺跡群 (大分市教育委員会 2007)、杵築市八坂本庄遺跡 (大分県教育委員会 2003) がある。これらの煮炊具は 12 世紀後半頃を中心とする特徴をもつ。

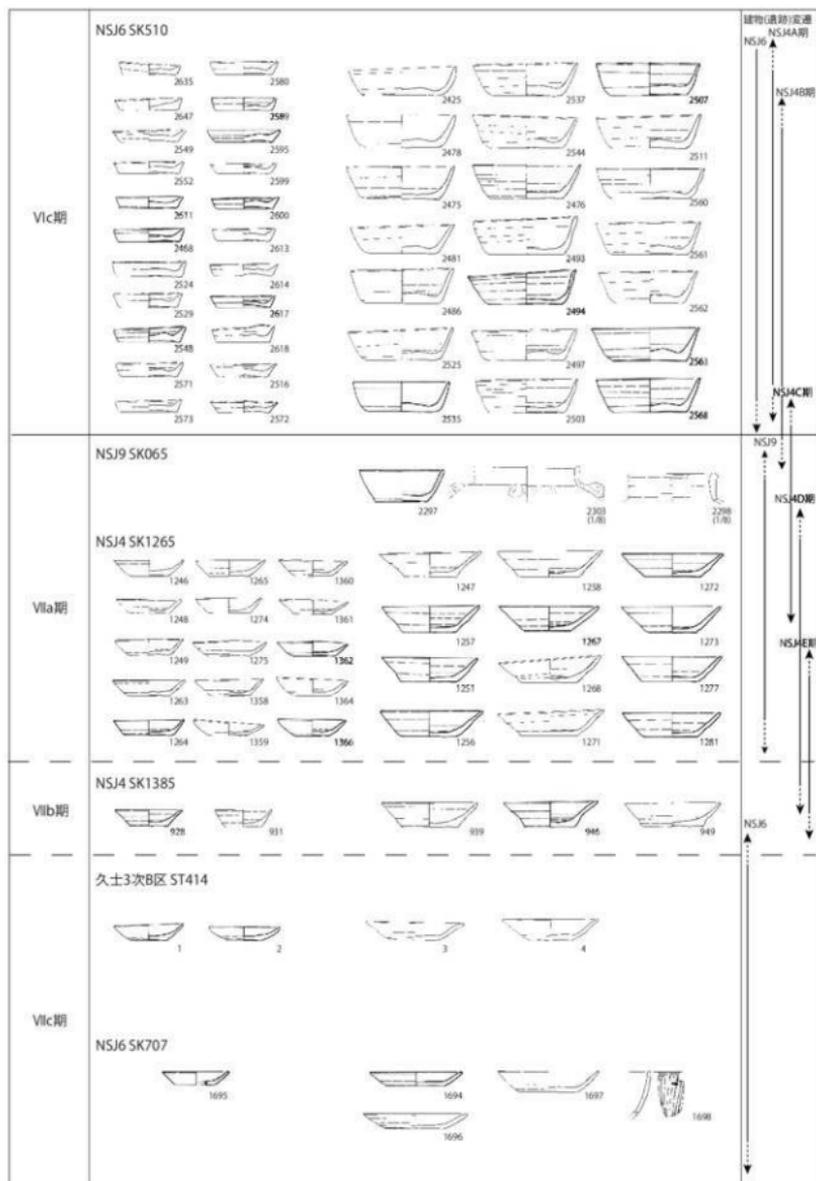
和泉型瓦器小皿 (3025) は、体部中に屈曲し、底部は丸底である。和泉型瓦器椀 (2125) は、体部中に屈曲し、断面三角形の低い高台が付く。尾上実氏 (尾上実 1983) の編年によると III・2 期にあたるものか。

白磁碗は口縁部が端反をなすものがみられる。大宰府陶磁器分類 (山本信夫 2000) によると、見込を輪状に軸を抜き取る VII-3 類 (2113)、高台が高く内外面無文の V-4a 類 (3031) があり、貿易陶磁器編年の D 期 (12 世紀中頃～後半) にあたる。

V a 期の時期は、土師質土器小皿・杯・鍋釜、和泉型瓦器・白磁など搬入品の年代観から 12 世紀後半～末頃と考えられる。



第 476 図 丹生川流域・中世土器編年図② (1/6)



第 477 図 丹生川流域・中世土器編年図③ (1/6)

V b 期 (第 475 図)

第 9 地点 (NSJ9) SK145・SE080 最下層がこの段階にあたる。器種は V a 期とほぼ同様の内容をもつ。

土師質土器小皿は、体部が斜上方に開く小皿 A (1833・1838・1839・1949・1951・1968)、体部が内傾気味に開く小皿 B (1937・1954・1969・1984～1986) がみられる。V a 期と同様、小皿 A・B が主体である。SK145 出土の法量は、口径 8.3cm、器高 1.2cm、底径 6.6cm である。

土師質土器環は、環 A の器高が縮小したものの (1837・1944・1950・1955) のほか、体部が斜上方に開く環 B (1831) がみられ、環 A とは法量が異なる。この段階は環 B が少なく、環 A が主体のようである。

海部型瓦器は V b 期もみられる。小皿 (1933・1934・1943・1964・1998)、高台付き皿 (1953) の底部は、V a 期と同じく糸切り離しが残る。小皿は V a 期にみられた丸底 (1964) のほか、平底をなすものがみられる (1933・1934・1943・1998)。高台付き皿・椀 (1832・1960・1982・2003) は、高台が低く、体部はまるみをもつようになる。椀は、良好な資料が少ないものの、V a 期と比べると、器高が 5 cm 代の傾向にあり、法量の縮小を読み取ることができる。海部型瓦器は、現状ではこの段階以降、確認できないようである。

和泉型瓦器は、小皿 (1997)・椀 (1967・1999) がみられる。尾上実氏 (尾上実 1983) の III 期と考えられる。

白磁碗は、玉縁状口縁の IV-1a 類 (1958)、端反口縁で、無文の V-4a 類 (1974)、内面に櫛描文を施す V-4b 類 (1859) がみられる。青磁は、同安窯系・龍泉窯系がみられる。同安窯系皿は、見込に幾何学文を施す I-2b 類 (1858) がある。龍泉窯系碗は、体部内面に花文 3 単位を施す I-2a 類 (3002)、外面体部に蓮華文と縦方向の櫛描文、内面体部に蕉葉文を施す I-6a 類 (3003) がみられる。貿易陶磁器編年によると、C 期 (11 世紀後半～12 世紀前半)・D 期 (12 世紀中頃～後半) にあたり、陶磁器は V a 期と同様な傾向である。

東播系須恵器鉢 (1849) は、荻野繁春氏 (荻野繁春 2005) の編年によると、II 期 (12 世紀中葉～後葉) にあたる。瓦器質の山城系鍋 (1836) は、森島康雄氏 (森島康雄 2006) の編年によると、13 世紀前半頃と考えられる。1847 は器形・調整から瀬戸内系の鍋と考えられる (鈴木康之 1996)。1860 は土師質焼成で器形から、山城系模倣と考えられる。図示しえなかったが、SE080 最下層では、中野晴久氏 (中野晴久 2005) の 2 型式と考えられる常滑焼裏が出土している (300 ページ 3000)。第 9 地点 SK125 では、黒陶陶器碗 (281 ページ 3012) が SE080 最下層と遺構間接合をしており、この段階に埋まったと考えられる遺構である。SK125 は、一括性が弱いものの、森下稔氏 (森下稔 1995) の第 II 期第 2 段階の東播系須恵器鉢 (281 ページ 3013) や、山本悦氏 (山本悦 1993) の III-1 期の吉備系土師器椀 (280 ページ 2076) が出土している。

V b 期の時期は、土師質土器、瓦器椀の V a 期からの器形・法量の変遷傾向を読み取れ、搬入土器・陶磁器の年代観から、13 世紀前半～中頃と考えられる。

V c 期 (第 476 図)

第 6 地点 (NSJ6) SE580 が相当する。器種として、土師質土器小皿・環、東播系須恵器鉢、白磁皿などがみられる。この段階は遺構が僅少なため明確でない部分がある。

土師質土器小皿は、小皿 A (1662・1676・1678) と小皿 B (1661) がみられる。いずれも V b 期と比して口縁部の立ち上がりが短い。土師質土器環 (1626・1663) は、V b 期にみられた体部が斜上方に開く環 B がみられる。口縁部端部はまるみをおびる。

東播系須恵器鉢 (1623) は、森下稔氏 (森下稔 1995) の第 III 期第 1 段階にあたるものか。白磁皿 (1659) は、口弁げをなすもので、皿 IX-1d 類か。貿易陶磁器編年によると、F 期 (13 世紀後半～14 世紀前半) にあたる。

V c 期は、白磁皿、東播系須恵器の年代観から、13 世紀後半頃と考えられる。

VI a 期 (第 476 図)

VI 期は、V 期と比べると全国的に輸入陶磁器が減少する時期にあたり、丹生川上流域の各遺構も土師質土器小皿・環主体の傾向である。

VI a期には、第13地点(NSJ13)SK005上層、第6地点(NSJ6)SK035が相当する。器種として、土師質土器小皿・杯、瓦質土器鍋、龍泉窯系青磁がみられる。

土師質土器小皿は、体部が斜上方に開く小皿Aが主体である。第13地点SK005上層の法量は、口径7.8cm、器高1.7cm、底径5.6cmである。2702は底部の器壁が厚いものである。

土師質土器杯は、体部が斜上方に開く杯Bが主体である。1513～1515、2700を除く、他の杯は口縁部が内彎し端部がまるみをもつものが多い。杯の法量は、口径12.5cm、器高3.4cm、底径8.7～9.1cmである。

瓦質土器鍋(1516)は、口縁部がくの字状に外反し、口唇部を上方向に揃い上げる。体部下半に屈曲がみられる。小振りの器形であるが、口縁部の形状から古相を呈するものと考えられる(山本哲也2007)。

龍泉窯系青磁碗(2682)は、高台径に比して口径が大きく、内彎する体部である。大宰府陶磁器分類ではIII-2c類、貿易陶磁器編年のF期(13世紀中頃から14世紀初頭前後)にあたる。

VI a期は、土師質土器小皿・杯から、14世紀前半～中頃と考えられる。

VI b期(第476図)

VI b期は、第6地点(NSJ6)SK010、SK015が相当し、土師質土器小皿・杯が主体である。

土師質土器小皿は、体部が斜上方に開く小皿Aが主体である。口縁部が短く外反し、内面底部はユビナデにより窪む。前段階と比して法量が縮小し、口径7.6cm、器高1.3cm、底径6.4cmである。

土師質土器杯は、体部が斜上方に開く杯Bが主体である。体部が直線的に伸びるもの(1491・1504)、体部中位に屈曲をもち、口唇部がすばまるもの(1493・1497・1499・1501・1532・1534～1536・1543・1554)がみられる。後者が大半を占めるようである。調整は小皿Aと同じく、内面底部はユビナデによって窪む。SK010は口径12.8cm、器高3.5cm、底径9.2cmであり、前段階と比して法量が大きくなっている。SK015は口径11.8cm、器高3.1cm、底径9.0cmを測る。中世大友城下町出土土器編年(坂本嘉弘2005)によると、法量に差異が認められるものの、中世大友府内町跡第30次調査S109出土資料の段階にあたるものと考えられる。

VI b期は、土師質土器の調整・法量の変化から、14世紀後半頃と考えられる。

VI c期(第477図)

VI c期は、第6地点(NSJ6)SK510が相当する。土師質土器小皿・杯の約500個体を廃棄した良好な一括資料である。

土師質土器小皿は、体部が斜上方に開く小皿Aが主体である。前段階と同じく、口縁部が短く外反し、内面底部はユビナデによって窪む。小皿の法量は、口径8.2cm、器高1.6cm、底径6.9cmであり、前段階より伸長している。口縁部の形状からバリエーションがみられる。2614・2617・2618・2516・2572は底部の器壁が厚く、口縁部がすばまる。

土師質土器杯は、体部が斜上方に開く杯Bが主体である。調整は、小皿Aと同様に、内面底部がユビナデによって窪む。体部が内彎するもの(2425・2478)、体部が直線的に伸びるもの(2475・2481・2486・2525・2535・2537・2544)、体部中位に屈曲があり、口縁部が短く外反するもの(前記以外の番号)がみられる。いずれも口唇部はすばまる。体部が直線的、体部中位に屈曲をもつものが多い。杯の法量は、口径12.8cm、器高3.9cm、底径8.9cmであり、前段階より法量が伸長している。

VI c期の時期は、中世大友城下町出土土器編年(坂本嘉弘2005)によると、中世大友府内町跡第20次A調査S1505の段階にあたるものと考えられ、法量に類似性が認められる。VI b期からの法量の伸長傾向から、15世紀前半頃と考えられる。

VII a期(第477図)

VII a期は、第9地点(NSJ9)SK065、第4地点(NSJ4)SK1265が相当する。第4地点SK1265は、銭貨を

使用し土師質土器を方形に整然と配した地鎮遺構である。

第9地点SK065は土師質土器杯、瓦質土器茶釜、備前焼壺がみられる。土師質土器杯(2297)は、体部が斜上方に開く杯Bがみられる。良好な資料ではないが、前段階と比して口径、底径の縮小がみられる。瓦質土器茶釜(2303)は、口縁部が垂直に立ち上がり、端部の内側は面取りをなす。茶釜は大部分内で良好な資料が僅少であり、その様相について不明な部分が多い。口縁部の立ち上がり、器形から15世紀代を呈するものか。備前焼壺(2298)は、口縁部が垂直に立ち上がり、口縁部端部は肥厚する。乗岡実氏(乗岡実2005)の備前焼編年によると、中世4期ないし5期にあたり、15世紀代とみられる。

第4地点SK1265は、土師質土器小皿・杯が主体であり、総数93個体をかぞえる。SK1265では、小皿・杯とも底径に比して口径が大きく開く、小皿D、杯Cがみられる。VIIa期以降、小皿D・杯Cが主体的な位置を占めるようである。いずれも当該時期以降、大友館、中世大友府内町跡を中心にみられるロクロ土師質土器とは異なり、ロクロ痕をもたないものである。

小皿Dは、体部が斜上方に開き、口縁部端部はすぼまる器形である。体部と底部の境は明瞭である。口縁部が短く外反するものもみられる(1263・1358・1360)。小皿Dの調整は、体部は回転ナデ、内面底部がナデである。外面底部は糸切り離しのちナデである。口径8.5cm、器高2cm、底径4.8cmを測る。杯Cは、小皿Dと同様、体部が斜上方に開き、口縁部端部はまるみをもつ器形である。体部と底部の境は不明瞭なものもみられる(1256・1267・1268)。杯Cの調整は、体部は回転ナデ、内面底部がナデである。外面底部は糸切り離しのちナデである。内面底部のロクロ痕をナデ消すものが多い。口径12.3cm、器高3.1cm、底径6.6cmを測る。

VIIa期の時期は、第9地点SK065の杯B、第4地点のSK1265の小皿D・杯Cから、15世紀後半～末頃と考えられる。

VIIb期(第477図)

VIIb期は、第4地点(NSJ4)SK1385がこの段階に相当する。資料が僅少であるため、明確ではない部分がある。土師質土器小皿・杯が主体であり、小皿D・杯Cがみられる。いずれもVIIa期と比して、口径・底径の縮小が見受けられる。杯Cは底部が円盤状を呈し、体部下半に屈曲がみられる。体部と底部の境は不明瞭である。杯Cの法量は、口径11.5cm、器高3.2cm、底径6.4cmである。

VIIb期の時期は、共存資料がなく不明であるが、小皿D・杯Cの法量の変遷から、16世紀前半頃と考えられる。

VIIc期(第477図)

VIIc期は、久土遺跡3次B区ST414(高畠豊2005)、第6地点(NSJ6)SK707がこの段階に相当する。

久土遺跡は、丹生川上流域に位置し、15～16世紀代を中心とする集落跡が検出されている。ST414は木棺墓と考えられる土壌である。ST414では、土師質土器小皿・杯が出土している。小皿Dは器高が低く、体部が内彎する器形である。口径8.6cm、器高2.0cm、底径4.4cmを測る。杯は、杯Cと器形的に類似するが、器壁が薄手で口縁部が短く外反するものである。器形から京都系土師器模倣の在地系杯と考えられている(後藤一重2000、高畠豊2005)。口径12.1cm、器高2.5cm、底径5.5cmである。

第6地点(NSJ6)SK707は、小皿D・杯Cがみられる。小皿D・杯ともVIIa期より器高が減少し、口径が大きく開く。内面底部は平滑に仕上げている。龍泉窯系青磁碗(1698)は外面体部に線描き蓮弁を施す。上田秀夫氏(上田秀夫1982)のB-IV類にあたり、15世紀後半代の所産である。

VIIc期の時期は、共存資料が明確でないものの、杯Cの器高減少、京都系土師器模倣の杯の存在から、16世紀中～後半頃と考えられる。

・丹生川上流域における土器様相

以上、丹生川上流域の12～16世紀にわたる中世土器の変遷についてみた。ここでは在地産瓦器および、丹生川上流域の土器様相について考えたい。

○地域型瓦器の設定に向けて

大分県の中世前期の瓦器は、豊前南部・豊後北部に分布する豊前型瓦器、国東半島東部に分布する東国東型瓦器がみられる。その生産流通、編年については、前者を小倉正五氏（小倉正五 1984）、後者を後藤一重氏（後藤一重 2003）によって論じられている。大分市域では、豊前型瓦器が利光遺跡（大分県教育委員会 2002）、中世大友府内町跡第 23 次調査（大分市教育委員会 2003）、東国東型瓦器は本報告の第 9 地点、下志村遺跡第 2 次調査（大分市教育委員会 2005）、中世大友府内町跡第 7 次調査区（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005）などで出土しており、いずれも客体的な存在であろう。

今回の第 9 地点の調査では、豊前型瓦器、東国東型瓦器とは法量・胎土・焼成が異なる在地産とみられる瓦器がまとまって出土した（第 475 図）。編年では V a・V b 期を通してみられ、供膳具構成のうち、主要な位置を担ったものと考えられる。ここでは遺跡が位置する旧海部郡の郡名をとり、「海部型瓦器」と仮称し、今後の地域型瓦器設定に向けて一助としたい。第 9 地点で出土した海部型瓦器の特徴について下記にまとめる。

※海部型瓦器は小皿、高台付き皿、椀の器種構成がみられる。器形は口縁部が垂直気味に立ち上がり、体部中に屈曲が認められるもので、いずれも共通している。口縁部端部はすばまるものが多い。ヘラミガキは、外面体部一横方向、内面体部一同心円を施す。いずれもヘラミガキの単位は太く、粗雑である。色調は黒灰色もしくは暗灰褐色を基調とし、焼成は軟質が多い。胎土は石英・赤色粒・結晶片岩を含み、周辺地内で生産された可能性がある。

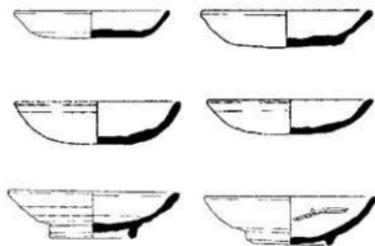
※小皿・高台付き皿の外面底部は糸切り離しが残る。小皿は、口径 8.6～9.5cm、器高 1.6～2.3cm、底径 5.4～7cm である。小皿の底部形態は平底、底部を押し出した丸底がみられる。後者は高台付き皿の底部と類似する。V a 期から V b 期の口径縮小の変遷傾向がみられる。

※高台付き皿は、口径 8.5～10cm、器高 2.6～3cm、高台径 4.5～5.4cm である。底部形態は底部を押し出した丸底である。外面底部は糸切り離しのちなデが多い。高台は断面三角形を呈し低い。

※椀は、良好な資料が僅少であるが、口径 15.2～16.7cm、器高 5.8～6.6cm、高台径 5.1～6.8cm である。V a 期から V b 期の法量縮小の変遷傾向がみられる。高台は断面三角形、方形のバリエーションがみられる。底部は押し出しており、丸底気味である。外面体部中位から下半に糸切りの痕跡がみられる。

第 9 地点で出土した海部型瓦器は、12 世紀後半～13 世紀中頃を中心とみられるようである。丹生川上流域の各地点では 13 世紀中頃以降の瓦器は確認していない。このことから、長期間存続した豊前型、東国東型瓦器と異なることが示唆される。

畿内産瓦器の研究によると、瓦器焼成には閉塞可能な窯を使用し、精良な胎土、燻し焼きの特徴をもつことが指摘されている。海部型瓦器の胎土は、土師質土器の胎土と共通している。瓦器の色調から閉塞可能な窯を想定できるが、黒灰色・暗灰褐色と一様ではなく、第 9 地点では未焼成品も散見できる。海部型瓦器椀は、底部押し出し技法、小皿・高台付き皿は底部糸切りを採用している。その出現時期、技術系譜は不明である。近年、大分市内では 12 世紀代を中心とする、非押し出し技法で、底部に糸切りが残る白色研磨土師器椀が確認されている（榊田智美 2007）。12 世紀代の様相は不透明な部分があり、白色研磨土師器椀との併行関係・その系譜および、海部型瓦器の焼成技術を含めた工人に関する検討が課題である。



第 478 図 古園石仏前庭部出土瓦器 (1/3)
(菊田徹 1997, 一部改変)

海部型瓦器の分布については、当該地域の調査事例が乏しい。小皿・高台付き皿は白袴磨崖仏群の古園石仏前庭部で出土しており、12 世紀後半代を中心とする時期と考えられる（菊田徹 1997, 第 478 図）。色調、法量に相違がみられるものの、器形・調整に類似が認

められる。白杵磨屋仏群は旧海部郡にあり、古代・中世初頭は丹生郷に属し、中世前期には白杵荘として立券される。その史的背景に、丹生地域との共通性がみられる。今後の周辺地域の出土事例をまちたい。

以上、第9地点出土の瓦器を、小皿、高台付き皿、椀の器種構成、豊前型、東国東型とは異なる器形から、海部型瓦器と仮称し、その特徴について考えた。資料僅少のため不十分な部分が多い。出土資料の増加をまって、生産・流通について改めて検討したい。

○丹生川上流域の中世土器様相

丹生川上流域の各期の特徴を大略的に捉えるならば、Ⅴ期—海部型瓦器の生産、搬入土器・陶磁器の流入、Ⅵ期—土師質土器小皿A・杯Bの主体、Ⅶ期—土師質土器小皿D・杯Cの主体を挙げることができる。

Ⅴ期の海部型瓦器は前述のように、小皿・高台付き皿・椀の器種構成、器形、その消長から、豊前型、東国東型瓦器とは一線を画するものであり、地域色のつよいものである。後藤一重氏は豊前型、東国東型瓦器の導入背景について、宇佐宮の影響によるものと考えられている（後藤一重 2003）。丹生地域の史的背景をみると、第9地点の海部型瓦器の下限時期は、大友氏の丹生荘入部時期との関連性が示唆される。その前段階は豊後大神系白杵氏、佐伯氏の所領が推定され、丹生荘成立当初は白杵荘とともに領家は皇嘉門院領と考えられている（本報告第17章飯沼賢司氏の考察を参照）。丹生荘成立、大友氏の丹生荘入部時期は不明であるが、海部型瓦器の出現、消長については、以上の政治的要因が少なからず影響があったものと考えられる。Ⅴ期は、和泉型瓦器・吉備系土師器・常滑・瀬美焼など国産土器・陶器、白磁・青磁・黒軸陶器・黄軸陶器など中国産陶磁器の流入がみられる。大分県内の和泉型瓦器の出土分布は、国東半島以南の沿岸部に位置する摂関家・寺社など中央権門関係の荘園を中心にみられている（橋本久和 2003）。海部型瓦器、和泉型瓦器、流通希少の白磁四耳壺、黒軸陶器、吉備系土師器、常滑・瀬美焼が出土した第9地点は、丹生川上流域における拠点的な位置にあったとみられ、丹生郷もしくは丹生荘の在り地領主、荘官クラスの屋敷地と考えられる。

土師質土器小皿・杯の生産については、Ⅴ・Ⅵ期を通して、小皿形態と杯形態の作り分けが行われている。当該時期の大分県内各遺跡出土の小皿・杯も、法量・形態に差異を認められるが、小皿・杯の作り分けを行ったとみられる。小柳和宏氏（小柳和宏 1994）が国東半島各地の土師質土器の地域性を検討したように、地理的要因などにより、各地域で土器生産を行ったと考えられる。Ⅵc期の第6地点SK510の時期は、大友11代親著が府内から隠岐の地として丹生へ赴く時期にあたるものと考えられる（第17章飯沼賢司氏の考察を参照）。Ⅵb・Ⅵc期の土師質土器は、大友館・中世大友府内町出土の土師質土器と器形・調整に類似性が認められる。SK510の土師質土器大量廃棄の特異な出土状況と併せて、Ⅵ期の丹生地域は大友氏が深く関わる段階とみられる。

Ⅶ期はこれまでの小皿A・杯Bが衰退し、替わって小皿D・杯Cが主体的な位置を占めるようになる。小皿D、杯Cは、法量の異なる同形のもので、底径に比して口径が大きく開く。この形態はおおむね、汎西日本的に共通し、ほぼ同時期にみられるようである。大友館・中世大友府内町跡では体部内面にロクロ痕が残る土師質土器小皿・杯がみられ、16世紀前半頃には京都系土師器が加わる（坂本嘉弘 2008、第479図）。ロクロ土師質土器は、大友館・中世大友府内町跡の他、豊後大野市千人塚遺跡（緒方町教育委員会 1999）・高添遺跡土木園地区1次調査区（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007）、竹田市小路遺跡（久住町教育委員会 2000）など豊後地域を中心にみられ、その分布傾向から、京都系土師器とともに大友氏との政治的な要因に関わるものと考えられている（後藤一重 2000）。丹生川上流域でみられる小皿D・杯Cは、ロクロ痕を有しないものである。ロクロ痕を有しない小皿・杯の出土分布は、佐伯市長畑遺跡（佐伯市教育委員会 1994）、日田市慈恵山遺跡（大分県教育委員会 1991）など県西部・



第479図 豊後府内出土の土師質土器
（坂本嘉弘 2008）

南部を中心にみられる。ロクロ痕をもたない土師質土器小皿・坏について、大友氏によるロクロ土師質土器使用の規制によるものと考えられている（後藤一重 2000）。史料では中世後期の丹生地域の在地領主として、丹生佐野を本拠とする大友氏被官の齊藤氏が知られる。齊藤氏は大友氏の加判衆をつとめている（第17章飯沼賢司氏の考察を参照）。丹生川上流域の齊藤氏の関わりは史料的に不明な部分がある。発掘調査では、第6地点で京都系土師器が1点のみの出土であった。久土遺跡の京都系土師器模倣の坏の出土を併せて考えるならば、Ⅶ期の土師質土器については、大友氏の政治的影響の関連性が示唆される。

以上、丹生川上流域の中世をⅤ～Ⅶ期に分け、その様相について考えた。各期を通して、在地土器生産の基盤には、丹生郷、丹生荘における政治的・社会的背景が少なからず影響があり成り立ったものと考えられる。各土器の詳細な型式学的検討、史的背景をふまえた十分な検討はできなかった。今後の課題としたい。建物（遺跡）変遷については、本報告の第7・10・12・14章、第4地点の詳細な変遷は本章第2節を参照されたい。丹生川上流域の中世遺跡の調査では、地域史、中世土器生産を考えるうえで貴重な資料を得ることができたといえる。

本稿を執筆するにあたり、飯沼賢司氏、五十川雄也氏、神田高士氏、後藤一重氏、塩田潤一氏、森島康雄氏、山本悦世氏の方々にご指導、ご教示を得ました。記して感謝申し上げます。（山本 哲也）

参考・引用文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
 大分県教育委員会 1991 『基壇山遺跡』
 大分県教育委員会 2002 『利光遺跡久保地区』『利光遺跡』
 大分県教育委員会 2003 『八坂本庄遺跡A地区』『八坂の遺跡』Ⅰ
 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005 『中世大友府内町跡第7次調査区』『豊後府内』3
 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007 『高添遺跡上本園地区1次調査区』『一般国道57号中九州横断道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』(1)
 大分市教育委員会 2003 『中世大友府内町跡第23次調査』『大分市内遺跡確認調査概報—2002年度—』
 大分市教育委員会 2005 『下志村遺跡第2次調査』
 大分市教育委員会 2007 『第31次調査』『下部遺跡群』Ⅴ
 大分市教育委員会 2008 『横尾貝塚』
 緒方町教育委員会 1999 『千人塚遺跡』
 佐野繁春 2005 『須恵系陶器の編年と生産技術の展開』『中世窯業の諸相』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
 小倉正五 1984 『宇佐地方の瓦器について—型式・編年に関する試案—』『古文化論叢』第14集 九州古文化研究会
 尾上実 1983 『南河内の瓦器検』『古文化論叢』藤野一夫先生古稀記念論集刊行会
 菊田徹 1997 『発掘調査』『国史白杉密崖仏保存修理報告書』白杉市
 久住町教育委員会 2000 『小路遺跡 上屋敷遺跡』
 後藤一重 2000 『小路遺跡出土土器の分析と遺跡の性格』『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会
 後藤一重 2003 『八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について』『八坂の遺跡』Ⅲ 大分県教育委員会
 小柳和宏 1994 『土器の年代と使用を巡って』『豊後国田原別荘の調査』Ⅰ 大田村教育委員会
 佐伯市教育委員会 1994 『鮮卑丸城跡関連遺跡発掘調査報告書』
 坂本嘉弘 2005 『中世大友城下町跡出土の土師質土器編年』『豊後府内』Ⅰ 大分県教育庁埋蔵文化財センター
 坂本嘉弘 2008 『中世都市 豊後府内の変遷』『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院
 鈴木康之 1996 『土師質土器の編年』『草戸千軒町跡発掘調査報告』Ⅴ 広島県草戸千軒町跡調査研究所
 高島豊 2005 『久土遺跡第3次調査』『海部の遺跡』Ⅰ 大分市教育委員会
 中野晴久 2005 『常滑・瀬美』『中世窯業の諸相』発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
 栗岡実 2005 『備前』『中世窯業の諸相』資料集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
 橋本久和 2003 『九州出土の畿内産瓦器検—ノート』『中近世土器の基礎研究』XⅦ 日本中世土器研究会
 神田賢美 2007 『白色磨研土師器検』の編年の検討について（予察）『下部遺跡群』Ⅴ 大分市教育委員会
 森下隆 1995 『中世須恵器』概説 中世の土器・陶磁器 日本中世土器研究会
 森島康雄 2006 『中世陶土の土器炊具』『中世の土製・陶器製鋸金と鉄器製鋸金の関係を探る』文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 新領域創生研究部門 平成17年度合同研究会報告記録 静岡大学・京都橋大学
 山本悦世 1993 『吉備系土師器検の成立と展開』『鹿田遺跡』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
 山本哲也 2007 『豊前・豊後における瓦質土器の初期様相』『瓦質土器の出現と定着—瓦質土器を考える（前編）—』第26回発表資料集 日本中世土器研究会
 山本信夫 2000 『大宰府家坊跡XⅤ—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会
 崎賢俊一 1997 『買米・城遺跡の中世土器』『ガラシ遺跡 植田遺跡 植田条里遺跡』大分県教育委員会

第2節 4・7・8地点における古代から中世の掘立柱建物跡の変遷

古代(奈良・平安)から中世の遺構群は第2～13地点までの各所で確認できている。土坑や溝などの遺構は然ることながら、柱穴も多く検出されており、掘立柱建物や柵などの構築物を構成していたことが判明した。特に第4地点、第7地点、第8地点は古代の掘立柱建物跡を中心に第4地点では中世～近世まで展開している。

第4地点では、古代と中世の柱穴の密度は高く、古代と中世の柱穴の切り合いがほかの地点に比べて、非常に多かった。また柱穴からの出土遺物は限られるので、それぞれの柱穴の時代判別は難しいところであったが、調査中に埋土の特徴などをつかみながら、また中世の造成土の上から切りこんでいるか、除去後に検出できたかなどにより、正確な時期判別に近づけるよう考慮した。

前述したが、柱穴からの出土遺物は限られたため、掘立柱建物跡の明確な時期判定は困難なところであった。よって、建物跡の軸方位や切り合い関係などから相対的な変遷を示す。

古代の掘立柱建物跡の変遷は、第A期から第E期までの展開が考えられる。特に第4地点をはじめ、第7・8地点に建物跡群は展開し、一辺約1m程度の方形柱穴で構成される掘立柱建物跡や約0.3mほどの円形柱穴で構成する掘立柱建物跡などを検出している。第4・7・8地点間距離はともに近接しており、直径約200mの円内に納まる状況である。第4・7・8地点の立地は、いくつかの開析谷が集まる場所にあり、それら開析谷を避けるように、後背地に丘陵を伴うような小さな面積の場所に遺構群は展開している。よって、掘立柱建物跡の軸や並びは、地理的な規制を受けている結果であることがいえる。

古代A期建物群は第4地点に展開する。第4地点の北東部に重複して2棟(SB009・010)展開する。主軸方位 $N23^{\circ} \sim 25^{\circ} W$ である。出土遺物はわずかである。また切り合い関係もD期のSB008と切り合い関係があるだけである。建物跡の主軸方位は異なるが、B～C期の時期の建物群に伴う可能性も否定はできない。

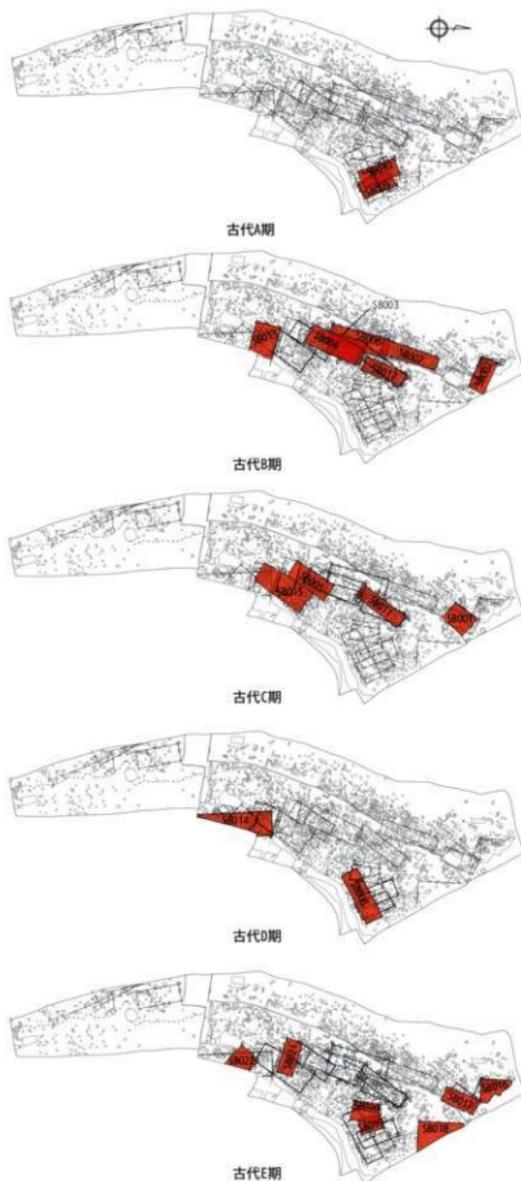
古代B期建物群は第4地点の北側に展開する。7棟(SB002・003・004・006・007・012・013)展開する。SB002に接する北側の調査区外は、谷地形となり、試掘調査でも遺構は確認できなかったため、まず北側の調査区外に建物跡が展開することはない。これは古代～中世、近世にも共通することである。SB2は北側桁行が自然流路により確認できなかったため、建物跡として述べているが、柵跡になる可能性もあることは付け加えておく。SB006とSB007、SB003・004・006は重複するため、一部の建物跡は建替えが行われたと考えられる。主軸方位はSB003・004・006・007・012の $N13^{\circ} \sim 24^{\circ} E$ とSB002・013の $N65^{\circ} \sim 73^{\circ} W$ が展開し、前者と後者の建物軸は直交する。ただSB003・004・006・007・012は建物平面プランが長方形になる特徴を有している。その身舎面積は平均値で約56㎡である。1つの施設としての全体プランは不明であるが、続くC、D期この特徴をもつ建物跡が展開することは注目され、中心的な建物跡になると考えられる。

古代C期建物群は第4地点北側に展開する。4棟(SB001・005・011・015)が展開する。主軸方位はSB005・011・015の $N35^{\circ} \sim 37^{\circ} E$ とSB001の $N36^{\circ} E$ の2方位がある。2つの建物軸はほぼ直交するものである。SB001の東側は後世の削平により明らかではない。SB005・011・015は建物平面プランが長方形となり、身舎面積は平均約54㎡を有する。B期のSB002・003・004・006・007・012・013などと規模など類似し、B期のそれらと同様の機能をもった建物跡と考えられる。

古代D期建物群は第4地点、第7地点、第8地点で展開する。

第4地点は、2棟(SB008・014)展開する。SB008は主軸方位 $N59^{\circ} E$ をとり、SB014は主軸方位 $N3^{\circ} W$ をとる。ややズレが生じるが、この2棟は直交に近い状況である。建物規模は同地点B期のSB002・003・004・006・007・012・013や同C期のSB005・011・015などと類似し、身舎面積約54㎡をはかる。この2棟以外に建物跡は確認できていないが、おそらく前段階と類似する建物跡の機能を担う建物跡と推定する。

第7地点は、第4地点の北東100mほどのところに立地し、2つの開析谷が交わるころのやや標高が高いところにある。この地点からの周辺の見通しはよい。D-1期にSB001・(003・004)が展開し、D-2期にSB002・(003・004)・005が展開する。短い期間で建替えが行われたものと思われる。SB001・(003・004)



第480図 第4地点古代建物跡変遷図

は主軸方位 $N18^{\circ}E$ で、柱穴規模は約0.3mほどの円形である。SB002・005も主軸方位 $N72^{\circ}\sim 85^{\circ}W$ 。ここで注目すべきはSB1の掘立柱建物跡である。SB1は内部に石敷を設けており、構成する柱穴すべてから壁土が出土した。よって、壁土の建物跡に内部は石敷の施設であり、隣接している溝が糸里平野に向かって流れており、出土遺物もほとんどないことから、水に関わる祭祀施設と推定される(第4節(2)参照)。

第8地点は第7地点の40m北側に立地する。谷部を避けた箇所立地する。第8地点は遺構の残存状況はあまり良くない。埋土や切り合い、出土遺物により5期に分割でき、D期とE期に渡って展開するものと推定される。特に2,3期は建物柱穴が隅丸方形で一片約80cm以上となり、第4地点のA～D期と同じくらいになる。

このようにD期はA～C期までが第4地点周辺に建物跡が展開していたのに対し、同期は第7・8地点周辺まで展開するようになる。特に第7地点SB001の性格と建物の展開を考えるとC期とD期の間に画期があったとも考えられる。

古代E期建物群は第4地点、第8地点で確認できた。この期もD期からすると建物跡に大きな変化が見られる。第4地点では建物主軸方位は統一性がなくなり、建物規模や建物を構成する柱穴も小規模となり、DとE期の間にもなんらかの画期があったとみてよい。

以上、古代建物跡の変遷をおおてみた。古代はA期～E期の5つに大別でき、切り合い関係・方位・土器編年を参照すると概ね8世紀代～10世紀まで存続しており、特に8世紀後半～9世紀前半に隆盛する。建物跡の